昭和五年五月廿五日印刷
昭和五年五月廿九日發行

上製 新井石禪全集第五卷

著作權者 祥雲晩成
編纂者 山田靈林
發行者 飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地
印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地
印刷所 加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

(製本 山田製本所)

【と】

【な】

【に】

【ね】

【は】

【ひ】

【ふ】

【そ】

【た】

【ち】

【つ】

【て】

【し】

【す】

【せ】

【き】

【く】

【け】

【こ】

【さ】

傳燈遺照講話　索引

【ま】

【み】

【む】

【も】

【や】

【ゆ】

【て】

【と】

【な】

【に】

【ぬ】

【の】

【は】

【さ】

【し】

【か】

【き】

【く】

【け】

【こ】

新井石禪全集
修證義説教軌範　索　引

を得る方法はまことに雜作がない。各自が實地に修行の步を進むれば則ち足ることである。行じないで、口先きでとやかういつてゐても、埒はあかぬ。何を苦しんで、無明長夜の闇路に迷うてゐるか、自分で自分の黑影を作り、恐れてゐるのか、月光は千古萬古圓かに照り輝いてゐる。月光の如く圓かなる佛の萬德を、各自が體得するとせざるとは、行の步を實地に進むるか、進めないかによつて定まる。佛法は修行である。禪は行である。耳口三寸の學に終らせないで、實地に修行することが肝要である。而して、これは獨り佛法とか禪とか申す特別の世界のことでない。一般の人々の日常の生活上のことである。實際生活の解決は耳口の學ではいかぬ。實際の行の力であり人格の力である。

進れば元來遠近にあらず、知らず明月誰が爲めにか圓なる。

崑崙象に騎るも藕絲牽く、機外の機は天外の天に遊ぶ――前句は旣に述べし處の如くである。佛の萬德が十二分に實現してゐる世界に、自在なる日夜を送つてゐても、そこに慢心を抱く樣では、未だ祖師西來意を得たものでない。眞に祖師西來意に合せる消息、眞の自由境は、機外の機を得て天外の天に遊ぶともいふべきもので、捕捉端倪すべからざるものである。（機とは機能、はたらきのこと）

解脫門頭高く眼を著けよ、長安の大道直きこと弦の如し――これは煩惱妄想の繫縛を脫した、所謂解脫の世界、佛向上の一路についての句である。佛向上の一路の消息を得んと欲せば、高く眼を見開いて見よ。その一路は、支那にいふ長安大都への大道の如く、弦の如くに眞直ぐである。どう眞直ぐか、各自が本來の正しい務に沒入する所、直ちに佛向上の一路であるからである。

擧心動念せば蹉過了、劍去つて笑ふ他の空しく舷を刻することを――祖師西來意や佛向上の一路は、ああか、かうかと、心を動かし念慮を用ひて忖度したりなどいたしては、悟られるものでない。あゝか、かうかと忖度推量などしても、その正體を摑めない。例へば船に乘つて海を渡る人が劍を落し、落した處の舷に、刀で印をつけ、それを目印にして置き、後に、舷の目印の下の處を探して見やうとしてゐたといふが如きもので、愚も亦甚しいことだといふのであります。

歩を進むれば元來遠近に非ず、知らず明月誰が爲めにか圓かなる――祖師西來意、佛向上の一路、これ

佛境界に入る道といへば、お念佛でも唱へるか、お佛壇へでもおまゐりすることだとのみ思うてゐる。勿論それも佛境界に入る道には相違ないが兩手を打つて商をするのも、佛境界に入る道である。否、それが直に佛境界である。鋤鍬とつて働くも佛境界に入る道であり、佛境界である。俥を引いて走るも、自動車の運轉をするも、電信柱の上で工事をするも、何事であれ、苟もこれがその人の正しい務である限りそれは立派な佛境界に入る道佛境界そのものである。だから、この道理が分つて見れば『佛向上の事』だとか『向上の一路』だとかいつて騷ぎまはる必要がない。況や人に尋ねることおやです。
師曰く、鴆毒水に入つて魚みな死す――向上の一路だの何だのと追ひまはして、脚下の各自の務を忘れてゐるものには手がつけられぬ。そんな連中は、佛の境界にありながら、佛の境界を殺してしまつてゐるものである。例へば、折角の水の中へ、恐ろしい鴆といふ毒を入れて、魚を皆んな死なせてしまふ樣なものだといふお答です。

頌曰。崑崙騎象藕絲牽。機外機遊天外天。解脫門頭高着眼。長安大道直如弦。擧心動念蹉過了。劍去笑他空刻舷。進步元來非遠近。不知明月爲誰圓。

【讀方】頌に曰く、崑崙象に騎るも藕絲牽く、機外の機は天外の天に遊ぶ。解脫門頭高く眼を著けよ、長安の大道直きこと弦の如し。擧心動念せば蹉過了、劍去つて笑ふ他の空しく舷を刻することを。歩を

禪の力が餘程出來た人でないと分らぬ。佛の萬德は、象に限らず、事々物々の上に圓滿に現成してゐるのだが、それを見る眼の無い人には、見えぬ。ともかく『崑崙象に騎る』とは、さういふ貴い話、佛の萬德を實現してゐるもの同志が相集つた實に貴いところをいつたのです。達磨大師が西來は、まさにこの貴い世界を、吾等に直指するためであります。

『藕絲牽く』とは何であるか、藕は蓮根である。蓮根は二つにでも三つにでも折つて引き離して見ると、折れ目から細い絲がスウッと出で、切れた樣でも却々切れず、あとを引いてゐる、それをいふので、つまり『藕絲牽く』とは、執著が殘つてゐる、凝滯があるといふことである。どんな立派な世界でも、それに執著がからまるとよろしくない。禪では尤もその執著を嫌ふ。

『祖師西來意』は『崑崙象に騎る』とでも形狀すべき境地に入らしむるにありなどと、そこにばかり引つかゝつて、人々各自の脚下が、とりも直さず、その貴い境地であることを知らずにゐてはいけない。自己の脚下が、その境地だと悟り得ても、また、そこに執心してまご〳〵してしまふ樣でも猶更いけないと、微に入り細に入つた所を指示されたのであります。

又問ふ、如何なるかこれ向上の一路——今度はまた別の問が出た。恐らくは別の僧が出て問うたのでせう。佛教で『向上の一路』といふが、如何なるものをいふのでせうか、と問うたのです。

『向上の一路』とは、佛向上の一路ともいひ、佛の境涯に驀入する一本路です。佛教を深く學ばない人は

まふ必要はない。といつて、また、何かまうものか、やりたい様にやればいゝのだといつて、放漫になつてもよろしくない。

師曰く、崑崙象に騎るも藕絲牽く――『如何なるかこれ祖師西來意』といふ問を出した僧は、餘程の力量の出來た人であつたので、これに答へて天巖禪師は『崑崙象に騎るも藕絲牽く』と答へられたのです。『本來本法性、天然自性身』といふ佛教の大思想を知り、更に『發心、修行、菩提、涅槃する』必要のある所以を體得して、まことに申分のない境地に到達せしむること、これが達磨西來の意であると、おまへは、すつかり、悟つた氣になつてゐるが、まだ〳〵いけないぞと答へられたのです。

『崑崙象に騎るも藕絲牽く』といふ文字は、解釋が少しこみ入つてゐる。『崑崙』とは支那の崑崙山から出る黒い玉である。然しこゝでは、單に玉をいふのでなく、『崑崙無縫罅』などといふ時の意と同じで、佛の萬德が十二分に、そこに實現して申分が無いといふ意である。『象』といふも亦た同じく、佛の萬德が十二分に、そこに實現して申分なきものゝことである。

支那の趙州和尚に、ある人が『大勢の盲人が寄り集つて、象をなでまはし、種々のことをいつてゐる。一人は象は柱の如しといひ、一人は箕の如しといひ、一人は象は壁の如しといつてゐる。勝手なことをいつてゐるが本當の象とはどんなものですか』と、問うた時に、趙州は『眼の無いものゝ知つたことでない』といはれたことがある。趙州に問を出した人をまで、趙州は盲人扱ひにしてゐるのです。本當の象は

る。この仙人の處へ、或る坊さんが行つて『如何なるかこれ祖師西來意』と問うた。すると仙人は、長い長い柄の杓をすうつと差し出して、ずつと彼方の谷の水を汲み、『溪深うして杓柄長し』といつたが、これはどういふ意ですかと、或る人は雪峰に問うたのです。雪峰和尚は、これを聞いて『仙人はよい境地にゐる』といはれた。溪が深ければ長い柄の杓を使ふ、谷が淺ければ短い柄の杓を使ふ、まことに平凡な何でもないことであるが、そこに祖師西來の意がある。

達磨大師が『法を傳へて迷情を救ふ』といつて支那に來られたのは、奇拔なもの珍らしいことを敎へに來られたのでなく、極めて平凡な分り切つたことを、而も人が皆忘れて、顧みずにゐることを氣づかせ、佛の御心をよく合點せしむるために來られたのである。

人間は、ありふれた、當りまへのことが出來さへすれば、それが實に立派なる人間であるのだが、何か變つたことをして見樣とする、所謂時節〳〵、都度〳〵に適應する務と一枚になつて、それをやり遂げるといふ大切なことは、これを顧みないでゐる。それがよろしくない。山は高く、水は長しで、山ならば高いがよく、水ならば長く流れるがいゝのである。山でありながら水の眞似をし、水であるものが山のことを羨ましう思うたりする。小僧が番頭を羨ましがり、番頭が主人を羨ましがり、何より大切な務は第二第三にしてしまふ。これがよくない。

然し、別段窮屈に考へることはない。佛敎は安樂の法門である。嚴肅一點張りに、窮屈に固くなつてし

である。
日本には七福神をまつる風習があつて、その中に布袋様も加はつてゐるが、布袋様は、布袋和尚といつて、支那の明の時代にゐた禪僧である。福々しい肥滿な體格の方でいつも、にこ〳〵して、大きな布袋をかついで歩く、その中には、百物倶在、何でも入れてある。中から菓子などを取り出し、子供に『さア』といつて差し出し、子供が受取らうとすると、引つ込めてしまふ、といふ様な戯れごとを毎日してゐる面白い和尚であつた。
この和尚に或る坊さんが、『如何なるかこれ祖師西來意』と問うたことがある。すると布袋和尚は、擔いでゐた大きな布袋をおろして、兩手を胸の所に重ねた。これは禪家の一の禮法で、叉手當胸というてゐます。布袋和尚が叉手當胸した。それが卽ち『祖師西來意』である。然し、これは餘程、禪の分つた人でなくては分らぬ。布袋和尚に『祖師西來意』を問うた坊さんも、やはり分らず『まだ外に、西來の意があるのではありませんか』と問うた。すると布袋和尚は、布袋を引つ擔いで、さつさと去つてしまつた。これでは、何の意味だか、分らぬでせう。
有名な雪峰和尚に、或る人がまた『祖師西來意』を問うたことがある。それはかうである。仙人の様な人があつて、草菴に棲んでゐる。菴には長い柄のついた杓が備へてあつてそれをすうつと出して、菴室の遙か下方を流れてゐる谷川の水を酌んで飮む。いつもかも何もせず、時々、杓で水を汲んで飮むだけであ

道元禪師は、禪に於て、その頃未だ體得される所がないので、こゝの所に御疑ひが起り、比叡山の高僧方に御尋ねになつたのですが、明快な御答がない。そこで、建仁寺の榮西禪師の禪室を叩き、『本來本法性、天然自性身、何としてか三世諸佛、發心、修行、菩提、涅槃する』と御問ひになりました。禪師は、『三世諸佛、あることを知らず、狸奴白牯、却つてあることを知る』とお答になつた。ふん、さういふことは、三世の諸佛は御存じあるまい。狸なんかの方がよく存知居るだらうといふ御挨拶であつた。つまり、道元禪師の問にとりあはれないのです。本來本法性、天然自性身といふ天台の大思想が、本當に分り體得出來てゐれば『何としてか、發心、修行、菩提、涅槃する』などいふ疑は出ぬはずである。さういふ疑の出るのは、體得出來てゐないからである。故に榮西禪師は、とりあはれない。自ら發奮して體得される因縁時節を暫時お待ちなされてゐるのです。

道元禪師は、勿論、後に、この疑ひを自ら解決なされた。桶の底がぬけた樣に、こきみよく解決なされました。天巖宗趣禪師も、この貴い道理を十分體得してゐられたので、祝國開堂といふ最も重大なる式典の時に當つて、この言葉をお唱へになつたのです。つまり、天巖禪師の悟の境地をお示しになつたのです。

僧問ふ、如何なるかこれ祖師西來意」――式が引きつゞいて進み大問答が初まると、坊さんが出て、天巖禪師に『如何なるかこれ祖師西來意』と問うた。祖師とは達磨大師のことで、達磨大師が西方、卽ち印度から遙々東方支那に來られたには、大に意味あつてのことであらうが、その意味は何であるかといふ問

節、都度々々に適當した面目を現はすことが出來ぬのであります。かるがゆゑに、佛教では何を扱て置いても『當に因縁時節を觀ずべし』時節々々、都度々々に適應して、その面目を實現することの出來る人間になれと、やかましく申します。

人間が、時節々々、都度々々に適當した面目を實現するとは何ぞ、と申せば、つまり、小僧となつては小僧の務をなし、和尚となつては和尚の務めに專念し、師家になつては師家の本務を精進することです。豐太閤が豐太閤である時には、天下に政令して嚴乎讓らず、草履とりであるときには、忠實な草履とりで滿足して、その務めに精進する。かういふ工合にやれるのが時節々々に適應し、都度々々に適當した面目を現はすと申すのであります。精出して勤めると、立身出世が出來るから、精出すのだといふのでは、上上とは申されませぬ。『これが私の務めだから、專念にこのことに精進する』といふのでなくては、佛の御心に叶はないのです。發心、修行、菩提、涅槃するといひますと、何となく、立身出世が出來るから精を出す、金儲けになるから怠けないといふ、世間普通の考と同じである樣に思はれ易いが、實際は、さういふ意味でない。發心もその時節々々に適應してこれをなし、修行も、その時その時に適應してこれをなすのです。それが菩提であり、同時に涅槃であります。このことが體得された曉には、『本來本法性、天然自性身』であるのに、何故『三世諸佛は、發心、修行、菩提、涅槃する』のであるか、といふ疑問は起りませぬ。

ことはいらぬといふ大思想であります。

道元禪師、夙にこの事については承知いたされてゐた。が然し、そこに一つの疑問があつた。既に右いふ如きものであるならば、『何故に三世諸佛は發心修行菩提涅槃する』のであるか。諸佛菩薩と仰がるゝ尊い方々は、何れも、先づ志を發して修行を勵み道を行じて涅槃に到達されるが、何故、發心したり修行したりされる必要があるのであるか。小僧が小僧でゐるに滿足せず、和尚たらんと欲して努力する。和尚は和尚で滿足せず、大知識にならうと修行する。大知識は、更に進んで佛菩薩にならうと精進する。所謂發心し修行し、菩提し涅槃する、これは一體何故であるか。小僧は小僧でよし、和尚は和尚でよし、善知識は善知識、佛は佛、それなりで獨自の價値がある。何も他を羨む必要がない。然るに段々と移り進み、向上して行かうとするのは何故であるか。こゝが私には納得出來ぬといふのが道元禪師の疑問であつたのであります。

涅槃經の中に『佛性の義を知らんと欲せば、因緣時節を觀ずべし』とある。因緣時節を觀ずることを知らないでは、禪は判りませぬ。山川草木は、常に、因緣時節を觀じて居る。春至れば百花爛漫、秋來れば千山紅葉、誰が指圖をするのでもないが、山川草木は、時節をたがへぬ。朝は朝、晝は晝、夜は夜、天地自然の面目は、その都度々々に變つてゐる。然るに、人間には、この時節々々、都度々々に適當して、その面目を實現することの出來ないものが多い。つまり頑固な人とか、我の強い人とかいふ者は、時節時

路。師曰、鴆毒入水魚皆死。

【讀方】天巖宗趣禪師。僧問ふ、如何なるかこれ祖師西來意。師曰く、崑崙、象に騎るも藕絲牽く。又問ふ、如何なるかこれ向上の一路。師曰く、鴆毒、水に入つて魚みな死す。

天巖宗趣禪師――は總持寺五院の尊宿（高德なる大師家）である大徹宗令禪師の高弟で、池田筑後守に尊崇せられ、筑後守の領內攝津に大廣寺を建てゝ住し、大に禪道佛法を宣揚されたお方である。

大廣寺を建てゝ、始めて祝國開堂といふ大式典を擧行され、一同に示された言葉の中に『三世諸佛、あることを知らず、狸奴白牯却つてあることを知る』云々の句がある。この一句によつて、天巖禪師の悟は分ります。この句は、高祖道元禪師が、比叡山の修行中に起された大疑問に對し、京都建仁寺の榮西禪師がお答になつた句であります。

道元禪師が、比叡山に修行中發された疑問は、『本來本法性、天然自性身、なんとしてか三世諸佛、發心修行、菩提涅槃するや』といふことであつた。『本來本法性、天然自性身』とは、天台敎學の敎ふる大思想で、大宇宙に存する所の事々物々は、何一つとして獨自の面目を有せぬものはない。鶴は長く、鴨は短く、松は直く、荆は曲る。各ゝその獨特の價値を有して、他に讓る所がない。人間もとより然り、小僧は小僧和尚は和尚、實業家は實業家、お役人はお役人、それ自身、獨立の價値をもつてゐるので、何も他を羨む

天巖禪師の崑崙騎象の話

佛教は解脱の教である。煩悶懊惱の苦しみを脱して冷湫々地、水月清風の境地を、日常生活上に實現することが、その眼目であります。禪家に於て『祖師西來の意』といひ『向上の一路』といふ。皆これは水月清風の境地に關してのことであります。こゝに講述いたさうとする天巖宗趣禪師の話もまたそれである。

我が佛祖正傳の禪では、綿密の行持をつとめて、奇行を衒はず、『吾我を忘じて、潜かに修す』ることをその要諦としてあります。『吾我を忘じて、潜かに修す』る當處が、そのまゝ既に水月清風の境地である。山上りの樂しみは、山の絶巓に達した時にのみあるのでない。山上りの一歩一歩に、山上りの樂しみがある。佛道修行も、修行しつくすと、そこに樂しい世界が新に現はれるとのみいふにあらず、修行の一歩一歩が樂しいのである。

天巖崑崙騎象話

天巖宗趣禪師。僧問、如何是祖師西來意。師曰、崑崙騎象藕絲牽。又問、如何是向上一

智、卽ち佛の大智慧とは抑々どんな働きをするものであるか、一體、何に役立つものであるか、と問うてゐるのです。

巴陵和尙、もとより修行者の心の中が分つてゐるから、佛の大智慧が泰平無事の世界に、活現してゐる相を、一句に表現して示した。『珊瑚枝々月を撐着す』と。水を帶んだ珊瑚の枝々に、般若の月光が宿つて實によいぞと、綺麗な叙景の句を示して、巴陵和尙は佛の大智慧の活現を表示されたのです。

珊瑚枝々月を撐着す、實によい風光です。かうした風光に卽して、吹毛の利劍、佛の大智慧の活作用を省悟いたしたきものであります。

大に闘争もするが、大君に事を構へ奉らうとは誰もせぬ。間違つて、敢てするものがあつても、直ぐ滅んでしまふ。これは、心得置くべき深い道理のある所であります。

さて、兩堂の坊さんたちに、グウの音も出せぬほどに、その坊さんたちを統制してゐられる南泉和尚に於て今取りあげた猫を、どう處置するか。一同のものどもの共有だぞと云ひ渡した所で、一定のものを大勢で皆々が滿足して飼つてゆくことは、實際に於て出來ることでない。といつて、南泉和尚自らこれを飼ふことにしたら、不平をいふものが出る。最も偉大なるものは、何ものをも所有せぬことを必要とする道理がある。一物も已れの所有なき人でなければ、禪家の大道場に主人たることは出來ぬ。結局、所有者を定めることの出來ぬ、やり場のない猫である。南泉和尚、斬つてしまふより仕方がない。

斷臂とは、師匠と仰ぐ達磨大師の禪を求める赤心から、遂にその臂を斷ち切つてしまはれたといふ慧可大師の故事である。

南泉の斬猫といひ、慧可大師の斷臂といひ、共にこれ、吹毛の利劍、般若の智光の大活用であるが、併し、まあ、それらのことは、今敢へてこれを問はず、ここには吹毛の利劍、般若の智光が、泰平無事、平和の世界に活躍し、現成してゐる風光『珊瑚枝々、月を撐着す』といふ消息を歎美するのであります。

昔、巴陵の顥鑑和尚に、修行者が問うたことがある。『如何なるかこれ吹毛の劍』吹毛の利劍は、一體どんなものであるかと。この修行者の心では、禪家に於て吹毛の利劍といふ言葉で、喚びかけたるが般若の

ち切り、百億の惡魔を雲霞の如く消え去らしむるがいゝ。

繋驢橛とは驢馬をつなぐ橛のことで、つまり邪魔ものをいふ。百億の魔軍とは、煩惱妄想を始め、見るもの聞くもの、すべて吾等の身心を惱ますものをいふ。

斬猫斷臂吾れ鬪せず、珊瑚枝々月を撑著す――この二句は、百億の魔軍を悉く退治しつくして、泰平無事、佛の大智慧光明が隈なく實現してゐる消息を頌したのであります。

斬猫とは、支那南泉山の普願和尚が故事である。和尚の下に集つて修行してゐた大勢の坊さんたちが、猫一疋の所有權を爭つて果しがつかぬ。猫一疋くらゐと人ごとにはいふが、自分のことゝなれば却々手輕るに片づかぬ。取り合ふ品物は猫一疋でも、それに双方、我執が加はるから大層なものになる。南泉和尚、見かねて猫を引つ捕へ、『さあどうだ、まご〳〵してると、こいつを斬つてしまふぞ』といつた。一同も、いざとなると、いくぢがない。仲間同志でならば、西瓜頭を振りたてて爭ふが、南泉禪師に引さらはれては最後、爭つて出るものは居らぬ。

畏れ多いことではあるが、日本では、天皇陛下御一人の前に、爭をかまへて出るものはない。臣民の間でならば、隨分激しい爭もする。戰國時代などは殊にそれが甚しかつた。今日と雖も、人民の間同志では樣々の爭鬪を連續してゐる。仲間同志で、似たりよつたりの間でならば、爭がつきぬが、すべてを一呑にする偉大なるものの前には、爭はつゞかぬ。いや、爭などゝいふものが起らない。人民同志は

今更いふまでもないが、賊の大軍が、旗鼓堂々と押し寄せて來ることを知つた時には、遉に心中一點の安んぜざるものがあつてか、かねて歸依してゐる廣嚴寺の明極和尚を訪うて『生死交謝の時如何』と問はれた。すると、明極和尚は『兩頭ともに截斷すれば、一劍、天に倚つて寒し』と答へられたといふ。

いざといふ場合に臨んで、死なねばならぬだらうか、死なないでもすむだらうか、などと、死生が心頭にかゝつてゐる樣では碌なことがない。死生を超脱し、勝敗を度外に置き、滿身の英氣を使命遂行のことに捧げつくす勢がなければ、自在の活機輪は展開されぬ。下手な思案は休むにしかずで、思案に耽つて勝敗得失に囚はれると、佛の大智慧がその作用を現はさない。大智慧が働かないから、正々堂々、事に處することが出來ぬ。

『吹毛の那一劍、紫電天を劈いて寒し』佛の大智慧が、何物にも邪魔されることなく、その活作用を現はした所を頌して『勢よく振りあげた吹毛の利劍、電光の如く閃きを放つて凄い』といつたのである。

若し磨礱を試みんと擬すれば、未だ免れず他の瞞を受くることを――此の吹毛の利劍は、研いたり磨いたりしたゝめに、鋭利になつたといふ劍とは違つて、最初から鋭利であるのだから、これを研いたり磨いたり致さうといふ了見など起さうものなら、それこそ識者の笑を買ふことになつてしまふ。活用である、活用するがいゝ。(磨礱とは、すりみがくこと。)

只能く驢橛を剸却すれば、百億の魔軍おのづから敗闕す――鋭利なる吹毛の劍を振つて、繫驢橛をぶ

以て心とし、佛の御行を以て行とすることが、どれだけ出來て來たか、それを弟子は實現せんとし、師匠は看破せんとするのである。

だから、古來『吹毛の劍』といふ題目が、問答で幾度となく繰りかへされてゐるが、『吹毛の劍』の說明や講釋をした人は一人もない。『吹毛の劍』とは般若のことである。佛の大智慧のことである。その大智慧はかく〳〵のもので、といふ樣に說きたてた人はないのである。『吹毛の劍』といはれゝば、吹毛の劍となつて、その活作用を現はす。佛の大智慧といはれゝば、佛の大智慧を自在に、そこに體現し提示するといふ工合に行くのが禪機である。禪を得た人の活作用である。

頌曰。吹毛那一劍。紫電劈天寒。若擬試磨礱。未免受他瞞。只能剸却繫驢橛。百億魔軍自敗闕。斬猫斷臂吾不關。珊瑚枝々撐著月。

【讀方】頌に曰く。吹毛の那一劍、紫電、天を劈いて寒し。若し磨礱を試みんと擬すれば、未だ免れず他の瞞を受くることを。只よく繫驢橛を剸却すれば、百億の魔軍も自ら敗闕す。斬猫斷臂吾れ關せず珊瑚枝々月を撐著す。

吹毛の那一劍、紫電、天を劈いて寒し――楠正成が、後醍醐天皇に仕へて誠忠を捧げまつつたことは

師曰く、「汝なんの道理をか見る」――どういふ意味で、禮拜などをいたすのかといふ追求である。

紹曰く、「和尚、某甲を瞞ずることを得ざれ」――定紹侍者は、徹山禪師から『どういふ意味で禮拜するのか』といはれて『あんまり馬鹿にしないで下さい』といつたのである。

師曰く、「瞞ぜざる底そもさん」――馬鹿にするなといふが、馬鹿に出來ない樣な、シツカリした所を現して見せるがいゝと、徹山禪師が更に追問された。

紹、兩手を展ぶ――定紹侍者は、スウツと兩手を左右に打ちひらいた。

これは何であるか。定紹侍者が手を展べたのは、佛の大智慧が宇宙に遍滿してゐることを、手眞似で示したのだとか何だとか、種々と穿つた説明をする向きもあるが、定紹侍者がこゝで、佛の大智慧の説明などをしだす樣であつたとしたら、未だ未だこの人には禪が分つてゐないといはねばならぬ。

定紹侍者は、説明をしだしたのでない。たゞさういたしただけである。併し、見る人が見れば、そこに定紹の禪機が首肯けるのである。徹山禪師は定紹が佛の大智慧を體現してゐることを首肯かれた。吹毛の劍を自由に使ひ得てゐることを首肯かれたのです。

師、休し去る――徹山禪師は、首肯いて默つてしまはれました。

紹、再拜して出づ――定紹侍者も師の意を悟りお辭儀をして、自室に引き下つてしまつた。

問答といつても、禪では、論議を戰はすのが眼目でない。修行者の究局理想である所の、佛の御心を

であるか。この問に答へて。吹毛の劍は斯く〳〵の利劍でありますといふ様な、刀劍賣買的の講釋をしたのでは、徹山禪師は滿足されぬ。

禪師が問はるゝ、吹毛の劍とは、般若のことである。佛の大智慧のことである。天はこれを得て高く、地はこれを得て低し。山川草木、人畜鳥魚、佛の大智慧の現はれにあらざるものはない。而も徹山禪師は今、般若の說明を定紹侍者に期待されてゐるのでない。佛の大智慧の講釋を望んでゐられるのでない。定紹侍者が、般若をどの程度まで體現してゐるか、佛の大智慧を、その生活の上に、どう實現し得てゐるかそれを徹山禪師は知りたいのである。說明を聞きたいのでない。然るに、

「紹、進語せんと擬す」——定紹侍者は、何か講釋でも始めさうであつた。

「師、驀に其の口を掩ふ」——徹山禪師は、それと知つて、いきなり、定紹侍者の口に、蓋をしてしまはれた、『天、何を言ふや、四時行はれ、萬物生ず』大自然は何も口舌で說きたてない。而も春夏秋冬、その序を違へず、春來れば百花爛漫、秋來れば千山紅葉、時々の面目を實現實修してゐる。禪家に重んずるところも亦それである。『一尺を說得せんよりは、一寸を行取するにしかず』ベラベラと饒舌くるよりは、行ひのそこに至るのがいゝのであります。

「紹、釋然として契悟し、便ち禮拜す」——定紹侍者は徹山禪師の提撕によつて、佛の大智慧に合當し、大智慧の働きを體現して、慇懃に禮拜をいたしました。

と擬す。師、驀に其の口を掩ふ。紹、釋然として契悟し、便ち禮拜す。師曰く、汝なんの道理をか見る。紹曰く、和尚、某甲を瞞ずることを得ざれ。師曰く、瞞ぜざる底、そもさん。紹、兩手を展ぶ。師、休し去る。紹、再拜して出づ。

徹山旨廓禪師――は加賀の大乘寺の珠巖道珍禪師のお弟子であります。珠巖禪師は非常に高德のお方で、人間でない神仙だといはれたお方です。或る日、禪師が山地を歩いてゐられると、これを遠くから望み見た人が、禪師が空中を歩いてゐられるといつて騷ぎ出した。大勢の人がそこへ行つて見ると、禪師は普通の足どりで、小徑を歩いてゐられる。別段變つた樣子も見えない。不思議に思つて、禪師に委細を申上げると、禪師は『眼花すること莫れ』幻覺を起すなとついてお叱りになつたさうであります。ともかく、禪師は並々でない高僧であつた。この高僧の門下の中で、その人ありと推賞されたのが、徹山旨廓禪師であります。

侍者定紹、參ずる次――侍者をしてゐる定紹といふ人が、一日、禪師に修行上のことをお問ひいたさうとした。そのけぶりを、禪師は早くも見て取つて、

問うて曰く、如何なるかこれ吹毛の劍――と定紹侍者に、禪師の方からあびせかけなされた。

劍刃上に毛を吹いてこれを試む、其の毛おのづから斷ずれば、乃ち利劍なり、これを吹毛の劍といふ。

徹山禪師が『如何なるかこれ吹毛の劍』と問ひかけられたのは、侍者定紹は何を聞かうとしてゐられるの

徹山禪師の問吹毛劍の話

佛の大智慧を、梵語では般若といふ。一切の惑の根本を斷ち斬るその鋭いところを、特に尊重してこれを利劍に譬へ、また一切の闇黑を照すを以て、金剛の燄に喩へる。證道歌には『大丈夫慧劍を秉る、般若の鋒金剛の燄』とあるのは、佛の大智慧を讃歎した言葉であります。

智慧を刄や鋒に例へることは世間にもある。あの人はよく切れる人だとか、切れぬ人だとかいふ。この章で講ずる徹山と侍者との問答では、佛の大智慧を『吹毛の劍』といつてあります。

徹山問吹毛劍話

徹山旨廓禪師、侍者定紹參次、問曰、如何是吹毛劍。紹擬進語。師驀掩其口。紹釋然契悟、便禮拜。師曰、汝見甚麼道理。紹曰、和尚瞞某甲不得。師曰、不瞞底作麼生。紹展兩手。師休去。紹再拜出。

【讀方】徹山旨廓禪師、侍者定紹、參ずるの次、問うて曰く、如何なるかこれ吹毛の劍。紹、進語せん

師門下には、澤山の大力量人が出た。中でも二十五人特に秀でた高僧があつたが、通幻禪師はその隨一であつたといふほどの意である。

永澤とは、細川賴之が建てた通幻禪師の大道場。透網の鱗とは、碧巖錄にも出てゐる『透網の金鱗』といふ句から取つたのであります。臨濟禪師の弟子の三聖和尚が、雪峰禪師を訪うて『透網の金鱗いぶかし何を以てか食となす』といふ問答をしたことがある。透網の金鱗とは、網を突き破つて出るほどの偉大なる眞鯉である。小さいことに屈托して、あつちに突つかゝり、こつちにぶつかり、我れと我が身を縮め苦しんで、不自由な思ひをしてゐる人とは違つて、他人が何といつても、そんなことに翻弄されることのない大人物が、透網の金鱗である。

通幻禪師は、透網の金鱗の中での、透網の金鱗、實に偉大なるお方である。この方が、永澤寺にあつて天下の僧祿として、一宗の僧侶を取締られたその光景は、まことに尊いことである。

かッといつたとな」と云ひ置いて去つた。雲助ども變に思つて、早速、天桂禪師の所にゆき、一伍一什を申上げると、天桂禪師は『あゝさうか、その坊さんは白隱和尙ぢや、あれは偉い坊さんであるぞ』といつて、雲助どもを不思議がらせられた。

天桂と白隱との如きは、正しく『璞が生鐵と嚙み合つて、而も路上に塵一つ立てない』といふ所である。『崑崙生鐵を嚙み、亂走すれども塵を惹かず』である。共に無心の大善知識であるから、これが出來る世の評判だの人氣だのに、あせつてゐる所謂名聞利養に囚はれてゐる連中や、我見我慢のある徒輩に出來ることでない。

身心脱落鐵牛月に眠り、脱落身心木馬春に遊ぶ――身心脱落と脱落身心と、區別して見ることも出來るが、こゝでは區別して見る必要がない。つまり、無心になり切つてしまつた所、道と人とが合致してしまつた所、大悟徹底した所をいつたものである。無心になり切つた人、大悟した人の消息は『鐵牛月に眠り木馬春に遊ぶ』ともいふべきものである。

鐵牛とは鐵製の牛、木馬とは木製の馬。鐵牛が眠つたり醒めたりする譯がない、木馬が遊んだり働いたりする譯がないといふのは、凡人の常識である。詩の國に遊ぶ文人墨客、乃至、子供の無邪氣さは『鐵牛月に眠り、木馬春に遊ぶ』消息を解する。

二十五哲皆賢聖、永澤獨り藏む透網の鱗――この二句は、通幻禪師を讚歎したのである。師匠の峨山禪

は間違つてしまふ。況や、宗教の第一義を體得するに於てをや。道は常に無心である、無私である。人が無心にさへなれば、何時でも道は得られる。

崑崙生鐵を嚙み、亂走すれども塵を惹かず――これは『人無心にして道に合し、道無心にして人に合す』るところ、人と道とが一つになつた所、大悟の所、そこに現成する活作用を頌したのである。禪機の一端を說き現はしたのである。通幻禪師が、所謂『倒に佛殿に騎つて山門を出づ』といはれた消息である。崑崙は、支那南地の崑崙山から出る璞のことである。生鐵は鍛鍊を經ない鑛鐵である。『崑崙生鐵を嚙み、亂走すれども塵を惹かず』璞と生鐵とが嚙み合ひをして追ひ回り、路上で大格鬪をやつてゐるが、塵が一つ立たないといふ、この句の眞意は、つまり、無心の現はす妙用、大悟の上に現成する禪機はかくの如きもので、常識では一寸見當のつかぬほど、微妙なる活作用であることをいうたのである。

駿河の國に天桂禪師といふ高僧が居られた。或る日、禪師の寺に近い大井川を渡つた一人の坊さんが、雲助に『この邊に、天桂といふ馬鹿野郞がゐないかい』と問うた。天桂の德は雲助どもにまで及んでゐる。雲助ども憤然として、この暴言を難じたのを、坊さん、どこまでも靜まり返つて、『まあい〻、そんなに怒るな、怒ると頭から湯氣がたつぞ。貴公等の大事がる天桂の馬鹿野郞に聞いて見い、そんな面をしてい〻かどうかつて』。雲助愈々怒り出すが、坊さんに妙な威光があつて、打つてもか〻れぬ。坊さんは『おい、雲や、天桂のところへ行つて、さういへ、變な坊主がことづけして、天桂の馬鹿野郞は、まだ生きてゐる

どを公開するといふ有様であつた。何時の世にも、珍らしいもの好きの人がある。與平一派がやらうといふ素人義太夫會も、大變な人氣で公開することになつた。『素人義太夫、それはよからう』と集つた連中は多かつたが、何れも駈け出しの素人で、聞くに堪へない。初め大入だつたのが、一人減り二人減り、眞打株の與平が一生懸命でやり出した時には、お客が大方歸つてしまつた。客席を見た與平は驚いた。高座に上る時には、まだ四五十人はゐたお客が皆歸つて、たつた一人、年寄つた婆さんだけが坐つて、袂を顔にあてゝ泣いてゐる。『耳の無い連中百人より、心から聞いてくれる婆さん一人が面白い、婆さんは感動してゐる』と喜び、談るだけ談つて高座を下りたが、婆さんは泣き止まぬ。よく〳〵感動したと見えると思ひながら、與平が近寄つて話しかけると、婆さんは、ワーツと聲を立てゝ愈々泣く。與平不思議に思ひ、聞いて見ると、少しも義太夫に感心してゐたのでない。

『私にも、あんた位の伜があるが、あんたと同じ道樂者で、義太夫狂、家を飛び出してしまつたが今頃、何處を如何して、うろつき回つてゐることぢややら、あんたの樣に、人前に出て、赤恥かいて居りはせぬかと、私は悲しうてならぬ』とかきくどく。與平には、この泣きごとが、胸にこたへた。自分の了見違ひが分り、義太夫の道具も本も、たゝき壞し、焚き拂ひ、家に歸つて亡き父母へ詫びをいひ、それからは家道專一と精進して、今日に傳はる西村家の基を作つた。

與平も、不思議な緣で、無心で婆さんの意見が聞かれたために悔悟が出來た。世俗の話も無心でなくて

身心兮木馬遊春。二十五哲皆賢聖。永澤獨藏透網鱗。

【讀方】頌に曰く、人無心にして道に合し、道無心にして人に合す。崑崙生鐵を嚙み、亂走すれども塵を惹かず。身心脫落鐵牛月に眠り、脫落身心木馬春に遊ぶ。二十五哲皆賢聖、永澤濁り藏す透網の鱗。

人無心にして道に合し、道無心にして人に合す――通幻禪師は、この語を以て門下を教導いたされたことがある。禪では『無心』を尊重する。無心とは、死灰枯木になることでない。妄念妄慮、惡知惡覺を拭ひ去つた清淨無垢の心情をいふ。坐禪儀にいふ所の『非思量』の當體である。

世俗でも、我を張る人間を、小さい器だといふ。我見我慢があると人間が小さくなる。自然人を容れず、また、人に容れられず、不遇になる。遂には世を呪ひ人を恨む樣なことになつて、人道も佛道も踏めなくなつてしまふ。無心になることが肝要である。無心になり、無我になれば、自ら人道に契ひ佛道に合する。無心になつてゐないと、見易い人道が見えぬ。

江州蒲生郡市部村に西村與平といふ人があつた。吳服商で今はその四代目だといふが、與平は初め親類緣者からも見放された放蕩者であつた。義太夫が大好きで、商賣は番頭まかせ、自分は女義太夫の所に入りびたり、家道を更に顧みない。名代の身代であつた與平の家は、忽ちの中に破產したが、與平は何とも思はぬ。誰が何と意見をしても、自分の所行の惡いことが分らない。

流行はまた恐ろしいもので、與平の凝つてゐる義太夫に凝る連中が、また澤山あつて、素人義太夫會な

の大悟、禪機のあるを御承知になつて、大に喜び、種々眞訣を傳授いたされた。足利氏の重臣細川頼之が、通幻禪師の禪風に歸依し、攝津と丹波の境に、永澤寺を建て、禪師を請じて峻烈なる禪法修行の大道場としたのは、これより間もない年のことである。

禪師は、明德二年五月端午の日に、『甲子を算計するに、滿七十年、轉身の一路、兩脚天を蹈す』といふ遺偈を殘し、門下を集めて『我が滅後、汝等諸人、當に諸緣を屛息し、一大事を究明して、洞上の玄風を墜ちざらしむべし。若し文字言句、名聞利養に貪着せば、吾が徒に非ず』と誡めて入滅いたされました。

『轉身一路、兩脚天蹈』の句は、いかにも禪師らしい。轉身とは身を飜へすこと、つまり死ぬことである。死んで何處へゆくか、まつさかさまに、地獄へぶち落ちてゆくのだ、といふ鹽梅であります。禪的境地に住する人は、六道輪廻轉風流で、地獄で鬼が待つてゐれば地獄に落ち、天上界で天人が待つてゐれば天上界に上る、因緣次第、感應次第、何處へでも出現して動着しない。かゝる大安心の禪の境地へは、經文の末に引つかゝつてゐたり、浮世の名利に引きまはされてゐたりしては、到達することが出來ぬ。『若し文字言句、名聞利養に貪着せば、吾が徒に非ず』と通幻禪師が遺言されるのは、こゝであります。

頌曰。人無心合道。道無心合人。崑崙嚼生鐵。亂走不惹塵。身心脫落兮鐵牛眠月。脫落

騎せて出かけるといふ圖であります。父親たる者は飽くまでも嚴格な態度で子供に臨むべきだと思ふは、人生の一面で、全面でない。父親が子供の馬にもなり、僕にもなる、この自由の眞味は、人の子の父親になつたものでなくては分らぬといふところである。通幻禪師は大悟の境地に入つて、身心の眞の自由を味ひ、その自由を歎美して『倒に佛殿に騎つて山門を出づ』といはれたのです。

山曰く、亂走すること莫れ」——師匠は、通幻禪師のこの語を聞いて、大に喜んでゐられるのだが、『亂走すること莫れ』無暗に走り出してはいかぬとたしなめられた。禪門の師家は、かかる場合、否定的の言葉を能く使用する。

師曰く、羅籠すれども住らず、呼喚すれども回らさず」——通幻禪師は飽くまでも強く出て、師匠から種種にいはれても、ビクともせぬ。沒量の大人とはこのことである。その力量は量ることが出來ぬ。羅籠とは網と籠で、鳥などを捕へる道具である。呼喚とは呼びかけること。『羅籠すれども住まらず、呼喚すれども回らさず』とは、引ツ捕へてしまはうとしても捕はれぬ、呼びとめやうとしても留められぬといふことである。

拂袖して去る——これは、記者がその場の樣子を記したのである。通幻禪師は、師匠の峨山禪師が種々と追問されるその語に引ツかゝらないで、ヅン／＼法堂から退つてしまはれたのであります。この時、通幻禪師は三十五歲、峨山禪師は八十に近い御高齡であつた。法嗣（禪法の正傳者）たる、通幻禪師に此

この方が大悟されたその時の問答であるから、所謂佛來れば佛を打し、祖來れば祖を打す、といふ勢ひあるは當に然るべき所です。

こゝに、禪の面白味がある。他の顰に倣はず、その天資性格が呈露しになつてゐる。通幻禪師が身心脫落の境地は、この勢ひに、よく現はれてゐる。

山曰く、身心脫落の時如何――この弟子にしてこの師匠あり、師匠峨山禪師は、更に追問して『身心脫落の時如何』と、通幻禪師が佛祖をも驀過する底の勢ひを、まるで子猫あつかひにした仕方である。

師曰く、倒に佛殿に騎つて山門を出づ――通幻禪師のこの答へは、謎や判じものでない。が、禪語を讀み慣れない人には分りにくい語である。

『倒に佛殿に騎つて山門を出づ』の語を、文字通りに見れば、奇術師でも行れさうにない藝當である。文字通りに解すると、佛樣をおまつりしてある佛殿の屋上に倒立して、佛殿を步ませ、山門をくゞりぬけて、寺の境內の外に出るといふのである。そんな藝當は、奇術師にだつて出來ない。この語は、畢竟何をいつてゐるか。これは、人間が自分で勝手に定めた杓子定規に縛られて動きの取れぬと違つて、大悟の境地は自由無礙である、任運に機用を現ずることが出來る、禪機は斯くの如きものだといつてゐるのです。

佛殿を父親、山門を子供といふことにして、この句の意味を考へると分りがいゝ。父親が子供を肩車に

と一體、何處ですか』、『貴下の心ぢや、天は高うしてその頂を極むべからず、地は低うしてその底を極むべからずといふが、心はその天の上にも達し、地の下にも届いてゐる、この心が即ち佛境界ぢや』。『へい、心が佛境界ですか』、『さうぢや、高い天の絶頂を極め、低き地の底に徹する大心を摑んだ所が佛境界である』。こゝで儒者は深く省悟する所があつたといふ。

天の頂きを極め、地の底に徹してゐる心、この心をシッカリと見究めるならば、それは即ち坐禪用心記にいふ所の『心地開明』である。大悟である。大悟の眼を見開いて見れば、佛境界にあらざる所は一處もない。普天の下、率土の濱、行くとして佛境界にあらざる所がない。此の佛境界には、身心を苦しむる束縛なく、繫累なし、自由無礙の樂天地である。此の地に到つて見れば、今までの身心が、まるで自分の身心ではなかつたと思へるほどに、不自由な苦惱に充たされたものであつたことに驚く。こゝに到つて、誰しもホッとする。こゝの自由無礙なる氣持、これを文字に現はして、身心脱落といふのである。

通幻禪師は、師匠峨山禪師が、身心脱落の話をいたされるのを聞いて『我れ會せり』分りましたと申されましたので、

山曰く、汝作麼生か會す――師匠の峨山禪師は尊公は如何分つたのか、と追求いたされました。すると、

師曰く、和尚、人を瞞ずること莫くんば好し――通幻禪師は答へて、あんまり馬鹿にしないで下さい、と申されました。通幻禪師は、峨山禪師門下で機鋒峻烈、行持綿密、並ぶ方が無いと評された方である。

一日、山の身心脱落の話を擧するを聞いて、忽然大悟して曰く、我れ會せり——通幻禪師は、師匠峨山禪師が『身心脫落』の話をいたされるのを聞いて、直下に、その妙趣を體會して『我れ會せり』分りましたと、申し上げられました。身心脱落の妙趣は、御承知の如く、高祖道元禪師が、支那天童山にあり、如淨禪師の指南によつて、親しく會得いたされた所のものである。

人間には、肉體的にも精神的にも、打算的にも理想的にも、社會的にも家庭的にも、種々樣々の束縛がある。その束縛苦から脱出した大自由の境地が、即ち身心脫落の所である。これは佛菩薩の境界であるが、吾々と雖も、直下にこの境界を體會することが出來ないのではない。

或る儒者が、禪僧を訪うて問答をした。『佛境界は何處にありますか』、『貴下の頭上にある』。『頭上といふと家根のことですか』、『家根でない、もつと上ぢや』。『家根より上にあるのですか、屋上の烏が、佛境界を得てるのですか、道理で、烏はコウコウといつて啼きます、孝は百行の基、佛境界もこの孝から開けるのでせう』、『いや違ふ、佛境界には孝は勿論あるが、烏が佛境界にゐるとはいはれない』。『では、佛境界は空中にあるのですか』、『いやもつと上である』。『天ですか』、『天より上ぢや』。『分りませんね』、『分らねばいふが、佛境界は貴下の脚下だ』。『へい、今度は脚下ですか、私の坐つてる疊の上ですか』、『さうぢやない、も少し下だ』。『あゝさうですか、椽の下ですか、成るほど椽の下の力もちは、佛根性でなくては出來ませぬ』、『いや違ふ、も少し下ぢや』。『大地ですか』、『も少し下ぢや』。『大地より下といひます

脫落の時如何。師曰く、倒に佛殿に騎つて山門を出づ。山曰く、亂走すること莫れ。師曰く、羅籠すれども住まらず、呼喚すれども回らさず。拂袖して便ち去る。

通幻寂靈禪師――は豐後國東郡武藏鄕の人といひ、また因幡の人ともいふ。歷史家の研究によらなければ、確かなことは分りませぬ。禪師が出生について、不思議な話が傳はつてゐる。

禪師の母上は、非常に信心深いお方で、禮拜看經を怠らず、懷胎になられてからも、お丈夫であつたが、やがて玉のやうなお子を分娩されやうといふ間際になつて、急に死亡してしまはれた。まことに、はかなき人間の命である。すると、葬儀も了つたその夜のこと、墓地の傍を通り合せた人が膽をつぶした。今日葬儀のあつた墓石の下で、赤ン坊の泣き聲がするのです。喫驚して其の事を緣者の方に話すと、緣者の人々も驚いて、早速、新しい墓をあばいて見た。これは不思議、亡くなつた母の胎から、玉の樣な男の子が產れてゐる。早速抱きあげて連れ歸り、父親は大に喜び、卜師などを召んで、その將來を卜はせた。かうして、父の手一つで育て上げられた、非凡のその子こそは、後に天下の僧祿になつた大善知識、通幻寂靈大禪師であります。

禪師は聰敏、博く經史の學に通じ、十七歲にして豐後の大光寺定山禪師について出家し、翌年、太宰府の觀音寺戒壇に上つて佛戒を受け、行脚修行に出て、加賀の大乘寺に明峰禪師に參じ、精思苦研、禪道佛法の秘奥を究め文和元年、峨山禪師を總持寺に拜して、遂に師事されることゝなりました。

通幻禪師の身心脫落の話

太祖常濟大師の坐禪用心記に、坐禪をすると、立ろに『心地を開明し、本分に安住す』と誨へてあります。心地とは、佛の境界、本分とは各自の本領である。吾々お互が、佛の境界に到達したのを大悟といひ、各自の本領を全うして、自由無礙に現はす所の働きを禪機といふ。

坐禪に親しくなると、立ろに佛の境界に到達し、自由自在なる働きが出來るのである。これより通幻禪師の大悟禪機の消息についてお話いたします。

通幻身心脫落話

通幻寂靈禪師、參峨山禪師。一日聞山擧身心脫落話、忽然大悟曰、我會也。山曰、汝作麼生會。師曰、和尚莫瞞人好。山曰、身心脫落時如何。師曰、倒騎佛殿出山門。山曰、莫亂走。師曰、羅籠不住、呼喚不回。拂袖便去。

【讀方】通幻寂靈禪師、峨山禪師に參ず。一日、山の身心脫落の話を擧するを聞いて、忽念大悟して曰く、我れ會せり。山曰く、汝作麼生か會す。師曰く、和尚人を瞞ずることなくんば好し。山曰く、身心

もみぢ葉の散りしく山にまるねしてわれも錦を身にまとふかな

といつて、襤褸を著て、貧乏生活はしてゐても、紅葉葉の散りしいて美しい山にまるねをすると、全く錦繡綾羅をまとうて寢てるも同然、まことに豪奢なことだといつてゐます。一茶の樣な境涯になれば安心です。一茶には、然しまだ、何處かにひねくれた所があつた樣にも聞いてゐます。加賀の殿樣に『子供等がのんのうといふ梅の花』といひ『何のその百萬石も笹の露』といふ樣な句をよんで、不遜の所などもあつた樣に聞いてゐますが、ともかく、見識はしつかりしてゐたらしい。『もみぢ葉の散りしく山にまるねしてわれも錦を身にまとふかな』の歌などは、大悟者が本地の風光の中にまるねしてゐる樣子があります。

この消息を、見破る人が、何處にあるか。釋尊が本地の風光を拈起された時に、大迦葉が破顏微笑した樣に、無底禪師が大悟の消息、これを誰が知つて微笑をすることであらうか。無底禪師の兒孫である吾等でなければならぬ。

釋尊は四十九年間一日も、無事休養なされた日はなく、求道者のために説法化導いたされたのであるが、或日、求道者大勢が前に集つてゐる壇上にお立ちになつて、たゞ一枝の金婆羅華といふ花を拈起いたされたのみで、一言の説法もなさらない。大勢は何のことだか薩張り分らぬ。ぽかんとしてゐる。然るに、大迦葉尊者が一人、釋尊が拈華してゐらるゝ御精神をすつかり領知して、破顔微笑いたされた。にこ〳〵ッとなされた。この拈華と微笑、これは禪の以心傳心の濫觴として、古來重く見られる所のものであります。今私が、こゝに『端無く觸著す拈華の髓』と申しましたのは、釋尊拈華の精神を無底良留禪師が、すつかり悟られたといふ意味を現はしたのであります。

拈華といふ言葉は無底禪師も珍重なされたので、御開創の黑石の正法寺の山號になつてゐます。正法寺は、詳しくは、大梅拈華山圓通正法禪寺と申すのです。禪師の頃は長い名のお寺が多くあつたので、道元禪師初開の道場たる、京都近くの宇治の興聖寺なども、觀音導利院興聖寶林禪寺といつたのでありました。

更に飲光をして笑ひ轉た新ならしむ——飲光とは、大迦葉尊者のことです。釋尊の心をそのまゝに傳へられて大迦葉が破顔微笑いたされた如く、無底禪師は、釋尊の心をそのまゝに單傳して、破顔微笑いたされたといふほどの義であります。

信州の一茶は、今日も人から貴ばれる俳人で、立派な方であるが、極めて枯淡に甘んじ、貧乏生活を以て得々としてゐた。

古板聲中法塵を脫す——古板とは、古色蒼然たる板で、幽邃閑寂な禪堂には相應しい板である。禪では古鏡とか古板とかいつて、古いものを珍重する樣に見えるが、これはたゞ單に古ぼけたのを骨董的に喜ぶのでなく、俗離れのしてゐる氣持が漂うてゐるのを貴ぶのです。專門的にいへば、本地の風光がそこに窺はれるのです。見んと要せば直下に見よ。本地の風光は、禪の眼を以て見れば、即處に見ることが出來る、聞く耳を以てすれば、即刻聞くことが出來る。

法塵とは塵芥に汚濁したものをいふので、つまり吾等が煩惱にからんだ目で見ると、本來清淨の本地の風光が、法塵となつてしまふのである。紅塵萬丈といつて、支那では、實際に萬丈の高き空までが、紅塵で一杯になることがあるといふ、思うても不快なことである。

吾等は煩惱妄想の紅塵に惱んでゐる。無底良韶禪師も亦同じく、惱んでゐられたのだが、『古板聲中法塵を脫す』、禪堂前の古板をパンパンと叩くその聲を聞いて、即處、その聲中に沒入し、所謂觀音流を入して所知を亡じて、釋尊が曾つて『奇なる哉、奇なる哉』と讃歎いたされた本地の風光、法塵を拭ひ去つた風光に接せられたのであります。

圓通境裏渾身を沒す——圓通境裏とは、本地の風光のことです。無底禪師が、本地の風光の中に沒入されたことを『圓通境裏渾身を沒す』と申したのです。

端無く觸著す拈華の髓——拈華といへば、禪書を多少見られた人は、大抵御承知の拈華微笑の話です。

良韶と觀音大士と圓通を同じうす——圓通とは圓かに通ずるといふ字で、觀音菩薩は、一切の音聲に圓かに通じて缺くることなき菩薩である。つまり聞聲三昧を得てゐられる方で、如何なる音聲にも應同して眞にその救濟者とならるゝ菩薩である。その菩薩と同じ境地に到達しましたと、良韶禪師は申されたのです。

山曰く、作麼生かこれ同底——觀音大士と、どんな工合に同一の三昧を得たか、同一の三昧を、こゝに出して見いといふ勢です。

師曰く、明頭暗頭、遊戯自在——明頭は明るい所、暗頭は暗い所、更にいへば、差別の方面と平等の方面、迷者の側と悟者の側、惡人の方と善人の方、乃至、世にありとある一切の方面をいふのであります。どんな方面にも、どんな人々にも。自由自在に應同して、よく化導をなし、自も喜び他も喜んで、兒童の遊戯のそれの如く、何等の屈托がない。

觀音大士と圓通を同じうしてゐる樣子を、明頭暗頭、遊戯自在の、八字でお答へになつた。

山これを頷ず——峨山禪師は、良韶禪師の境地を御承認になつたのであります。

頌曰。古板聲中脫法塵。圓通境裏沒渾身。無端觸著拈華髓。更使飮光笑轉新。

【讀方】頌に曰く、古板聲中法塵を脫す、圓通境裏渾身を沒す。端無く觸著す拈華の髓、更に飮光をして笑ひ轉た新ならしむ。

昔たて〻、前の泥溝の中に落込んでしまつた。

大慧は戻つて、早速笠の中を見た。大事の簪が無い。大慧はまつさほになつて、道友を詰つた。道友は大慧のために、その不心得を諭し、『簪は魔ものだ、そんなものに心を奪はれて、貴公、工夫鍛錬をお留守にして、どうなるか』と痛く難じた。大慧も漸くその非に氣づいて、專一に修行をなし、遂に今日に禪門の偉傑として傳へられる高僧になられたのであります。

これは、古人が少し脫線した話であるが、これによつて大慧禪師等の平生の熱誠なる修行が分る。無底良留禪師なども、實に熱心なる修業を致された。その功空しからずして、一日、堂前の板聲を聞いて、豁然契悟いたされたのである。

趨つて籌室を叩いて曰く――趨るといふ字は、足を小きざみに鞠躬如として急ぎ運ぶといふ字である。籌室とは住職の居間のことである。言葉の起りは、印度の優婆毱多尊者が、受學者の中で、禪法を悟るもの一人を得る毎に、籌といふものを一つづゝ室に收められた。その籌は、長さ四寸位の細い草であつたが遂には室一杯になり、尊者が入滅せられた時には、その籌で火葬したと寶林傳に書いてある。そんなことから、師家たる住職の居室を、籌室といふ。

籌は印度では、舍羅といふ草をいふので、人員を數へる數取りに使用する習慣があつた樣であることは五分律などでも分ります。

なり切ることは容易でない。古人もこの境地になり切るために、一通りならぬ苦辛をしてゐる。
支那に禪があつた頃、大慧宗杲禪師といふ高僧がゐられた。禪門の第一書といはれる碧巖錄は、大慧禪師の師匠の圓悟克勤禪師が作られたのであるが、この碧巖錄を大慧禪師は燒き捨てゝしまつたといふ人であります。この高僧大慧禪師が、そんなにまだ偉くなつてゐられぬ修行時代に、道友と二人で行脚されたときのことです。大慧禪師の樣子が、常時と違つて、どうも落つかない。何か心に懸つてゐると見えると、道友は大慧禪師を私かに案じてゐたが、口に出して問ひもせず、歩行をつゞけて、よく注意してゐると、大慧は被つてゐる笠の中を、ソツと見ては、安心した樣な顏をする。暫時するとまた見る、見ては安心をするらしい顏つきをする。これは變であるわいと、道友は思つたが、容易に問ひたゞしもせず、行く中に大分疲れたので休息いたすことになり、茶店に休んで、大慧は便所に行つた。

このときだと、道友は早速、大慧の笠をあらためた。すると笠の中の巾の所に何か光るものがある。引ツぱり出して見ると、それは金の簪であつた。簪を貰つて喜び、心がそれに引かれてしまふといふは、相應しくない話だが、思ふに大慧は、信者の方よりの信施として、實際これを受けて喜び、病氣をしたり路銀に困つたりした際には、金に代へて用を辨じ樣としてゐたのであつた。然し、なんにしても、寸陰分陰も油斷をしてならぬ禪の修行者が、金の簪に心を奪はれて、靜思工夫の大事を怠るが如きは、許すべからざることである。道友は簪を引きぬくなり、身ぶるひして放り投げた。ポーンと放り投げた簪はジャブンと

（禪法を説いて人を導くこと）を願はうと致されましたが、峨山禪師御老體にて、そのことは成りませんでした。が誠に親切なる御書簡を送つて、良韶禪師の德を歎賞あらせられ、正法寺の隆運は旭日の勢となりました。併し良韶禪師の御壽命は長からず、四十八歳を一期として御遷化になりました。

良韶禪師の御遷化の後は、禪師の弟弟子である月泉良印禪師が、峨山禪師の命によつて、正法寺に住せられ、月泉禪師の下には、四十三人といふ大勢のお弟子が出來、これより奥羽二州の禪法は愈隆昌を極めることになりました。出羽の秋田在には、今日も補陀寺といふ名刹がありますが、この寺は月泉禪師が開山で、藤原藤房卿が建立發願をなされたと傳へられて居ります。

一日、堂前の板聲を聞いて、豁然として契悟す――良韶禪師が、峨山禪師の爐鞴に入つて、修行してゐられる或る日のことです。禪堂の外に掛けてある版が、內外の靜寂を破つて鳴り響いた。版といふのは、音聲を發する道具で、禪寺には、僧堂だの方丈だの庫裡だのに掛けてあつて、坐禪が始まるお茶が始まるといふ樣なとき、それを參禪者に知らすために鳴らすのである。

版が、パーン〳〵と鳴るのを聞いて、良韶禪師は豁然として大悟いたされた。機緣といふものは大事なもので、世の中でも、あゝしたはづみに、かうしたはづみに、といふ樣なことをいふ。良韶禪師は、版の音を聞いたはづみに、『觀音、流を入して、所知を亡ず』といふ聞聲三昧の境地に沒入されたのです。『觀音、流を入して所知を亡ず』とは、かくかくのこと〳〵、知識的には見當がついてゐても、すつかりその境地に

曰く、良詔と觀音大士と圓通を同じうす。山曰く、作麼生か是れ同底。師曰く、明頭暗頭、遊戯自在。山これを領す。

●●●●●無底良詔禪師――は、能登酒井の方で、二十歳前後で明峰禪師について禪を修し、それより總持寺の峨山禪師の爐鞴に投ぜられた。(爐鞴とは、爐も鞴も鍛冶屋の道具です、爐は鍛冶屋の銅鐵を燒く火爐で、鞴は火をふきおこすフイゴです。禪宗の師家は鍛冶屋が銅鐵を鍛へるにきついことをする樣に、學人を手荒い方法で鍛錬するから、師家の下に弟子入りして、精一杯の指導を受けることを、爐鞴に投ずるといふのです)而して遂に、大悟する勝縁を得られたのでありました。

良詔禪師、大悟の後、各地に禪喜法悅を傳へて、遂に奧州黑石の里に到り、山水の美を愛し、幽邃閑寂を賞して、そこに菴を結んで住せられましたが、その地の長部近江守や黑石出雲守の歸依する所となり、大梅拈華山圓通正法寺といふ大寺院が建立されました。峨山禪師は、良詔禪師のこの正法寺を重く遇せられ、崇光天皇よりも『奧羽二州の僧錄、扶桑曹洞第三の本寺たるにより、紫衣着用、兩國出世の道場となすべし』といふ綸旨の御降下があつたほどに隆昌を極めた寺で、今日は栗山泰音師が住山されて居ります。

良詔禪師は、文和四年に、能登永光寺の第八世に御住山になりましたが、一年で退き、正法寺に御歸りになつた樣であります。それより數年の後、峨山禪師を奧羽の地に御巡錫を請ひ、正法寺に於ても御法益

動きを舞臺に移して演出する芝居にも、音樂がはいらなければ成功しない。諧調ある音聲には偉大なる力がある。況んや、佛の音聲に、偉大なる調和統一力のあることは申すまでもないことであります。禪にあつては、一切の音聲は、これ佛の御聲なることを知つてゐる。佛の御聲を聞き、佛の御聲の偉大なる調和統一力の中に攝取し盡された消息、これが『觀音、流を入して、所知を亡ず』といふ所です。流を入すとは、音波の流に沒入すること、所知を亡ずとは、音聲の中に沒入し盡した當處であつて、自分は今、音聲を聞いてゐるのだとか、自分に聞かれてゐる音聲だとかいふ考の、全く無いことを申すのです。つまり、音聲に沒入し、音聲が我か、我が音聲か、その區別もつけられぬ境地、そこを『觀音、流を入して、所知を亡ず』と申したのです。聞聲三昧とも申すのです。而してこれは身心の最もよく調うた境地であります。この境地は、禪の至極とする所、卽ち觀音菩薩の境地で、この境地に住する人にして、始めて無限の大悲を以て有情非情を救濟し盡す、偉大なる力を現はすことが出來るのであります。

無底遊戲自在話

無底良韶禪師。參峨山禪師。一日、聞堂前板聲、豁然契悟。趣叩籌室曰、良韶與觀音大士同圓通。山曰、作麼生是同底。師曰、明頭暗頭。遊戲自在。山領之。

【讀方】無底良韶禪師、峨山禪師に參ず。一日、堂前の板聲を聞いて、豁然契悟。趣つて籌室を叩いて

眞直ぐな世の中を、眞直ぐに見ることが出來ぬ。ひがんで眺めて、結局、自分が苦しい目をする、さういふことは、眞理のためにも、人のためにも、また自己一身のためにも、よろしくない。

『觀音、流をかへして、所知を亡ず』これは吾等が觀音になつてしまつた時の消息である。觀音は讀んで字の如く、音を觀ずるといふこと。世の中の音聲を觀ずることで、如何なる音聲もこれを觀ずるのでありますが、お寺の梵鐘を觀ずることを例に取つていへば、ボーンと鐘が鳴る、それを聞いて、お寺詣りを思ひ立つ、これも一つの觀音です。鐘は上野か淺草か、どつちの寺の鐘の音かと考へ込むも、觀音です。びつくりして飛び上るも觀音、幽邃の境にひかれゆくも觀音、觀音にも色々ありますが、ボーンといふ聲を聞いて、ボーンの中に沒入してしまふのが一番よい觀音であります。

ボーンの中に沒入するといつても、分りが惡いかも知りませぬが、一體に、音聲といふものは、人の心を動かす力の强いもので、音樂が人心に及ぼす影響の實に偉大であることは、孔子もこれを認められて、禮樂を重ぜられたものでありませう。音樂の調子によつて、人の心は、浮き立ちもすれば、沈み込みもする。音樂の調子が、直に人心の調子を作つてしまふ。つまり音樂は、得て人心を調和統一に導くものであります。

鐘の聲を聞いた、擊柝の音を聞いた、その機會に於て、大悟した方が澤山にある。支離滅裂になつてゐる心が音聲で調うて、大統一を得てしまふのであります。これは世俗にもよくあることで、人心の微妙な

無底禪師の遊戲自在の話

觀音菩薩といへば、皆さんは直ぐに、慈悲柔軟なお姿を思ひ出される。佛敎信者は申すに及ばず、佛敎を信じない人でも、觀音さまを禮讃する。觀音さまを禮讃し、觀音さまの因緣で悟りを開かれた方に、無底良韶禪師といふお方がありますから、こゝにその講話をいたします。

觀音は、詳しくは觀世音といつて、世の樣々の音聲を聽くことを專門とする菩薩であります。つまり、請願の引受係です。觀音經には『觀音妙智力、能救世間苦』とあつて、觀世音は、世のあらゆる苦惱を滅除する救世主である。併し、禪では、觀世音にお願ひをして、救うて頂くだけでは滿足しない。自ら觀世音菩薩となつて、自らを救ひ他を救ひ、盡さねば承知しない。

道元禪師は、學道用心集の中に、他の宗敎宗派で營む所の恭敬禮拜等のことを述べ『向來、都べてこれを用ゐず、身心を調へて以て佛道に入るなり、釋迦老子云く、觀音、流を入して、所知を亡ずと、卽ちこの意なり』とお示しになつて居ります。觀音になつてしまはなければ、眞に徹底した救濟は成就しないぞといふ誨です。『身心を調へて佛道に入る』といふことは、道元禪師のやかましくお誨下されたことで、身の姿勢がよくなければいかぬ。心の姿が正しうなつてゐなければならぬ。根性が曲り、ひねくれてゐては

ばりの太鼓を軒端につるし、これを撃つ。ここに發する音は、一體、誰が聞き分けるだらうといふのである。譯の分らぬ樣な句であるが、これは、本佛釋迦牟尼如來の妙音は、松の梢を吹く風の聲にも、竹一葉を渡る風の音にも、乃至、世のありとある一切の有聲無聲に行き渡つてゐることを現はした言句であります。

『古鏡臺前、燈を假らず』の一句は、『歸りて父に就く』の消息を視覺に訴へて說き示したものであるとすれば、『布鼓當軒、撃つに從つて響ふ』の一句は、『歸りて父に就く』の消息を聽覺に訴へて說き示したものである。

少林、雲密にして、人到り難し、得髓は他の斷臂の僧に歸す――少林とは支那嵩山の少林寺で、達磨大師が端坐してゐられた寺です。この寺は、人里遠く離れて、山雲に蔽はれた山にあつて、容易に行かれない。そこを難儀苦勞して、漸く行つて見た所で、肝腎の目的が叶へられるか、どうか分らない。達磨大師の禪を得んとして、少林寺へ行つた人は澤山あるが、達磨大師の眞髓を傳へ得たものは、斷臂の僧一人であつた。斷臂の僧とは二祖慧可大師のことで、二祖は、初め達磨大師に參じた時に、求道の赤心から、遂に臂を斷つてしまはれた。道を得ることのためには、身を粉にしても厭はれないのである。この赤誠あつて遂に達磨大師の禪を正傳いたされたのであります。

少林寺へいくら骨折つて行つた所で、達磨大師の禪の眞髓を得た人は、二祖慧可大師一人であつたと同じ様に、帝釋天の網羅幢研究などを、艱苦してやつた所で、果して『古鏡臺前燈を假らず』の消息が悟れるか、どうか分らない『歸りて父に就く』消息が分るかどうか、分らない。であるから『網羅幢について參承するがよい』といつたからとて、網羅幢に心を引つぱられて、遠方のことを考へる必要はない。

誰か知らん、教外安心の訣。布鼓當軒、擊つに從つて響ふ――歸りて父に就くの消息、古鏡臺前燈を假らざるの消息、安心決定の要訣は、まことに手近かな所にある。『布鼓當軒、擊つに從つて響ふ』ここにある。布鼓とは、布ばかりの太鼓である。布ばかりであるから、普通の太鼓の樣な音がせぬ。むしろ、音は出ぬといふべきである。然るに、古人に『布鼓當軒、これを擊つ、誰かこれ知音』といふ句がある。布

古鏡臺前、燈を假らず——大智禪師が、瑩山禪師から『子、歸りて父に就く時如何』と問はれて、その答に申された言葉である。既に話した如く、この言葉は禪語を見慣れぬ人には、少しく分りが惡いが、味つて見ると實によい言葉である。慈父本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明の中に沒入してゐる消息がよく現はれてゐます。

網羅幢畔、好し參承するに——網羅幢は御承知の通り帝釋天の喜見城の網羅堂にある。四方八方、重々無盡に無數の珠がつるしてある。その珠があみの目の樣に見えるほど、ギッシリ懸けてあるから、これを網羅幢といつたのである。網羅幢の珠と珠とは、互に映り合ひ、映し合うて實に壯觀である。

この網羅幢は、十方世界の事々物々が、互に緣じられたり緣じたりして、（科學の言葉でいふならば、互に條件になり合つて）ゐるその有樣は、本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明が、天地に彌漫して、事々物々を現成してゐる眞相を、最もよく說示してゐる。『古鏡臺前、燈を假らず』の消息がよく示されてゐる。よつて『網羅幢畔、好し參承するに』網羅幢畔について、そこの趣きを合點するがよいといふのであります。

斯樣にいふと、禪に志のある人の中には『では網羅堂の研究を初めませう』と、ぼつ／＼やり出す人がある。然しそんなことをやり出した所で、却々埒のあくものでない。例へていつて見れば、次にいふごときものである。

の主人である。主人といひ賓客といふも、その場その時限りの假りの名稱に過ぎぬ。だから、賓客と主人とを、全然別個のもの、どこを捉へて見ても、寸毫似通ふ點もない樣に響かして問はれるのを、大智禪師は、『何をいひなさる』と喝散してしまはれたのです。

峰曰く、賓主歷然――成るほど、主といひ賓といふも、その場その時限りのことではあるが、その場その時にあつては、主は主たり、賓は賓たり、これを無視することは出來ぬ、と明峰禪師は申されるのです。勿論このことは、大智禪師に分り切つてゐることですから、新に感心される話ではない。が、

師便ち禮拜す――大智禪師は、賓主歷然と聞いて、思はず起つて禮拜を致された。問答も既に圓滿したので、この場の主人公たる明峰禪師に對し、賓客としての大智禪師が、その儀禮をなされるのです。大智禪師が、申さるゝ言句、爲さるゝ行ひ、まことに申分がない。實に禪師は希有の大善知識であります。

頌曰。古鏡臺前不假燈。網羅幢畔好參承。少林雲密人難到。得髓歸他斷臂僧。誰知敎外安心訣。布鼓當軒從擊譍。

【讀方】頌に曰く。古鏡臺前燈を假らず、網羅幢畔好し參承するに。少林雲密にして人到り難し、得髓は他の斷臂の僧に歸す。誰か知らん敎外安心の訣、布鼓當軒擊つに從つて譍ふ。

佛の大智慧光明だといふことになると、猫も杓子も同じものだといふことになりはせぬか、悪平等に墮ちはせぬか。すべての階級も秩序も無視してしまひ、君もなく臣もなく、主もなく賓もない、といふ様なことになりはせぬか。貴公、この點を、どう思ふかと追ひ詰めてお問ひになるのです。

師曰く、有り――君臣・上下・貴賤・賓主、これを無視してしまふ様なことは有りません、上下・貴賤・賓主の別は、歴然として有ります、と大智禪師は答へられました。

峰曰く、如何なるか是れ賓――上下・貴賤・賓主があるといふなら聞きたいが、賓とは抑々どういふものをいふか。

師便ち喝す――大智禪師は『クワーツ』と大聲一發『何をいつてゐなさる』といふ調子の挨拶です。

峰曰く、如何なるか是れ主――明峰禪師は、更に、主とは抑々何か、と追問された。

師また喝す――大智禪師、また一喝、『何をいつてゐなさる』といつて、取り合はれない。

こゝの所を了解するのには、大智禪師が瑩山禪師に申上げられた『鑑照は卽ち無きにあらず、兒孫邊の事を見ず』の語を考へ合せるがよい。

賓あり主あり、賓客と主人と、歴然として存してゐるは、ゐるけれども、賓客も主人も、もと〳〵本佛の大智慧光明の片々であるのだから、その間、確然たる區別はつけられぬ。世間話でいつて見ても、此の家にある時の主人は、彼の家へ行つたときの賓客である。此の家にある時の賓客は、彼の家へ行つた時

菩提樹の下で坐禪工夫をなし、一朝、東天を仰いで明星を御覧になつた、その機縁に於て、心機一轉、宗教的心眼を打開せられた。宗教的心眼を打開して御覧になると、天にあるもの地にあるもの、何から何まで悉くが、本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明の片々である。大智慧光明にあらざる一物も存在してゐない。ものみなが大智慧光明の面目を現成してゐる。そこを釋尊は思はず聲を發して、『有情非情同時成道、草木國土、悉皆成佛』と仰せになつたのです。

師曰く、大方、外無し――本佛の大智慧光明は、天地に彌漫して至らぬ隈なし、といふほどの意味である。

峰曰く、未在更に道へ――大智禪師の『大方外無し』といはれた言葉だけでは、十分その意が現はれて居らぬので『未在更に道へ』十分でない様だ、更に一句を道へと、明峰禪師が追求されたのです。

師曰く、一葉落ちて天下秋を知る――梧桐一葉、バサツと落つる、その音にも、本佛の大智慧光明が充滿してゐるといふ意味である。

『大方、外無し』の方には、本佛の大智慧光明が、廣く十方に彌綸してゐる意味が窺はれ、『一葉落ちて天下秋を知る』の方には、本佛の大智慧光明が、一事一物の上にも浸透しつくしてゐる意味が窺はれる。二句合せて見ると『細には無間に入り、大には方處を絶す』といふ禪語と同じになります。

峰曰く、卻つて賓主有りやまた無しや――明峰禪師は更に深く追問されるのです。十方世界は悉く本

十方世界の事々物々が、本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明の片々として、本德を全うし、えもいはれぬ佛々想念の世界を現はしてゐるといふ意味を申上げられたのであります。

祖曰く、洞上の宗、倚るべし——大智禪師の申された所を、瑩山禪師は大に讃歎して、『尊公は、曹洞宗の綿密なる宗旨を傳持するに堪へる大人物である。』といひ、

則ち指して明峰に見えしむ——指圖して明峰禪師の所へ行かしめられました。明峰禪師の所に行つて修行をなされたならば、大智禪師は、更に更に偉大なる境地に進まるゝと、瑩山禪師はお思ひなされたのでありませう。

明峰禪師は瑩山禪師のお弟子で、此の頃は京都にお出になつた樣に思はれます。

峰問うて曰く、大地有情、同時成道、意旨作麼生か會す——明峰禪師は、大智禪師に『大地有情、同時成道』といふことがあるが、一體、どういふ意味だと尊公は思ふか、とお問ひになつたのです。

『大地有情、同時成道』といふのは、二千五百年の昔、印度に出現された釋尊が、菩提樹の下で、悟をお開きになつたその時に、仰せられた言葉である。『有情非情、同時成道、草木國土、悉皆成佛』と仰せられたとも申します。佛教で有情非情といふのは、心情の有るものと無いものといふことで、つまり、天地間にありとあらゆるもの一切をいふのである。

悟といふことは、種々むづかしくも說くが、いつて見れば、宗教的の心眼を開くことである。釋尊は

祖曰く、却つて鑑照ありやまた無しや――大智慧光明の輝きぶりは、どんなか、と瑩山禪師が、突き入つて問はれるのです。

師曰く、鑑照は卽ち無きにあらず、兒孫邊の事を見ず――大智慧光明の輝きぶりは、それは實に素晴らしいものです。世間の人々が使用してゐる鏡などのそれとは、似もつかぬものであると大智禪師は答へられました。『鑑照は卽ち無きにあらず』といふ言葉は、餘り判然せぬ言葉の樣に思はるゝかも知れぬが、禪語には斯ういふ用語が澤山にある。

大智慧光明の輝き（古鏡の鑑照）は『無きにあらず』どころの話でない。十方世界は、大智慧光明の片々である。大智慧光明の外の一物も無いのである。いはゞ大智慧光明は本體で、十方世界の事々物々は現象である。大智慧光明と十方世界とは、切つても切れぬ關係である。父子の關係である。十方世界は大智慧光明から出生したのである。然るに、大智慧光明の輝き（鑑照）は『無きにあらず』といふ樣な、判然しない言葉でいふのは、何故であるか。

大智慧光明と十方世界、言ひ換へれば、本體と現象、更にいへば、父と子、この關係が、まことに微妙で、理論の上では分けていふ樣なものゝ、如實の上では分けることの出來ぬものである。この不可思議不可商量の消息を、響かすために、『無きにあらず』といふ樣な言葉を禪門では使ふ。それゆゑに大智禪師も『鑑照は無きにあらず、兒孫邊の事を見ず』と申されたのです。

佛の大智慧光明のことである。面山禪師の言葉にも『般若を喩へて古鏡と名づく、圓鏡、寶鏡、宗鏡、種々の異稱皆同じ』とあります。また、『般若とは諸法實相を觀照するの光明なり』ともあつて、古鏡とは、つまる所、本佛釋迦牟尼佛の大智慧光明をいふのです。この大智慧光明は『漢來漢現、胡來胡現』漢人が來れば漢人を映す、胡人が來れば胡人を映す。女が來れば女を映し、男が來れば男を映し、美は美、醜は醜、短は短、長は長と、きつぱり映し出して、眞相を誤ることがない。

世人に使用されてゐる手鏡や姿見は、金屬製や硝子製で、その働きは、畢竟するに、光線の反射に過ぎないのであるから、眞暗がりの處では、鏡の働きが現はれない。太陽の光なり、燈火の光なりを借りて、初めてその働きを現はすのであるが、今いふ古鏡はそんな世俗の鏡とは違つて、本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明そのものであるから、太陽の光や燈火の光など借りる必要がない。『明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打』明るいのも暗いのも、つまりは大智慧光明そのものの輝きに外ならぬ。天にも地にも、この大智慧光明にあらざるものは一つも無い。

大智禪師が、瑩山禪師から『子、歸りて父に就く時如何』と問はれて、『古鏡臺前、燈を假らず』と答へられるその御心持では、『父の所に歸つたといふことは、つまり本佛釋迦牟尼佛の大智慧光明の中に沒入してしまつたことであります。大智慧光明の中に沒入して、大智慧光明そのものになり切つた心境は、まことに申し樣なき趣きでございます』といつてゐられるのであります。

は、師父のことでない。大智禪師の師匠である瑩山禪師を指すのでない。慈父本佛釋迦牟尼如來を指してゐるのである。釋迦牟尼如來といへば、二千五百年前、印度に出現された釋迦牟尼如來のことをいふのだと思ふ人があるが、こゝにいふ慈父本佛釋迦牟尼如來とは、久遠劫の昔から、現存しましまして、今日も、明日も、明後日も、いな、未來永遠に滅することなく、恒存しまします所の本佛釋迦牟尼如來のことである。

この久遠劫の昔から現存しまします本佛釋迦牟尼如來の子として、二千五百年前の印度の釋迦牟尼如來もお生れになつた。乃至、今日吾等も亦その久遠劫の昔より現存しまします本佛釋迦牟尼如來の子として生れ出でて、本佛釋迦牟尼如來の大智慧光明の中に浸つてゐるのである。然るにも拘はらず、吾等はこの事に氣づかず、孤兒の思ひをなして、徒らに賴りない、わびしい日を送つてゐる。慈父の膝下に居りながら、全くそのことに氣づかず、放蕩ものが、家を追ひ出されて、他人の家の軒下をうろつき回つてゐる樣な、わびしい思ひをしてゐる。實にあさましいことである。

然し大智禪師は、大に修行をつまれたから、恐らくは右いふ道理を、徹底的に得心されたことであらうと、瑩山禪師はお思ひになつて、『子、歸りて父に就く時如何』とお問ひなされたのであります。果せるかな、大智禪師は、立派な答話をなして、

古鏡臺前燈を假らず——と、きつぱり申されました。古鏡とは久遠劫の昔より在します本佛釋迦牟尼

峰問うて曰く、大地有情、同時成道、意旨作麼生か會す。師曰く大方、外無し。峰曰く、未在更に道へ。師曰く、一葉落ちて天下秋を知る。峰曰く、却つて賓主有りやまた無しや。師曰く、有り。峰曰く、如何なるか是れ賓。師便ち喝す。峰曰く、如何なるか是れ主。師また喝す。峰曰く、賓主歴然。師便ち禮拜す。

大智禪師、太祖に見ゆ——大智禪師が、支那より歸朝して、早々、太祖常濟大師瑩山禪師を、能登の永光寺にお尋ねになつた。

晩參の次、出でゝ禮拜す——禪家にては、住持人が學人を、法堂に集めて禪法を説示するを大參といひ、或は法堂に或は方丈（住持人の居室）に集めて、樣々の訓示をなすを小參といふ。小參は時々行はれるが、晩間に行はれるのを晩參といふ。

大智禪師が瑩山禪師の下に歸られたその日、晩參を行はれたので、大智禪師は列位の中よりスウッと出て、御拜を致された。つまり瑩山禪師に禪法の問答を希はれたのである。

祖曰く、子、歸りて父に就く時如何——遙々、支那までも修行に出かけてゐたが、久々で、今日、家に歸つて來て、どうだ、何か變つたことでも感じたかと、瑩山禪師は問はれました。が然し、禪家では、借事問といつて、何かのことに事よせて、證を問ふことが甚だ多い。今も矢張りそれである。

證問題の問であるとして「子、歸りて父に就く時如何」といふ言葉を考へて見ると、その謂ふ所の父と

の王に上られた詩偈も殘つてゐる。王は異常に禪師を尊敬し、また深く同情をなされ、舟を新にして歸途につかしめられたといふ。歸朝して、能登永光寺の瑩山禪師の下に歸られたが、そのときの問答が、これから話さうとする公案である。

大智鑑照不無話

大智禪師、見太祖。晩參次、出禮拜。祖曰、子歸就父時如何。師曰、古鏡臺前不假燈。祖曰、却有鑑照也無。師曰、鑑照卽不無、不見兒孫邊事。祖曰、洞上之宗可倚。則指見明峰。

峰問曰、大地有情、同時成道、意旨作麼生會。師曰、大方無外。峰曰、未在更道。師曰、一葉落天下知秋。峰曰、却有賓主也無。師曰、有。峰曰、如何是賓。師便喝。峰曰、如何是主。師又喝。峰曰、賓主歷然。師便禮拜。

【讀方】大智禪師、太祖に見ゆ。晩參の次、出でて禮拜す。祖曰く、子、歸りて父に就く時如何。師曰く、古鏡臺前燈を假らず。祖曰く、却つて鑑照有りやまた無しや。師曰く、鑑照は卽ち無きにあらず、兒孫邊の事を見ず。祖曰く、洞上の宗倚るべし。卽ち指して明峰に見えしむ。

舟がとまつてしまふのでない、こつちで舟が動いてゐることを見ぬだけだと。こゝで理窟がいひたい人もあらうが、萬法は唯識所變である。これで、舟をとめてしまつたといへる道理があるのである。が、それはまあいゝとして、禪師は七八歳のとき、既に斯様なことが分つてゐたのでありますから、確かに天才です。

寒巖禪師はそれを見て『尙ほ手脚を勞するあり』それぢや面白くない。起つて行つて障子を閉めたりなどするのでは、手脚を勞して舟をとめるのだ。そんなとめ方では十分でないといはれました。すると禪師は目をつむつてしまはれた。これには寒巖禪師も實に驚かれたといふことであります。

ともかくも、大智禪師は、小さい時から大智であつた。それから段々年と共に佛道の修行が出來、雲水行脚に出て、加賀の大乘寺に到り瑩山禪師に師事されることになりました。かくて二十歳を越えられた頃には、堂々たる大善知識となられたが、二十五歳のとき、元に渡つて、更に名僧知識を訪ねられることになつた。

支那では、豫期に反し、心を打ち込んで師事されるほどの高僧に出會はれなかつた。歸朝されて、ずつと後に、元に歸るといふ僧に贈られた詩偈にも『日本眞金の貴きを持つて、大唐鍮子に博易して歸ること莫れ』とある。日本の禪が純金なら、支那のは眞鍮だといふ御挨拶であるから大抵、禪師の心が讀める。

禪師は支那からの歸りに、暴風にやられて、大變な目に會はれた。朝鮮へ吹き流されて、上陸し、朝鮮

へ、鐵心石腸を抱いて、不動着なることを得たのであります。大智禪師は、吾が佛教界で名高いお方で、夙に禪を體得いたされた立派な御人格であり、また詩偈が最も堪能であつた。今日も禪門の小僧さんで、『大智の偈頌』を暗誦してゐないものはない。

禪師は肥後の國宇土郡長崎村の人で、禪の天才であつた。近くの大慈寺に入つて小僧さんになられたのは、七歲の時であるが、その時、既に師匠寒巖禪師をやりこめてゐられる。

禪師の幼名は萬十といつた。師匠寒巖禪師、からかうつもりであつたか、どうか分らぬが、ともかく、出家することを許したその日、菓子器の中の饅頭を、一つ取つて與へ、『萬十、饅頭を喫するとき如何』といはれた。何だか一休問答にでもありさうな話である。すると七歲の禪師『大蛇の小蛇を呑むが如し』まあ大きな蟒が小蛇を呑んだ樣なものでありませうとお答へなされました。寒巖禪師は一寸驚かれた。これは頓才がある小悧巧な子だ『汝、小智あり、よろしく小智と命ずべし』おまへに『小智』といふ名をつけてやらうといはれたのです。ところが『小智』といふ樣な名で滿足する萬十でない。そこで寒巖禪師は、『では、大智といふ名を與へやう』といつて、こゝに萬古に鳴り響く命名がいたされたのであります。

また、禪師は、師匠の寒巖禪師から、『坊や、遙か向ふを舟が通つてゐるが、あの舟を、こゝに坐つたまゝで、おまへ、とめてしまふことが出來ないか』と問はれた。すると何のためらふ樣子もなく、起つて前面の障子をスウツと閉め切つてしまはれた。成るほど、障子をしめ切れば、舟はとまつてしまふ。

大智禪師の鑑照不無の話

菊池武時父子の忠誠については、後醍醐天皇の御代を知る人の、よく存じ居る所であるが、その忠義一徹の赤心は萬古の鏡である。

元弘の初め、後醍醐天皇より、九州の探題北條英時を誅すべしといふ綸旨を拜したものは、菊池一族のみでなかつた、少貳、大友の二氏も、同じ綸旨を拜したのであるが、これらの一黨は、變心して北條氏に味方した。しかし、菊池武時は、武重、武茂二人の子息と共に、よく忠誠を盡した。そうして、衆寡遂に敵せず、菊池武時は討死して相果てたが、その忠節は永遠に滅びる時がない。

菊池武茂が、鳳儀山に納めた祈誓の願文に『武茂弓矢の家に生れて、朝家に事へまつる身たる間、天道に應じ、正道の理を以て、家名を擧げ、朝恩に浴し立たんことは、三寶の御許しを蒙るべく候。その外、私の名聞利欲に、我を忘れ、恥を顧みず、諂へる當世の武士の心を永く離るべく候』とあるが、菊池一族の人々が如何に義に勇み、時弊を慨いてゐたかが窺はれる。

武茂が右の祈誓文を納めた鳳儀山とは、大智禪師の開かれた鳳儀山聖護寺のことで、大智禪師は、この寺に二十年も住山いたされたのである。菊池一族の人は、全く大智禪師の指導によつて、大義名分を辨

ので、大雄山を下つて参るのである』と御答へになつた。極樂寺の住持も大層感心いたし『それでは其の御木像を獻上いたしませう、この御木像は支那百丈山の大智禪師であると申し傳へてゐます』といはれたので、了菴禪師は感涙にむせんで御喜びになり、早速、大雄山の開山堂に奉安あそばされることゝなつたのであります。

爾來は、毎朝毎晩、御木像を禮拜し、通幻禪師は梅干がお好きであるからといふので、朝晩、梅干や湯茶を御供へになり、御木像に冬は帽子を頭におかむらせして保溫あそばす樣、夏は團扇を差上げて冷味をお取りあそばす樣、種々に心を碎いて御供養申上げられた。その風が傳へられて今日も、然樣いたすことになつてゐる。了菴禪師の御孝心まことに有り難い次第であります。此の山を大雄山と號せられたのも、此の御木像に因由する所がないとは申されません。

了菴禪師の如き、大德高僧を日々夜々に仰ぎまつりて、人々各自が時々刻々の大道を驀直に前進し、苟も小利小欲に累らはされて、人たる道を踏み迷うやうなことなからんことを、覺悟いたさねばならぬ次第であります。

佛の本源に徹して、人間は初めて自由を得る、山川草木が日に新に日に日に新なる面目を現成し來ることも分る。

脚跟下岐路に迷ふこと莫れ、萬仭崖頭大雄を見る——この二句は禪の修行者への注意である。脚跟下とは足もとである。踏み出す一歩を錯つてはならぬ。人々は、いつも〳〵岐路に當面してゐるものである。權勢に賴らうとする、利欲を貪らうとする。自己の本分を全うせんとする良心はありながらも、狐疑し躊躇して不首尾な歩き方を致して居る。目前の迷路に沒頭することを休め、大きく眼を見開いて、萬仭崖頭の大雄の峻峰を見るがいゝ。大雄とは小田原の大雄山最乘寺のことで、了菴慧明禪師が曹洞禪の大道場として御開きになつた禪寺である。此の山は、支那の百丈禪師が住せられた峻峰大雄山によく似てゐるので、大雄山と名づけたもので、老杉古松の繁茂せる靈域である。

此寺には通幻禪師の御木像が奉安してある。開山了菴慧明禪師が隣村の極樂寺より讓り受けられた御木像であるといふ。了菴禪師は何かの因に、極樂寺へお詣りになつたことがある。本堂へお上りになつて直ぐ眼についたのが、大きな木像であつた。これより了菴禪師は毎日毎日大雄山を下つて極樂寺へお行きになつて、木像を懇に禮拜なされた。極樂寺の住持が不思議に思つて、『何故、毎日〳〵、御熱心に御詣りなされるのですか』とお尋ねした。すると禪師は答へて『此の御木像は本師通幻禪師にそつくりである。御姿を拜してゐると、親しく本師に御仕へ申してゐる樣に感ぜられる。毎日一度御詣り致さねば氣がすまぬ

などいふものがある様に思ふのが間違ひである。凡夫根性を放つて、妄想分別を捨てゝしまへば、立ろに諸佛の本源が悟られる。諸佛の本源は、天地の間何れの處にも滿ち渡つてゐる。

破草鞋枯拄杖、柳綠ならず花紅ならず――この二句は、諸佛の本源が、所謂空界無物で、全く巴鼻（摑所）の無い様子を述べたのである。

草鞋や拄杖は禪僧が行脚をする時の道具で、大切のものであるが、破れ草鞋、腐れ拄杖となつては、何のたよりにもならぬ。諸佛の本源を摑むたよりにならぬ。

柳や花は、諸佛の本源を脫體に現はすといはれてゐるが、柳だ花だといふ差別をつけて見る眼では諸佛の本源は見究められぬ。諸佛の本源を見破る平等眼には、柳とか花とかいふ差別相が映じない。達磨大師の所謂廓然無聖で、聖もなく凡もなく、迷ひもなく悟も無い。全く本來形名なく天眞にして性相を亡じた境地である。

殺人刀活人劍。月西に沈み日東に出づ――この二句は諸佛の本源が、所謂色界萬象となつて、脫體に現成してゐる消息を述べたもので、諸佛の本源を見極めた人にして始めて殺活自在の働きが出來ることを說いたのである。

高祖大師の御言葉に『朝朝日は東より出で、夜夜月は西に沈む、雲收まりて山骨露はれ、雨過ぎて四山低し』とある。月日の出入りも山水の變化も皆悉く、諸佛の本源の脫體現成であるとの示誨である。諸

ここの所である。了菴禪師の禮拜の如きは、正にこれ『證上に萬法あらしめ出路に一如を行ずる』底の行履行動である。

頌曰。說似一物卽不中。纔涉言端便耳聾。但盡凡情無聖解。乾坤何處不圓通。破草鞋枯拄杖。柳不綠花不紅。殺人刀活人劍。月沈西日出東。脚跟下莫迷岐路。萬仭崖頭見大雄。

【讀方】頌に曰く、說似一物卽不中、纔かに言端に涉れば便ち耳聾す。但凡情を盡せ聖解無し、乾坤何れの處にか圓通せざる。破草鞋枯拄杖。柳綠ならず花紅ならず。殺人刀活人劍、月西に沈み日東に出づ。脚跟下岐路に迷ふこと莫れ、萬仭崖頭大雄を見る。

『說似一物卽不中、わづかに言端に涉れば便ち耳聾す』——諸佛の本源は、何とも名狀すべき言葉がないので、古人の例に倣ひ、強いて『一物』と呼んで見たが、どうもシツクリせぬ。諸佛の本源は『たゞ人自ら肯うて卽ち親し』で、言の端にかけて、とやかくと話した所で、聞き手が了解する筈のものでない。聾に話をするも同じこと、何の手ごたへもない。

『但凡情を盡せ聖解無し、乾坤何れの處にか圓通せざる』——諸佛の本源を會得するには、凡夫根性を放擲すること以外には方法がない。梁の武帝は達磨大師に『聖諦第一義』を問うたことがあるけれども、聖諦

即今、慧明が自性』と道破いたされたのであります。

祖曰く、儞この什麼の道理をか見る――慧明禪師の悟が、峨山禪師に分らぬ譯は勿論ないが、『更に一拶を與ふ』といつて、更に念を押して試問されるのである。『尊公はどんなことが分つたのか』

師曰く、說似一物即不中――『そこのところは、却々答話いたすことが出來ませぬ』

說似一物即不中といふ語は、有名な六祖大鑑慧能禪師の高弟たる南嶽禪師の言葉である。一物とはつまり『諸佛の本源』のことである。『本來形名なく天眞にして性相を亡ず』るもののことである。形もなく名もない、何とも形容して見樣の無い所のものであるから、これを『一物』と說き示しても、その眞相を說き示したものとはいはれない。『何とも說破のして見樣がない』のである。

祖すなはち打つ――『何とも說破のして見樣が無い』といつて、まご〱してゐるのでは、諸佛の本源を究めた人とはいはれない。自己の本性を徹見した人とはいはれない。慧明禪師が、まご〱してゐられたので、峨山禪師は、ピシツと一掌を與へらた。

師、禮拜す――了菴禪師は即座に禮拜をいたされた。峨山禪師の前に、諸佛の本源を脫體に現成せしめられたのであります。

吾等は二六時中、諸佛の本源を離れてゐない。吾等が大休大歇の上に爲す所の一擧一動は、悉くこれ諸佛の本源の脫體現成である。高祖大師が『證上に萬法あらしめ出路に一如を行ず』べしと仰せらるゝは、

を離れずといふ妙趣が、はつきりと分つて、愉快でたまらず、思はず音を發して、

正にこれ諸佛の本源、卽今、慧明が自性――と說破いたされました。

諸佛はお寺の本堂にお詣りして見ると澤山お出でになる。藥師佛、多寶佛、彌陀佛、乃至三世の諸佛がお出でになる。此の諸佛は、一體、何處からお出ましなされたのか、御鄕里は何處であるか。この研究は禪家で最も重大視いたす所のもので、諸佛の御鄕里を徹見すれば、禪の秘奥に徹したといふべきであります。

諸佛の御鄕里は何處であるか。本來形名なく、天眞にして性相を亡ず。心で斯く〳〵のものと想像して見る譯にも行かず、眼や鼻で斯く〳〵のものと見定めることが出來ず、嗅いで見ることも出來ぬ、何とも窺つて見樣のない所のものである。唯佛與佛、乃能究盡といつて、佛と佛とのみよく承知してゐられる所である。從上の祖師も、諸佛の本源、諸佛の御鄕里を見屆けるために、隨分苦辛をいたされた。了菴慧明禪師も、このことに苦辛されてゐたのであるが、峨山禪師が『直下に大休大歇し去るべし』と仰しやつたのを聞いて、卽座に、大休大歇いたされた。大休大歇いたされると、奚ぞ知らん、慧明禪師御自身の本性が、諸佛の御鄕里であつたのであります。

諸佛の本源は遠方にあるのでない。各自も諸佛の本源から出生し來つたのである。諸佛と吾等とは同鄕である、本源を同じうしてゐる。了菴禪師この消息を證悟して嬉しくてたまらず、『正にこれ諸佛の本源、

るほどに惱み苦しむ。苦惱を好むものはないのだが、苦惱を拭ひ去ることに精進する人が少い。貧乏して苦しみ不平をいふ人は多いが、貧乏をせぬ工夫をする人が少い。それを人ごとゝは思はず、慈父が子に諭ゆるが如くに、石霜は繰り返し〳〵苦惱を除く工夫を勸められたのである。

『休し去れ』は、妄想の紛起を休止せしめよといふこと。『歇し去れ』は、妄想を放擲してしまへといふこと。『冷湫々地にし去れ』は、妄想の熱惱を冷却し盡せといふこと。湫はすゞしいといふ意味の字、地は助字で意味がない。『一條白練にし去れ』心を一條の練絹の如くに淨白に致せといふこと。『寒巖枯木にし去れ』心をつめたい巖や枯れ木の如く冷かに保てといふこと。人におだてられて喜び、さげすまれて怒るといふ風な、落ちつきのない心ではいかぬといふこと。『古廟香爐にし去れ』古い祠堂で誰もお參りをせぬ、線香をたてる香爐はあくびをしてゐる、香の煙がたつてゐない古廟は、淋しいは淋しいが、また、いふにいはれぬ實に幽邃な感じのするものである、この寂靜を得よといふこと。『一念萬年にし去れ』は、悟を開けといふこと。妄想が紛起せず、心が冷靜になり、純情無垢となれば、一念の心に於て、十世古今を觀ずることが出來る。十世をして十世たらしめ、古今をして古今たらしめる所以のものが分る。つまり悟が開けるのである。

師、廓然として契悟し、覺えず大笑して曰く――了菴禪師は峨山禪師の『直下に大休大歇し去るべし』の語を聞いて、卽座に大休大歇が出來た　煩惱妄想を拂ひ除けて、純淨無垢の心境を得、十世古今は當處

（どこから來たか）、『相州』（相模から參りました）、『路多少ぞ』（道程はどれ位あるか）、『七百里』、『破草鞋若干雙』（草鞋を何足ほど履き破つて來たか）、『數を記せず』（何足か分らぬほどです）、『老僧此間、恁麼の飯袋子を容れず』（わしが道場には、尊公の樣なゴクツブシを入れる譯にゆかぬ）と痛棒を加へられた。了菴禪師はこの、手嚴しい試問を受けて、愈々通幻禪師を尊み慕ひ、何としてでもその提撕に與りたいと切願されたので、許されて猛烈な修行をいたされることになつたのであります。

參峨祖――それから了菴禪師は、師匠通幻禪師に指圖されて、通幻禪師の師匠である峨山禪師を御訪ひなされることゝなつた。

祖、一日、上堂して曰く、直下に大休大歇し去るべし――峨山禪師は、或る日、法堂（說法する道場）に上つて『直下に大休大歇し去るべし』と示された。『直下』といふ字は、禪書によく出る、趣きのある字である。まあ『速刻その場に於て』といふほどの義だと思へばいゝ。『大休大歇し去るべし』とは、妄想分別を休歇し盡せといふことである。

石霜禪師といふ方が、『休し去れ、歇し去れ、冷湫々地にし去れ、一條白練にし去れ、寒巖枯木にし去れ、古廟香爐にし去れ、一念萬年にし去れ』といつて、修行者を誨へられたことがある。『去れ』といふ字が七つあるので、これを石霜の七去といつて名高い言葉になつてゐるが、別段七つでなければならぬのでない。要する所は、煩惱妄想を拭ひ去つてしまへといふのである。人間は妄想のために、心が煮えくりかへ

理をか見る。師曰く、說似一物卽不中。祖便ち打つ。師禮拜す。

了菴慧明禪師——今日、曹洞宗の寺が關東に澤山あるが、その、大部分は、了菴慧明禪師の法孫によつて開かれたもので、門葉四千箇寺といつてある。

禪師は關東生れの御方で、鎌倉の建長寺で坊さんになり、雲水修行に出て諸方の名師宗匠を尋ね、丹波の永澤寺へ行つて、通幻禪師に見え、遂に曹洞宗の宗要を究めて弟子となり、通幻禪師門下の高弟とならせられた方であります。

通幻禪師は、有名な大禪師で、その子弟を導かれる嚴格さは、古今獨歩とまでいはれ、文字點檢、活埋窖といふ傳說も殘つてゐる。禪家では檢査に巡ることを點檢といふ、弟子達の所持品を檢査して、修行の邪魔になる樣な書物は遠慮會釋なく取りあげて、燒いてしまはれた。文字の葛藤にからまれて坐禪觀法を怠るのを痛く警策されたのです。活埋窖といふのは、修行を怠けるものは、活きながらに大窖に打ち込んでしまはれたといふのである。ともかく手荒い導き方であります。今日、試驗地獄だとかいつて、入學試驗の難しいのがよくないといはれてるが、難しい入學試驗をする學校からは、實力のある人が出る。通幻禪師の所では、入學の試驗も嚴しく、入つてからの日々の試驗も、實にやかましかつたのである。

了菴禪師が、通幻禪師の處に行かれた時、眞最初に出された試問が、斯うである。「什麼の處より來る」

了菴禪師の諸佛本源の話

事を徹底的に、どこまでも突きとめて研究することが、漸次盛んになつて、佛菩薩の正體をまで、調べ上げる世の中となつた。『佛さまの戸籍調べ』といふ樣な書物もある。佛さまの戸籍しらべが、本當に出來れば、まことに結構で、古人も此の事のためには、骨を折られてゐる。こゝに講じやうとする公案も、佛さまの戸籍しらべであります。

了菴諸佛本源話

了菴慧明禪師、參峨祖。祖一日上堂曰、直下可大休大歇去。師廓然契悟、不覺大笑曰、正是諸佛本源、即今慧明自性。祖曰、儞見箇什麼道理。師曰說似一物卽不中。祖便打。師禮拜。

【讀方】了菴慧明禪師、峨祖に參ず。祖、一日、上堂して曰く、直下に大休大歇し去るべし。師、廓然として契悟し、覺えず大笑して曰く、正にこれ諸佛の本源、卽今、慧明が自性。祖曰く、儞この什麼の道

十分世界に彌綸して、萬法を現成せしめてゐるのだといふことであります。

無陰陽の地須らく看取せよ——久遠實成の佛の境地を看取せよといふ意味である。陰陽未分、天地未剖のことのみの話でない。

優鉢羅は開く不老の春——優鉢羅は瑞應華のことである。うどんげのことである。うどんげが咲くのは泰平の兆だといふ。佛法の眞髓を極めれば、いつもかも世は泰平である。優曇華の咲いて散ることなき常春の世が現はれるのである。

久遠實成の佛の境界、これを見究めることが先決問題であります。この境界に觀達すれば世は泰平常春の御代である。神官は常春の御代に觀達したかどうか分りかねますが、この話を聞く吾等は、これを機縁として、各自に常春の御代を觀得いたしたいものであります。

初めに話した井伊大老などは、仙英禪師の説示によつて常春の御代に觀達した人である。あの物騷な幕末時代が、なんで泰平常春の御代といふ人があるであらうか、世は如何に物騷でも、そこに處してゐる井伊大老の心境には、駘蕩たる春風が吹いてゐる。無學祖元禪師は賊軍の白刃に仆れんとするその場にあつても『珍重す大元三尺の劍、電光影裏春風を斬る』といつて泰然としてゐられた。

趙州從諗和尙は、趙州城の門の話をしながら、佛敎にいふ所の實相の門を說いて居られる。佛もこの門を出入することによつて自在を得、凡夫もこの門を出入することによつて自在を得てゐる門を說き示してゐられる。迷者もこれを得たり、悟者もこれを得たり、この門を得てゐぬものは一人もない。

空劫以前に故人あり――空劫以前とは、天地未分の以前、開闢以前といふこと、無着禪師に問ひを發した神官の言葉でいへば、混沌未分の時である。

混沌未分の時は、天も未だ開けず、地も未だ現はれざる時であるから、人間の居やう譯がないのであるが、こゝに『故人有り』といつてある。こゝに最も親しい舊友がゐるといつてある。この舊友とは、つまり宇宙の本體のことである。此の本體は『本來形名なく天眞にして性相を亡ずる』底のもの、どんな顏つきともいへない。が然し、

正中妙挾また天眞」――形名なく性相を亡じてゐる所の本體（正中）は、虛無とは違ふ、但の空ではない。そこには花あり月あり樓臺あり、森々羅列の萬象が天眞爛漫の妙相を示してゐる。

無着禪師に、神官が尋ねたのは、或は現實の世界の混沌時代の話、その時の淸濁、善惡、邪正などの話であつたかも知れないが、無着禪師の答への方はそんなことでない。佛法の眞理についての話、佛そのものについての話である。

『空劫以前に故人あり、正中妙挾また天眞』とは久遠劫の昔より實成の佛が在まして、その佛の德は、盡

探し求めても、容易に道が目に見えぬ。大抵これが道だらう位のあて推量で、いゝ氣になつてゐると、とんだことになつてしまふ。山道に迷つたと同じでおさまりがつかなくなる。あて推量ではいかぬ。大道を見るには、心の迷妄を先づ拭ひ去るがいゝ。迷妄の雲を拂へば、直下に大道がいつでも現はれて來る。

右の消息を『信心銘』の中には『大道の體寛にして難なく易なし、小見は狐疑す轉た急なれば轉た遲し、これを執すれば度を失し必ず邪路に入る、これを放てば自然なり體に去住なし、性に任すれば道に合し逍遙として惱を絶す』と說いてある。無着禪師は、出家の初めより『信心銘』を愛讀して、此の間の消息をよく了得いたされた。

實相の門通ず、誰れが眞妄を隔てん——趙州從諗和尙に或る坊さんが『如何なるかこれ趙州』と問うた。趙州とは支那の一都市の名である。從諗和尙の住居した觀音院は、この趙州城にあつた。坊さんは趙州城といふ都市の樣子を問うたのか、從諗和尙の家風を問うたのか、何れにしても、この問によつて從諗和尙の力量を窺はうとしてゐるのである。

從諗和尙はこれに答へて『東門、西門、南門、北門』といはれた。趙州城には、東西南北に門があつて、四通八達、まことに自在であるといはれた。つまり『出づるに門あり、入るに門あり、まことに自由自在である。而もどの門もどの門も、一として飾りものはない、實用の門ばかりである』といはれたのであります。

て枯淡な活計で滿足し、學人を提撕することに全力をお注ぎになつた大德であります。此の高僧の生れ代りだと、神官が今述べてゐるのをお聞きになつて、無着禪師も立腹される譯はない。然し『人々悉く一段の光明のあるあり』で、無着禪師には無着禪師の面目があり・道楷禪師には道楷禪師の面目があるのだから、化身だの、生れ代りだのといはれて、喜んでのみゐないのが禪家の大力量人であります。

頌曰。大道體寛。何要趣向。實相門通。誰隔眞妄。空劫以前有故人。正中妙挾也天眞。無陰陽地須看取。優鉢羅開不老春。

【讀方】頌に曰く。大道の體寛なり、何ぞ趣向を要せん。實相の門通ず、誰れか眞妄を隔てん。空劫以前故人あり、正中妙挾また天眞。無陰陽の地須らく看取すべし、優鉢羅は開く不老の春。

大道の體寛なり、何ぞ趣向を要せん——無着妙融禪師が出家して禪を學ばれた最初に、深く愛讀された書物が『信心銘』である。信心銘は佛心を信仰し奉行して、佛心や吾、吾や佛心の分ぬまでに、佛心と親しくなつて、日々の本務を遂行してゆく妙趣が示されてある書物である。つまり吾等が須臾も離れることの出來ぬ『人の道』が示してあるのである。

『佛道は人々の脚跟下なり』で、佛の直指下された『人の道』は各自の足下にある。行くとして道ならざる處なしであるが、迷妄の雲に蔽はれてそれが見られぬ。迷妄の雲の中にあつては・これかあれかと道を

ることが出來て、弟子となつた。

今日は神佛分離であるから、神官で同時に佛教徒であるといふ人は無いが、昔は神官と僧侶と兼ねてゐる人もあつた。神社と寺院とは同じ境内によくあつたものである。

「一日、師に謂つて曰く、某甲、嘗て夢に異人を見るに曰く、儞、法を求むる志深し、故に來つて儞に告ぐ、却後十一年、眞の善知識有り、來つて儞が爲めに說法せん、此れはこれ支那國芙蓉道楷禪師の應化なり、儞はこれ當時楷師の檀越なりと、如今正に十一年に當る、夢中の事と相符ふ」──神官が師匠無着禪師に、十一年前に見た夢の物語をして、その敬虔な心情を表白したのである。

今から十一年も前の話ですが、夢の中に、奇態な人が現はれて『お前は求道の心が切實だから、今來て告げるのだが、お前は、十一年後に、立派なお方にお逢ひして、正法を聞くことが出來る。立派なお方といふは、他でもない、支那の芙蓉道楷禪師である。道楷禪師がお前の道心に感じ、相を現はしてお出ましになるのである。お前は當時は、道楷禪師の檀家の一人であつたのだと申しました、今年は恰度それから十一年に當ります。夢がそつくり事實に合致してゐます』と、神官は禪師に申述べたのです。

「師笑つて曰く、俗漢寐語すること莫れ」──無着禪師はその話を笑ひながらお聞きになつて、ナニ寢言をいふかといつてゐられたのです。

芙蓉道楷禪師は、道元禪師も大層尊崇致されてゐる高僧で、道心のまことに堅固なお方であつた。極め

いつて、善惡・迷悟・佛凡を總に超越せしめてしまふので、その深意を得ぬ人はびつくりする。善惡・迷悟・佛凡の問題は、一體如何なるのかと心配する。この神官も恐らくこれが氣になつたのであらうと思はれる。

師曰く、清濁の外に向つて、別に一句を道ひ來れ——清濁だ、善惡だ、迷悟だ、佛凡だなどいふことは廢すがい〻、清濁・善惡・迷悟を離れた話を一つ致さうではないかと、禪師は神官に申されたのであります。禪

禪師は、世間通途の御談義や、第二第三の俗諦門の話でなく、禪の秘奥を此の神官と話したいのです。禪が十分手に入つてゐれば、兎や角と口舌を動かさないでも、立派に相手にその意を通ぜしめることが出來るのであるが、禪が分つてゐないと口舌を動かさうとする。

主、口を開かんと擬す——神官は、まだ〳〵禪師と禪の秘奥の談を自由に致すまでにはなつてゐなかつたと見えて、禪師に口でお答を致さうとした。

師便ち打すこと一掌して曰く——禪師は神官の橫顏をビシッと一つ平手で打ち叩いて曰く、

這の立地の死漢、什麼を作すにか堪へん——ナンダ其方は、大地の上に起つてゐるから、定めし潑溂たる働きの出來る快漢であると思へば、死人同樣のイクジナシだ。そんなことで何一つ出來るものでない、と痛く叱責された。

主、當下に契悟し、乃ち弟子の禮を執る——神官も其の人であつたと見え、即座に禪師の心境を體得す

應安二年、伊勢の松坂から程遠からぬ所に、庵室を結んで住せられた。そのときに

因に一神社主問ふ——或る神社の神官が、禪師に問うたのである。

書に曰く、「淸は以て天と爲り、濁は以て地と爲ると、未審、混沌未分の時、淸濁何れの處にか在ると」——宇宙の太初は『氣象未だ效はれず、名もなく爲もなし、誰か其の形を知らん』と古事記の序にもある通り、何ともいつて見樣のない狀態であるが、その狀態から、淸氣と濁氣とが分れ出で、淸氣は天となり濁氣は地となつて、漸次に吾等が今日見聞するが如き世界が出來たのだといふ說が、日本書紀の冒頭に出てゐる。この神官も、それを讀んで疑問を起したものである。書とは支那では書經の略、日本では書紀の略である。

淸氣が天と爲り、濁氣が地と爲るといふことは、それでよいが、その淸氣だの、濁氣だのいふものは、一體、何處から出て來たのか。『名も無く、爲もなく、誰もその形を知らない』といふ所謂混沌から、忽然として淸氣濁氣が出て來たといふのも、了解に苦しむ話である、ひとつ此處のところを御敎示して頂きたい、と神官は質問をして出たのであります。

此の神官は、相當に佛法の事が分つてゐるらしく思はれる。これは天地創造の話にことよせて、佛敎でいふ所の善と惡、迷と悟、佛と凡夫といふ樣な問題の解決を求めてゐるのである。佛敎では、善を學び、悟を重んじ、佛を大切にするけれども、向上門より更にいふ時には、善惡を超越せよ、迷悟に拘はるなと

處。師曰、向淸濁外、別道一句來。主擬開口。師便打一掌曰、這立地死漢、堪作什麼。主當下契悟、乃執弟子禮。一日謂師曰、某甲嘗夢見異人、曰儞求法志深故來告儞、却後十一年、有眞善知識、來爲儞說法、此是支那國芙蓉道楷禪師應化也、儞是當時楷師之檀越也、如今正當十一年、與夢中事相符。師笑曰、俗漢莫寐語矣。

【讀方】無着妙融禪師、因に一神社主問ふ、書に曰く、淸は以て天と爲り、濁は以て地と爲ると、未審、混沌未分の時、淸濁何れの處にか在る。師曰く、淸濁の外に向つて、別に一句を道ひ來れ。主口を開かんと擬す。師便ち打すこと一掌して曰く、這の立地の死漢、什麼を作すにか堪へん。主、當下に契悟し乃ち弟子の禮を執る。一日師に謂て曰く、某甲嘗て夢に異人を見るに、曰く、儞は法を求むる志深し、故に來つて儞に告ぐ、却後十一年、眞の善知識有り、來つて儞が爲めに說法せん、此れは是れ支那國芙蓉道楷禪師の應化なり、儞は是れ當時の楷師の檀越なりと、如今正に十一年に當る、夢中の事と相符ふ。師笑つて曰く、俗漢寐語すること莫れ。

無着妙融禪師――は大隅に左遷せられたお役人の子で、究理心の强い方であつた。日向の大慈寺に出家し『信心銘』を披見して感悟する所あり、中國に出で三光國師に學び、大隅に歸り、興聖寺に禪定を修すること三歲、後、日向の皇德寺無外圓照禪師に謁して禪の秘奧に徹せられた方である。

實に難しい事になつた。天下の政治を行つてゐる大老に非難の聲が高まつた。その頃、大老は江戸で人相見に運勢を見て貰つた。すると『劍難の相がある』といつた。劍難の相があるといはれて、大老は驚いた。殺されては困ると氣病みを始めて、御祈禱をして貰ふ、警固のものを增す。大騷ぎをした。かねて歸依してゐる仙英和尚にも相談して、如何したものだらうと問うた。このときはまだ大老は安心決定が出來てゐない。

仙英和尚は强い。大老にきつぱり答へた。『武士が劍難の相を恐るとは何事であるか、「古人は兩頭ともに截斷し、一劍天に依つて寒し」といつてゐる。武士は一劍になり切つて行住坐臥する處にその貴さがある、劍難に仆るも因緣時節なり、劍難を免るゝも因緣時節なり、劍難に意を勞して何うしやうといふのであるか』と答申致されたのである。大老深く感悟する所あり、宗教の秘奧に徹することを得て、禪家にいふ所の沒量の大人になつたのであります。

沒量の大人が、今日は少い。安心決定の十分出來た人が少い。安心決定を得る捷徑は如何。これより話さうとする無着禪師の『別傳の一句』について見ることに致しませう。

無着別傳一句話

無着妙融禪師、因一神社主問、書曰、清以爲天、濁以爲地、未審混沌未分時、清濁在何

井伊大老については世評とり〴〵であるが、信ずる所に向つて勇敢に突進されたといふ點では、異存をさしはさむものがない。大老が港を開いて外國と交通をすることに取り定めたのが悪い、その心事が善くないといつて、櫻田門外で、水戸の浪士が殺してしまつたのであるが、大老の膽力は、賴山陽に『相模太郎膽甕の如し』と褒められた北條時宗にも劣らぬものがある。

井伊大老は、斯様に勇敢な強い膽力を、生れながらもつてゐられたかといふに、然うでない。井伊大老のことを精しく研究してゐられる中村勝麿さんの話によると、大老は參禪の力によつて出來上つた人である。大老は、井伊家の菩提寺である彦根清凉寺の師虔和尚について、夙に禪學を修めてゐられたが、師虔和尚の後住になられた仙英和尚について、また盛に禪を修行された。つまり、禪を修行して、安心決定が出來たので、度胸もそれによつて出て來たのである。

宗教では、安心決定といふことを尊ぶ。宗教的信念が確立し、心に落つきが出來ると、何んな事變が勃發しても、おど〳〵しない。井伊大老も、本當に安心決定を致されたのは、大部晩年であつた。天下がやかましくなつて、外國と交通するがいゝ、いや、してはいけない、といふ議論が、尊皇の問題とからんで

に住して門外に出でられなかつた。足利義滿公が、禪師の家風を慕うて、請ぜられたけれども、禪師は應ぜられなかつた。

それほどであるから、龍澤寺梅山禪師の禪に親しく參じやうとしても、なか〳〵寄りつきにくかつた。これは禪師が、禪を惜んで人に說かれないのではない。禪師は、禪を本當に人に領得せしめたい一心から、かゝるはづみなることを致されなかつたのである。

雞を養うの意は五更の天に在り——今日雞を養ふのは、玉子を取るためらしいが、昔は玉子を取るためでも肉を食うためでもなかつた。鷄に曉を告げさすためであつた。

五更は、夜の明け方である。一夜を五つに分けて初更、二更、三更、四更、五更といつた。三更は眞夜中、五更は明け方である。

『雞を養ふの意は五更の天に在り』とは、梅山禪師が門下の人々を養はれたその目的は、その人々に、正眞正銘の自覺を得しむるがためであつた。而して、その人々をして更に他の人を覺醒せしめるがためであつた。鷄が曙を覺つて鳴き、よく他をして無明長夜の夢を破らしむるが如く、門下の人々を大悟せしめ、而して、その人々が起つて、覺醒の警鐘を鳴らすことを、禪師は只管に念願あそばされてゐたのであります。覺醒の第一聲をあぐる禪者が出づることを、梅山禪師は、その門下にのみ望んでゐられるのでない。法孫の吾等も亦その人であることを思うて、精進いたすべきである。

けて、親しく禪を實踐躬行なされてゐるのであります。

梁王は識らず老胡の禪――禪を親しく實踐躬行して、論議などは決して致されなかつた方は、ひとり梅山禪師のみでない。達磨大師も亦その人であつた。だから梁の武帝は、この達磨大師に相見し、大師から實踐躬行の禪を露堂々に直指されてゐながら、氣がつかず、『聖諦第一義』は何だとか、禪はどうだとか、愚にもつかぬ質問を出して、頭ごなしにされたのであります。

老胡とは老々大々たる胡人といふこと、異國人といふことで、印度から梁の國へ來られた達磨大師のことである。

我れ儞に如かず、快馬の一鞭。作家の大用、鑑機前に在り」――この四句は、梅山禪師が、門下の坊さんたちに示誨をなし、問を發した坊さんを捕へて『お前はえらいぞ』といふ樣な語を發し、ヒヤリとさせながら、親切に指導して行かれる消息を讃歎したものであります。

『我れ儞に如かず』といはれた一言は、駿馬の如き學人に加へられた快鞭であつた。この一鞭、決して無駄になつてゐない。梅山禪師の如き、一家の風をお立てなさるゝほどのお方が、學人の根機(實力)を觀破いたさるゝその働きは實に素早い。禪師の照鑑は、學人の機用が發するの前に、旣に行はれてゐる。作家とは、一家の風をなすほどのお方といふことである。

龍澤雲深うして人到る叵し」――龍澤は、梅山禪師が開創いたされた寺の號である。禪師は、晩年この寺

て大變である。人手を賴んで拾ひ上げて貰はねばならぬ。それには落した處に目印をつけて置く必要があるといつて、腰の一刀を拔き舷をけづり、こゝから落ちた、こゝから落ちたと、舷を見守つてゐた。舟は進む。いくら舷に印をつけても、大刀の落ち込んだ位置の印とはならぬのであるが、この分り切つた道理が、この人には分らず、こゝだ〳〵といつて舷をけづつて印をつけてゐたといふ。

梅山禪師が『吾に一玄一位無し』などいふ言葉を發せられたのは、愚かななされかたである、大刀を落して舷をけづつた愚人にも似通うた愚かなところがあるといつて、こゝで梅山禪師を、うんと貶したのである。が然し、梅山禪師をけなしてゐるのでなく、梅山禪師の『吾に一玄一位無し』の言葉に屈托してゐる後學の人々の蒙を、この一語で啓かうといふのであります。

叉手當胸たゞ這れ是れ——本當の禪は、三玄にもなく、五位にもなく、『一玄一位無し』のところにもなく、叉手當胸のところ、こゝにある。

叉手とは、左手の親指を中にして左手で拳を作り、その拳を右の掌で覆ふ樣にして握ることである。當胸とは胸（みぞおちの少し下のところ）に當てること。叉手當胸はもと〳〵世間一般の禮法の一つであつた、それが後に、坊さんだけの禮法となつてしまつたのである。

禪は、三玄や五位の理論にあるのでなく、叉手當胸、禮拜看經、鐘が鳴れば法堂に上る、梆が響けば齋堂に入る、定め通り掟通り、道に叶うた行履を致す、その一擧一動の上にある。梅山禪師は専ら論議を避

頌曰。三玄五位止蹄錢。縱道吾無尙刻舷。叉手當胸唯這是。梁王不識老胡禪。我不如儞快馬一鞭。作家大用。鑑在機前。龍澤雲深人叵到。養雞意在五更天。

【讀方】頌に曰く、三玄五位止啼錢、縱ひ吾に無しと道ふも尙ほ舷を刻む。叉手當胸たゞ這れ是れ、梁王は識らず老胡の禪。我れ儞に如かず、快馬の一鞭。作家の大用、鑑機前に在り。龍澤雲深うして人到ること叵し、鷄を養ふの意は五更の天に在り。

三玄五位止啼錢――臨濟大師の三玄も、洞山大師の五位も、いはゞ、泣きわめく兒をすかすための手だてである。迷者の心を轉換して、大悟を開かしめるための手段に過ぎぬ。

止啼錢とは、涅槃經にある譬諭譚で、お錢を欲しがつて小供が泣いてゐる。親は與へるお錢がないので、公孫樹か何かの落葉を拾うて、お錢をやるぞといへば、小供はお錢を貰つた氣になつて泣き止んだといふ。佛教で教理を說き、禪理を示すなども、つまりは止啼錢に外ならぬ。迷へるものが顚倒して、わいわいいつてるので、何とか彼とか、手段や方法を弄して、顚倒を止めしめ泣きを靜めさすのである。

縱ひ吾に無しと道ふも尙ほ舷を刻む――三玄も止啼錢だ、五位も止啼錢だといふ立場よりすれば、梅山禪師が『吾に一玄一位無し』といはれたのも、餘り感心したことでもない。

昔、愚かな人があつて、船に乘つて海を渡る砌、二本差しの一方を落してしまつた。大事の大刀を落し

に穏かである。世の酸も甘いも嘗めつくした大成の人、まことの好々爺であると申上げたい氣がする。

僧曰く、和尚、人を瞞ずること無くんば好し——坊さんの方はまだ若い、梅山禪師の大成されてゐる家風は分らぬ、穏やかなお答への味が分らぬ。そこで、坊さんは、梅山禪師に『あんまり人を小馬鹿にすることは廢めて下さい』といつたのです。

師曰く、果然、儞に如かず——『いや、どうしても、わしは、お前にかなはぬ、敗けた、敗けた』と梅山禪師はいつて、禪師から禪理を聞かうとする坊さんに取り合はれない。

梅山禪師のこゝのお示しや、問答の御樣子は、梅山禪師の御師匠である大源宗眞禪師がお示しであるところの、

洞上の宗乘、五位を以て事理を究め、君臣を以て上下を分つ、然も恁麼なりと雖も、回互轉變の機無くんば、則ち却つて、乃祖の旨を失す。當に位中に位を明め、言中に言を遣りて、相應の分あるべし。道ふことを見ずや、寒巖異草の青きを守ること莫れ、白雲に坐却するも宗妙ならず。

といふ言句を思ひ合せて見ると、愈〻妙味が出るのであります。

大源禪師の禪も、梅山禪師の禪も、同一轍で、理窟なしの正禪である。實に老熟し切つた圓滿なる家風である。

汝等作麼生か會す——お前達は、どう思ふか、と門下の方々に梅山禪師は仰せられました。

自ら代つて曰く——梅山禪師が門下の人に問はれても、キツパリした答をする人が無いので、禪師は自ら代つて仰せになるに

大衆、堂に歸りて茶を喫せよ——お前達は、マア、そんなに、ポカンとした顔をしてゐないで、居間に歸つてお茶でも飲んだがよからうといふのであつた。

僧問ふ、諸方に徒を匡し宗を立つ、如何なるか是れ和尚の佛法——梅山禪師の仰しやる言葉の意味が、門下の坊さんたちには飲み込めない。で、坊さんの一人が問うて出た。禪師は、人を導くに、三玄や五位はおろか一玄一位も用ひない、そんなものゝ話を問うてるより、居間に歸つて茶でも飲め、と仰しやいますが、私達は、そんな、くだらぬことをしてゐる閑日月はありません。生命がけです、私どもは、禪師が諸方から參問に來る修行者達を導いて、禪の要旨を直示なさるゝ、そのときの、ギリ〳〵結着、提撕の樣式を承りたいのですと問うて出た。

師曰く、我れ爾に如かず——『さうか、お前はえらいことを知つてるな、わしは何も知らぬのぢや、お前にはかなはぬ、この問答は、わしが敗けぢや』といふほどの言葉である。

三玄、五位の理論を以て、禪要を說示しやうと致されぬは勿論、理論めいたことは一言半句も說かれない、こゝに、梅山禪師の禪がある。禪師は『見處』が頗る明白であると同時に『行履』が頗る綿密で、實

謂正偏五位を示されたのである。

宗乘を扶樹する底の牓様なり」——宗乘とは、吾が禪門の要旨である。上に說いた所の臨濟大師の三玄、洞山大師の五位は、皆これ吾が禪門の要旨を扶護し樹立するための様式である。が然し、吾に一玄一位無し——吾れ梅山には、三玄、五位は、おろか、一玄、一位も無い。そんな道具だてには用無しだといふのが梅山禪師の見識である。

道元禪師が春秋の卷に示し下された言葉の中にも、『佛法もし、偏正の局量より相傳せばいかでか、今日に至らん、(中略)洞山に偏正等の五位ありて、人を接すといふ、これは胡說亂說なり、見聞すべからず』とあつて、五位を固執することを喜ばれない様子が見えて居ります。五位や三玄が惡いのではない、五位や三玄が間違つてゐるのでは勿論ないが、それらの言句に屈托するのがよろしくないのである。

禪家の家風は、飽くまでも『不立文字』でなければならぬ。文字言句に縛られて、動きの取れなくなることは大禁物である。『金屑貴しと雖も眼に入りては翳となる』黄金の粉末は貴いが、然し眼に入れた日にはかなはない。塵ほこり以上に仕末が惡い。五位や三玄も、用ふるに處を得、人を得れば、實に偉大なる價値を現はすので、臨濟大師や洞山大師が用ひられるときには、學人をして直下に大悟せしめる活句となるのであるが、他の人が眞似て使つたのでは三文の値打ちもない。いや邪魔になる、害になる。これ道元禪師が『胡說亂說なり』といはれ、梅山禪師が『吾に一玄一位無し』といはるゝ所以である。

正とは、本體である。本體といふものは、吾等がこれを見樣としても、見ることの出來るものでない。摑まうとして摑めるものでない。吾等が水を摑まうとしても、水を摑むことは出來ぬ。摑んだと思つても摑まれてゐるものは波である。波でない水といふものは、どうしても見ることも摑むことも出來ぬ。波は摑める、波は見られる、が水そのものは、摑むことも出來ず、見ることも出來ぬ。それと同じ樣に現象といふものは見たり摑んだりすることが出來る。けれども本體そのものは、見ることも、摑むことも出來ないものである。だから、古人は、本體のことを『空界無物』といつてゐる。空だ無物だといつてゐる。

偏とは、現象である。現象は吾等の見たり聞いたり、觸れたり摑んだり、勝手次第にすることが出來るものである。吾等は波の相は見ることが出來る。波の音は聞くことが出來る。波には觸ることも出來れば摑んで見ることも出來る。だから、古人は『色界萬象』といつて、現象界は色の世界だ、物質の世界だ、種々雜多の物々の存在せる世界だ、といつてゐる。

右申す次第で、正は空界、平等、無物、本體の端的であり、偏は色界、差別、萬象、現象の世界である。その點のみを考へると正と偏とは、全く相反するもの、異つたものであるが、實際は、初めにも申した通り、水と波とが一ともいへず、異ともいはれない微妙不可思議の關係にある如く、本體と現象とは一ともいへず、異ともいへぬ。微妙な關係にあるのである。

この微妙な關係を納得させるために、洞山大師は、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到といふ所

三玄とは、畢竟ずるに、體・相・用の三つが、一語の中にも圓かに含まれてゐなければならぬといふことである。師家が學人を導くその言句には、眞如の理體、眞如の德相、眞如の妙用が、十分に體現されてゐなければならぬことをいつたものである。

洞山の五位——とは、洞山悟本大師が用ひられた五位といふことで、五位には、正偏五位、功勳五位、君臣五位、王子五位といふ四類があるが、君臣と王子の二類は、功勳五位を譬喩でもつて詳說したに過ぎぬのであるから、つまりは、正偏と功勳の二類の五位しか無い譯である。

正偏五位は、本體と現象との微妙不可思議なる關係を說示したものである。本體と現象の話をするのには、本體を水に譬へ、現象を波に譬へて、說明される場合があるが、この水と波との譬は實によい譬である。水のある所には、必ず波がある。今日は風が穩かで、波が無いといふ樣なことをいふときでも、それは比較の上の話であつて、水があつてそこに波が立つてゐないといふことは決してない。大なり小なり波が立つてゐる。また、波の立つてゐる所に、水が無いといふことも決して無い。波のある所必ず水がある。水と波とは離れることが出來ぬ。が然し、水と波と全く同じだとはいへぬ。實に不可思議なる關係である。一にあらず、異にあらず、洵に微妙である。

本體と現象との關係は、水と波との如く、一にもあらず、異にもあらずといふ關係である。この關係を十分に納得のゆく樣に、說示するために、洞山大師は、正偏五位をお作りになつたのであります。

無心に、拜んでゐる樣子を見ると、その像が愈〻尊く仰がれる。
この情景にスッカリ感激なされた禪師は『觀音樣のお像を私にくれないか』と小供に賴みなされた。どこまでも無邪氣な小供たちは『ハイ』といつて喜んで献上した。禪師は非常に喜んで、大事に捧げて宿坊に歸り、念持佛として朝夕の禮拜を致され、後、越前に龍澤寺を御建立になつたその時に、一堂を設けて奉安なされたといふことであります。人間は、金のことになると、淨穢を忘れる。穢い金でも何でも、金とさへいへば、生命がけで摑まうとする傾きがあるが、宗敎心の醇厚である人は、また小供の樣な無邪氣さ小供の樣な無心な敬虔さには、感に打たれてしまふ。梅山禪師の御人格は、こゝで伺ふことが出來る。洵に貴いお方である。
時の將軍足利義滿公が、禪師に是非相見がしたいと思ひ、使を加州に遣はして懇請されたけれども、應じられなかつた。で、義滿公は畫家を遣はし、禪師のお相を描かせた。これもならぬといはれるのを、畫家は唐紙の隙き間から盜み見して描いて歸つたといふ話がある。ともかく、梅山禪師は偉大な高僧であらせられ、師匠大源宗眞禪師の禪を大に宣揚されたお方であります。
衆に示して曰く――門下の學人達に示して仰せられるのです。
臨濟の三玄――禪宗史上に、實に偉大なる光彩を放つてゐられる臨濟義玄禪師は學人を導くに三玄といふものを使用いたされたと申します。

梅山聞本禪師——梅山聞本禪師は、美濃の多治見の人で、初め律宗の坊さんになられたのであつたが、感ずる所あつて、驛路を往來する人馬の便益をはかり、誓願を立てゝ十萬の馬に水や草を與へやうと致されたことがある。

後、京都に出で禪を學び、また、加州に行きて大源宗眞禪師に師事し、好んで苦役を勤め、晝は村里に出で米麥を貰ひ來り、自ら搗き自ら炊ぎて、同學者の粥飯を辨じ、夜は樹下石上に坐禪して、只管に靜寂の境地に親しまれました。

禪師には、宗教的なシンミリした話が、澤山あつて、京都の六角堂にお參りされた時の話なども、洵に尊いと思ふ。或時、禪師が六角堂の方に參られると、四五人の小供ががや〳〵いひながら、砂いぢりをして遊んでゐる。良寛和尚が、小供の無邪氣さに引き入れられて、日暮れを忘れて手毬づきをやつて遊ばれたといふ話があるが、梅山禪師も、小供の無邪氣な遊びに見とれてゐられた。

砂いぢりをしてゐた小供の一人が、ジヤアと立小便をやつた。砂山が俄かに洪水に會つて、泥土が出來た。その泥土を、小供たちはかきまぜて、種々のものを作り遊んでゐる中、そこへ、一つの像が出來上つた。見れば、立派な觀音樣のお像である。小供たちの目にもそれが觀音樣と見えたからであらう。石の上に奉安し、皆して何か唱へごとしながら頻りに拜む。これを見てゐられた梅山禪師は、いたく宗教的感激にお打たれになりました。小供は天國のもの、小便から捏ね上げた像に、少しも不淨が感ぜられぬ。小供が

いて來るか』と仰つしやつたときに、即座に『私がお伴致します』といつて出られたのが、大源宗眞禪師であつた。『見處』が明白でなければ、即刻この返事をなさることは出來ぬ。『行履』が綿密でなければ、峨山禪師が、この返事をお喜びなさる譯がない。

これより話さうとする梅山聞本禪師は大源宗眞禪師の弟子で、その『見處』、その『行履』ともに、師匠に讓らぬほどのお方であります。

梅山吾無一玄話

梅山聞本禪師、示衆曰、臨濟三玄、洞山五位、扶樹宗乘底牓樣也。吾無一玄一位、汝等作麼生會。自代曰、大衆歸堂喫茶。僧問、諸方匡徒立宗、如何是和尙佛法。師曰、我不如儞。僧曰、和尙無瞞人好。師曰、果然不如儞。

【讀方】梅山聞本禪師、衆に示して曰く、臨濟の三玄、洞山の五位は、宗乘を扶樹する底の牓樣なり。吾に一玄一位無し、汝等作麼生か會す。自ら代つて曰く、大衆、堂に歸りて茶を喫せよ。僧問ふ、諸方に徒を匡し宗を立つ、如何なるかこれ和尙の佛法。師曰く、我れ儞に如かず。僧曰く、和尙、人を瞞ずる無くんば好し。師曰く、果然として儞に如かず。

梅山禪師の吾無一玄の話

禪家では『見處明白』といふことを尊ぶ。見處とは、つまり悟のことである。シツカリした悟を開いた人でなければ話にならぬ。薄ぼんやりでなく、明確分明に悟を開かねば、一人前でないといふのであります。が『見處明白』といふことが大事であると同時に『行履綿密』といふことが大事であります。實踐躬行が大事である。行ひがシツカリしてゐなければ、何を悟つてゐたからといつても、價値がないといはなければならぬ。

禪家の大宗匠といはれる人の中にも、行履（身の行ひ）のいかゞはしい人がある。『見處』は大事であるが『行履』などはどうだつてかまはぬ、といふ人がある樣であるが、正傳の禪は、さういふ亂暴なものでない。『行履』さへよろしければ『見處』は、どうだつてかまはぬといふのでは勿論ない、が『行履』は大事である。『見處』が十二分に明確であり分明であつて、その上に『行履』がよろしいといふのが、一番いいのである。

曾て話した大源宗眞禪師といふ方は『見處』も明白『行履』も綿密、實に申分のないお方でありました。師匠の峨山禪師が『わしが魚屋になつたら、誰が賣り上げの錢勘定をしてくれるか、番頭役に誰がつ

樂に、日々を好日に暮し行くことは、知見の力に待たねばならぬ。悟の力によらねばならぬ。

竺山禪師に學んで『一物』を如實に體得することが、何よりの急務であります。

（この講話に於て『一物』といふ言葉で、述べられてゐる所のものは、つまり久遠實成の釋迦牟尼佛のことであります。吾等が本尊佛のことであります。—編者註—）

吐き出す水さへも甘露の飲物と尊く感ぜられる。

把住するや老鼠鐵蒺藜を呑む――『一物』が何ものゝ上にも顔を出してゐないといふ見方に立てば、老大々たる聰明叡智の鼠でも、鐵蒺藜、即ち鐵條網に喰ひつくやくざものに見えてしまふ。

今『放行するや烏龜甘露酸を吐き、把住するや老鼠鐵蒺藜を呑む』の二句を、こゝに出したのは、『一物』について十分體驗の出來てゐない人々が、或は放行一邊の見方より、或は把住一邊の見方よりして『一物』を見て『一物』は、すべての上に現はれてゐるのだから、修行も修養もいらぬといふ樣な邪見に陷つたり、『一物』は何處にも現はれぬ、これはどうすることも出來ぬものだ、といつて自屈いたしたりするのを矯正するがためである。

誰か知らん劍樹刀山の裏、等閑に迸出す鳳凰兒――或は放行の見方より、或は把住の見方より、學人たちは七顚八倒してゐる、苦しんでゐる。劍の林、劍の山に上る苦しみを致してゐるが、その苦しみは無駄事でない。その苦しみの中に瑞祥そのものゝ如き、めでたい鳳凰兒が出生してゐるのであると、學人の上に注意を與へつゝ、竺山禪師が苦修鍊行を致されて、大悟得脫、天下の大將軍を導く大善知識になられたことを讃歎してゐるのである。

『欲にあつて禪を行ずるは知見の力なり』吾等が世の中は、禪道佛法に志のある人もない人も、思ひ思ひの葛藤にまつはられて苦しんでゐる。が、その欲の世にあつて、禪を得、靜慮を得て、泰然自若、安

なしです。

それと同じ様に『一物』は、いつでも、いかなる所でも、背を向けてゐるといふことがない。活眼を開いてゐる人が見れば、竪に三際を極め、横に十方をつくし『一物』の大功德力にあらざるものは一つもない。古語に『左右源に逢ふ』と申しますが、實際、右を見ても左を見ても『一物』の大功德力『一物』の活作用のみである。

妙唱豈舌に干はらんや——八面すべて向背なく、露堂々に現はれてゐる所の『一物』の聲は、人間の舌先きからでなくば發しないといふ様な不自由なものでない。どこにも此處にも、大音聲を發してゐる。

放行するや烏龜甘露酸を吐き——放行といふ字は、把住といふ字と對をなしてゐる。放行とは『一物』が放出して、すべての上に行き渡つてゐるといふ見方をいふのであり、把住とは『一物』が一物の位を把つて、その位に住するといふ見方である。放行も把住も、共にそれは見方であつて、如實でない。

ともかく、碧巖錄にも『放行するや瓦礫も光を生じ、把住するや眞金も色を失す』といつて『一物』の功德力は、すべてに行き渡つてゐる、山の高きも、海の濶きも、鶴の長きも鴨の短き、皆これ『一物』の現成であると見れば、瓦一片礫一粒も尊い。が、『一物』は『一物』の位を把つて動かず、何處へも顏出しはしてゐないといふ見方よりすれば、黄金といへども尊く思はぬのが佛敎徒の信念である。

で、すべてに『一物』が現成してゐるといふ見方よりすれば『烏龜甘露酸を吐く』、烏龜(眞黒の龜)が

るのが、つまり鳴つてゐるといへるのである。そのもの〳〵の本德を包みかくさず大音聲に吹聽してゐるのであります。

車を造るときは轍に合するを要す――支那は道路が大變惡るくて、車が通ると輪が道路にくひ込む。頻繁に車の通る道路は、車の轍の跡が深くほれて、同じ寸法の車でないと、そこが通れない。さういふ國では、車を作る人が、その轍の寸法を合せて作らないと、折角の車が役に立たなくなる。だから、車を作るときは轍を合するを要するのである。

何のために、こんな話をこゝにもち出したかといへば、禪の悟を開いた人は獨掌の聲を聞いてゐるがために、動もすると、二つの掌を以つて、パン〳〵と拍ち鳴らす必要がないなどいふ傾きがある。が、それはよろしくない。獨掌は結構、獨立無件、萬事一人だちで行くは結構だが、誤つて調和協力といふことを無視してしまふ樣なことがあつてはならぬ。そこを心配して、車を作るときは轍に合せねばよろしくない、世に處するには、世と協調をたもたねばいけないと、こゝに說き來つたのであります。

獨掌は浪りに鳴らず、車を作るときは轍に合するを要すの二句は、つまり竺山禪師が『一物』を體得して、その大功德力を澁滯なく、まことに手ぎはよく現成されてゐることを、賞讃したものであります。

當頭向背無し――富士山を頌した詩に、『八面すべて向背のところ無し』といふ句があります。富士山は、どちらから見てもよろしい、背面を見てゐるといふ感じは起りませぬ。全く八面すべて向背のところ

也老鼠吞鐵蒺藜。誰知劍樹刀山裏。等閑迸出鳳凰兒。

【讀方】頌に曰く、獨掌は浪りに鳴らず。車を造るときは轍に合するを要す。當頭向背無し、妙唱豈舌に干はらんや。放行するや烏龜甘露酸を吐き、把住するや老鼠鐵蒺藜を呑む。誰か知らん劍樹刀山の裏、等閑に迸出す鳳凰兒。

獨掌浪りに鳴らず——二つの掌でパン〳〵と音をたてることは、世にありふれたことであるが、掌が一つで音を發するといふことは滅多にない。が、禪を修する人は、掌が一つだけで立派に大音を發することを會得せねば、本物とはいはれない。

白隱禪師は、學人に『隻手の聲』を聞けといはれた。大悟すると、隻手の聲が聞かれる、獨掌が鳴り通してゐることが分る。悟らぬ人には、それが分らぬ。鳴るものは隻手や獨掌ばかりでない、柱も鳴り、屋根も鳴り、机も鳴り、本も鳴り、何もかも鳴つて鳴つて仕方がない。大智禪師といふお方は、『燈爐露柱しばらく低聲』といつてゐられる。燈爐だの露柱（お寺の御拜の丸柱）だのが鳴つて、やかましくて仕方がない。少し靜かにしてくれといはれたのである。狐につまゝれた樣な話と思ふ人があるかも知れぬが、そんなこと思ふ人の方が、狐につまゝれてゐるのである。

鳴るといへば、パンパンとか、チンチンとか、ドンドンとかいふ音のするものとのみ思ふのが抑々の間違ひである。手が手の働きをなし、柱が柱の働きをなし、山が山の働きをなし、川が川の働きをなしてゐ

までもないことでございませう』といふ鹽梅の文字である。

徹曰く、未在更に道へ――いかぬ、改めて答へを致すがいゝ。

師便ち坐具を擲下す――竺山禪師は、持つてゐた坐具を放つてしまはれた。これはつまり擧動で、大悟の境地『一物』の活作用をお現しになつたのです。

坐具は坊さんが禮拜をするときに使用する法具で、坐具を廣げて、禮拜するも『一物』の活作用であり、坐具をたゝんで放つてしまふも『一物』の活作用である。何としても『一物』の大功德力の外に出ることは、禪師には出來ない。いや禪師一人が『一物』の中にあつて、そこから飛び出せぬのでない。何人もこの『一物』の中にあつて行住坐臥し、これから離れることは出來ぬのであります。この消息が、いかにもよく、竺山禪師の爲さるゝ行動の上に、はつきりと現はれてゐるので、

徹曰く、如是如是――本師大徹禪師は、喜んで、『如是如是』と仰せになりました。

如是とは、如々不動の眞理そのものだ、といふ義である。『一物』をテッキリと信解行證し、『一物』になり切つての大行爲であるといふ義である。『ウンよし』といふ推讃の辭である。『汝、今これを得たり、よろしくよく保護すべし』といつてゐられるのであります。

頌曰。獨掌不浪鳴。造車要合轍。當頭無向背。妙唱豈干舌。放行也烏龜吐甘露酸。把住

ければ、宗教でない。行とは修行である、實踐躬行である。證とはさとりである。『これを手に得て、心これに應ずる』をいふ。信解し得る所を、實踐躬行し、すつかり、それが日常生活に、溶け込んでしまつた、その微妙法樂の境地を、自ら深く首肯いたのが大悟である。

竺山禪師は、かねがね信解して既に實踐してゐらせられた『一物』の妙德を、今深く首肯くことが出來た。折も折、大徹禪師から『如何なるかこれ箇の一物』とお問ひがあつたので、竺山禪師は、スウツと出て、お拜をなされたのであります。

達磨大師が、お弟子の方四人に、悟をいへと仰しやつたとき、三人のお方は、それ〴〵言句を以て、悟りを述べられたが、二祖慧可大師のみは、何とも仰しやらずに、起つて禮拜を致されたといひます。默つて禮拜するその動作が、立派な答へとなつてゐるのです。答へは口でなければ出來ぬといふことはない。これは禪道佛法の上のことのみでなく、世俗でも、目でものいひ、いはすこともあり、無言が却つて雄辯に、意中を傳へることもある。竺山禪師は、禮拜によつて『一物』を脫體（つゝみかくすところなく）に本師大徹禪師の前に呈露なされたのであります。

徹曰く、汝なんの道理をか見る――大徹禪師は、竺山禪師が禮拜の樣子を御覽になつて『尊公は、なんだといつて、禮拜するのか』と詰問なされたのです。

師曰く、獨掌は浪りに鳴らず――『なんだといつて』など仰せられますけれども、『そんことは申上ぐる

もロでいつて見樣がなく、心で考へて見樣が無いといふのであります。

何とも口で云つて見樣もなく、心で考へて見樣もないものだが、『常に動用の中にあり』で、天地間に有りとある一切のものの活作用の中にあつて、この『一物』が働いてゐる。天が高うして天の面目を持ち、地が低うして地の面目を持つてゐるのは、全くこの『一物』の功德力によるものである。

それほどの大功德力を有つてゐる『一物』であるが、本來形名がない。何ともいつて見樣がない、考へて見樣がない、全くあやめが無い、ひツつかみどころが無い。そこを『黑きこと漆の如し』といひ、また『黑うして漆に似たり』と洞山大師は申された。

といふを擧して曰く、如何なるかこれ箇の一物——洞山大師の御示しを大徹禪師が、委細に擧似し(あげ示し)て、さてこの『一物』を、尊公等は、一體、なんだと思ふか、との問ひを發せられたのであります。

師、忽ち豁然として大悟し、衆を出でゝ禮拜す——竺山禪師は『一物』をテツキリ會得し、『一物』そのものになりきり、進み出て禮拜いたされた。

豁然とは、心のひろ〴〵として屈托なく、光明に滿ちて陰影をとゞめざるをいふ。

佛敎には四滿成佛といふことがある。信と解と行と證との四つを圓滿することの出來たときが、卽ち豁然大悟である。信とは信仰である、解とは解了である。信あつて解なければ、迷信に陷る。解あつて信な

一日、徹上堂——ある日、大徹宗令禪師が上堂いたされた。上堂とは、佛法を說くために、法堂（說法や法式を營む道場）に上ること、百丈古清規に『長老、上堂陞座すれば、主事徒衆、雁立して側聆す』とある。

洞山大師、冬夜の示衆——洞山大師とは洞山悟本大師のことです。曹洞宗の禪は、洞山大師の德によつて確立したと申していゝほどであります。曹洞宗の曹といふ字は、曹溪六祖大師の曹の字でありますが、洞の字は、この洞山大師の洞の字であります。兩師を仰ぎ尊んで、後人がこの禪の宗風を呼んで、曹洞宗と稱するに至つたのであります。

洞山大師が、冬の一夜、參禪修行の大衆に示された。何を示されたか。

一物有り、上、天を拄へ、下、地を拄ふ、黑きこと漆の如し——と、『洞山錄』の中には、洞山大師が玄泰といふ方と、果物を召し上りながら『一物有り云々』の法話をなされたことが書いてあります。その文には、

冬節、泰首座と果子を喫する次で、乃ち問ふ、一物有り、上、天を拄へ、下、地を拄ふ、黑うして漆に似たり、常に動用の中に有り、云々。

とあります。『一物』とは、何のことであるか。古人はこの一物のことを『本來形名なく、天眞にして性相を亡ず』といつて居られる。形もなく、名もなく、本性といふも當らず、實相といふも當らず、何と

時、禪師は目が覺めてしまつた。

『まことに不思議な夢を見た、地藏菩薩が夢に御告げを下されたか』と、これより禪師は只管に佛教を學び、解脫の彼岸に憧憬れて、京都に出で、東山訥和尚について、專一に參禪學道を致されることになり、諸方にも出でゝ禪を修し、大徹宗令禪師に參じて大悟し、一世に名高き大禪師とならせられるに至つたのであります。

竺山獨掌不鳴話

竺山得僊禪師、參大徹。一日、徹上堂、擧洞山大師、冬夜示衆、有一物、上拄天、下拄地、黑如漆曰、如何是、箇一物。師忽豁然大悟、出衆禮拜。徹曰、汝見什麼道理。師曰、獨掌不浪鳴。徹曰、未在更道。師便擲下坐具。徹曰、如是如是。

【讀方】竺山得僊禪師、大徹に參ず。一日、徹上堂。洞山大師、冬夜の示衆『一物有り、上、天を拄へ、下、地を拄ふ、黑きこと漆の如し』といふを擧して曰く、如何なるかこれ箇の一物と。師、忽ち豁然として大悟し、衆を出でゝ禮拜す。徹曰く、汝、什麼の道理をか見る。師曰く、獨掌は浪りに鳴らず。徹曰く、未在更に道へ。師便ち坐具を擲下す。徹曰く、如是如是。

竺山得僊禪師。大徹に參ず——竺山得僊禪師は大徹宗令禪師について禪の手引きを求められた。

竺山禪師の獨掌不鳴の話

足利義滿將軍が『此の禪師に遇うて、幸に吾が信仰心が向上した』といはれたほどの大善知識（學德兼ね備へられたる高僧）竺山得僊禪師のお悟をこれより述べるのであります。

禪師は江州の人で、幼少より佛法に緣があつて、地藏菩薩を信仰してゐられた。坊さんになつて專門に佛道修行を致したいといふまでには、考へてゐられなかつたかも知れないが、一夜、實に不思議な夢を御覽になつた。

夢の中では、感情が非常に強く働いて、恐ろしいものに出會はすと、たまらなく恐ろしい。嬉しいものは、また極端に嬉しく感ぜられる。竺山禪師は、夢に牛頭・馬頭の二鬼に驅りたてられて、地獄に墮ちられたといふのであるから、恐ろしかつたらうと思ふ。猛火の炎々たる中に、大釜があり、熱鐵が、トロトロに赤く熔ろけて、焰を吐いてゐる。二鬼が、禪師を捕へて、その中に投げ込んだ。四肢五體が眞赤に爛れて、痛苦に堪へず、氣が遠くなつてしまつた。ところが、そこへ慈悲愛愍の御手が現はれた。卽ち地藏菩薩がお出まし下されたのである。菩薩は、御聲朗に、『彼岸に行かう、向ふの岸へは、牛頭・馬頭の力が及ばない』と仰せ下された。禪師は狂はんばかりに喜んで、向ふ岸へ飛び移らうとなされた、其の

この八つのためには、誰しも心を動かして、身心の平安を失ふのであるが、大徹禪師は、これらの八風が吹き荒んでも、こんなものには頓着されぬ。八風吹けども動ぜず天邊の月、吹くは吹くに任せて心を動ぜられるといふことがない。實に偉大なる德相を具へさせられたお方でありました。

禪に志し、禪に因緣を結ぶ我々は、禪師のこの境地に學んで、鐵牛となつて兒を生み、石女となつて機を織り、萬仞峰頭獨足に立つて、禪師の兒孫たる名を恥かしめぬ樣に致したいものであります。」

あつた。お山の大将俺一人、他の追隨を許さぬのであります。勿論これは我見や我慢が强かつたといふのではない。悟豐かに德高うして、拔群の大善知識であらせられたといふのである。

『空華忽ち發く不萠の枝』これは、大徹禪師が拔群の大善知識であらせられて、不可思議不可商量の働きをあそばされたことをいつたものであります。空華はメバナのこと、眼を患ふと空中にチカ〳〵光る花瓣の樣なものが見える。畢竟ずるに空華とは實體のなき、幻の如きをいふ。但しここでは、六祖大師の所謂『本來無一物』の所より發生したる微妙の花をいふので、佛法の妙華の意である。

不萠の枝といふも、同じく、本來無一物の消息を失はない不可思議なる枝である。鐵牛が兒を生む、石女が機を織る、木龍が火を渡る、といふ凡夫の情識分別では解釋の出來ぬ微妙不可思議の消息を表はすのに『空華忽ち發く不萠の枝』といふ文字を用ひたのであります。

行雲流水唯是くの如し、遮莫れ八風狼籍に吹く——これも大徹禪師が御一生の偉大であつたことを表はす句である。

行雲流水は、雲の行くが如く水の流るゝが如く、固なく必なく、因緣に從ふことである。

八風とは、人間が心を動かされ易い八つのものをいふので、一に利、心に叶ひたること。二に哀、心に反すること、三に毀、貶られること。四に譽、褒められること。五に稱、人前にて褒められること。六に譏、人前にてそしられること。七に苦、身や心を苦しむること。八に樂、身や心を樂しましめること。

神戸に直木三郎といふ人が居る。感心な心がけの人であるが、或るとき按摩さんに一本參らせられたといふ話をされた。直木氏は、按摩さんの眼の不自由なのを氣の毒がり『此頃は醫術が進んで、大抵の眼は治るさうだ、よいお醫者さんにかゝつて治したら如何か、私も相談にのつてよくばのりますよ』と親切にいつたのであつたが、按摩さんは一向に氣乘りせず『旦那さま、、、わしはこのまゝ盲人でゐたいのでございます。盲人でありますが、少しも不自由はして居りません、、、わしは綺麗な神戸の町を、日々見て居ります、信心深く人情の厚いよい人ばかりの神戸を見て居ります。何も眼の手術をして、神戸の町を見直す必要はございません、なまなか目あきになつて今まで見てゐた神戸が、打つて變つた汚いもの醜いものでもあつたら、それこそ困ります、わしは盲人がよろしうございます』といつたさうである。直木氏もこれには感じ入つて、自分に活眼なきことを愧ぢたといつて居られました。

肉眼よりも尊い眼がある。いくら肉眼は開いてゐても、心眼が開いて居ねば盲人である。大徹禪師は勿論盲人でない。肉眼も開き、心眼も開き、佛法眼が開いて居る。搗てゝ加へて、手には打ち出の小槌をもつて居られる。何でもかでも打ち出される。鐵牛が兒を生む、石女が龍象を織り出す活作略（働き）を一身に有つといふ次第である。

萬仭峰頭獨足にして立つ、空華忽ち發く不萠の枝――『萬仭峰頭獨足にして立つ』は大徹禪師が御入滅の時の遺偈（遺言の詩）の中にある句である。禪師の一生は實に『萬仭峰頭獨足にして立つ』底のもので

るといふ。情識分別では、この道理が呑み込めぬ。

『心頭滅却すれば火自ら涼し』。情識分別、凡夫根性を無くしてかゝれば、水火何ぞ辭せん。たゞ本分を遂行する一路を驀直に前進するのみである。眼中、本分の遂行のみあつて、私了見、凡夫根性の無いのを、佛家では、時に木龍といひ、時に木馬といひ、時に鐵牛といひ、また、時に石女といふ。こゝに『木龍火を渡る』といつたのも、沒量の大人が眼中、本分の遂行のみあつて、私なく、驀直に前進する、その消息をいつたのである。

若しこゝの消息が分れば、鐵牛が兒を生むといふ消息も分る。木龍が火に燒けないといつても、別段、不思議がることはない。『佛祖不傳の妙旨』といふも、畢竟するに木龍が火を渡り鐵牛が兒を生むの消息に外ならぬ。

頂門活眼を開き、腦後に金槌を下す――これは大徹宗令禪師が、木龍の火を渡ることを會し、鐵牛の兒を生む消息を體顯して、偉大なる人物となられた上の活機輪（キビ〳〵したはたらき）をいつたものである。

活眼とは佛法眼のことである。金剛の五眼といつて、佛教では、肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼といふことをいふ。肉眼は凡夫の眼、天眼は聲聞の眼、慧眼は緣覺の眼、法眼は菩薩の眼、佛眼は佛の眼だといふ。佛菩薩の眼を得たのが佛法眼である。

してゐても、知らないでゐては役に立たぬ。釋尊は夙に自家の寶藏に氣がついて、それを受用された。迦葉も自家の寶を知つて受用された。迦葉が自分の力で自分の寶藏を受用されたとき、釋尊は迦葉尊者を印可證明致された。その印可證明致されたときのお言葉が、『我れに正法眼藏涅槃妙心あり汝摩訶迦葉に附屬す』といふのであつた。別段、何を傳授附屬されたのでもないが、さう仰せになつた。迦葉尊者も何をお受け取りになつたのでもないが、これより佛家の第一祖とおなりなされた。

右樣のことが、實にこれ、佛祖相傳の消息である。相傳といへば相傳であるが、別段、何物を傳へるでもなく、傳へられるでもないのだから、不傳といへば不傳である。

ともかく佛家には、傳とも不傳ともいひ切られない獨特の形で、永恒に存在するところの妙旨がある。佛法眼を開いて居る人は、この妙旨を、明々瞭々洵によく承知して居るのであるが、これは口舌でも、筆頭でも、說き示すことが出來ぬ。南嶽禪師も『說似一物卽不中』といつて居られる。いくら說き表はさうとしても說けない。說き得たと思うて、省ると、そこには何もない、もぬけの殼である。『唇皮に墮せず』とは唇にかゝらぬこと、云ひ表はせぬことをいふ。

若し木龍火を渡ることを會せば、何ぞ怪まん鐵牛兒を生ずることを――木龍とは木製の龍をいふ。これは通幻錄に出て居る文字である。石か鐵で製作した龍なら火を渡らせても燒失せぬが、木製では火に直ぐ燒かれてしまふはずのものである。ところが、禪家では、木製の龍が火渡りをして、然かも燒けないで居

【讀方】頌に曰く、佛祖不傳の妙旨、明々として唇皮に墮せず。若し木龍火を渡ることを會せば、何ぞ怪しまん鐵牛兒を生ずることを。頂門活眼を開き、腦後に金槌を下す。萬仞峰頭獨足にして立つ、空華忽ち發く不萠の枝。行雲流水唯是くの如し、遮莫れ八風狼籍に吹く。

佛祖不傳の妙旨、明明として唇皮に墮せず――莊子に輪扁といふ車作りの話が出てゐる。車の輪を作るくらゐは何でもないことの樣であるが却々難しい。輪扁は車を作るコツを得てゐたが、それを子供にも傳へることが出來ず、弟子にも相續さすことが出來なかつたといふ。精魂を打ち込んだことは何でも、他の人に傳へることは難しい。

佛教では相續を重んずる。釋尊大悟の正法は、迦葉尊者に、迦葉尊者の正法は阿難尊者に、阿難尊者の正法は和修尊者にと、嫡々相續して、一器の水を一器に瀉すが如く、餘さず缺かさず相傳する、この相傳を非常に重んずる。然し、この相續相傳たるや、能傳所傳に渉ることがない。傳へませう、傳へられませう、といふ樣な話とは譯が違ふ。つまり弟子たる人が十二分に鍛へあげて、申し分の無い境地に達したその境地を、師匠たる人が『ウンよし』と印可する、それを相傳といひ相續といふのである。傳へるといつても、師匠が弟子に渡すものがあるのでなく、傳へられたといつても、弟子が師匠から受け取るものがあるのでない。

『自家の寶藏外より來らず』各自の寶は外から來るのでない。寶は元來、各自銘々が所有して居る。所有

くゝ、無我無心であるがよい。情識分別を離れなければ、佛法でない。

祖曰く、切に忌む道着することを――大徹禪師には、こゝの道理がよく分つてゐる。分つてゐるからそれを述べたい。峨山禪師から質問が出たのをいい潮に、大に述べたてようとなされる。それを峨山禪師は述べさせなさらぬ。『切に忌む道着することを』あんまりしやべらぬがよい。『もの道へば 唇 寒し秋の風』碌なことはないから、しやべらぬがよい。『道ふものは親しからず、親しきものは道はず』たしなむがよいとの御挨拶である。

師、口を開かんと擬す――それでも猶ほ大徹禪師はしやべらうと致される。大河の決したるが如く、大徹禪師は分りかけた佛法が面白くて、道はずには居られぬといふ様子である。

祖則ち打つ――ピシヤツと一打、警策を與へられた。

師當下に省あり――大徹禪師は、警策で打たれた機に、ピタリと口をつむつてしまはれた。口に千萬言を說いた所で、足實地を踏まざれば佛法にあらず。大徹禪師は默つた刹那に大に感悟なされる所があつたのであります。どう感悟なされたか。それは頌の上で述べることに致しませう。

頌曰。佛祖不傳妙旨。明明不墮脣皮。若會木龍渡火。何怪鐵牛生兒。頂門開活眼。腦後下金槌。萬仭峰頭獨足立。空華忽發不萠枝。行雲流水唯如是。遮莫八風狠籍吹。

大徹宗令禪師に峨山禪師が『鐵牛、兒を生む時如何』といはれたのは、大徹禪師を試驗して居られるのである。大徹禪師に、果して佛法眼が開けてゐるか如何か、沒量の大人の日常の消息が分つて居るか如何か、それを驗すのに『鐵牛、兒を生む時如何』といふ問ひを以てなされたのであります。

師曰く、石女梭を動かして樞機密に囘る——大徹禪師の答は、實に立派なものである。『鐵牛、兒を生む』と『石女、梭を動かして、樞機、密に囘る』とは、異音同調であります。

石女とは、普通はうまずめのことをいふが原意は石造の女人像である。佛法では、情識分別がなく、凡夫根性が無い人のことをいふ。つまり沒量の大人のことをいふのである。凡夫根性の機織女が梭を動かしてゐるのでは、機械の運轉も却々うまくは行かないが、石女が行るとうまく行く。凡夫の根性、情識分別は洵に厄介なもので、これが少しでもあると物事がうまく行かぬ。文字一字書いても、無我無心で書くと下手は下手なりに妙趣が現はれるが、凡夫根性がそこへ僅かばかりでも顏出しするとかたなしになつてしまふ。

般若心經の中に『般若波羅密多に依るが故に、心罣礙無し、罣礙無きが故に、恐怖あること無し、一切の顚倒夢想を遠離す』とあるが、これはつまり空々大空畢竟空で、凡夫根性も情識分別も無くしてしまつてさへゐれば、心にこだはりが無く、既に心にこだはりが無ければ、恐怖といふものもない、すべて間違つた了見といふものから全く離れてしまふことが出來るといふことであります。鐵牛の如く、石女の如

正師の得られざるを遺憾として、雲水行脚に出られました。恰度そのとき、能登の總持寺に峨山禪師が居らせられて、提撕甚だ嚴峻であるといふ評判であつた。禪師は聞きて、即刻、峨山禪師に參問されることとなりました。

祖問ふ、鐵牛兒を生む時如何――これは峨山禪師が、大徹宗令禪師へ出された質問であります。鐵牛とは、支那黄河の守護神として祀つてある大きな鐵製の牛である。鐵製の牛が兒を生むとは、常識を以てしては何としても解釋の出來ぬ話であるが、佛法眼を開いて見れば、驚くほどのことでない。

佛法では『たゞ凡情を除け、別に聖解無し』といつて、何よりも凡夫の情識分別（迷ひにからんだところの働き）を取り除かすことに努める。佛法の奧義が知りたくば、先づ第一に凡夫根情を去れといふ。禪の眞髓を得たくば、何を扨て置いても、情識分別を棄てゝしまへといふ。凡夫根性を無くし、情識分別を無くしてしまつた人を、沒量の大人といつて、禪では推重する。つまり凡夫のあさはかな根性、惜しい欲しい、憎い可愛いの狹い量見を無くし、公利公益あることを知つて私利私慾を顧みぬ大人物を推重するのである。

鐵製の牛には、凡夫根性が無い。情識分別が無い。凡夫は鐵牛を黄河の守護神と仰ぎ、各自銘々の利益を祈つて居るが、鐵牛はそんなことには頓着しない、鐵牛は鐵牛の本性を現はしてゐるまでのことである。こゝで鐵牛が兒を生むと、いつたのは其のことである。

大徹禪師の鐵牛生兒の話

禪家が使用する言葉には、何の意味だか薩張り見當のつかぬのがある。取ツつきがわるくて困るといふ非難があるが、禪語は其の意を了解して見れば、そこには何ともいへぬ味があつて面白いのであります。大徹禪師の『鐵牛生兒の話』なども、初心の人からは難しがられるが、難かしいだけに、また別味がある。

大徹鐵牛生兒話

大徹宗令禪師、參峨祖。祖問、鐵牛生兒時如何。師曰、石女動梭樞機密回。祖曰、切忌道着。師擬開口。祖則打。師當下有省。

【讀方】大徹宗令禪師、峨祖に參ず。祖問ふ、鐵牛兒を生む時如何。師曰く、石女梭を動かして樞機密に回る。祖曰く、切に忌む道着することを。師、口を開かんと擬す。祖則ち打つ。師當下に省有り。

大徹宗令禪師、峨祖に參ず——大徹宗令禪師は、幼歳で出家し、讀經も坐禪も熱心に致されたが、未だ

も、即刻『宗眞の有る在り』といふ力強い御返答が出來たのであるが、これを人ごとゝ思うてはならぬ。各自も幻人である。幻人として幻を幻としてゐるのではないか。そのことが了得出來れば、

水鳥のゆくもかへるも跡絶えてされども道は忘れざりけり

水鳥が池の上を自由自在に遊びまはるが如く、また飛ぶ鳥が自由自在に大空を遊びかける如く、各自も自由に往き來することが出來る。而して各自の本面目が露堂々に實現され、各自が大道を踏みはづすといふことがなくなる。この消息を早く體得するがよい。

然るとき『歩々解脱門に非ずといふこと無し』で、すること、なすこと、皆悉く佛法の大精神に合ひ、心廣く體胖にして、その樂しみいふにいはれざるものがある。お互は、これを自ら體得し、他をして體得せしめねばなりませぬ。

の打つ通しである。錯の打つ通しの中で、千古萬古、寃恨の結び合ひをしてるは馬鹿げた話である。

太源宗眞禪師は、そこを眞に諦めて居られる、悟つて居られる。魚屋であらうが、肉屋であらうが、因緣次第、何にでも、どん〲なつてゆく。他人が破戒といはふが、持戒といはふが、そんなことに頓着はない。

一語全提す經律論、分明に倒却す刹竿の旛――『宗眞の有る在り』私が魚屋のお伴になつて、錢勘定でも何でも致します、といはれた宗眞禪師の一語、この一語には、佛教にあるとあらゆる法門（經・律・論）の大眞理が提起し盡されて居る。確かに峨山禪師門下で、この場合、宗眞禪師が、第一等に腕前が勝れて居た。そこの所を示して『分明に倒却す刹竿の旛』といつたのである。師匠の峨山禪師も、宗眞禪師には、頭を下げてよからうといふ意を示したのであります。

刹竿の旛といふのは、印度で法の對論者を待受ける時に建てる旛である。若し旛を建てた主人公が、對論に敗北する樣なことのあつた際には、それを倒してしまつたものである。峨山禪師と宗眞禪師との問答は、宗眞禪師の大勝である。峨山禪師も門頭の旛を倒されるがよいといふ所である。

虛空路有り君看取せよ、步步解脫門に非ずといふこと無し――この二句は、前に宗眞禪師を激賞したので、學人がぽかんとして、人ごとの樣に見てゐるのを警策した語であります。

宗眞禪師は、幻人幻を幻とする活消息を體得して居らるゝために、峨山禪師の突拍子もない問に會つて

いひ、犬犬に非ず、然かもこれを犬といふ。人も人に非ず、然もこれを人といふ。すべてのものは、たゞ暫時、因緣合成によつて、それ〴〵の相を示し現はしてゐるまでで、そのもの獨自の實體といふものは一つもない。因緣次第で、假りに樣々の相となつてゐるまでである、皆悉く幻である。

今、私が、傳燈遺照を講話して居るのですが、無自性不可得の悟を開いた人の眼から見れば、『私が傳燈遺照を講話して居る』といふよりも、『幻が幻を幻して居る』といふ方が親しいのである。これは私一人のことでない。あなた方も亦然なりで、『あなた方が傳燈遺照を聞いて居られる』といふよりも、『幻が幻を幻して居られる』といふのが親しいのであります。

人も幻である、傳燈遺照も幻である。話すも幻なれば、聞くも幻で、幻ならざるものは一つも無い。而して、この幻そのものに亦、幻といふ實體があるのでない。『幻に幻根無し』、幻、幻といふけれども、幻といはるべき固定的不變的なものは一つもない。すべてが無自性不可得、すべてが因緣合成、因緣を離れては何一つ存在しないのであります。

將錯就錯、千古寃を結ぶ――觀じ來り觀じ去れば、諸佛諸菩薩が世に出現して正道を說くなどいふことも、實は餘計なこと、夢の世に夢を說く囈言に過ぎませぬ。一休禪師は『釋迦といふいたづらものが世に出でて』と申されたが、釋尊の出世化導も無用であるといつてよい。正道だ外道だ、邪だ正だ、ずつたもんだ、をやるのは錯の上に錯を重ね、錯の大紛爭をやるといふもの、『錯をもつて錯につく』錯

明に倒却す刹竿の旛。虚空路有り君看取せよ、歩々解脱門に非ずといふこと無し。

幻人幻を幻とす、幻に幻根無し――この句は太源禪師が入滅の時示された遺偈の中の語によるもので、遺偈には

> 幻にして來幻し、幻にして去幻す。
> 幻に幻根無く、幻人幻を幻とす。

とあります。幻とは『まぼろし』のことで、實體の無いものをいふ。世間では幽靈だの、妖怪だのを幻といふが、佛教學の上では、森々羅列の萬象、一として幻ならざるものなし、何れも無自性不可得であります。

> 因縁所生法、我說卽是空、亦名爲假名、亦是中道義。

といふ偈がありますが、世の中に、因縁から出來たのでないものは一つもない。何もかも因縁の合成である。机も本も、犬も猫も、皆悉く因縁合成である。因縁合成であるから、何物にもそのものの實體といふものがない。

> 引きよせて結べば柴の庵なり解くればもとの野原なりけり。

引き寄せて見れば草庵であるが、草庵の實體といふものはない。結んだ繩を解き、組んだ柴枝を取り去つてしまへば、草庵の影も形もありはせぬ。世の中は皆かくの如く、草庵草庵に非ず、然もこれを草庵と

せんがためである。かくして、人材が養はれて、化門が全國津々浦々にまで開かれて、今日、宗門の大隆昌を來し居るのであります。

支那に許由といふ仙人があつて、浮世の名利などは、塵芥の如くに捨て去つて、深山に幽居し、たゞ一瓢を所有し、渇し來れば、瓢を以て溪水を飲み、飲み了れば、これを樹枝にかけて、無爲を樂んだ。堯帝はその心操の高潔たる所を見て、帝位を讓らうとされた。許由はこれを聞いて拂袖し去り、溪水に下つて頻りに耳を洗つたといふ話があるが、許由の如きは脫塵の病に罹つた病人である。

神聖病や脫塵病が、佛家にあつては相成らぬ。然し、未だ神聖の妙味を味はず、未だ脫塵の風光に觸れたことが無いのでは仕方がない。太源宗眞禪師入鄽販魚のこの公案は、大悟以後の妙行であることを忘れては困る。

山、深く、これを肯ふ——峨山禪師は、太源宗眞禪師のこの間髮を容れない卽答を大に滿足なされました。

頌曰。幻人幻幻。幻無幻根。將錯就錯。千古結寃。一語全提經律論。分明倒却刹竿旛。
虛空有路君看取。步步無非解脫門。

【讀方】頌に曰く、幻人幻を幻とす、幻に幻根無し。將錯就錯、千古寃を結ぶ。一語全提す經律論、分

といふのである。

世の中には、神聖病といふ病氣があつて、佛法は神聖にして犯すべからず、佛法の學人は魚屋や肉屋になつてはならぬ。佛法を信ずるものは、燒香、禮拜、念佛、修懺、看經をすればそれでよい、それが佛法である、禪道であるといふ樣に、心得違ひをする人がある。勿論『大死一番、大活現成』で、俗事諸緣は殺しつくして神聖の極致に達せねばならぬが、いつまでも、その境地を死守してゐたのでは用をなさぬ。大活現成して、魚屋よし、炭屋よし、薪樵りよし、油賣よし、車掌よし、機關手よし、車夫よし、馬丁よし、何にでも因緣に任せてその身を現じて、私心なく、本務のために本務を盡す、佛道のために佛道を修するといふことにならなければいかぬ。

從上の祖師が、深山幽谷に益々入り込まれたのも、自分の私事からでない。高祖大師が京を去つて越の山奧に入らせられたのも、私事私心からでない。佛法のために、眞に佛子を作り出したいといふ敎育上の大精神に催されてゞある。太祖大師が加賀の大乘寺より、能登の永光寺、更にまた總持寺と、段々邊境の山地に去られたのも、世を厭うてゞなく、世を救はんためである。退いて人材の養成に力めなされたのである。故に坐禪用心記の中に

常に大慈大悲に住して、坐禪無量の功德、一切衆生に回向すべし。

と仰せられてあります。坐禪をあそばすも、道のための大修行であり、看經なさるゝも、衆生濟度に回向

昔の比丘の如く寂靜をねがひ、山林に隱居することなかれ。實にこれ前來も、是くの如き未得道のあやまりあり、近來も此くの如く未得道なる誤あり。

猶諸人と肩をまじへ、參來參去すること、閑靜ならざる故に、獨り山林に居して、しづかに坐禪行道せんと、かくのごとくいひて、多く山谷に隱居し、みだりに修練する類、多くは邪路に赴き來る。

とあります。山林に安居することは、もとより大切で、坐禪用心記の中にも

叢林の中、善知識の處、深山幽谷、これに依止すべし。綠水青山、これ經行の處、谿邊樹下、これ澄心の處なり。

とあるが、山林に沒在し、谿邊樹下に死在しては死漢である。向上の死漢となつては佛意に背く。

愚なる我は佛にならずとも衆生を渡す僧の身たらん。

自分は極樂淨土に往生することを遠慮して、娑婆に苦しんで居る人を救濟し盡くさねば止まぬといふのが、諸佛諸菩薩の誓願である。娑婆の攻め苦に惱んで居る千萬無量の人々を、救濟するのには、一筋繩では間に合はぬ。觀世音菩薩も三十三身に身を現はして、衆生濟度をなされて居る。坊さんが時に魚屋になるくらひの覺悟はあつて、然るべきことであると申さねばなりませぬ。

禪語に『百尺竿頭進一歩』といふ。百尺の竿頭に上るとは佛法の正眼を開くことである。そこを更に進一歩すとは、開き得た正眼を己れ、ひとりこれを樂しまず、一切の人々に敎へ勸めて、各自に證得せしめよ

專門の佛教徒は、理想が高い、心事は洵に高潔である。然し、やゝもすれば、理想に墮し高潔に墮して、所謂『向上の死漢』となる。宗眞禪師は、これを夙に憂へて、いはゞ佛教の實生活化に努力いたされたお方である。

太源宗眞禪師の門下には、梅山聞本、了堂眞覺の兩禪師があり、梅山聞本禪師の下に、太初繼覺、傑堂能勝、如仲天誾等の禪師が出られて、宗眞禪師の佛法は遂に天下に彌漫いたしました。

山、因みに衆に謂つて曰く——峨山禪師が、何かの因に門下の方々に仰せになつた。

我若し市鄽に在つて魚肉を販がば、誰かこれ後に隨つて以つて其の錢を貫せん——私が若し市街に飛び出して魚屋を始めるとしたら、誰が付いて來て、帳場をやるかい、といふお尋ねであります。

嚴肅そのものの如くであらせられる峨山禪師が、魚屋になつたら誰がついて來るかといふお問であるから、一同は驚いた。今でこそ魚を買ふ坊さんもあるが、峨山禪師の頃には、魚の話一つするものもない。

峨山禪師は實に突飛な事を云ひ出されたのであります。一同は開いた口がふさがらぬ。然るに

師曰く、宗眞の有る在り——私が居ります。私がお伴をして、おかせぎになつた錢を錢緡に貫してお手傳ひ申しませうと、宗眞禪師は即答いたされたのであります。宗眞禪師の見識といひ、信念といひ、禪機といひ、洵に中分がありませぬ。

太祖常濟大師の傳光錄の中に、

太源宗眞禪師、峨山禪師に參ず――太源禪師は加賀の人であります。弱冠して坊さんになり、佛教の典籍を種々御研究になつたが、未だ安心決定が出來ぬ。廣く佛書に涉れば涉るほど、疑團が胸一杯になつて、心がいら〳〵して苦しい。

たま〳〵坊さん達が評判するのを聞くと、能登の總持寺に峨山禪師といふ高德が居られ、簡易直截、苦患の根底に突き入つて、直下に安心立命を得しめられるといふ話である。宗眞禪師は飛び起つやうに喜んで、早速、能登の總持寺に拜趨し、懇切なる垂示を受けて、貞和五年六月一日、豁然として大悟いたされた。この時、峨山禪師は七十五歲の高齡で、宗眞禪師を得たことを非常にお喜びになつた。

峨山禪師は曹洞宗興隆の大禪師で、門下に二十五人の龍象(立派な師家)を出されたといふお方である。どのお弟子を特に推重なされるといふことはないが、宗眞禪師は獨特の家風を有せられてゐるので、峨山禪師は特に肯うて居られた樣に拜せられる。

宗眞禪師が、峨山禪師の後をついて、總持寺第三世となられせられてからの法語にも、『寒巖異草の青きを守ること莫れ、白雲に坐却するも宗妙ならず』とある。巖々たる岳嶺に珍異な草の青々と茂つて居るのは、見る目に氣持ちがよいが、異草に現を拔かしてしまつたんでは仕方がない。白雲の濛々たるも惡くはないが、白雲の中に落ち込んでしまつては世に處せられぬ。世俗紅塵を遠く離れた境地、純眞無垢の心境は洵に結構だが、そこに縛りつけられては自由がきかぬ。

太源禪師の市鄽貫錢の話

佛の敎は尊いが、餘りに尊過ぎて娑婆の人間には縁遠い、日常生活の適切な手引きとは成り難い、といふ話をよく聞くが、それは未だ佛法を知らざるもの丶囈語である。

本當に佛の精神を得れば、終晝至夜、佛法を離れやうにも離れられないはずのものである。傘松道詠にも『此の經の心を得れば世の中の賣り買ふ聲も法を說くなり』とあります。佛敎の精神を得れば、市場で賣つたり買つたり商をする騷ぎも、佛法そのものであることが分る。これより述べやうとする太源宗眞禪師の話は、この間の消息を、洵によく示されたものであります。

太源市鄽貫錢話

太源宗眞禪師、參峨山禪師。山因謂衆曰、我若在市鄽而販魚肉、誰是隨後以貫其錢。師曰、有宗眞在。山深肯之。

【讀方】太源宗眞禪師、峨山禪師に參ず。山、因に衆に謂つて曰く、我若し市鄽に在つて魚肉を販がば、誰かこれ後に隨つて以て其の錢を貫するや。師曰く、宗眞の有る在り。山、深くこれを肯ふ。

湘の南、潭の北、湘江の流るゝ南の方、潭江の流るゝ北の方、つまり天下中といふことである。一天下國土中に、黄金が一杯光り輝いて居る。行くとして黄金の輝かざる所なく、極樂淨土ならざるところが無い。『無影樹下の合同船』黄金の光明が、眞ツ晝間の樣に輝いて一切萬有を照らし、盡大地に一翳の影も見當らないと說き來つて、慧忠國師のいふ卵塔とは、この大地のことだ、純淨無垢の實報土（極樂淨土）、一切の有情が、等しく佛の光明に照らされて居る此の土のことだと直示したのであります。が、肅宗皇帝には、未だそれが分らぬ。耽源はそこを齒痒がつて、『琉璃殿上に知識なし』。金銀琉璃をちりばめた立派な御殿に住はれる御方が、この消息に通じない。全く無眼子であるのだから仕方がない、といひ切つたのであります。

無眼子では仕方がない。我等のこの大地が、無影樹下の合同船、佛性の大海に、一切人類が、仲睦じく乘合船で乘り出して居るのであることを、シツカリ眼を開いて見るがよい。

花開く那ぞ東風の力を假らんや――東風は春風である。春風が吹き出すと、大地の花が爛漫と咲き亂れるが、然し、春風の御他力で、花が開くのぢやない。佛德本然の顯現で、花と開き葉と茂るのである。すべての本源は佛德である、明峰禪師大悟の『皮膚脫落し盡して、たゞ一眞實のみ有り』といふその一眞實の顯現である。澄みわたりたる大空の如き心境それ自身の力の發現である。

自己と佛と、これが二つの體に見える間は、未だ禪を體驗した人とは許すことが出來ぬ。然しながらこの自己と佛と別でないことを、親しく會得することは、口や筆では及ばない。

四辯八音も說くことを得ず――釋尊の如き大雄辯のお方でも、『喚べば則ち應ずる底のもの』を口で說いて、人に會得さすことは難かしい。

無影樹頭高く眼を着けよ――これには故事がある。支那に、南陽慧忠國師といふ方がある。肅宗皇帝の歸依もあり、一世に重きをなした高僧である。老齡に及び將に入寂せんとするとき皇帝親しく御見舞ひになつて『何か御遺言はありませんか、申し遺さるゝことは、何なりと承りませう』と仰せられたので、國師答へて、私に『無縫塔』を作つて下さいといはれた。無縫塔とは、坊さんの墓碑である。坊さんの墓は卵子形であるので、これを卵塔ともいふ。皇帝曰く『卵塔にも種々あるが、どんな格好のがよろしからうか』といはれた。が國師は默つてしまはれた。暫時して『お分りですか』と國師は靜かに問返へされた。皇帝には分らぬ。そこで國師は『私の弟子に耽源といふものがある、萬事心得てゐますから、耽源にお尋ね下さい』といつて入寂された。

皇帝は、耽源和尙を近くお召しになつて、そのことをお話になると、耽源和尙は『湘の南分潭の北、中に黃金有つて一國に充つ、無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識なし』と答へた。湘も潭も川の名である。當時專ら禪が行はれてゐた地域、今の湖南省の地方を流るゝ河で、湘江は南に、潭江は北に流れて居る。

い。それだつたら陽性の傲慢の方が寧ろ愛嬌で、罪が輕いかも知れぬ。

午日影像無く、青天怒雷奔る――純眞なる心境と、その心境より發する活作用とを示した句である。『午日影像無く』の句は、明峰禪師が曾つて使はれたことのある句で、或る僧が『奪境不奪人』といふ問を發した時に、禪師は、『午日影像無く、萬里一條鐵』といつて居られる。午日は眞つ晝間である。日輪午に當つて、地に樹影なし、白日當天の正午には大地に影が無いそれの如くに、明峰禪師の心地には、影がない曇りがない。六祖大師の謂はるゝ『本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん』といふ消息である。

本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんで、空々寂々、何もないのか、空無かといふに、然うでない。『青天怒雷奔る』で、青天の霹靂の樣に、突如として活作用が起つて來る。茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫する自由自在の働きが現成して來る。

明治天皇の御製に

あさみどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

とありますが、清澄な大空の如き心境にあらせられたればこそ、明治天皇の御聖德は、かくも偉大に顯現いたしたのであります。

喚べば則ち應ずる底これ誰ぞ――明峰禪師ばかりでありません。人から喚ばれて『ハイ』といふ、自から喚んで『ハイ』と答へる、その『ハイ』、『ハイ』と返事をするその主は抑々何ものか。自己である、佛である。

を假らん。
皮膚脫落し盡して、たゞ眞實のみ有りて存す――これは明峰禪師の心境であります。が、實際は却々容易にこの心境には達せられぬ。私は解脫して居りますと、公言する人でも、案外、解脫し盡してはゐないもので、つまらぬことに引つかゝりて自由を失つて居る。

支那に嚴陽尊者といふ人があつて、有名な趙州和尙の所へ行き『一物不將來の時如何』と問うた。何一つ擔いで居りません、まことに純一無雜の境地に、私は居るのですが、どんなものですか、と誇らしげにいつたのである。明峰禪師の言葉に飜譯すれば、『皮膚脫落し盡して、たゞ一眞實のみ有り』といふところです。すると趙州は『放下着』うつちやつてしまへと答へた。何も擔いで居るものが無いといつてるのに、打ち捨てゝしまへといふ御挨拶では平仄が合はぬ。嚴陽尊者は『一物不將來の時、箇のなにをか放下せん』何も擔いで居らぬのに、一體、何を打ち捨てよといはれるのですか、といふ反問である。『師曰く、與麼ならば、擔取し去れ』そんなら擔いでゆけ。飽まで平仄が合はぬ。然し嚴陽尊者は、趙州のこの言を聞くや瓦解氷消する所があつたといふ。全く、擔いで居ない樣でも擔いで居るのが、樣々の因襲である、邪見である、迷執である。

謙遜は、人の美德であるが、謙遜に囚はれると、卑下慢といふ病人になる。卑下することを自慢にするといふ連中である。傲慢不遜は、勿論よろしくないが、卑下慢もよろしくない。卑下慢は陰性でキビが惡

も權利義務の條目を口にせぬ。實業家も算盤を膝へのせてゐない。七八十の老人も、二つ三つの小供も、一緒になつて和氣靄々、まことに人生樂園の名に背かぬ。

宗教がまたそれである。禪がそれである。一度、禪門の中に入れば、鬪爭が無い、嫉視が無い、是非が無い。善惡が無い。有るものは、法喜である。禪悅である。たゞたのしいのである。ありがたいのである。見るもの、聞くもの、佛德佛光佛壽にあらざるはない。

祖曰く、脫落脫落――太祖大師が、弟子明峰の心境を喜んで、賞讃されたのである。純眞無垢のよい心境である。煩惱妄想の纏縛が全く無い、と歎美されて居るのです。

師拂袖して出つ――明峰禪師は、賞揚歎美されていゝ氣になつてゐる樣なおめでたい方でない。禪師が皮膚脫落し盡して居られる活消息を、そのまゝそこに出された趣きがある。

頌曰。皮膚脫落盡。唯有眞實存。午日無影像。青天怒雷奔。喚則應底是何誰。四辯八音說不得。無影樹頭高著眼。花開那假東風力。

【讀方】 頌に曰く、皮膚脫落し盡して、たゞ眞實のみ有つて存す。午日影像無く、青天怒雷奔る。喚べは則ち應ずる底これ誰ぞ、四辯八音も說くことを得ず。無影樹頭高く眼を著けよ、花開く那ぞ東風の力

師また對ぢる無し——弓も名手は滿を持して放つ。明峰禪師も滿を持して、未だ輕々しくは答話を致されません。

一日契悟、方丈に上つて乃ち曰く、某甲會せり——因緣圓熟、純眞、玉の如くなる自己の心境を、深く自ら肯づかれることが出來たので、明峰禪師は、太祖大師のお居間に進んで『分りました』と申上げられたのである。

祖曰く、爾作麼生か會す——どう分つたか。

師曰く、皮膚脫落し盡して、たゞ一眞實のみ有り——天地宇宙、たゞ一つの眞實體のみあつて周遍し、何處の涯に參りましても、這の唯一つの眞實體のみであります。佛德のみであります。從來は、見るところに迷ひ、聞くところに惑うて、眞實體を見ず、佛德を見ず、自己を見ず、佛を遠きに求め、道を外に求めてゐましたが、今日、すつかり明瞭いたしました、と答られたのである。

煩惱妄想に、からみつかれて、自由のきかないのが人間である。煩惱の衣を脫ぎ捨て、妄想の皮膚を取り去つて、素ツ裸になれば、自由である。安心である。安樂である。家庭は人生の樂園、一日の勞苦も家庭團欒の一刻に慰められてしまふといふ。何故、家庭が樂しいか、それは、家內中がよそゆきの衣服や裝具をかなぐり捨てゝ、スッカリ打ちくつろいで居るからである。軍人も家に歸ればサーベルをとる、軍帽を脫ぐ、軍服を脫ぐ。政治家も家庭の人となつては黨派の反目も無く、主義主張の爭ひもない。法律家

たのである。『これなんぞ』も『これ誰ぞ』も同じである。『誰ぞ』とは誰のことか、『なんぞ』とは何のことであるか。『誰ぞ』とは佛のことである。『なんぞ』といふも佛のことである。禪家で、誰ぞといひ、何ぞといふは何時でも、それは佛のことである。道のことである。法のことである。自己のことである。

修行が熟して來ぬ間は、佛と法と道と自己と、これが皆同一物であることが分らぬが、これらは畢竟、別のものでない。高祖大師は『現成公案』の中に於て、『佛道をならふといふは、自己をならふなり』と示されてあります。眞實の自己を見つけ出しさへすれば、參學の大事こゝに了んぬで、禪の討究に一段落つくのである。

支那に、瑞巖の彥禪師といふ方があつて、いつも自分を喚び、自分で『ハイ』と答へ、『惺々著、他時、人の瞞を受くること莫れ』、シツカリ、眼をさまして居なさいよ、眼を覺して居ないと、人から馬鹿にされますよ、と自分で自分を注意することを怠られなかつたといひます。常に自己を喚び覺ましてゐることが肝要である。

眞實の自己は、佛の分身である。佛の萬德を一身に具備して、少しも缺くる所がない。『能く萬物を變作する』力が十二分にある。太祖大師が『能く萬物を變作す、且く道へ、これ誰ぞ』といはれるのは、眞實の自己を親しく會取させたいがために『そらそこに眞實の自己が顏出して居るぢやないか』といはれたのである。

返事をせずに居る方が、大部よい方である。

是くの如きこと凡そ八年――『哲侍者』、『ハイ』、『これなんぞ』、『……』。『哲侍者』、『ハイ』、『これ何ぞ』、『……』。同じ様なことが八ヶ年も繰り返されたといふのです。勿論、言葉の上では同じだが、これを言ひ、これを聞く心境は日に月に變つて居る。進んで居る。

支那の雲門といへば、實に有名な禪僧である。その侍者に香林の遠といふ人があつて、修行に却々熱心で、十八年間も雲門に隨侍して居たといふ。雲門もこれを愛し指導甚だ親切を極めた。指導の仕方が、太祖大師のによく似て居る。雲門は、機會到ると見る度毎に『遠侍者』と喚ぶ。遠侍者は『ハイ』と答へる。すると雲門は『これなんぞ』といふ。遠侍者は『下語見解を呈し、精魂を弄すれども終に相契はず』で、いろいろと言句を發し、見解を述べ『これ何ぞ』に答へ樣と骨を折るが、どうもいかぬ。遠侍者は、これがために非常な苦辛を致された。禪家でいふ『これなんぞ』には、却々答へられぬ。禪が手に入つてさへしまへば、『これなんぞ』に答へることは造作もないが、心境未だ熟さゞるに於ては何と答へても當らぬ。

明峰禪師が、いつも『これなんぞ』には、默して答へられなかつたのは、禪師は既に、相當の所まで達して居られた證據だともいふことが出來る。世の中に、一言居士といふものがある。何事に對しても、一言いつて見なければ承知のならぬ人である。が何んにでも口を出す人は何事についても深味がない。

祖示して曰く、能く萬物を變作す、且く道へこれ何誰ぞ――『これなんぞ』の問を少し念入りに發せられ

めないのが例であつた。然し

祖、目撃これを器として、侍司に居らしむ――太祖大師は、禪を問うて來た明峰禪師を一目で、その鈍才でないことを見抜き、早速許して、側近に隨侍することを許されました。

室中常に喚んで曰く、哲侍者と――室中と普通申しますと、禪法を傳へる大切の室のことであるが、ここでは、必ずしもその意味でない。太祖が室に居られてといふほどの義である。大師は、明峰禪師のことを、哲侍者々々とお喚びになつた。素哲といふお名で、侍者(お側付き)がお役目であつたから、哲侍者とお喚びになつたのであります。洵に親しい師弟の間柄が窺はれます。

師應諾す――明峰禪師は、ハイとお答へなさる。

祖曰く、是れ什麼ぞ――太祖大師は、いきなり『これは何か』、と仰せになつたのです。禪を少しおやりになつた方には、『これなんぞ』といふ言葉の響きが直ぐに聞き取れるが、初進の人には分らぬ。

師對うる無し――明峰禪師お答へが出來なかつた。この邊の消息を難かしく考へれば、どんなにも難かしくいへる道理がある。が、實際社會、日常のことについて考へれば、見當だけはつく。

知音同志であると『ドーダイ』の一語でも、すつかり事が通じてしまふ。『ウーン』の一語で、すつかり答が出來てしまふ。然し知音同志でないと、却々うまく行かぬ。『ドーダイ』といつたから、何か問うてるのだらう、扨て何を問うて居るのか知らんといつた工合に、頭をひねり出した日には、おさまりがつかぬ。

明峰素哲禪師、參太祖。祖目擊器之、令居侍司。室中常喚曰、哲侍者。師應諾。祖曰、是什麼。師無對。如是者凡八年。祖示曰、能變作萬物、且道是何誰。師又無對。一日契悟、上方丈乃曰、某甲會也。祖曰、爾作麼生會。師曰、皮膚脫落盡、唯有一眞實。祖曰、脫落脫落。師拂袖出。

【讀方】明峰素哲禪師、太祖に參ず。祖、目擊これを器として、侍司に居らしむ。室中、常に喚んで曰く、哲侍者と。師應諾す。祖曰く、是れ什麼ぞ、師對ふる無し。是くの如きことおよそ八年。祖示して曰く、能く萬物を變作す、且く道へこれ何誰ぞ。師また對うる無し。一日、契悟、方丈に上つて乃ち曰く、某甲會せり。祖曰く、爾作麼生か會す。師曰く、皮膚脫落し盡して、たゞ一眞實のみあり。祖曰く、脫落脫落。師拂袖して出づ。

明峰素哲禪師、太祖に參ず——明峰禪師は、辨慶の勸進帳で名高い富樫の緣つゞきだといひます。眞僞のほどは分らないが、ともかく加州野々市の富樫家に生れられたと傳に認めてある。この富樫家は、太祖大師が住職されて居た大乘寺の檀徒で、寺の境內と邸內とが向ひ合ひの地續きであります。檀頭の息子が、檀那寺の和尙さんに、禪を尋ねると申せば、極めて手輕るに考へられるが、禪家には禪家の儀式があつて、決してナマやさしいものでない。古人は法を惜んだ譯では無いが、法を尊んで、容易には參ぜし

明峰禪師の皮膚脫落の話

永平開山高祖承陽大師五世の法孫に、明峰素哲禪師といふお方があります。『伽藍は峨山、法は明峰』といつて、明峰禪師の法孫は、今日、日本全國に存在して居ります。先回お話をした峨山禪師は日本全國に、曹洞宗の寺院堂塔を建立する上に、實に偉大なる功績を殘されて居るお方で、その門下の人々が、今日、曹洞宗一萬四千箇寺の九分通りまでを創立致されたのでありますが、その寺院の中に住して禪法を說き行ふ所の人物はといへば、これからお話致さうといふ明峰禪師門下の方が多いのであります。つまり峨山禪師の下には、堂塔伽藍建立といふ大事業を能く成し遂げた、偉大なる高僧が一時に出られたが、その子孫は餘り繁興せず、伽藍建立には餘り關係の無かつた明峰禪師門下の方々が、諸方に出來上つて居る多くの堂塔伽藍に住して、禪道佛法を宣揚されることゝなつたのであります。

明峰禪師御入滅になつてより今日まで、五百數十年を經て居りますが、その法孫は今も盛んに、そのお悟を傳へて居られるのであります。お悟が如何に立派であつたかは以つて知ることが出來ませう。

し、在家求道者の軌範も、こゝにあつてこれを示された。

「纔かに文彩に形せば蹉過了」――この消息は、文字言句の末を逐ふ人々には會得が出來ぬ。あゝであらうかと推測し、かうであるかと文字で書く樣なことになると、全然禪法ではなくなつてしまふ。「空華瑞を開く不萠の枝」――わづかも思量分別を用ひず、推測、邪念の芽の萠さぬそのときに於てのみ、自由無礙の境地が現成する。

空華とは元來、眼病などの人にのみ見える所謂眼花で、迷執の心に浮ぶ幻の相である。が、こゝでは無自性不可得の萬法を指して空華といつたのである。一切の萬法は、空華の如く、無自性不可得である。『櫻木を打ち破り見れば何もなし花の種子とは何を言ふらん』綺麗に咲く花も、櫻木の中に、あつてそれが出て來るのでない。因緣によつて花と咲き出るに過ぎぬ。櫻の花に櫻の花の自性があるでなく、櫻の木に櫻の木の自性があるのでない。全く無自性であるが、無自性の所に因緣が熟して、櫻花と咲き、櫻木と榮える。

大悟徹底を得るときは、山を賞し、水を愛し、晴たるも好し、雨降るもよし、他のために毫も轉倒せらるゝことなく、また他を無みし去ることなく、不萠の枝に咲く空華を珍重して、任運自在、實に心廣く體胖かなる生活を營み行くのであります。

この龍門の上に輝く萬古の月は、正しく峨山禪師が觀得いたされた月である。この古月を、今誰あつて見得して居るか。一度、この古月を觀得し、峨山禪師と同じ境界に到達するならば、

珍重す晴好雨奇――である。晴れたるもよし、曇りたるもよし。天氣の晴雨によつて、機嫌を二三にするといふ樣なことがない。月明も得たり、雨夜も得たり、事々物々上にその風趣を味ふのである。

先年、奉天に參つたとき、中秋十五夜の觀月の宴に招かれたが、雨で月が出ぬ。非常に失望する人もあつたが、心境の徹底した人は失望せぬ。衲も『聽雨月明也風流』の句を作つて披露したことがありました。雨の夜の觀月も亦一段の風趣がある。

玄所に路有り、多岐に渉らず――高祖承陽大師の御歌に『水鳥の往くも還るも跡たへてされども道は忘れざりけり』とあります。池の面には陸上に見る樣な往還の道は見えないが、見えない所に道がある。『波間路なく路縱横』道が縱横にあつて、右するも左するも、道の外に出樣がない。我等も亦、寢るも起きるも、坐るも起つも、道の外に出樣がない。誠に踏み易きは道である。更に紛らはしい所がない。

然しながら『纔かに思量に渉れば、白雲萬里』で、わづかでも私心をその間に交ふると、紛然として見境がつかなくなる。然るに大悟者は、『是非不到の處』、『智不到の處』にあるが故に惑はない。

智不到の處、高く風規を立つ――常にこの『是非不到の處』、『智不到の處』を離れず、百般の施設をされる。峨山禪師の九十一年の御生涯がまたそれであつた。出家求道者の淸規も、こゝにあつてこれをな

【讀方】頌に曰く、山はこれ山水はこれ水、吾が道一以つてこれを貫く。誰れか識らん龍門の古月、珍重す晴好雨奇。玄所に路有り、多岐に渉らず。智不到の處、高く風規を立つ。纔かに文彩に形はせば蹉過了、空華瑞を開く不萠の枝。

山はこれ山水はこれ水——實地にこの心境を得て居る人は少い。他の人が高官に上つたのを、平然として見ることが出來ず、他の人が富貴を得たのを、喜んで慶賀することが出來ぬ。山の高きも、これを妬まず、水の長きも、これを羨まず、といふことが出來ぬのである。然るに、大悟者は、常にこれを實地に行つて居る。

吾が道一以てこれを貫く——大悟者は、如何なる時にも、山の高きを妬まず、水の長きを羨まぬ。他の喜びを以て我れ喜び、他の憂ひを以て我れ憂ふ。共に憂ひ共に喜んで、他と拮抗せず、他と衝突せず、その間、常に大調和が持たれて居る。

誰か知らん龍門の古月——龍門とは支那の孟津にある大瀧のことである。支那人は堯舜の世を理想的の國家として居る。その舜の世に大洪水があつた。その時に禹といふ男があつて、山を截り開き、孟津にこの大瀧を作り、洪水を押し流して、その難を救うた。爾來そこの瀧へは、春さきになると鯉魚がその下に集り元氣よく躍ね上る。うまく躍ね上ることに成功したのは、龍となつて雲を起し雨を呼んで上天するといふ。

師、これより激勵甚だ切にして三歳を逾ゆ――峨山禪師は、洞上の種草と許されぬと聞いて、奮激精勵晝夜を措かず、三年の年月を夢中で大修行いたされた。

一夜、月に對し坐して夜半に至り、心身湛寂、物我倶忘――峨山禪師の心境は實によい。明月に面して坐禪をして居られるその樣子は何ともいはれぬ心境で、身心湛寂、物我倶忘、實に申し分がない。『無心無心大無心、徹底無心大無心』である。月やわれ、われや月の分らぬまでに、透徹した心境に居られる。誠に結構であるが、然し大自在の神通妙用を現はす點に於て缺くる所がある。機緣全く熟して大活現成の神通妙用の現はれるのに今一氣息といふ所である。

祖、師の耳畔に於て、彈指一聲す」――太祖大師は、峨山禪師が月に對して坐禪して居られるその耳朶の處に於て、パチンと一聲彈指を致された。

師、豁然として大悟す――峨山禪師は、一聲の彈指に激發されて、大活現成いたされた。大活現成いたされて後の御消息については、次に述べる頌に於て示されて居る。

頌曰。山是山水是水。吾道一以貫之。誰識龍門古月。珍重晴好雨奇。玄所有路。不涉多岐。智不到處。高立風規。纔形文彩蹉過了。空華開瑞不萠枝。

沒分曉の禪者には分らない。

祖問ふ、月に兩箇あることを知るや――これは、峨山禪師が『是非不到の處』に死在して居られるのに『活』を入れて、活きかへらさうための提撕（差圖）であります。

『千江月有り千江の月』月は何處にでもある。一箇や兩箇にとゞまらぬ。然るを月は天上にたゞ一つ存するもの、これを措いては、何處を見ても、月を見ることは出來ぬと、一途に思ひ込んで居る人がある。誠に融通のきかぬ話であります。

『是非不到の處』、『無一物の處』に死在すると、禪の修行者もまた一方向きの擔板漢になつて、融通がきかぬ。峨山禪師も『是非不到の處』に死在して居られる觀がある。そこで、太祖大師は、『是非不到の處』を脫却し『無一物の處』を脫却して、自由自在の働きを現はさしめねばならぬとの御思召から、『月に兩箇あることを知るや』との、この問を發せられたのであります。

師曰く、識らず――峨山禪師は『是非不到の處』に死在して居られるから、分らぬのである。まだ峨山禪師の心境は熟して居らぬ。

祖曰く、月に兩箇あることを知らずんば、洞上の種草と成ること能はず――『月に兩箇あり』といふことが分らぬ樣では、曹洞宗の禪法を天下に弘通する第一人者と許すことは出來ぬ、正傳の禪を天下に繁茂せしむる種苗であるとして天下に推すことは出來ぬと、太祖大師は仰せになつたのであります。

必要は更にない。下手に何とかいふと、子供を大變な過に陷れてしまふことがある。

師、措くこと罔し――峨山禪師は、幸にも太祖の甘い言葉に引つかゝらないで、專一に愈々精進いたされた。さすがは峨山禪師である。

或る時、祖、師に問うて曰く、是非不到の處、何ぞ道ひ持ち來らざる――峨山禪師の、猛烈な修行を見て居られた太祖大師、因緣熟せりと御覽あつてか『是非不到の處、何ぞ道ひ持ち來らざる』と、師匠の方より弟子への催促であります。

師、口を開かんと擬す――問はれて峨山禪師、師匠太祖大師にお答への言葉を發し樣と致される所を、

祖、便ち打つ――太祖大師は、いきなり、いやツといふほど、お打ちなされた。そのはづみ、

師、省有り――峨山禪師は、すつかりお悟を開いてしまはれた。『是非不到の處』へ、すつぽりと入り込んでしまはれたのであります。

一夜、月を賞す――禪家の修行は、片時も油斷あることを許さぬのであるが、花咲けどもこれを見ず、ほとゝぎす啼けどもこれを聞かず、寒灰枯木になつてしまへといふのでない。春は花、夏ほとゝぎす、秋は月、冬は雪降る、その風光を愛翫すること、他と異る所がない。たゞ異る所は、見るもの聞くものの上に、眞理を面り觀得し、同時に、自分がその中のものとなつて活躍する、この一事だけが異つて居るのである。この呼吸は、口に『脫體の機情』云々と說く天台宗の學生や、『是非不到の處』に死在して居る

に法を問はれて『四十九年、一時不説』と仰せられた。説かれざる所に深旨がある、禪への轉向がある。

師、沈思す――峨山禪師は、考へ込んでしまはれました。天台宗の密旨を得て居られても、禪の秘奥に徹して居られぬことが、こゝで分る。

因に衣を更へて掛搭す――禪師は、天台の衣を脫ぎて、禪衣をまとひ、太祖大師の下に入塾されたのであります。入塾は、この時直ぐでなく二年後のことであるとの説もあるが、この穿鑿は史家に任せて置く。

一日、問うて曰く、是非不到の處、請ふ師、一句を道へ――峨山禪師は、太祖大師の下に於て、大修行をお始めになり、一方ならぬ苦辛を致されたことが、この問で分ります。恐らくは先きに問題となつて來た『別處』について樣々研究をつまれたのでありませうが、その『別處』は言詮不及意路不到で、口先きで兎や角といつても當らない。意であゝかうと考へても當らない。是非善惡の論量を超絶した所である。こゝは如何に天台の學解に通達して居られても、手にはいらぬ。愈々困つて『是非不到の處を、何とか、會得させて頂けないでせうか』と、太祖大師へ懇望されるのであります。

祖曰く、道はじ道はじ――太祖大師は『道はぬ、道はぬ』とばかり仰しやつて居る。

師曰く、甚麼としてか道はざる――何故、答へて下さらぬのですか。

祖曰く、蹉過了――わづかに言端に涉れば當面に蹉過す。何とか一口でもいへば横ぞれをしてしまふ、だからいはぬのだ、と太祖大師は本音を吐いてしまはれた。親が子を育てるに、その本心を口先きに出す

豈、教外の旨と異なるあらんや――『教外別傳』を標榜なさる禪の秘奥と雖も、これに異りはありますまいと問話いたされたのであります。

禪で『教外別傳』と申しますのは、教相（佛一代の教法）の外に別に傳承し來れるものがあるといふ意味ではありません。『佛法の大道、何ぞ内外に拘はらんや』と如淨禪師も申されて居る通り、佛道に内だ外だの別があるはずはない。禪の眼を開けば、佛一代の教法はおろか、溪聲も山色も、雨竹も風聲も、皆佛道である、禪である。佛道ならざる一事なく、禪にあらざる一物がない。

この邊の消息は、峨山禪師が『脱體の機情、妄想を得ず、又法性を得ず、性に法性を存せざる、これ吾が宗の密旨』といはれる天台の密旨と、何處が相違して居るか、更に區別のつけて見様がない様に思はれる。然るに、

祖、微笑して曰く、別別――太祖常濟大師はニコニコッとお笑ひになつて『それは別だよ、別なのだよ』とお答へなされた。

師曰く、別處作麼生――そこで峨山禪師は、一體、何處が、別でありますかと、鋭く追問いたされた。

すると、

祖、便ち寢室に入る――太祖常濟大師は、默つておやすみ所に、入つておしまひなされました。默してお答へにならぬ所、誠に深旨がある。徹悃の慈悲から、お答へにならぬのであります。釋尊も、文殊大士

眞理の妙徳が、眞裸で働いて居るのだ、見るもの聞くもの、何一として『脫體機情』(包み隱しのない眞理そのもの〻働き)でないものはないと申すのであります。

包み隱しの無い、眞理そのものの働きには、妄想や邪念が、まぎれ込んで居るはずがない。『一法界に達せざるを以ての故に、心相應せず、忽然として念起るを無明と爲す』で、一法界、即ち眞理そのま〻の働きを、面り見て居りながら、それに氣づかず、まご〱すると、そこに無明煩惱の妄想の雲が沸き、何が何だか更に分らなくなるのである。

眞理の働きそのものには、妄想がない。而してまた、或る宗旨に於て說く樣な法性といふものも、有るわけのものでない。『あの人は本性からがよくないのだ』などいふ言葉を、我等は平生用ひるが、然し人の本性といつて、別に體の何處か奥の方にでも、隱れて存在するものかといふに、そんなものはない。體と心、本性と形相、といふ樣に常識ではいふけれども、身心一如、性相不二といつて、もともと體の外に心が轉がつて居るのでなく、形相の外に本性が別に存在して居るのでない。こ〻を『性に法性を存せず』と天台でいふのであります。

『脫體の機情、妄想を得ず、又法性を得ず、性に法性を存せざる、これ吾が宗の密旨なり』本性と形相とを二つに見ないといふ見所、これが吾が宗の深密の旨であると、峨山禪師は、天台についてのお悟を、太祖常濟大師に提露して、

ると申すことが出來ます。斯樣な隆昌を致されるに至つた基はといへば、峨山禪師が、師匠太祖常濟大師から、實に親切なる、而も嚴峻なる指導を得て、大修行を致されたからであります。言ひ換へれば、高祖承陽大師によつて傳へられた佛祖正傳の禪法が、因緣圓熟、その人を得て、一時に無等々に、天下に繁興致したのであります。

峨山禪師が、初めて太祖常濟大師について禪法をお尋ねになつたのは、二十三歲の冬であつた。禪師は既に久しく、比叡山にあつて、天台一乘の敎觀を學び、その秘奧を了得されて居た。が、心地に未だ安んぜざるものあり、たま／＼京都西の洞院に菴居して居られた太祖常濟大師を御訪問になつて『台宗曩祖の曰く』云々の問答をなされ、それから二年を經、峨山禪師二十五歲の時、改めて常濟大師を加賀大乘寺にお訪ねになり、そこで衣を更へて、弟子となり『是非不到の處』云々の疑問に向つて、專心一意に工夫し更に『月に兩箇有り』云々の公案を拈じ、二十七歲の冬、遂に大悟徹底いたされたのであります。

問うて曰く、台宗曩祖の曰く、脫體の機情、妄想を得ず、又法性を得ず、性に法性を存せざる、これ吾が宗の密旨なり——峨山禪師が十餘年、比叡山にあつて修學いたされた、その造詣を傾けつくされてのお言葉であります。天台宗の妙旨はこの言葉に盡されて居る。天台に於ては『一色一香無非中道』といひ、一つの木の葉、一つの花の香そのものが、佛德そのものである、眞理そのものであると申すのであります。葉の綠、花の紅、鳥のさへづり、虫のうごめき、これがそのまま佛德である、眞理である、佛の德相

因に衣を更へて掛搭す。一日、問うて曰く、是非不到の處、請ふ師一句を道へ。祖（太祖）曰く、道はじ道はじ。師（峨山禪師）曰く、甚麼としてか道はざる。祖（太祖）曰く、蹉過了。師（峨山禪師）措くこと罔し。

或る時、祖（太祖）師（峨山禪師）に問うて曰く、是非不到の處、何ぞ道ひ持ち來らざる。師（峨山禪師）口を開かんと擬す。祖（太祖）便ち打つ。師（峨山禪師）省有り。

一夜、月を賞す。祖（太祖）問ふ月に兩箇有ることを知るや。師（峨山禪師）曰く識らず。祖（太祖）曰く、月に兩箇あることを知らずんば、洞上の種草と成ること能はず。師（峨山禪師）これより激勵甚だ切にして三歳を逾ゆ。

一夜、月に對し趺坐して夜半に至り、身心湛寂、物我俱忘、祖（太祖）師（峨山禪師）の耳畔に於て、彈指一聲す。師（峨山禪師）豁然として大悟す。

總持二祖峨山禪師、太祖に參ず——總持寺の第二代の祖師は、峨山禪師であります。禪師は九十一歳の高齡をたもたれた方で、その化緣の隆んなること、我が曹洞宗は、禪師によつて繁興いたしたのだと申してよいほどであります。二十五哲といつて、門下に廿五人の拔群の大善知識が出られ、その方々が日本全國、津々浦々にまで行化を致されまして、一時に禪法が弘まつたのであります。曹洞宗は今日一萬四千の寺院を有して居りますが、その殆どすべてが、二十五哲の方々及びそのお弟子方の力によつて開かれて居

解が出來ません。

峨祖月有兩箇話

總持二祖峨山禪師參太祖。問曰台宗曩祖曰、脫體機情、不得妄想、又不得法性、性不存法性、是吾宗密旨也、豈與敎外之旨異。祖微笑曰、別別。師曰、別處作麼生。祖便入寢室。師沈思。因更衣掛搭。一日問曰、是非不到處、請師道一句。祖曰、不道不道。師曰、爲甚麼不道。祖曰、蹉過了也。師罔措。或時、祖問師曰、是非不到處、何不道持來。師擬開口。祖便打。師有省。一夜賞月。祖問知月有兩箇麼。師曰不識。祖曰、不知月有兩箇、不能成洞上種草。師自是激勵甚切逾三歲。一夜對月趺坐至夜半、心身湛寂、物我俱忘。祖於師耳畔、彈指一聲。師豁然大悟。

【讀方】總持二祖峨山禪師、太祖に參ず。問うて曰く、台宗曩祖の曰く、脫體の機情、妄想を得ず、又法性を得ず、性に法性を存せざる、これ吾が宗の密旨なり、豈に敎外の旨と異ならんや。祖（太祖）微笑して曰く、別々。師（峨山禪師）曰く、別處作麼生。祖（太祖）便ち寢室に入る。師（峨山禪師）沈思す。

ちらうと、一時質問を保留し、人の居ない歸り路にかゝつた時に、改めて、先の質問を發した。『先刻は場所がらよろしからず、と御遠慮申しましたが、こゝには誰も居りませぬ。何卒、先刻御尋ね致した儀のお敎へを頂きたいのであります』と懇願した。が、師匠道吾は堅く口を閉ぢて何としても答へぬ。道を求むることに急なる仲興は、異常な興奮をなして、師匠道吾を叩き倒してしまつた。それでも師匠は答話をせぬ『打つことは則ち打つに任す、道ふことは則ち道はず』といつて、何としても質問に答へぬ。仲興も無我夢中でビシ〳〵打つた。それでも道吾は答へぬ。仲興が求道の熱誠に感心して、嬉しく思へば思ふほど答へぬ。この男は一人前のものになるだらうと、望みをかければかけるほど答へない。師匠道吾は、仲興の問ひに何としても答へないで『お前は暫時、他へ行つて修行して來るがよい』といつて、その場から仲興を雲水行脚に出してしまつた。雲水行脚に出ないで、道吾と共に寺に歸つたら、仲興は、師匠を打つた罪を問はれたであらう。罪を問はれるはよいとしても、境地を變へて修行する方が、此の場合よいと道吾は思つたので、仲興を雲水行脚に出でしめたのであります。

人を育てる實際問題について、誠心誠意、骨を折つて居られる方は、この一條の話柄をごもつともに思はれるでせうが、大量生産的のやり方で、敎育が完全に行はれるものだとお考への方には、解せぬ話であるかも分りませぬ。

これよりお話する『峨祖月有兩箇話』といふ公案も、右いふ道吾流の指導法に共鳴致されぬ方には御諒

峨山禪師の月有兩箇の話

禪家の教育法は頗る嚴峻でピシ〳〵やる。禪寺には警策といつて、學人を叩きのめす棒が必ず備へてある。朝も二時三時から起きて坐禪をする。夜も九時前後まで坐禪をする。脚を曲げ手を組んで坐つて居ない時には、お經を讀む、草探りをする。炊事といはず、掃除といはず、生活上のことは一切行る。その時に、惰氣を出すものは警策を受ける。眠るものも警策を受ける。寸分の油斷も許さぬのが禪家の薫育法である。

學人を導くに、この通りであるから、師家（導き手）も亦、生命がけである。まご〳〵すると、師家と雖も容赦はない。勿論、師弟の道の嚴として犯すべからざるものあるけれども、師も弟も、道のためにはその身あるを思はぬ。時には、師家が弟子から警策で打ちのめされることも、無いとはいはれぬ。

支那の漸源の仲興といふ人は、師匠の道吾を叩き倒したことがある。これは師匠が法務を怠つたからでない、寧ろ法務に忠實過ぎたからであつた。

或時、師匠道吾が、弟子の仲興を連れて、信徒の家に葬儀に行つた。仲興は熱心で暫時も求道の志を鈍らさない。葬儀半に師匠に質問をした、が師匠は答へぬ。こゝは場所がらが悪いので答へて貰へぬのだ

しである。互に平常心の道を談り合ひ聽き合うてゐる、といふ意味であります。

經行坐臥遲疑することを休めよ、舊に依つて東山西嶺青し——經行とは、坐禪をして體が鬱結して來たとき、足が痛むとき、心が落つかぬとき、睡くなつたときなどに、一足半歩の法に隨つて、靜かに歩行をなすことである。授戒會の時に、一同が遶行するのなども、一種の經行である。遲疑とは疑ふこと、道がこゝにあるか、ないかなどゝ迷ひためらふことである。

『經行坐臥遲疑することを休めよ』經行も坐臥も悉く平常心是道の面目である。寢ても起きてもその外に出様はない。

『舊に依つて東山西嶺青し』昔、或る僧が雲門禪師に尋ねた。『如何なるかこれ向上の關棙子』、關棙子とは關所の門のことで、つまり最も大切の所、要の所といふこと。佛法の一番要の所は、何處であるかといふ問ひである。そのとき雲門禪師は、『東山西嶺青し』と答へた。東の山も青い、西の嶺も青い、何れも青青として氣持がいい。佛道の端的、平常心是道の端的も、東山西嶺青しといふ一句の外にない。しつかり此處の趣きを承當するがよいのであります。

ることが出來る。會得するに最も易き道あり、『たゞ凡情を除け、別に聖解なし』凡夫の淺はかな取捨憎愛の妄執をさへ離却すれば、立ろにこれを得ることが出來る。

石烏龜の解語するを待たず、何ぞ妨げん木上座の傾聽することを――この句は二句ともに、太祖大師が上堂の語である。

石烏龜とは、眞黑い龜の格好をした石のことで、煩惱妄想の熱氣の無い、迷悟凡聖の文彩を絶した人間のことである。木上座とは、木製の坊さんといふこと、これも煩惱なく迷悟なき人間を指したのである。禪では『木人歌ひ、石女舞ふ』といふ。石で出來たものや木で出來たものは動かぬもの、況んやこれが歌舞するなどゝは思ひもよらぬことであるが、佛法の眼より見來ると、木人も歌ひ、石女も舞うて居るのです。

『石烏龜の解語するを待たず』石烏龜が講釋してくれるのを待つまでもなく、山も川も、草も木も、異口同音に『平常心是れ道』の大說法をして居る。

『何ぞ妨げん木上座の傾聽することを』木上座が說法を聽きたいといふなら聽かすがいゝ。古人は『燈爐露柱暫く低聲』といつて居る、燈爐も說法し、露柱も說法して、實に喧しくてたまらぬほどであるのだから、木上座が聞きたいなら、この說法を聞かすがいゝ。

この二句は、つまり、宇宙の森々羅列の萬象、一として道の外のものはない『平常心是道』を說き通

平常心是れ道、說破す八萬の經――釋尊は四十九年の間、衆生のために、機に隨ひ緣に應じて、大乘の敎を說き、小乘の敎を說き、權敎を說き、實敎を說き、顯敎を說き、密敎を說き、實に八萬四千といふ大經卷をお說き下された。然しその一卷一軸を讀むにも、相當の時間がかゝる。八萬四千の經卷を讀むとあつては、十年二十年も未だ及ばずである。況んやその一一を心で讀み、身で讀むといふことに至つては、一生、二生、三生、乃至、生々世々を費しても難しい。

殊に、小根劣機の輩は、邪解し曲解して、その眞意を得ず、月を指す指に迷ひ、兎を捕る係蹄に迷ふものも亦決して少くない。これを遺憾とし、最も簡易直截に釋尊出世の本懷を直示して、人に悟らしむるのが禪である。

今、南泉和尙が說き、徹通禪師が話された『平常心是れ道』の一語、文字わづかに五字であるが、その中に釋尊一代の八萬四千の法門を、悉く說きつくして居る。

崑崙夜裏に走る、空手流星を捉ふ――素手で流星を捕へることは容易のことでない。それと同樣『崑崙夜裏に走る』といふ、この消息を手に入れることは、實に容易のことでない。

文彩のあるものは、捕へるに易い。が、道の當體は、あらゆる文彩を絕し、世法とも佛法とも、迷とも悟とも、凡とも聖ともいふことの出來ない所のものであるから、捕へることが難しい。

然し、空の流星を素手で捉へることはよし出來なくとも、崑崙夜裏に走るといふ境地は、親しく會得す

太祖大師が、後醍醐天皇の御勅問に奉答された語の中に『禪門の神通は、運水搬柴これなり』といふ意味がある。神妙不可思議の通力は禪家の貴ぶ所でない、水を運び柴を搬ぶ、日常の極めて平凡なる行持、それが禪家の最も大切とする所である。君に忠、親に孝、これが禪の大道である。甘露の白法といふもこれに外ならぬ。茶を出されたら茶を飲み、御飯が出たら御飯を食べる。平凡なことではあるが、これを毎日〱昧まさず實行することの外に、人の道があるのでない。

黑漆の崑崙夜裏に走るといふ所に、どつしりと心を落しつけて、その上に於て、茶に逢うて茶を喫し飯に逢うて飯を喫する無罣碍なる働きを營む、これが實に人の道の行取、佛の道の行取である。

師曰く、子、向後當に洞上の宗風を起すべし――徹通禪師が、太祖大師の大悟に對し、言辭をつくして、御賞讚なされたのであります。

頌曰。平常心是道。說破八萬經。崑崙夜裏走。空手捉流星。不待石烏龜解語。何妨木上座傾聽。經行坐臥休遲疑。依舊東山西嶺青。

【讀方】頌に曰く、平常心是れ道、說破す八萬の經、崑崙夜裏に走る、空手流星を捉ふ。石烏龜の解語するを待たず、何ぞ妨げん木上座の傾聽することを。經行坐臥遲疑することを休めよ、舊に依つて東山西嶺青し。

をしたいと思ひ、諸方に人を遣はし、松茸を各名産地より取り寄せて、お汁も松茸、お平も松茸、壺も皿も引物も、何もかも一切松茸づくめで、大料理を差しあげた。上人も大に喜んで御馳走になられたが、後からこの事のために、信者が大變な骨折したのだといふことを聞いて、痛く慚愧し、佛前に燈明を挑げ香華を新たにして、涙を流し『出家の身を以て食ひものに執着し、ために信者に異常な手數をかけ、入費を出さしめて、面目がありません。釋尊は、一切衆生、皆如來の智惠德相を具す、唯妄執邪欲のために、證悟することを得ずと仰せ下されてあります。出家の身として、食べものに妄執したことは、何としても申し開きが出來ません』と懺悔せられたといふ。

佛弟子の眞境地に入る時は、何ものをも取捨しない、憎愛しない。一切の差別より超越し、すべての文彩より脫却して居る。こゝの消息、その全く文彩の無い様子を、太祖大師は、黑漆の崑崙夜裏に走るといはれたのであります。

師曰く、未在更に道へ――黑漆の崑崙夜裏に走るの一言で、あらゆる文彩を絕した消息はよく分つて居るが、向上の一邊に滯つては世の營みが致されない。佛法は實際を貴ぶ、徒らに綺語を弄して晏如たるものでない。更に一句をいへとの追求であります。

祖曰く、茶に逢うて茶を喫し、飯に逢うて飯を喫す――平生の心、平生の行ひが、そのまゝ佛道であることが、この語によつて、實に明快に承知することが出來る。

す。而して、恰も子が母の膝に歸つたが如き、いふにいはれぬ喜びを感得された。多年戀ひ慕うてゐた親の手を握りたるにも似たる法喜禪悅に充されて、思はず、聲を發して、

乃ち曰く我れ會せり――『自分にも會得できた』といはれました。

師曰く、儞什麼か會す――『おまへ、どう會したか、道がどう分つたか』と、どこまでも道のために親切な御追求であります。

祖曰く、黒漆の崑崙夜裏に走る――簡單なお答へです。門外の人は、これでは分らぬ。黒漆は黒漆といふこと、崑崙は支那の崑崙山から出る眞黒な玉のことで、黒漆の崑崙が夜裏に走るとは、眞黒い玉が、眞暗な眞夜中を飛んでゆくといふことであります。

寶鏡三昧の中に『唯文彩に現はせば則ち染汚に屬す』といふ言句がある。文彩とは綾模樣のことです。禪では、すべてものに相場をつけ、畫模樣をつけることを嫌ふ。善だとか惡だとか、迷だとか悟だとか、何とか物に相場をつけねば承知のならぬ人があるが、禪ではさういふ事をしない。もと〳〵相場の無いものに、相場をつけるから、面倒が起る。凡夫は何とか差別をつけて物を見樣とする。相場を定めて物を考へ樣とする。取捨憎愛、片時もジッとしてゐない。

栂尾の明惠上人は佛道の大修行者で、物に差別をつけず、相場をつけず、隨つて取捨せず憎愛せず、實に道に親しい人であつた。が、たゞ一つ松茸が大の好物であつた。京都の信者某が、上人に大に御馳走

これは面山和尚の歌であるが、我等が貪欲・瞋恚・愚痴の澁が、ソツクリそのまゝ柿の甘味となる。甘露味となるのである。道を求むるものは、道を自分自身の中に求むるがいゝ。自分の心、自分の行の外に、佛道があるのでない。

南泉から『平常心是道』と聞いても趙州には、未だ十分それが分らぬ。分らぬから『却つて趣向すべきや』といふ樣な生ぬるい次の問を發して居る。『平常心是道』と仰せらるが、果して平常が道に背かぬといふ鹽梅に行くかどうか、道に趣向して背馳しないことが出來ませうかと問ひ返して居るのです。

南泉は、もうさう〳〵趙州のために、婆々談義は致しません。『趣向せんと欲すれば、即ち背く』道に趣き向はうなどゝ、のろまのことをいつて居たのでは、何時になつたつても道に親しくはなられぬぞと叱咤した。道に趣き向はうなどいふ了見は、向上より見來れば、愚の愚である。

田の草を採つてそのまゝ肥料かな

田の草の外に、田の肥料はない。自己の煩惱妄想を別にして、自己の道といふものはない。田の草を回向すれば肥料となる。煩惱妄想を回向すれば、道となる。我等が平常の心、煩惱妄想の雜草繁茂の心を一たび如實の智光に照らせば、そのまゝが道である。

南泉と趙州とが『平常心是道』の問答を斯樣にしたことがあると、師匠徹通禪師が話して下さるのを聞いて、重疊の迷雲、一時に霽れ來つたが如く、實に氣色よく道の消息を常濟大師は悟られたのでありま

一日、師、上堂、平常心是道の話を擧するを聞いて、豁然徹證す――大師が二十七歳、永仁二年十月の二十日の日です。徹通禪師が須彌壇の上に上つて、その下に集れる人々のために『平常心是道』といふ話をなさるのを聞き、豁然として大悟徹底いたされたのであります。

『平常心是道』といふ語は、もと、有名な支那の南泉和尚と弟子の趙州和尚との間に於て、商量された文字であります。趙州は六十歳を過ぎて、出家修行を始めた人、當時の大善知識である南泉和尚について、『如何なるかこれ道』私は佛道を修行したいのであるが、その佛道の正體を指し示し下さいと問うたのである。

古人は、この道を求めるために、生命がけであつた。趙州和尚も亦その一人である。南泉和尚は『如何なるかこれ道』と問はれて、『平常心是道』と答へられた。實に千古の格言であります。道は決して遠くにあるのでない。我等が平生の心の上にある。平生の行持の上にある。

道といふ言葉に迷ふことなかれ朝夕おのがなすわざと知れ。

道は目の前にある、擧足下足のところにある。我等は、心狂ひ行ひ亂れて、貪欲や瞋恚や愚痴の囚はれになつて居る。然るに、こゝに道がある。佛の道がこの外に無いとは、全く承知しがたい話であるが、釋尊は、我等が貪欲・瞋恚・愚痴そのまゝが、佛道に回向されてゆくことをお示し下されてある。

あしきとて唯一すじに捨つるなよ澁柿を見よ甘乾となる。

この御經を讀んで、太祖大師は、三千大千世界に在まさざるところなき久遠實成の佛の面目を會得いたされたのです。肉眼で三千界を見るといつても、額に手をかざして、處々方々、遠近を眺めまはすことなどでない。自己方寸の中に於て、盡天盡地を透見し盡すことである。

師の激勵に因つて、鑽研七年――太祖大師は、大に省悟いたされたのであるが、師匠の徹通禪師は、未熟であるといつてお許しにならぬ。愈々勵まして、七年といふ長い間を、一日の如くに研究いたさしめなされたのであります。我等が學ぶべき所です。假令山中に獨居して居ても、市内に働いて居ても、常に研鑽怠らず、堅い金鐵を鑽るが如く、鐵石を研くが如くに、撓まず屈せず、修行に努むるがよい。

越後の平井に全性寺といふ寺がある。三代ほど前に石黒某といふ老僧が居た。その直ぐ隣りの寺には星見天海老師が住職して居られた。石黒某の方は、勿論天海老師に比ぶべき名聲高き人ではないが、非常に道心堅固で、私と年齢は違つてゐたが、大層親しくして居た。全性寺は所謂骨山、即ち貧乏寺で、大勢の雲水修行者を置くことが出來ぬ。自分の弟子と一二人の隨身とを置いて居ただけであるが、規矩は大叢林（大きい禪寺）そのまゝで、小さい小僧相手に、曉天の坐禪、夜の坐禪を、きまり通りに行ふ。夏は楞嚴會といふ法會をつとめ、楞嚴行道をやる。實に感心なことであつた。死して叢林にあれば骨また清し、この老僧の如きは、永劫に人々に清い感化を及ぼしてゆく人と思ふ。先年、平井へ行つたときに、老僧のお墓まゐりを致して、感慨に耽つたことである。

崇して兩祖と仰いで居る。今はその太祖大師の話である。

大師は六歳にして既に佛教の信仰をもたせられ、八歳の時、永平寺に上つて、高祖大師より三代目の徹通禪師の弟子となり、十三歳の時、出家の授戒をなされ、十八歳で師に暇を乞ひ、諸國修行にお出かけになりました。二十二歳の時、師匠の許にお歸りになると、師匠は間もなく、加賀の大乘寺にお轉住になつたので、大師も御伴して、お移りになつた。

會ま法華を看、父母所生眼、悉見三千界に到つて、省有り――法華經をよんで、法子功德品の『父母所生眼、悉見三千界』のところに到つて『ウン』と首肯いて、かねて疑團と致された所のものが釋然氷解した。『父母所生眼』卽ち父母が生んで下された所の眼といへば、申すまでもなく肉眼のことである。この肉眼で三千世界を見ぬくといふのですから、實に素晴らしいことです。自然科學が發達して、千里の外の聲は聞える世となつても、未だ三千大千世界を一目で見通す話は聞いたことがない。

全體、法華經といふ御經は、大乘佛教の秘奧を說いたもので『一卽一切、一切卽一』の道理が示されて居る。つまり我等の肉身は、朝顏の花に宿る玉露よりも脆いものであるが、この肉身には、久遠實成の御佛の智慧德相が殘らず具はつて居る。佛は遠く求めては、これを拜むことが出來ぬ。近く自己を諦觀する時、立ろに御佛の御體御生命を、ソツクリ自分自身の上に勸請しまつり、自らがその佛の外のものでないことを悟ることが出來ると敎へてある御經であります。

常濟大師の黑漆崑崙の話

總持寺開山常濟大師が、久しい間の苦修練行により、人生の秘奥に徹し、究局的の指導原理を體得あらせられ、その境地を師匠の徹通禪師に申上げて、賞讚のお言葉を頂かれる一條の話であります。

太祖黑漆崑崙話

太祖大師、參侍徹通禪師。會看法華、到父母所生眼悉見三千界、有省。因師激勵、鑚研七年。一日、聞師上堂、擧平常心是道話、豁然徹證。乃曰我會也。師曰儞作麼會。祖曰黑漆崑崙夜裏走。師曰未在更道。祖曰逢茶喫茶、逢飯喫飯。師曰子向後當起洞上宗風。

【讀方】太祖大師、徹通禪師に參侍す。會ま法華を看て、父母所生眼悉見三千界に到つて省有り。師の激勵に因つて研鑚すること七年。一日、師、上堂、平常心是道の話を擧するを聞いて、豁然徹證す。乃ち曰く、我れ會せり。師曰く、儞作麼か會す。祖曰く、黑漆の崑崙夜裏に走る。師曰く、未在更に道へ。祖曰く、茶に逢うて茶を喫し、飯に逢うて飯を喫す。師曰く、子、向後當に洞上の宗風を起すべし。

太祖大師、徹通禪師に參侍す——我が宗には、高祖承陽大師と太祖常濟大師と、お二方の祖師を特に尊

身を安んずることは嶮處に在り——以上說き來る徹通禪師の境界、誤つてこれを會得すれば、實に大變である。禪師は實に嶮處に身を安んじて、兒孫に見せしめて居られる。この嶮處に吾等は身を安ぜねばならぬ。嶮處こそは實に安樂の淨地である。

行路の難きを恨むこと莫れ——生活が困難だ就職が困難だといつて不平を並べて居る樣では、眞の丈夫とはいはれない。『憂きことの猶この上につもれかし限りある身の力ためさん。』

曩祖親密の意を會せんと要せば、直に須らく熱鐵丸を飽喫すべし——曩祖とは先祖のことである。佛祖である。佛祖が親しく單傳し來つた所の的旨を會得せんと欲することは、佛教徒の切望でなければならぬが、その切望を果さんとするには、右述べ來つた所の消息を味うて見るがよい。赤熱して焰を吐いて居る鐵の丸を呑むにも似たる忍苦と度胸とを要する實生活の味を嚙みしめて見るがよい。といふのがこの二句の意である。

切を自由にして居られる。その有様は、いはゞ『孤峰頂上に波瀾を起す』とでもいふべきものであると申すのである。

笑殺す古道士、佛に背いて太だ端無し――これも故事で、虚堂錄に出て居る。一人の修行者があつて、佛を奉安してある本堂を背にして坐禪をして居たのを、或る坊さんが見て『何事ぞ』と咎めた。すると、その修行者は『佛身は法界に充滿して居る、どつちへ向いて坐つても、つまり佛に面して坐つて居る譯ぢやないか』といつたといふ話である。

佛は在さぬところとては無い。『大には方所を絶し、細には無間に入る』で、何處にも此處にも在します。どちらへ向いても佛であるには相違ないが、然しそれだからといつて、態々佛の御像を奉安する所を背にして坐する必要もない。何處にも此處にも佛が在しますのだから、佛の御像を奉安してある所には猶更恭禮の誠衷を現はさねばならぬのである。禪家には、動もすると、信仰恭禮を閑却する人がある。誡むべきことであります。

徹通禪師が、文殊の玻璃盞を擊碎された、臨濟の赤肉體を咬破された、法執も世執も總に放下し去つて無寸草の處にも住まらず、孤峰頂上にあつて、大自在力を現はされたといふ一條を見、誤つてこれを會し、佛を無し祖を無し去る樣なことがあつてはならぬから、『笑殺す古道士、佛に背いて太だ端無し』の二句がこゝにあるのです。

邊の所に執著する所謂法執なるものを離脱して居られることを述べたものであり、次の『臨濟の赤肉團を咬破す』の一句は、世俗の物欲への迷執を打破し盡して、秋毫の世執をも留めて居られないことを述べたものである。

無寸草の處留むれども住まらず——この句にも故事がある。禪家では釋尊の勝迹に倣うて、五六七の三ケ月九十日の間、安居といつて一つの處に住して坐禪辨道を致す。その九旬安居の終つた日に、洞山大師は大衆にいはれたことがある。『諸人者、萬里無寸草の處に向つて去れ』と、妄想邪執の雜草の繁茂した中に居てはならぬ、心の中に生ひ茂つて居る煩惱の雜草を刈り取り、身の周圍に繁茂して居る執着の雜草を刈り取つて、一寸一分の草も生えて居ない大清淨の地に住せよと申されたのである。

これは實によい境界であるが、徹通禪師は、その境界にも留まらぬ。全く淨穢相對の世界から離脱して居られる。それでは、禪師は一體、どんな所に居られるのかといふに、

孤峰頂上に波瀾を起す——といふ境界に居られるのであります。孤峰とは峻峰である。ひとりだちの高山である。巍然として獨り聳え立つてる山である。禪師はその山の頂上に居り、所謂諸緣を放捨し萬事を休息して、世のすべてから超越して居られる。一切の利害得失、是非善惡の汰沙から超越して居られるといふのであります。

然し峻山雄峰に死在して居られるのでない。大自在大活動を現じて居られる。一切から超越して而も一

殊菩薩から、お茶を頂戴などなされた。古人は茶を飲む間にも、佛法を忘れない。文殊は茶碗を差しのべて、永嘉大師に問うて曰く『南方にもこんなのがありますか』と、永嘉大師は『ありません』と答へられた、すると今度は『南方では平生何で茶を飲んで居るのですか』と文殊は問はれた。然し、永嘉大師はこれに答へやうともなさらなかつた。

文殊菩薩に對する永嘉大師のこの應對ぶりは、如何にも出來て居る。試驗は及第である。文殊が出された試驗問題である所の茶碗、立派な玻璃製の茶盞を、何の容赦もなく、永嘉大師は、たゝきつけて、粉微塵にしてしまつた觀がある。

臨濟の赤肉團を咬破す——臨濟義玄禪師は、常に人に示して、『赤肉團上に一無位の眞人あり、常に汝等諸人の面門にあつて出入す、未だ證據せざるものは看よ看よ』といつて提撕せられた。その故事をこゝにもち來つたのである。

赤肉團とは我等が肉體のことである。一無位の眞人とは『本來形名なく天眞にして性相を亡ず』といふ、何とも名のつけて見やうもなく、形容のして見やうもない一物、即ち久遠實成の佛のことである。この佛が我等の肉體に卽して頭出頭沒して居る。それの分つて居ない輩は早くそれを了得せよ、證悟せよ、と臨濟大師はいはれるのであります。

この頌の既に述べた二句の中、初の『文殊の玻璃盞を擊倅し』の一句は、徹通禪師が大悟して、向上一

こに那伽定中といつてあるのです。

頌曰。擊碎文殊玻璃盞。咬破臨濟赤肉團。無寸草處留不住。孤峰頂上起波瀾。笑殺古道士。背佛太無端。安身在嶮處。莫恨行路難。要會曩祖親密意。直須飽喫熱鐵丸。

【讀方】頌に曰く、文殊の玻璃盞を擊碎し、臨濟の赤肉團を咬破す。無寸草の處留むれども住まらず、孤峰頂上に波瀾を起す。笑殺す古道士、佛に背いて太だ端無し。身を安ずることは嶮處に在り、行路の難きを恨むこと莫れ。曩祖親密の意を會せんと要せば、直に須らく熱鐵丸を飽喫すべし。

文殊の玻璃盞を擊碎し——文殊は七佛の師と仰がるゝほどの聰明な大菩薩である。支那では五台山に祀つて、佛法を修行する者は必ず御詣りしなければならぬ場所となつて居たので、禪家にはこの山に因んだ話が澤山ある。

曹洞宗でよむ證道歌を作られた永嘉大師が、五台山に上られた時の話、路で手間どつて、山上につくと日が暮れたので、文殊の堂に一夜の宿を借らんことを、御本尊の文殊に伺ひをたてられた。すると文殊のお答へに『汝、執心のあるあり、ここに宿することを得ず』といはれて、手こづられたことがあつたといふ。

それから後の日のことであらうが、永嘉大師がまた五台山に上つて、今度は一宿されることになり、文

行ぜず』といふ敬虔な氣持ちで、孝順な態度で、日常の生活を營むことは勿論大切のことで、佛敎徒は當に然うあらねばならぬのであるが、同時に、また『佛祖をして佛祖たらしむるものは、實にこれ我等が一擧手一投足である』といふ偉大なる覺悟をもち、謂はゆる天上天下唯我獨尊の信念に活きるといふことが大切であります。

徹通禪師は修行も知見も圓熟して、右の如き境地に達せられたので『將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡あり』といはれたのだといふ、この見方も決して間違であるはずはない。たゞ言葉の表面の意味から推してこの見方は與へ過ぎてある樣に思はれるまでのことである。

祖これを領じて曰く——師匠の孤雲懷弉禪師は、徹通禪師の體驗された境界を嘉して曰く、儞、先師の所得の處に於てその旨を會す、諒に先師、那伽定中、必ず儞が爲めに證を作さん——尊公は先師高祖承陽大師が大悟されたその消息に於て、通曉せざる所が無い、高祖大師の皮肉骨髓を尊公はそつくり會得し盡して居る、高祖大師は嘸かし、御墓の中で、尊公の大悟を證明して居られることであらうといつて、孤雲禪師は徹通禪師の大悟を承認し讃歎して居られるのであります。

那伽定中といふのは、涅槃定中といふも同じで、俗にいへば、墳墓の下でといふほどの義である。那伽とは龍といふ梵語、禪僧が坐禪をした相は、龍が渦をまいて蟠つた所に似て居るので、坐禪とか禪定とかいふ代りに那伽定といつたのである。高祖大師は死んでも坐禪をして居らせられると思はれるから、こ

高祖大師の學道用心集に『佛の道を學ぶのには、初入門の時に、知識（師匠）の教へを聞いて、教の如くに修行するがよい。それには承知して居るべきことがある、謂ふ所の法我を轉じ、我法を轉ずといふことである。（中略）佛教にはこの兩般の義があるのだが、正嫡の大宗匠でなくば、これを知らぬ』といふ意味のことを說かれてある。この中の『法われを轉じ』といふことは、佛法の通則で、何宗何派の別なく說く所であるが『われ法を轉ず』の一事に至つては、正傳の禪にあらざれば、いはざる所であると申すべき事柄である。

『法われを轉ず』とは、修證義の言葉でいへば『諸佛の行持によりて、我等が行持現成し』といふ所で、いはゞ當り前のことである。諸佛諸菩薩の言行を手本にして、我等の言行をなして、萬遺漏なからんことを期し、進んで完全無缺の大人物になる樣に、務めて精進するといふことは、佛教徒たるもの丶當に然るべき所で、別に珍らしいことでないのであります。が『われ法を轉ず』の一事に至つては、他宗他門の人が聞かれたら、びつくりして目をまはすかも知れません。

『われ法を轉ず』といふ意味は、修證義でいへば『我等が行持によりて諸佛の行持現成し諸佛の大道通達するなり』といふ所であります。我等の言行如何によつて、諸佛の威德が現はれもすれば、隱れもするといふのである。實に我等の責任の重いことを誨られた一段であります。

諸佛諸祖の言行を手本にして『佛祖の言句にあらずんばこれを言はず、佛祖の行履にあらずんばこれを

あります。徹通禪師が身心脫落されたことを、懐奘禪師が分らぬはずは無いのですが、念に念を入れて、この問を發せられたのである。

師曰く、將に謂へり、胡鬚赤と、更に赤鬚胡あり——この話は最初に述べた通り、胡鬚赤と赤鬚胡を同じだといふ風に見る見方もあるが、これを同じとは見ないがよい。『胡人の鬚が赤い』といへば、胡人の鬚の說明に過ぎぬ。『赤い鬚の胡人』といへば、そこへ、胡人が提示される。

これを高祖大師の大悟の消息を傳へる語にあてはてめていへば、『胡鬚赤』は『身心脫落』に當り『赤鬚胡』は『脫落身心』に當る。身心脫落、脫落身心の解釋を今更する必要もないが、身心の脫落といへば、身の束縛、心の妄執を解きほごしたといふことである。いはゞこれは悟つた人の身心についての說明であつて身心の提示でない。然るに脫落の身心といへば、束縛を脫した體、妄執を離れた心といふことで、身心そのものの提示である。身心についての單なる說明とは譯が違ふ。徹通禪師が高祖大師大悟の消息を聞いて、十分に身心を脫落なされたことは『將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡有り』の語で分る。徹通禪師は、實に禪を體現された立派な大宗匠となられたのである。

『胡鬚赤』、『赤鬚胡』については、右いふ如くに解釋するがよいが、前にも一言して置いた通り、別の解釋をされた先輩がある。暫時その解釋に隨つていへば、胡鬚赤、赤鬚胡は、法轉我、我轉法といふと同じであるといふのである。

の出會ひを見たがる者が、われもわれもと現はれて、八萬四千人といふ大勢がお伴して出かけることゝなつた。維摩は實に不可思議な通力を具する人で、八萬四千といふ大勢を何の苦もなく、自分の居間へ迎へて文殊菩薩の來意を承り、大に感謝した。感謝するといつても並々の御禮をいつたのでなく、そこで大問答をやつたのである。が、兎も角、八萬四千人を入れた不思議な室を一つ計つて見やうといふ人があつて計つて見ると、一丈四方しかない室であつたといふことである。不可思議な抱容力のある此の室を珍重し爾來、寺院の主人が住む室の名にこれを用ひて、方丈とか丈室とかといひ傳へ來たのである。

某甲、今日、先師身心脱落の話を會得す――私は今日、先師（高祖承陽大師）が大悟の消息、身心脱落の境界を會得することが出來ましたと、徹通禪師は師匠の懷弉禪師に申し出られたのであります。

身心脱落については、前々回の話に於て、よく說き明してあるから、こゝに繰り返し述べる必要もないが、つまり、自分の氣隨氣儘が無くなり、世の束縛拘束が無くなつて、而も自由自在、實に樂しい境界を得たことをいつたものである。會得するといふ言葉は、たゞ單に了解したとか理解したとかいふことゝは違つて、體得した、體驗したといふことである。徹通禪師は、身心脱落とは斯く〳〵のことなりと了解しました、理解しましたといつて居られるのでない、自ら親しく身心脱落の境界に入り、この通り自由自在の樂しみを得て居りますと、脱落の身心を師匠懷弉禪師の前に提示して居られるのであります。

祖曰く、儞如何んが會す――懷弉禪師は、徹通禪師に、貴公は、どう會得をしたかと問ひ返されたので

という語を高祖大師が提示いたされるのを聞いて、感悟する所あり、修行これより益々親切、晝は便ち運水搬柴、夜は便ち坐禪工夫、生命がけの精進を致され、高祖大師が永平寺に入らせられて後も、隨侍して膝下を離れず、建長五年、大師病のために京に上らるゝの際も、隨伴なさらうと致されたのであるが、中途、永平寺に歸らるゝことゝなり『汝が禪は逸格にして履踐精密なり、吾が宗を紹隆せんこと必せり、吾が滅後、奘長老に依附し去れ』と、高祖大師よりいひ遺されたほどの御方であります。この年、徹通禪師は三十五歲でありました。

高祖大師は、八月京につき、その月の廿八日に御入滅になつたので、徹通禪師は御遺言通り、奘長老、卽ち日本曹洞の第二祖である孤雲懷奘禪師に師事して參禪學道いたされることになつたのであります。

一日、倏然として徹證す――熟し切つた甘柿が、何かの機會に、ぽとつと落つる如く、徹通禪師は、こきみよくも徹底的の大悟をなされた。久遠實成の佛の境界に直入いたされたのである。

徑ちに丈室に詣つて曰く――丈室とは寺院の住職の居間である。その名の由來は、維摩の故事に出づといふ。維摩が病氣だといふので、釋尊は、お弟子方に、誰か御見舞に行つて來いといはれた。が誰も行きますとお受けするものが無い。維摩は釋尊にも等しい程の大德力を有し、釋尊の御弟子達を時々困らせるから、今度見舞に行つても、定めし酷い目に合はされるだらうといふので、誰も御受けしないのである。そこで仕方がないから、七佛の師といはれる文殊菩薩が御使ひに立たれることゝなつた。さうなると、そ

介祖有赤鬚胡話

徹通義介禪師參弉祖。一日倏然徹證、徑詣丈室曰、某甲今日會得先師身心脫落話。祖曰儞如何會。師曰將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。祖領之曰儞於先師所得處會其旨、諒先師那伽定中必爲儞作證。

【讀方】徹通義介禪師、弉祖に參ず。一日、倏然として徹證、徑ちに丈室に詣りて曰く、某甲、今日、先師の身心脫落の話を會得す。祖曰く、儞如何んが會す。師曰く、將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡あり。祖これを領じて曰く、儞、先師所得の處に於て其の旨を會たり、諒に先師、那伽定中、必ず儞が爲めに證を作さん。

徹通義介禪師、弉祖に參ず——徹通義介禪師は越前足羽の人、姓は藤原、大將軍利仁の末裔である。寛喜三年、十三歲で越前の波著寺懷鑑和尚の弟子となり、仁治二年、廿三歲にして高祖承陽大師を、宇治の興聖寺に訪ねて隨侍いたされることになつた。

　是の法は法位に住して、世間相常住なり。

　春色百花紅に、鷓鴣柳上に鳴く、

義介禪師の赤鬚胡の話

禪語に『胡鬚赤、赤鬚胡』といふ語があります。胡鬚赤とは胡人の鬚は赤いといふこと、赤鬚胡とは赤髯の胡人といふことである。『胡人の鬚が赤い』といふことゝ『赤鬚の胡人』といふこととは、同じであると說く人もありますが、然し同じだといふのは間違ひだと見ることが出來る。『胡人の鬚が赤い』といふのは胡人の容貌についての說明である。鬚の色を說き明して居るだけのことである。然るに『赤鬚の胡人』といへば、それは胡人についての說明でなくして、胡人の提示である。赤鬚の胡人を、まる〳〵そこへ放り出して突き示して居るのである。胡人の鬚について赤いの黑いのと、その說明をなして居るのと、赤鬚の胡人を突き出して提示するのとは、大變の相違である。學問は兎角說明になり易く、宗教は何れも提示を貴ぶ。就中、禪はこの提示といふことを生命として居る。

佛の話をしても自己の話をしても、禪では說明をしないで提示をする。赤裸々に呈露するのである。虎の話をしても、虎の顏つきが恐いの、爪が鋭いのといふ說明をするのでなく『ソラ虎だ』と、話手自身が虎になり、躍り出て、聞き手を『ウン』といはすのが禪であります。こゝに話さうとする徹通義介禪師大悟の消息も亦この呼吸を知つて拜覽すれば、眞意が肯けるが、さもないと、よくは分らぬだらうと思ふ。

天眞の活計遮欄を絶す——孝順は至道の法なり、至道は無難で、何等の慮知念覺を要しない。天眞爛漫の起居動作である。遮欄を絶してゐる。そこには何の障礙をなすものもない。

孝は百行の本である。およそ道を說いて、孝を說かぬものはない。眞の大孝を爲すのには、禪師の如く禪の修行をつんで、大悟徹底したお方にして始めて全きを得といふべきである。禪の修行は、奇狂の言動をなすがためのものでなく、人間天眞の大道に親しくなる所以のものであります。

いつてゐた。婆さんは、坊さんたちから、台山へ上る道は何處ですか、と問はれる度毎に、『驀直去』まつ直ぐに行けばよいと敎へてやり、坊さんたちが、敎へられて歩き出すと『好箇の阿師また恁麼にし去れり』あゝ結構なお坊さんだ、またぞろ、あんな工合に進んでゆくがとはがゆがつてゐた。

或る日のこと、この話が趙州從諗といふ大禪師の耳にはいつた。趙州禪師は、これを聞いて、ウンよし老衲が一つその婆さんに道を尋ねて來やう、と云つて、婆さんに『台山の道はどこであるか』と問はれた。婆さん流石に、佛法眼を開いてゐるが故に、趙州を瞞肝する樣な言葉は發しなかつた。我等も趙州の如き力量を得てゐるならば、道の中にあつて道を聞き、人の笑を受ける樣なことは致さないで濟むのだが、慚愧千萬な次第である。

台山の一路君知るや否や——維摩經には『直心これ道場』とある。文殊の智劍を獲得する一路は、何處にもある。支那に行つて婆さんに尋ねるには及ぶまい。

星は秤頭に在りて盤に在らず——秤の目もりをしてある目は秤頭にある。盤や風袋の上にはない。あはを食つて、とんだ間違をしないがよい。道は脚下にある、道場は心中にある。この所を、十二分に、懷奘禪師は悟得致されて居るが故に、その行履が誠に道に親しい。

孝順既に垂る千古の範——懷奘禪師が、本師高祖承陽大師になされたる孝順は實に千古の模範、佛道面道の中に於て、禪師にまさる孝子は無いといつてよい。

に說く所の斷見もなく常見もない。修惑もなく無明もない。知的の迷もなく情意の惑もない。

知的の迷に比しては、情意の惑は根强いもので、理窟では分つてゐるのだが、どうもその氣になれないで困るといふ樣な惑が、人には澤山ある。丙午の迷信なども、理窟ではそんな馬鹿々々しいことはないと分つてゐるけれども、いざとなれば情意がそれを承知せぬ。これで大に困惑してゐる人がある。が、禪の悟を開いた懷奘禪師にはそんな迷妄がない。身心脫落で、束縛を受け樣にも受ける所がなく、寬い天地を自由に濶步してゐられる。

大道砥の如し趣向することを休めよ——大道は平々坦々、どうせんでも、人はそれを生れながらにして踏んでゐることを知るがよい。人はこれを知らず、道の中にあつて、道を他に求むるために事が面倒になる。自分の家に居るものが、自分の家を他所に探し始めたほど仕末におえぬものはない。

今日の人々は、神經過敏で昻奮し易いので、平坦な大道にありながら、それには氣づかず、道を遠きに求めて却つて顚倒する。が、それは休めてしまふがよい。

趙州豈老婆の蹣を受けんや——支那には五台山といつて、名高い山がある。文殊菩薩の靈場で、觀音菩薩の靈場たる補陀落山などと共に、佛敎徒の絕えず參拜に出かける山である。その五台山にお詣りにゆく坊さんたちに、道を敎へることを樂しみにしてゐた婆さんがあつた、婆さんもとより惡心あつてのことではないが、若い坊さんたちが道を尋ね來るのを、はがゆがつて、もつとしつかりした坊さんが無いものかと

師禮拜す——懷弉禪師のこの禮拜、こゝには佛道の全面目が露堂々に現成して居るのです。

頌曰、通身脫却龜毛縛。兎角杖頭天地寬。大道如砥休趣向。趙州豈受老婆瞞。臺山一路君知否。星在秤頭不在盤。孝順旣垂千古範。天眞活計絕遮欄。

【讀方】頌に曰く、通身脫却す龜毛の縛、兎角杖頭天地寬し。大道砥の如し趣向することを休めよ。趙州豈老婆の瞞を受けん。臺山の一路君知るや否や。星は秤頭に在りて盤に在らず。孝順旣に垂る千古の範。天眞の活計遮欄を絕す。

通身脫却す龜毛の縛、兎角杖頭天地寬し——龜毛兎角とは、無いものを有る樣に考へる間違つた見解をいふ。龜が久しく水にゐると藻がついて、毛が生えた樣になり。兎が耳を長く立ててゐると、角を生やした樣に見えるが、何れも實際有るものでない。然るに人間は、龜毛の如く兎角の如き、迷妄の見解を立て、そのために困らせられてゐる。迷のために心をせばめ、惑のために身を縮めて焦心し苦慮し、まことに困惑をして居る。

懷弉禪師は、佛心を體得し、行くも坐るも、臥るも起きるも、佛心を離れない境地に進まれたので、頭のきり〳〵から足のつまさきまで、兎の毛ほどの束縛も受けない。懷弉禪師には、人間の迷がない、佛敎

まだ分らない『萬年の後如何』千年萬年の後のこと丶仰せ下されるが、千年萬年の後如何あるのでせうと問うて出た。全明上座は、まだ若い。

石霜禪師曰く『登科は汝が登科に任す、拔萃は汝が拔萃に任す』試驗に及第し、拔擢され、登庸されることは、全明上座それその人の實力次第のことだ。他人の力を借つてするのでない。上座は、いつまでも、人の口の端についてまはるが、自分の力で、自分を發明したらどうか、と提撕致されたのであります。

そこで、全明上座、果して合點がいつたかどうか分らぬが、懷弉禪師は、高祖承陽大師からこの話を聞いて居られて、豁然大悟。

衆を出で丶禮拜――大衆の中から進み出で丶禮拜を致された。

祖曰く、汝如何の見る所ぞ――懷弉、尊公は、一毫衆穴を穿つ云々の問答が、如何分つたか、と高祖は御尋ねになつた。

師曰く、一毫は問はず、如何なるか是れ衆穴――佛心（一毫）のことは問題でありませんが、人々脚跟下の大道が問題であります。人々の日常の生活、行住坐臥、親しく道を行取することが問題であります。と懷弉禪師は御答へになつた。

祖微笑して曰く、穿了――高祖大師、會心の笑をお漏らしになつて、『うまく通つた。尊公の一言一行悉くこれ佛心の脫體現成である、佛道と親しい、善哉々々』と歎賞された。

一毫衆穴を穿つの因縁を聞いて即ち省悟――石霜慶諸禪師に、全明上座が『一毫衆穴を穿つ時如何』と問うた。昔、曲りくねつた穴のあいてゐる珠に、絲を通せといふ難題をもちかけられた男が、蟻の脚に絲をつけて九曲の穴をくゞらせて、うまく糸を通したといふ話がある。そんな工合に、正法の糸で以て、宇宙の萬象を數珠つなぎにしたら、どんなものかとでもいふ問を、全明上座が發した樣に思はれるが、然うでない。此の問は、今日の人々がいふ所の、一と多との關係を、佛法の妙理の上から說示して欲しいといふ問である。毫は絲毫で、わづかばかりのもののこと、糸のことだと見てもいゝ。一つの糸で澤山の珠を數珠つなぎにするといふ樣に解釋する向もあるが。そんなことでない。一毫とは一法である。佛心である全一である。衆穴とは森々羅列の萬象である。山川草木、禽獸蟲魚である。

『一毫衆穴を穿つ時如何』とは、つまり佛心が全宇宙に充滿しつくした時の消息は、如何でありませうかといふ問である。この問を發した全明上座は、いまだ未熟で、佛心が常に全宇宙に充滿してゐることを知らず、他日そんな時節が來るのだらう位に考へて居つたらしい。

石霜禪師には、全明上座のこの幼稚さが情なくてならぬので『直に須らく萬年の後なるべし』そんなことは、千年萬年の後のことだ。汝等の關する所でないと叱りつけられた。全く、そんなことは、千年萬年の後のこととして置くがいゝ、考へるに及ばぬ。禪の行き方は常にこれである。佛心が宇宙に充滿するせぬの論は、敎師、論師に任すがよい。禪は佛心を自己に親しく會得することを急務とする。全明上座は、

禪師について禪を修し、同學の人々から非常に推賞されて居られた方であります。たま／＼、高祖承陽大師が支那から正傳の禪を傳へて京都建仁寺に歸つて居られることを聞き、往いてその宗風を歎じ師事致さうとなされましたが、高祖大師には深いお考へがあつて『此に相隨はんこと不可なり』と仰せられたので、懷奘禪師は其の命に隨つて辭し去り、時の到るをお待ちになつた。

高祖大師が、文曆元年、觀音導利院興聖寶林禪寺を御建立になるに及んで、懷奘禪師は尋ね行きて、親しく隨侍致されることになり、爾來二十餘年、影の形に隨ふが如く、高祖大師の在すところ、懷奘禪師が在さぬことはない。『人の聞かざる所を聞けることはありと雖も、他の聞ける所を聞かざることなし』と自ら仰せになつて居る。いつもかも、お側を離れなさらなかつたのであります。

高祖大師が御遷化になつた後も、その塔所の傍に庵を結んで隨侍し、『夜間に珍重し曉天に和南して』一日も怠らず、夜となく晝となく禮拜恭敬して御奉仕になつた。その御入寂の時にも、遺言して大師の御傍に、侍者の位に埋骨することを命じ置かれたのであります。世に孝養を傳へらるゝ勝跡は多いけれども、懷奘禪師の如きは實に稀有の大孝養の人と申すべきであります。孤雲とは、高祖大師の塔所の傍に結ばれた懷奘禪師が小庵の名である。參ずとは、參師問法といつて、師を尋ね求めて法を問ふことである。

一日、請益の次」――請益は、法益を請ふといふこと。法益とは、佛法を說き聞かして、人を利益することである。或る日、佛法の話を願うた際に、

弉祖一毫衆穴話

孤雲懷弉禪師參高祖。一日請益次。聞一毫穿衆穴因緣卽省悟。出衆禮拜。祖曰汝如何所見。師曰一毫不問如何是衆穴。祖微笑曰穿了也。師禮拜。

【讀方】孤雲懷弉禪師、高祖に參ず。一日、請益の次。一毫衆穴を穿つ因緣を聞いて卽ち省悟。衆を出でて禮拜す。祖曰く、汝如何の見る所ぞ。師曰く、一毫は問はず、如何なるかこれ衆穴。祖微笑して曰く、穿了。師禮拜す。

支那の天皇道悟禪師の弟子石霜慶諸禪師と、全明といふ人との間に『一毫衆穴を穿つ』云々の問答があつたことがある。その話を高祖承陽大師が、大衆方になされたときに、懷弉禪師も、大衆と一緒に聞いてゐられた。大衆は何と聞いて居られたか分らぬが、懷弉禪師はこの話を聞いて、豁然大悟致されたのである。

孤雲懷弉禪師、高祖に參す——懷弉禪師は、京都の貴族の御出で、初めは比叡山に上つて出家し、佛教の教理を學び、坐禪觀法を實修して居られましたが、母上から佛道を學ぶものゝ陷り易い弊害を指摘され大に感ずる所あつて、淨土念佛の法門を、淨土宗西山派の高僧について學び、更に攝津多武峰の大日能忍

懷弉禪師の一毫衆穴の話

『人の道を求むること、世に高き色に逢はんと思ひ、剛き敵を伐たんと思ひ、堅き城を破らんと思ふが如くなるべし。志既に深きに依つて、この色に終に逢はざることなし。彼の城破らざることなし。この心を以て、道に飜へさん時、千人は千人ながら、萬人は萬人ながら、みなこれ悉く道を得べし』といふ御言葉が傳光錄に示されてあります。人が戀に燃え怨みに熱する、その勢で、道に向へば、千人が千人、萬人が萬人必ず道を得る、人の道を全うし佛の道を成就することが出來るとの仰せです。

昔も今も、道ならぬことに熱狂する人は多いが、道に精進する人は少い。今日の社會は新聞雜誌にいふ如くに、人々が道ならぬことに迷ひ込んでゐるかどうか、それは分らぬが、少くとも善い方の話が一向に評判されないのは喜ぶべきことではありません。佛教では道より外の話は致さない。常濟大師は古來の佛祖が道のために精進し、苦勞なされた行蹟を特に提示して、後人を御導きになつて居ります。こゝに述べる懷弉禪師の話も亦それである。

て來たら何と答へるかとは、何たる言ひ草でありますか』と三聖は鋭い見識を示されたのである。

臨濟は明眼の大宗匠、三聖のこの大喝の意を諒とされたが、言葉は臨濟一流の暴つぽい言葉で『吾が正法眼藏は、このめくらうまのところで、亡くなつてしまふか』といつてゐられる。言葉の上では、臨濟は慨嘆されてゐる樣であるが、實は大に稱讚されてゐる樣子が見える。

ては一時半時も生息し得ざる底のものである。正法眼藏は萬人の眼、萬人の寶藏である。これを離れては暗である。枯死してしまふ。

世人の多くは、久遠劫の昔より傳來せる所の正法眼藏を打ち忘れて、全くこれを知らぬ。古人も、この正法眼藏は無暗矢鱈に無眼子（目くらども）には付與されてゐないといはれた。正法眼藏を付與されてゐない貧乏人が實際あるのかも知れぬ。

瞎驢といふ言葉については面白い話がある。臨濟義玄禪師は臨濟宗の開祖、臨濟院に住して、道に親しい、提撕（學人を導くこと）のやかましい方であつた。この臨濟禪師が御逝去になるといふ日である。弟子の三聖院慧然禪師と最後の御物語があつた。

臨濟が、三聖に『わしが亡くなつても、わしが提唱し來つた正法眼藏は、これを亡くなさないやうにして貰いたい』と仰せになつた。三聖も素直に『はい、亡くしは致しません』と答へられた。臨濟は倘突き入つて『人がヒョツクリ來て、尊公に問うたら何と答へる』といはれるを三聖は聞きも了らず、『喝』と大音聲に、臨濟を怒鳴りつけた。正法眼藏は、叩くに從つて響き、求むるに應じて與へられる所のものである。照用同時、照知一如、卽ち問ふ人の心もちを見拔くことゝ、それに應じて答へをなすことゝが、間髮を容れず、全く同時に行はれるところのものである。斯樣に問うて來たら、斯樣に答へ、斯く〳〵に尋ねて來たら、斯く〳〵に答へやうなどゝ豫め献立をなし、用意をなして置くべきはずのものでない。『問う

師にのみお任せ申してはならぬ。人々各自も亦、實にこれその人である。いな、その人であらねばならぬのである。

「正法眼藏傳へ來ること久し、未だ嘗つて等閑に瞎驢に付せず」——この二句は人々各自が身心脫落底の人大悟徹底の人であることを示したのである。

正法眼藏とは佛の大道である。宗乘（禪門で至極となす所の道）である。正は『邪に對する正に非ず、正邪善惡を超越せる中正、即ち不偏の心體をいふ』とあつて、正だの、邪だの、善だの惡だのといふ場合の正といふ字でなく、天地に充滿せる心體、佛心佛性そのものをいふのである。我等の小さい心も、これを捕へんとして捕へることの出來ない如く、この天地に充滿する所の心體、佛心佛性も摑み出して見ることはできぬ。が然し、これを信得しこれを行取することが出來る。法とは一切萬法、森々羅列の萬象をいふ。萬法は悉く正（佛心、佛性）を離れたものでない。正より發現したる所のものである。眼とは照破の義で、事々物々をよく照破することである。正（佛心、佛性）には萬物を照破して盡さゞることなき妙徳が具はつてゐる。藏とは含藏の義、正（佛心、佛性）には、ありとある有象無象の一切を含藏して漏らす處なきなり。これを要するに、正法眼藏とは、三世十方の世界（ありとあらゆる世界）に充滿してゐる佛心、佛性をその性德相用（性質や機能）と兼ね合せて擧げた稱號である。

この正法眼藏は、萬人がこれを久遠劫の昔（昔の昔の大昔）より傳へ來つてゐる所のもの、これを離れ

はつてゐる。八面玲瓏、玉の如くにして、よく萬物を照破して過らざる力が具はつて居る。この力から發する所のものが卽ち知用である。此に云ふ知である。人間はこの知あるがために萬物の靈長たることを得る。照は慈照ともいひ、その體は慈悲である。この慈悲體をして、萬物に應ぜしむる處のものが知用である。慈照とその知用とによつて、萬物は光明に滿たされて歡喜踊躍する。但し、慈照と知用とが萬物を光被するその消息は、尋常のそれと異り、宏智禪師の所謂『事に觸れずして知り、緣に對せずして照す』底のものである。

萬物を慈照し萬物に應同するといへども、その慈照その應同が誠に不染汚である。欲得離れをしてゐる。照すものと、照されるものと、その間に區別があり隔があつては雜念がまじる。恩にきせるものと恩にきるものとが出來る。恩にきせたり、恩にきたりしなくてはやれない樣な慈悲は、佛家の大慈悲でない。魚が水中にあつて游泳する、その有樣を見るがよい。水が魚に恩をきせるでもなければ、魚が水に恩をきる譯でもない。水か魚か、水が泳ぐのか、魚がおよぐのか、水と魚とが一つになつて、水と魚とのけじめもつかぬ親しさである。

身心脫落底の行履（生活）、大悟徹底の日常は、正に是くの如く、本證妙修、慈照應同を行じて任運無礙『鳥飛んで鳥の如く、魚行いて魚に似たり』大空と鳥とが一つになりたるそれの如く、大海と魚とが一つになりたるそれの如くである。身心脫落底の行履（生活）、大悟徹底の日常は、これを、ひとり高祖承陽大

所で仕方がない。大空に向つて文字を刻むやうなものだ。悟り切れぬ人々は、正體の無いものを追ひまはし引つ捕へて、專有權の極印でも押さうと大騒ぎしてゐるが、誠に愚かなことである。

修也證や鳥飛んで鳥の如く——佛法では修行を重んずる。證悟を貴ぶ。然しながら、修行といひ證悟といふも、本來、同一行履の兩面に過ぎない。殆ど見さかえのつかぬものである。

人は、修行といへば、證悟を得るための手段と思ひ、證悟といへば、修行の結果として新に得られる所のものと考へるのであるが、禪家の、修行、證悟は然樣のものでない。修行は證悟を得るための手段でない。證悟は修行の結果として新に得られる所のものでない。證悟は、元來、我等が先天的に所有してゐる所のもの、故に之を本證といふ。修行は本證より發現する所の作用、故に之を妙修といふ。我等は生れながらにして本證といふ立派な寶を有つてゐる。この寶を見失はないで、平生の生活の上に活用してゆくのが妙修である。

妙修といひ本證といふ區別をつけて見ればつく樣なもの丶、妙修と本證とは誠に親しく相融じてゐるもので、いはゞ大空と、大空を飛んでゐる鳥との關係の如きである。澄み切つた大空を高く鳥が飛んでゐる鳥と見れば鳥であるが、果して鳥であるかどうか、大空と鳥とのけじめがつけられぬ。妙修と本證との關係もそれである。

知や照や魚行いて魚に似たり——照は照鑑、知は知用である。人間には生れながらにして照鑑の徳が具

草が枯れて、松の樹幹に一つ増した鱗までが判然と分る。

煩惱妄想の雲が霽れ、煩惱妄想の雜草が枯れて、秋風颯々、誠に言ふにいはれぬ境地、浮世のごた〳〵一切のもつれがすつかり決著したところ、身も心も清々したところ、所謂身心脫落の境地である。こゝに到ると、

這裏一毫の佛法なし、虛空に向つて剋鏤を擬することを休めよ――で、佛法だの世法だの、敎だの迷だのといふものが顏出ししない。高祖承陽大師は、支那より御歸朝になり、嘉禎二年十月十五日、京都宇治の興聖寺に於て御說法あらせられた。その日の御言葉に、

山僧（私）叢林（禪の專門修行道場）を歷ること多からず、只これ等閑に、天童先師（天童山如淨禪師）に見えて、當下（その場）に眼橫鼻直（眼は橫に二つ鼻は竪に一つ）なることを認得（さとる）して、人に瞞ぜられず（人に馬鹿にされない）、すなはち空手にして鄕に還る（からでゝ戾つて來た）、所以に一毫の佛法なし、（佛の敎法らしいもの何一つ有たぬ）云々

と仰せられてあります。全くその通りで、身心脫落の境地、大悟徹底のその境地には佛法もなければ世法もない。迷だ悟だ、凡だ聖だ、有だ無だ、得だ失だ、といふ相待差別の見解を總に放下してゐる。一切の固執を離れ葛藤を脫してゐるのであります。

『虛空に向つて剋鏤を擬することを休めよ』もと〳〵實體の無いものに、執着をして、追ひまはして見た

ん。高祖承陽大師の心魂はこれがために輝き、廓然として契悟あそばされました。
兩鏡相對して、形影倶に亡ず——高祖承陽大師は、廓然契悟あそばされた翌朝、如淨禪師の方丈(御居間)に上つて燒香を致された。弟子の高祖大師と師匠の如淨禪師、お二方倶に身心脫落底の人である。佛の智慧德相を十二分に、身に心に體得し行取してゐらせられる。知見(さとり)に於て、行持(おこなひ)に於て毫も間然するところがありません。

その知見、その行持、圓かなること玉の如く、明かなること鏡の如くであります。如淨禪師と高祖承陽大師と相對してゐらせられるその御樣子は、例へば明鏡と明鏡と相對したるが如く、その間、分別區劃のつけて見やうがない。どちらが强、どちらが弱といつて見やうがない。何れが主、何れが賓、何れが形、何れが影、と差別のつけて見やうがない。かくの如くにして、高祖承陽大師は、如淨禪師より印可證明(實に立派なる悟境に入つたといふ證明)を得られたのである。

禪家の免許皆傳は、常に是くの如くにして行はれる。師資二面裂破で、師匠と弟子と面り相對してはゐるが、その間、力に優劣がない。境界に强弱がない、師匠が弟子か、弟子が師匠かといふに到つて、印可證明、卽ち免許皆傳となるのである。

雲散じて富嶽秀で、林枯れて松鱗皺む——免許皆傳を得られた高祖承陽大師の御境界である。大師の心には、一翳の疑雲なく、大師の身には煩惱の熱氣がない。雲が散じて、富士の秀嶺が蒼空に現はれる。雜

頌曰、身心脫落。涙出痛腸。兩鏡相對。形影俱亡。雲散富嶽秀。林枯松鱗皺。這裏一毫佛法無。休向虛空擬刻鏤。修也證也鳥飛如鳥。知也照也魚行似魚。正法眼藏傳來久。未嘗等閑付瞎驢。

【讀方】頌に曰く、身心脫落、涙は痛腸より出づ。兩鏡相對して、形影俱に亡ず。雲散じて富嶽秀で、林枯れて松鱗皺む。這裏一毫も佛法無し、虛空に向つて刻鏤を擬することを休めよ。修や證や鳥飛んで鳥の如く、知や照や魚行いて魚に似たり。正法眼藏傳へ來ること久し、未だ嘗て等閑に瞎驢に付せず。

身心脫落、涙は痛腸より出づ――天童山の禪堂に於て、雲水（禪宗の坊さん）達が坐禪をして居りました。坐禪も本氣で致してゐると、大變疲勞することがあるもので、うと〳〵と居眠りを初めた者がありました。如淨禪師、これを御覽になると、手酷しい警告を致されました。『參禪は身心脫落を要す、何ぞ恁麼に打睡することを得たる』坐禪修行は命がけでなくてはならぬのだ、然るに居眠りなどをして、その態は何か、といふ酷しいお叱責であります。

お役目一片でする叱責とは違つて、實に如淨禪師は慈悲徹悃、雲水達の腑甲斐なさを憐み悲しんで、腸を絞る思ひを遊ばされてゐる。如淨禪師のこの誠實、御慈悲、これが學人の赤心に響かないでは置きませ

元和尚を御推賞になり、『雍容また霹靂』で中分がない、と仰せになつたのであります。

雍容とはものやはらかな容、泰平無事、自由無礙、寸毫の屈托もない樣子である。霹靂とは雷電の閃めく凄い光景で、機鋒の峻烈なるをいふ。

『普勸坐禪儀』に『若し此の意を得ば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり』とあるは、雍容また霹靂を示されたものである。龍の水を含んで三草二木を潤すは雍容に當り、虎の山によつた威力は霹靂に當る。人には雍容と霹靂を要す。卽ち柔軟の德と剛健の威を要す。柔軟の德あつて子供にも親まれ婦人にも敬愛せられ、剛健の威あつて非を制し邪を伏することが出來る。脫落の人は實にこの二德を圓かにしてゐる。

高祖大師は、如淨禪師の會下に於て、斯くの如くにして、大解脫地、雍容また霹靂の境界を得させられ、更に三年といふ年月、親しく如淨禪師の提撕をうけて、後、御歸朝になり、正傳の純禪を日本に初めて開演せられたのであります。

高祖承陽大師が、支那天童山に於て大悟いたされました消息に就ては、既に述べし所の如くであるが、それに衲は偈頌をつけて、參禪辨道の方々に示して居ります。

くには當らぬものであります。何卒然るべく御諒知下されまする樣にと申された。『更に上れ一層樓』、高祖大師はいやが上にも精進し向上しもて行かんことを念としてゐらせられる。

師曰く、我亂りに汝を印せず――無暗に尊公を推賞してゐるのでない。

祖曰く、如何なるか是れ、亂りに印せざる底――無暗に推賞下さるのでないとすると、何か確かな所があるのでございますか。

師曰く、脱落身心――尊公の爲すこと述ぶること悉くが不染汚の活動である、佛作佛行であるとの激賞である。

祖、禮拜す――法喜禪悅、大滿足の禮拜である。

師曰く、脱落、脱落――重々の證明であります。高祖大師も滿足、如淨禪師も滿足、大喜びである。

時に、福州の廣平侍者曰く、外國の人、恁麼地なることを得たり、實に細事に非ず――福州から天童山に來て如淨禪師の侍者を勤めてゐた廣平といふ方がこの樣子を見て、驚歎に堪へず『日本の人がかくの如き法喜禪悅を得たといふは、實に素晴らしいことである、支那國にも斯かる人なきに』といつた。

師曰く、此の中、幾くか、拳頭を契す。脱落、雍容また霹靂――此の天童山は數百の雲衲が修行してゐるが、その中の幾人か拳骨の味を知つたものがあるか。接得を受けても、何の變轍なく過ぎてしまふ無眼子が多い。然るに、道元和尚のみは接得の的意を了じ脱落の妙境に到達したと云つて、脱落の境地にある道

である。執着は禪の禁物とする所で『金屑貴しと雖も眼に入りては翳となる』、禪では如何なるものをでも、擔ぎ歩くことを許さぬ。人が珍重する金粉であつても受けつけない。眼の中に入つては、金粉と雖も取り捨てねばならぬ。禪は一切を放下せしめる。

或る僧が、趙州和尚に『一物不將來のとき作麼生』何も擔いてゐないが、これでよろしいかと問うた。すると趙州和尚、『放下著』打ち捨てゝしまへといつた。面白い答である。『何も擔いでゐない』といふ人に『捨てゝしまへ』といふ。『何も擔いでゐない』といふその了見を捨てゝしまへといふのだ。すべて問題はこの了見にある。物を有つてゐるゐないが問題であるのでない、有つてゐるとかゐないとかいふその了見が問題である。世の中の爭議といふ樣なことも、多くはこの了見が禍根となつてゐる樣である。その僧は、理窟をいつた。『何をか、放下せん』擔いでゐぬといふのに、何を捨てゝしまふのですか、捨てるものが無いのですと。趙州和尚の方は、薩張りしてゐる。更に屈托がない。さうか、それでは擔ぎて行け、『與麼ならば擔取し去れ』實に趙州は不染汚の活動そのものである。脫落身心の行履(行ひぶり)を致されてゐる。趙州和尚の如き境界に、今、高祖大師は到達いたされたので、如淨禪師は非常に御讃歎になり、印可證明して『身心脫落、脫落身心』と仰せになつた。

祖曰く、這箇は是れ暫時の伎倆、和尚亂りに某甲を印すこと莫れ――高祖大師は飽くまでも謙遜であります。私が參上いたして申上げてゐますことは、ほんの一寸やつて見ただけのこと、取たてゝお褒めを頂

の意であるが、こゝにいふ『身心脱落』には、更に〳〵深い意味がある。脱は解脱の脱で、籠の中から鳥が飛び出して、自由になつたとでもいふべき意味。落は洒々落々などいふ落で、重荷をおろした感じである。身心内外の束縛を悉く脱却し去つて洒々落々たるところ、天空海濶、隨處如意なるところ、これが身心脱落の境地である。

今までは邪見、執著、疑團を擔ぎまはつてゐたのであるが、今はそれをスツカリかなぐり捨てゝ、身ありと雖も更に束縛なく、心ありと雖も毫も苦痛なし、身心がありながらのありつぶれ、『佛法を學ぶといふは、自己を忘るゝなり』已れを忘れて無我の眞境に入つて、自なく他なし、誠に面倒がない。身心脱落の境界、これを說けば難しいが、坐禪堂に入つて坐禪になり切れば、直にそれが身心脱落である。

高祖大師は、居眠り坊さんが叱られる其の言葉をお聞きになつた途端に、身心脱落の境界を親しく身心に獲得してしまはれたのである。一本にはこゝの所を記して『身心脱落し來る』といはれたとあるが、意味は同じである。

師曰く、「身心脱落、脱落身心」――如淨禪師は高祖大師を賞讃されたのである。『尊公は修行成就の大力量人である、尊公は身心内外の束縛を脱却して自由無礙の妙境に入り、自由無礙の身心を任運に受用し行取してゐる』と感心なされたのである。『脱落身心』の文字は、『不染汚の身心』と解釋してもよい。不染汚は禪語である。清淨無垢で染み穢れがないといふ字で、要するところ執着が無い屈托がないことをいふの

参禪辨道、晝夜を分たず、遂に人も知る一休大禪師の禪機が生み出されることゝなつたのであります。

道を求めて生命がけになることは、一休禪師のみに限らぬ。釋尊もまた國王の位を捨てさせられた。山海の珍味に飽かるゝ御身を以て、非人乞食にも劣る粗衣惡食の修行者とならせられた。道を求むる者は誰でも、この覺悟が無ければならぬ。高祖承陽大師、もとより道のために不惜身命である。釋尊の如き苦行もあそばされず、一休禪師の如く氷水をぶつかけられはなさらぬが、道のためには生命がけである。非常な緊張で坐禪をなされた。

このとき偶ゝ、居眠りしてゐる坊さんがあつた。如淨禪師はこれを痛く責めて、『参禪は身心脱落を要す、何ぞ恁麼に打睡することを得たる』とお叱りになつた。

祖、これを聞いて廓然契悟――高祖大師の心扉は、この一語によつて打開された。大師の眼界、佛光佛德にあらざる一物なし。大師が永年の修行力がこの時一時に現成したのである。

天明に方丈に入つて燒香す――夜明けをまつて、如淨禪師の御居間に上つて香を焚き、禮拜をなされた。

師曰く、燒香の事、作麼生――香を焚いて禮拜をなすは禪門の儀式である。何か申しあげるとき、或は伺ひをたてるとき、または報恩謝德の誠衷を表するとき、之を行ふ。高祖大師が朝早く方丈に上つて、香を焚いて禮拜せられたので、如淨禪師は『何か』とお尋ねになつた。

祖曰く、身心脱落――『参禪は身心脱落を要す』とあつたときの『身心脱落』は、『命がけ』といふほど

宗曇の門を叩くお導きをしました。

然し宗曇老師は容易に入門を許されない。今日は何處の禪門を叩いても容易く入ることを許されるが、古人は却々許さなかつた。許されないで引き下り、重ねて出かけることを、禪家では『轉ずる』といふ。『私は五度轉じた、六度轉じた』のといふ樣なことをよく云たものである。『轉ずる』ことも、これが一つの儀式の樣になつては眞劍味が無いが、古人はこれを儀式的にやつたのでない、本氣でやつた。拒絶する方も本氣なら、轉ずる方も本氣であつた。

一休禪師は、峻絶されて、宗曇の門側に坐り込んでしまつた。宗曇は隨侍の人二三を連れて、化導に出られ、夕刻になつて歸られると、門側に坐禪をしてゐる雲水坊さんがある。宗曇老師、侍者に聞くと『この雲水は强情で何度でも轉ずる。轉じ來つて、もう此處を立ち去らぬのであります』と申しあげた。宗曇老師これを聞いて『さうか、では水をぶつかけてやれ』との嚴命である。禪僧は勇ましい。師家の嚴命である、大きな手桶になみなみ汲んで來た水を、一休禪師の頭からぶつかけた。時恰も寒天の夜である。つく氣息も凍るといふ場合、水をぶつかけられてはたまらぬ。一休禪師は濡れ鼠、つらゝの着物である。が、一休禪師ビクともなさらぬ。死を決しての參問であるから强い。宗曇老師、深夜に及んで點檢にまはり、門前に出られると先刻の雲水、凍てつく着物をまとうたまゝ儼然として坐禪をしてゐる。さすがの宗曇老師も、これには感じ入り、翌朝、入門を許された。一休禪師は、これより宗曇老師の提撕を受けて、

僧の打睡するを見、責めて曰く、『参禅は身心脱落を要す、何ぞ恁麼に打睡することを得たる』——参禅の参の字は、研究といふ程の意味である。身心脱落とは、こゝでは命懸けといふこと。恁麼にとは『そんなに』といふことである。

禪を研究するのには、命懸けでなければならぬ。孔子は『道さへ分れば直ぐに死んでもよい』と申されて居るが、全く道が悟れゝば、世にそれ以上のことはない。人間の道は魚の水に於けるが如きもので、人間が道をはづれてしまへば、その面目を保つことが出來ぬ。値打ちが全く無くなつてしまふ。禪は、人間の道の至極である。無上上の道が禪である。この禪道を研究するために、古人は命懸けであつた、不惜身命であつた。身命を抛つてかゝられた。

世の飄輕ものの看板の樣に人からいはれる一休禪師も、禪を研究するがためには命懸けであつた。石山寺に籠つて三週間の斷食を致された。觀音菩薩に願がけをして斷食されたのであるが、靈驗が現はれぬ。一休禪師の失望は一通りでない。佛に見放されてしまつたものだといつて、石山寺を去り、瀬田に出て、憂悶に堪へず、宇治川に入水自殺を致さうとなされた。そこへ通り合せた一人の雲水坊さん、訝しがつてその故を問ひ『人身得ること難し』の佛語を以て懇ろに諭し、當國に大善知識華叟宗曇のあることを語り『宗曇老師は機鋒峻烈、眞箇の學人を待つ。尊公、旬日を限りて、参問すべし。参じ了つて而して後、身命を斷つも敢へて遲怠といふべからず』といひ、一休禪師が入水自殺を旬日の後に延期せしめて、華叟

くなりと雖も、未だ、佛法僧の實歸を明らめず、徒らに名相の懷標に滯れり。後、千光禪師の室に入りて、初めて臨濟の宗風を聞き、今、全法師に隨ひて炎宋に入る。航海萬里、幻身を波濤に任せ、遂に和尙の法席に投ずることを得たり。蓋しこれ宿福の慶幸なり。和尙大慈大悲、外國遠方の小人、願ふ所は、時候に拘はらず、威儀を具へず、頻々に方丈に上りて愚懷を拜問せんと欲す。生死事大、無常迅速、時は人を待たず。聖を去りて必ず悔ゆ。本師堂上大和尙大禪師、大慈大悲、哀愍して、道元が道を問ひ法を問ふことを聽許したまへ。伏して冀くば慈照。　小師道元、百拜叩頭上覆。

とお願ひになつたので、如淨禪師大に御滿足に思召し、『晝夜と時候とに拘はらず、何時でも道を問ふがよい、遠慮には及ばない』、との御言葉を下されました。道元禪師は、こゝに勢を得て、專一に御修行致される。禪堂にあつては勿論のこと、佛殿に於ても法堂に於ても、運水にも搬柴にも、道をお忘れになることは片時もない。

高祖大師、天童の會に在り」——高祖承陽大師道元禪師が支那天童山の景德寺、如淨禪師の會下にゐらせられたとき、

一夜、如淨禪師、巡堂——或る夜、如淨禪師が、坐禪堂をお巡りになり、

なるか是れ亂りに印せざる底。師曰く、脫落身心。祖、禮拜す。師曰く、脫落、脫落。時に福州の廣平侍者曰く、外國の人、恁麼地なることを得たり、實に細事に非ず。師曰く、此の中、幾くか拳頭を喫す。

脫落雍容また霹靂。

高祖とは申すまでもなく、高祖承陽大師のことであります。道元禪師と申上げた方が、世の中へは通りがよいかも知れぬ。綿密の禪を初めて日本に傳へ下された祖師である。

久我侯爵家が大師の御實家で、今より七百二十餘年前（正治二年）にお生れになり、三歳のときに父上を、八歳のときに母上をお喪ひになつて、こゝに大菩提心を發し、十五歳のとき、ひそかに遁れ出で叡山に上り、修學兩三年、大疑團を抱いて山を下り、建仁寺に禪法を問ひ、明全和尙の親切なる提撕を受けて、辨道怠りなく、數年の間に一切藏經を兩度まで御閱讀になりました。廿四歳の時、明全和尙と同道して支那に禪法をお求めになり、有名な寺々に行つて、盛んに問答を致されましたが、御滿足なされる譯にゆかぬ。誠に詮なき次第とあきらめて、歸國致さうと御決心あそばされたとき、天童山へ如淨禪師といふ高德の方が御住職になつたといふ話を聞き、早速お尋ねになり、書狀を呈して、切なる求道の赤心を御披瀝になりました。

道元、幼年にして菩提心を發し、本國にありて道を諸師に訪ひ、聊か因果の所由を識る。然も是くの如

我等、太祖大師六百年大遠忌法會を嚴修するにあたり、この大遠忌を眞に意義深からしむるには、大師が最も力を注がせられ御精神を向けさせられた方面を信受奉行するに勝るものはない。こゝを以て、衲は日本洞上の祖師の傳燈の御消息を拜記し、以てその勝躅を欽慕する因縁となるべき『傳燈遺照』一篇をものした次第であります。

高祖身心脫落話

高祖大師在天童會。一夜如淨禪師巡堂。見僧打睡責曰、參禪要身心脫落、何得恁麼打睡。祖聞之廓然契悟。天明入方丈燒香。師曰、燒香事作麼生。祖曰、身心脫落。師曰、身心脫落、脫落身心。祖曰、這箇是暫時伎倆、和尙莫亂印某甲。師曰、我不亂印汝。祖曰、如何是不亂印底。師曰、脫落身心。祖禮拜。師曰、脫落脫落。時福州廣平侍者曰、外國人得恁麼地、實非細事。師曰、此中、幾喫拳頭、脫落雍容叉霹靂。

【讀方】高祖大師、天童の會に在り、一夜、如淨禪師巡堂。僧あり打睡するを見、責めて曰く、參禪は身心脫落を要す、何ぞ恁麼に打睡することを得たる。祖これを聞いて、廓然契悟。天明に方丈に入つて燒香す。師曰く、燒香の事、作麼生。祖曰く、身心脫落。師曰く、身心脫落、脫落身心。祖曰く、這箇は是れ暫時の伎倆、和尙みだりに某甲を印すること莫れ。師曰く、我れ亂りに汝を印せず。祖曰く、如何

傳燈遺照講話

高祖大師の身心脱落の話

我が總持寺には、高祖承陽大師、太祖常濟大師、二世峨山紹碩禪師の三尊を奉安してゐる廟所がある。傳燈院と申し、最も大切な殿堂であります。傳燈といふ文字には深遠なる意味が含まれてゐる。燈火には夜の暗黑を破る力があり、禪法には心の迷妄を破る力がある。禪法は心の燈火である。この燈火を釋尊は迦葉に、迦葉は阿難に、阿難は和修に、嫡々相傳して今日に至つて居ります。

太祖常濟大師は禪法の燈火を相傳することを最も大切に致されました。誤つて傳へれば、釋尊より正傳して來た禪法の燈火が消滅してしまふのであるから、大切にあそばされるのが尤もの次第であります。

太祖大師には『傳光錄』といふ御著述があります。大師は化導に大層忙しくゐらせられたお方で、靜かに御著述をなされてゐる暇はなかつた樣に拜察するが、その中に於て、特にこの『傳光錄』を御著はしになつたのには深い仔細がなければならぬ。即ち大師は傳燈を最も重んじさせられたのである。

○我心其儘ほとけいきほとけなみをはなれて水のあらばや。（古歌）

○濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる。（承陽大師）

なるが故に。(仁王般若經)

○衆生は即ち菩提、菩提は即ち衆生なり。之を知るを世間と爲す。(諸法無行經)

○いはゆる佛祖の保任する即心是佛は、外道二乘のゆめにもみるところにあらず。唯佛祖與佛祖のみ、即心是佛しきたり、究盡しきたる聞著あり、行取あり、證著あり。(承陽大師)

○即心是佛とは、發心、修行、菩提、涅槃の諸佛なり、いまだ發心修行菩提涅槃せざるは、即心是佛にあらず。(同)

○宇宙便ちこれ吾が心、吾が心これ便ち宇宙なり。(陸象山)

○迷と悟とは一心にあり、人欲深く無明の雲厚く、心月の光幽かにして暗の夜の如くなるを迷ひの心といふなり。學問修行の功積んで、人欲淸く盡きて無明の雲晴れ、心月の靈光明かに照すを悟りの心と云ふ。(中江藤樹)

○人は天地の心なり、天地は人の身なり。(中根東里)

○予は只勤勉と積累とによりて吾が業を成就したり。(ダルトン)

○思想の進む所は宇宙自ら戶を開き、人をして其の豐富と其の玄妙とを觀、且つ樂ましむ。(ヘーゲル)

○宇宙は活物なり、其の組織は汝の腦中のものと同一なり。(パウルゼン)

○佛はと問へば迷はぬものそなきおのが心と知る人もがな。(無難禪師)

迦牟尼佛の身と心となるのである。十二時中の起居振舞がソツクリ釋迦牟尼佛の大慈悲大智慧となりて、自を度し、他を度し、國家を益し、社會を賑すのである。是に於てか始て眞實の行持が現はれて、茶を喫し飯を喫し、算盤を彈き鋤鍬を持つも、皆佛祖の行持ならざるは無いのである。唯恨むらくは、無始の煩惱我心を蓋ひ、三業の罪障我身に纒はり、六道の夢永く暗く八苦の醉覺むること甚だ難いのである。

今や幸に曹洞正傳の佛法に遭ひ奉り、懺悔の慈門に投じて立ろに罪根を消滅し、受戒の臺に上りて忽ちに佛位に同入し、更に利生の願力を起して、一擧一動能く慈悲の光りを放ち、日々の行持を勵みて此の身心を擧げて能く報恩の德を全ふすと云ふ、甚深微妙の因縁を結ぶと申すは、喜びても猶ほ餘りある身の上ではありませぬか。是れ皆諸佛弘誓の大願力、釋尊傳授の妙法力に依るものなれば、深くも、諸佛とは釋迦牟尼佛なりとの御敎導を信じ奉りて、三德具足の標示たる釋迦牟尼佛の妙德鴻恩を感謝し、寢ても寤ても即心是佛の妙德を顯現せんとの 志 を忘れてはなりませぬ。

參　考

○菩薩いまだ成佛せざる時は、菩提を以つて煩惱と爲し、成佛する時は、煩惱を以て菩提と爲す、何を以てのゆゑに、第一義（結局のところ）に於て二ならざるがゆゑに。諸佛如來、乃至、一切法如（佛も衆生も、もと別なものでない）

を感得し、それが何人の目にも見えるので、一同奇異の思ひを爲し、是れ全く妙船信仰の奇特なりとて、近邊の人々までが競うて特々拜みに來る樣になつた。然るに、妙船は却て之を憂ひ、一介の凡夫たる我等が、如何ほど看經すればとて斯る不思議のあるべきはずはない、好し看經の力能く諸佛の感應を被むるとするも、そは我心と行との上に現はるべきものにして、有形の光明などを以て奇特と爲すべきに非ず、思ふに是は我をして增上慢を起し、眞正の信心を失なはしめんとする惡魔の所爲なるべしとて、其の後は、光明の現はるゝ每に、一層精力を込めて看經を致した、或時、また例の如く看經の最中に光明を放ちければ、それまた惡魔奴が我志を攪亂すぞとて、益々氣を勵まし聲を揚げて一心に讀經しければ、怪しや佛壇の上に當りて只ならぬ響が聞えた。それつと云ふので二階を穿鑿せしめけるに、忽然として一疋の老たる狐が佛壇の上より飛び出し、家根傳ひに何地へか遁げ去つたが、其の後は更に光明の不思議は無かつたと申すことであります。何か常識を以ては判斷の出來ぬ樣な事のあるのが、佛法の靈驗だなどとウツカリ思ひ込むと、飛んでもない瞞着を受くることがあるものである。妙船が一時の奇特に迷はずして、我心地上に佛を求め法を修めたるは感ずべきの至りである。

されはとて、靈驗を客觀的に求めてはならぬと云うのではない。又、決して佛法に不思議なしと斷ずるのでもないが、佛法の一大事は即心是佛に承當し去る所に存するのである。徹底、即心是佛と信ずる時は佛には生死なく煩惱なきを以て、此の身と心この儘がソツクリ生死解脫である。此の身と心とがソツクリ釋

ことが出來れば、八萬四千の法門も我等の所有物である。商人が商業するのも、農民が田畑を耕すのも、ソックリ佛法の妙用となる。此の境界に至りてこそ佛様や祖師方が難行苦行して佛法を御傳へ下された甲斐があると云ふもの、故に『正に佛恩を報ずるにてあらん』此の時始て眞實の佛恩報謝が出來るぞと仰せ下されたのであります。

昔、釋尊が一夏九十日の間、忉利天に御上りなされて母親摩耶夫人の爲めに御説法あそばされたことがあります。彌々娑婆世界に御返りと云ふ時、國王長者等が盛んに御歡迎申上げた。唯だ須菩提尊者のみは御迎もせず、獨り石室の中に在りて一心に般若の理を觀じつゝ、所謂卽心是佛の參究に餘念もあらざりし、其の折、蓮花色比丘尼が、一番最初に釋尊に御目に懸る事を得たれば、之を無上の光榮として大に喜び『吾こそは第一番に如來を見奉れり』と申されける時、釋尊は『否、汝の我を見たるは第二番に屬す、須菩提こそ第一に相見しつるぞ』と仰せられたと云ふ因緣がある。誠に貴とき御話しではありませんか。蓮花色比丘尼は佛の御身を拜んだので、須菩提尊者は佛の御心を拜まれたのである。又、蓮花色は肉眼を以て佛を見奉り尊者は心眼を以て佛を見奉られたのであります。

又、昔、江戸時代の俳人法眼不角の妹に妙船と云ふ人がありました。京橋槇河岸松村半兵衛の母にて非常なる篤信家であつた。晩年、家に在りながら尼僧と爲り、出家の勤行をして居られた。朝夕御佛壇に向て怠らず看經せしが、後に至り、看經の度每に、佛壇の上より一道の光明が輝いて妙船の頂を照らすこと

ためには本師本佛なるが故に、阿彌陀一佛に歸し奉れば、すなはち諸佛菩薩に歸するいはれのあるが故に阿彌陀一體のうちに諸佛菩薩は盡くこもれるなり』とありて、三世十方の諸佛諸菩薩も、阿彌陀如來御一佛の中にこもれるものぞと信ずるのである。我宗に於て釋迦牟尼佛を拜し奉るのも亦た是の如く、釋迦牟尼佛は三世十方の諸佛諸菩薩の本地法身なるを以て、釋迦牟尼佛に歸依し奉るのが、取も直さず三世十方の諸佛諸菩薩に歸依し奉ることゝなる。觀佛三昧經には『若し我名を稱して諸佛に南無せば、獲る所の福德無量無邊なり』とありて、釋迦牟尼佛と稱うる御名の中に、諸佛に歸依する功德が具つてをる。故に承陽大師は『十方の諸佛を見たてまつるべくば、釋迦一佛を見たてまつるべし』と仰せ下されてある。さすれば釋迦牟尼佛は、三身具足の功德聚、三德總持の妙體として信仰し奉るのであります。而して其の釋迦牟尼佛感應の御光りは、吾人信仰の一念心に輝きを起すのであるから、信仰の一念心を離れて外に佛は無い。そこを『釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり』と御示し下されたのです。

　最後の御文には『即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん』とありますが、實に御親切なる御教化ではありませんか。即心是佛といふ事は、決して空理でも無く空論でもない。又、佛菩薩や智者學者の上のみの事でもない。然らば誰の事ぞと審細に參究し盡して見よ。皆人人分上の事ではないか。我等御互が、熱いと知り寒いと知り、嬉しいと思ひ悲しいと思ふ底の心、此の心の其の儘が即心是佛である。此の事が解らぬ時は。佛法は何時までも自分の物にはならぬ。徹底此の意を信ずる

す。其の四大原則も畢竟修證の二を出でぬ。修證の二は本より吾人の一心を離れたものでは無い。此の心が卽ち本證の德を生じ妙修の功を現はすのである。是を卽心是佛と申されたのであります。次の御文に『過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛となるなり是れ卽心是佛なり』とあるは、過去・現在・未來の三世に出現まします諸の佛は、其の數も亦た無量無邊であるから、御發心の因緣や御修行の狀態は、其の時代と境遇とに依て多少異なる趣もあれど、彌々成佛あそばさるゝのは、能仁と寂默との功德を成就せらるゝ力に依るのである。故に、三世の諸佛は竟に一の釋迦牟尼佛に歸し、其の釋迦牟尼佛は卽心是佛なりで、此の一心に歸するのである。華嚴經には『一心念の中に無量刹を出生し、佛の威神力を以て悉く淨うして無垢なりと見せしむ』又『衆生法器に非ざれば諸佛を見奉ること能はず、若し心業の者あれば一切處に皆見る』とありて、三世無量の諸佛は一念心より出生し、十方無量の淨土も亦た一念心の現はれならざるは無い。又、同經に『若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心造なりと觀ずべし』と云ふ御文がある。是を破地獄の文とも稱して、至心に此の文を讀誦する時は地獄を打破る程の功德があると云ふことであるが、其の意は『十方法界は皆自心現の相にして我心を離れて佛なく諸法なしと明らむる時、始て三世一切の佛を見奉り、又、其の大慈悲大智慧を覺ることが出來るぞよ』との御示しであります。淨土を西方に建立し、阿彌陀如來御一佛に歸依せよと敎ふる淨土門でも、徒らに佛に對して揀り嫌ひは致しませぬ。眞宗の御文にも『諸佛菩薩と申すとは、それは彌陀如來の分身なれば、十方諸佛の

は一として佛樣と平等の大慈悲大智慧を有せざるは無い。唯だ妄想煩惱の爲めに種々の惡業を造り、業力の致す所自ら三界六道生死の繋縛を招ぎ、邪見の暗常に覆ひ苦惱の夢永く覺め難いのである。此の夢を覺し、此の暗を拂ひ、我身は卽佛の身なり、我心は卽佛の心なりと云ふ境界に至らしむるのが、佛教の目的であります。故に、釋迦牟尼佛を拜むと申しても、必ずしも三千年前の歷史を探し廻れよと云ふのではない。常住不滅の佛身に歸依し、我等の三業をソックリ佛の三業と爲すのである。

そこで次の御文に『釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり』と仰せられたのであります。卽心是佛とは、御互の此心が、ソックリ佛なるぞとの御敎である。さればと云うて、我等凡夫が朝から晩まで、惜い欲い憎い愛いの煩惱に使はれて、利己一點張の欲垢に染つてをるのを、直ぐ佛樣だなどと思うては飛んでも無いことになる。併し、此の心をも捨て此の身をも捨てゝ、空々寂々となるのが佛ぢやと思うても大間違です。こゝが最も大切なる處である。譬へば、如何程奇麗な水があつても、若し一滴の毒が其の中に入てをれば、一口も之を呑むことは出來ぬ。其の毒さへ取り除ければ、水は我等の命も同然で、一刻も之れなくては叶ひませぬ。御互の心も身も、本來淸らかなる水の如く、智德圓滿の佛樣であるのである。唯だ惜い事には三毒煩惱の毒の爲めに、永く三惡道の巷を狂ひ廻つて居るのである。其の煩惱の毒さへ無くなれば、此の身心の其の儘が佛の種子、眞理活動の生命である。どうすれば其の毒が取除けられるかと云ふに別な事は無い。此の修證義の四大原則たる懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩、是れ卽ち最善最勝の法門でありま

の三身三德でありまず。然るに、三身の內、强て優劣を爭ひて、此の佛を重んじ彼の佛を輕んずるが如きは、文に依て義を解する上より生じたる妄想と言はねばならぬ。古歌にすら『釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心の佛なりけり』とある。佛の心には輕重親疎の別は無いです。華嚴經には『佛身は法界に充滿し普く一切群生の前に現ず、緣に隨がひ感に赴いて徧からずといふこと無し而も恒に此の菩提座に處したまふ』とあります、佛の御身は法界に充滿しまします、是れ卽ち法身である。緣に隨ひ感に赴く時は身を千百億に分ちたまふ、是れ卽ち應身である。而も常に此の菩提座に在て大智慧大光明を現じたまふ、是れ卽ち報身である。三身ありと雖も畢に是れ一佛身であります。殊に釋迦牟尼佛と申す御名が萬德總持の御名號である。釋迦は梵語、玆に能仁と譯す。能仁とは大慈悲心の德號です。牟尼も梵語、此に寂默と譯す寂默とは大智慧の德號です。文字の上から申せば、寂は身と意とに於て諸の過患なきこと、默とは口に於て諸の忿爭なきことゝです。佛は般若の大智慧を成就したまひ、以て一切の煩惱を離れ生死の繫縛を脫し、身口意の三業に於て、純善無漏の妙德を顯はしたまふが故に寂默と云ふのである。斯樣に大慈悲と大智慧との二の德が圓滿にならせられたのが佛樣であります。我等御互が、佛樣を御本尊として御歸依をするのは、卽ち此の大慈悲光と大智慧力とに歸依し奉るのである。此の御歸依の功德は自づから佛の大慈悲と大智慧とを感得して、之と同時に、我等が本來具有する大慈悲大智慧の德を現はすことゝなる。一切の衆生

佛の御德にも、時間、空間の上に微塵も隔ては付けられぬ。故に、大なる心を以て信ずれば大なる佛を感得し、小さき心を以て信ずれば佛も亦た小さくなる。法・報・應の三身と區別するとも三通りの佛樣があるのではない。卽ち一身の上の三德であるのである。一箇の佛樣を三方面から拜んだ上の名字に過ぎぬ。法身とは佛の體、報身とは佛の德の顯はれた相、應身とは衆生の根機に應じて現はれたまふ作用の姿である。一口に申せば、佛の心が法身、佛の德が報身、佛の妙用が應身で、三卽一である。譬へて見れば、此處に一塊の黃金がありとせんに、黃金其の物の自性が法身で、黃金の世に超えて麗はしき相、燦爛たる光りが報身、それを、頸飾とか、時計とか、指輪とか、盃とか云ふものに製して、箇々各別の作用あるのが應身であります。黃金は頸飾なり、黃金は時計なりとは言はれまいが、其の頸飾や時計が其の儘黃金であるには相違ないです。して見れで、三身は卽一體、一體が卽三德と云ふことになる。そも釋迦牟尼佛は何を以て萬德圓滿の佛と爲りたまひしかと云ふと、今時の語を借りて申さば、宇宙絕對の眞理を究め盡して、萬古不易の大道と一致の境界にならせられたのである。此の眞理には自分と他人との分界は無い。此の大道には昔と今との區別も無い。さすれば、釋尊御一方の御身は、既に古今に通じ十方に徧うしてゐらせらるゝ。故に、佛樣の心地上は、從來の煩惱妄想を斷じ盡して、一點の汚れをも留めざる淸淨法身である。是を人格的に法身と稱し、修養上からは斷德と稱したのである。凡情一度離るれば智德自から備はりたまふ。是を報身とも智德とも云ふ。是の如く智德全く備はる時は佛性常住の孝順心慈悲心の德が現はれて、自然に

三十二、即心是佛（修證義第三十一節）

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり。過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ卽心是佛なり。卽心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん。

此の賛題の御文は修證義最終の一節で、佛法の肝要收めて此に在りとも謂つべき、甚深の妙義を御開示下されたる大切なる御文章であります。初に『謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり』と云ふは、前節に『一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり』とある御語を承けての御示しである。申すまでも無く、佛樣と申しても、釋迦牟尼如來あり、阿彌陀如來あり、大日如來あり、藥師如來あり、三世十方の間に無量恒河沙の佛が在ますれど、畢竟じて唯だ釋迦牟尼佛御一方の外には無いと心得るが宜い。敎家にては佛の御身に法身と報身と應身との三通りあり、佛の國土には、寂光土、實報土、方便土、同居土の四通りありと立てる。而して、釋迦牟尼佛は應身佛にして且つ同居土の佛樣ぢやなどと說く向もある。だが、我宗にて釋迦牟尼佛を御本尊として戴き奉るのは『釋迦牟尼佛は法界の敎主なり』として信仰し奉るのであります。

抑も、佛の御德は廣大にして邊際なく、恰も虛空の如きものである。虛空に東西南北の隔て無きが如く

○汝生命を愛するか、然らば時間を浪費すること勿れ。時間は生命を作る所の材料なればなり。（プーア、リチャード）

○我が務を了り、我が生を完うせん。（ブラウニング）

○過去は拂拭せよ、未來は信賴せよ、而して光榮の今に生活せよ。（エリザベス、タウン）

○一度失ひたる時間は決して再び得べからず。（プーア、リチャード）

○よきことは人にも敎へ我れもせよ是ぞまことの人といふなり。（よみ人しらず）

○徒らに過す月日はおほけれど道をもとむる時ぞすくなき。（承陽大師）

○徒らに通る月日と思ふなよ命をせむる使なりけり。（古歌）

○世の中は今日より外はなかりけり昨日はすぎつ明日は知られず。（古歌）

○曇りなき世の光りにや春日野の同じ道にも尋ね行くらん。（上東門院）

○きのふといひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり。（紀貫之）

○けふみれば春は短かし衣更。（祇德）

我等幸に懺悔滅罪して六根清淨となり、佛戒を相續して佛樣の御弟子となり、本證妙修の大功德を一身に聚むることを得たるは、何等の幸福であらう。故に朝な夕なに暫時も怠らず、釋迦牟尼佛の恩德を憶念し奉りて、眞箇報謝の正道を營むのが何より大切である。

參考

○若し百歳の中懈怠にして劣らば、一日の中勇猛にして精進を行ぜんには如かず。（法集要頌經）

○大恩ありと知りなば、則ち必ず、草露の命を徒らに零落せしめず、如山の功德を慇懃に報ずべし、是れ即ち行持なり、（承陽大師）

○人主として、引頸就刃（太宗四祖禪師の道風を慕ふて、招きたまふに三返共に辭す、太宗怒りて首切らんとす、師自若たり太宗益々慕ふ）して身命を惜まざる人物をも猶ほ歎慕するなり、是れ徒らなるにあらず、光陰を惜み行持を專らにするなり。（同）

○大禹は聖人なるに乃ち寸陰を惜む。衆人に至りては當さに分陰を惜むべし、豈に逸遊荒醉すべけんや。生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなきことは、是れ自ら棄つるなり。（陶侃）

○人生は白駒の隙を過ぐるが如し。（莊子）

○尺の璧を貴ばずして、寸の陰を貴ぶ。（文中子）

通じ、栗田流の書を能し、殊に佛教の篤信者であつた。性來慈善の心深く、自らは節儉を守りて貧民を憐れみ惠むことを樂しみ、文化年間、攝津河內の兩國洪水の時の如き、窮民を救ひしこと數を知らず、毎年極寒の頃になると、毎夜、洛中洛外の貧乏町を徘徊して、米錢を極貧者に施こすを以て務めとす。されど、専ら陰德を旨として姓名を顯はさゞりしが、何時しか公廳に聞えて、五六度も褒賞を賜はつたさうである。或日、歌の中山清閑寺の智眞長老が、傳兵衞の賢德あるを聞て尋ねられ、案內も待たずに其の居間に通り、『傳兵衞とは御身なるか、今は何事を爲しつゝあるや』と問はれました。其の時、傳兵衞は算盤を彈き帳面を廣げて帳合をして居たが、『ハア私は傳兵衞で、今、大般若經を轉讀して居ります』と答へた。長老は『そんな大般若でも御利益があるかな』と問ひしに、傳兵衞はニツコリ笑つて『此の大般若こそ利益無量なり。妻子眷屬の養育より世間の交際、貧民の救助、祖先の追善、子孫安樂の資本まで、盡く大般若の力ならざるは無い。併し、利益の大なるだけ罰の當り方も亦た大なり。一桁違へば自分のみか他人にまで迷惑を懸け罪を造らしむる。若し誠意を缺く時は害毒到らざる所なき有樣です』と答へました。長老大に感歎して、それよりは無二の知音となられたと申す話がある。佛法もかういきたいものであります。算盤を彈くも、鍬鎌を持つも、皆菩提の道に契ふ眞正の行持となれば、立つも坐るも善根功德ならざるは無い。此の行持にして一度現成すれば、進むも退くも、任運に忠信となり孝悌となり、恭儉となり博愛となるのである。此の時の心こそ直樣佛の御心、その身はソツクリ佛樣の御姿である。

てこそ、始めて眞に佛法が活て來る。佛樣の法身は其の行持の存する所に光りを放ちたまふのである。斯くしてこそ、無常の世に在りながら常住不滅の樂しみを得、露よりも脆き命を持ちながら玉よりも麗はしき大安心を決定することが出來るのである。例へば、千古の忠臣楠正成公は、天下人が齊しく之を景慕して、今は湊川神社として祀られ、又、銅像を皇城外苑に建られて長に其の偉勳を表彰せられてをる。併し、六百年前の一忠臣として、單に歷史的記念人物とのみ見てゐては、楠公の大精神は決して發揮せられませぬ。今日の臣民も亦た楠公の如き誠忠を抱きてこそ、公の大精神は今猶ほ不滅なのである。公にも劣らざる忠義の志を起すのが、眞に能く楠公の靈を敬重する所以なのである。孝といひ忠といひ、畢竟、孝順心慈悲心の性德が、君と親とに對して發動したる姿に名けたのであります。忠義の道とは何んなものか、孝行の理とは何んなものかというても『こんなものだ』と云うて人に示すことは出來ぬ。だが、至仁なる君と純忠なる臣と相對する處に、忠義といふ美しき花は爛熳として咲き亂れる。慈悲深き親と孝心深き子と相對する處に、孝行といふ淨らかなる月は玲瓏として光りを放つのである。佛教は世界無二の大宗敎で、佛樣は古今獨步の大聖人であらせられるが、其の靈光偉德は、實地に佛法を信受し、修行し、應用する手本に於てのみ拜まれるのである。佛教の未だ甚だ振はざるは、佛法を行持する人が少ないからです。佛法の功德の未だ全く現はれざるは、正しく佛法を信ずる者が多くないからであります。

文化の頃、京都に、大和の人で澤井智明と云ふがありました。通稱は大黑屋傳兵衛と云うて、經書にも

此の一日の行持である。故に明教大師は『尊きは道より尊きは莫し、美しきは徳より美しきは莫し、道徳の存する所匹夫と雖も窮するに非ず、道徳の存せざる所天下に王たりと雖も通ずるに非ず』と言はれてある。依て次の御文には『此の一日の身命は貴ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此の行持あらん身心自からも愛すべし自からも敬ふべし』とありて、此の行持ある一日の身命こそ最も貴むべき身命である。此の道を有する一日の形骸こそ最も貴むべき形骸である。苟も一日の行持の現はれたる身と心とは、業に既に凡夫地を離れて佛地に進んだのであるから、我が身ながらも深く之を愛し厚く之を敬まはねばならぬ。是れが本當の獨立自尊である。何故なれば『吾等の行持に依りて、諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり』で、我等が眞正なる行持に依りて、三世の諸佛の淨く麗はしき行持が目の前に現成し、十方の諸佛の悟りたまひし天地自然の大道が吾等の脚下に通達するからである。道に古今の隔ては無けれども、之を行はされば其の徳は現はれぬ。法に東西の別は無けれども、之を用ひてこそ初めて其の功を見ることが出來るのである。更に『然あれば則ち一日の行持、是諸佛の種子なり、諸佛の行持なり』と御示し下されて、我等の一日の行持こそ、全く佛法の功徳を實現するのであるから、取りも直さず活きたる佛樣は此の世に出現し奉る種子である。啻に種子たるのみならず、此の行持がソックリ其の儘諸佛の行持である。

佛法は決して理論でも無ければ學問でも無い。天地の大道、法性の妙徳を、我等の手の舞ひ足の踏む所に實現して、自を度し他を度するに非ざれば佛法は死物となつて了ふ。故に、眞實なる一日の行持が現はれ

は貪欲を増長し、逆境に逢うては瞋恚を增長し、愚痴の迷雲は常に本心の光りを包み、唯だ徒らに五欲六塵の巷を馳せ廻り驅け走りて、惜い欲い憎い愛いの間に、空しく百歲の日月を送過するの有樣です。趙州禪師は曾て其の徒に示して『汝等は十二時に使はれて居るから道を成ずることが出來ぬ。老僧（自稱）は常に十二時を使得て居るぞ』と仰せられたは此處です。

依て次の御文に『設ひ百歲の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其の中一日の行持を行取せば一生の百歲を行取するのみに非ず、百歲の佗生をも度取すべきなり』と御示し下されたのであります。一生の百歲とは現在の此世のことで、百歲の佗生とは未來生々世々をいうたのである。天地の妙道が自づから此の心と身とに具はりて、眞實の行持を行取得らるゝ時は、其の行持の一日こそ、大安心を決定し了つた目出度一日であります。佛樣が三祇百大劫の御修行も、此の行持の一日を得たまはんが爲めである。我等の信心修行も此の一日を得るのが目的であるのである。我々御互は、縱ひ今日までは聲色の奴婢となりて、迷ひに迷うて居たにもせよ、幸に佛祖正傳の正法に逢ひ奉りて大信心を發得し、此の一日の行持を行取する身の上となりさへすれば、啻に現在一世の身をして佛の道に一如ならしむるのみならず、未來生々世々の身をも濟度し盡して、永く佛果菩提の妙樂を得ることが出來るのであります。世財は賴むべからず、世事も亦た賴むべからず、無常の風一度吹き到りなば、妻子珍寶一として我身を資くるに由なし。唯々貴むべきは

隨て死せんと思ふ心を先づ發すべきなり、然るときんば道を行じ得んこと一定なり』と仰せられてあります。是れは決して身命を輕んぜよとの御旨意でもなければ、活計の事を捨よといふ御思召でもない。唯だ道を重んじ道を明らめて、人生の目的に於て遺憾なからしめよとの御誡めである。此の御教訓の如きは、我等御互が朝夕に拜讀して、親しく道を守り之を持ちゆく箴銘とも致したいものであります。だが、古語にも『善に從ふことは登るが如く、惡に從ふことは崩るゝが如し』とある通り、能く善を行なひ能く道を守ることは却々難かしいものです。一日の中、一時の間でも、仔細に點檢し來れば、道を行ふことは少なく道に遠ざかることが多い。是れ畢竟、內に確實なる信念なく、外、事物の爲めに惑はさるゝからである。

全體、凡夫と佛樣との區別は何處に在るかといふに、楞嚴經にも說かれてある通り、事物に轉ぜらるゝと、事物を轉ずるとに依て、迷と悟との道が岐るゝのである。自分の身と心とに於て、天地の原則たる道の本體を確乎と踏まへて、順逆の境に臨みても、ビクとも動着せず、能く順逆の境に應じて孝順心慈悲心の妙用を現はすのが佛樣である。然るに凡夫は、自分の本心が浮き〱して居るから、口だけが道に契うても身が道に契はず、身が道に順うても意が道に順はず、身口意の三業を擧げて道に一致することが容易に出來ぬ。それが爲めに、眼に色を見れば色の爲めに迷はされ、耳に聲を聞けば聲の爲めに動かされ、鼻に香を嗅ぐも口に味を嘗むるも、多くは妄想執着の媒介とならぬは無く、身の物に觸れるも、意の物を想ふも、亦た多くは三毒五欲の種となりたがつて困るです。是を聲色の奴婢といふのである。奴婢とは召使の

も壽命の長きを以て幸福とはいはれぬ。命の長からんよりは道の具はらんことを望まねばなりませぬ。千古の忠臣楠正成公は、七生報國の志を抱いて湊川の露と消えられたが、行年は四十三歳の男盛りであつた。小楠公は『かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入り名をぞ留むる』の一首を、吉野の如意輪堂に書き遺して、命を四條畷に捨てられたが、年齢は少かに二十三歳です。されど楠公父子の忠魂義魄は、六百年後の今日に至るも、彌々四維八紘に輝き渉つておる。楠公が嘗て功臣の第一と稱せられたる菊池武時公の陣歿は四十二歳、南朝の俊英たる護良親王は二十八歳、源顯家公は二十一歳にして歿せられた。一代の賢臣北條時頼公は三十七歳にして死し、絶世の豪雄北條時宗公は三十四歳にして死んでをる。此等の俊豪は、其の壽命の點に於ては甚だ惜くあるも、其の勳功の偉なる、感化の大なる、千秋萬歳の後に至るも嘗て滅することは無い。是れ卽ち其の一生を通じて道を守り道に盡されたからである。

我が高祖大師は、之れに對する心得を親切に御示し下されて『古人の云く朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと、今學道の人も此の心あるべきなり、曠劫多生の間だ幾度か徒らに生じ徒らに死せしに、稀れに人身を受けて偶々佛法に遇へる時、此の身を度せずんば何れの生にか此の身を度せん、縱ひ身を惜み持ちたりとも叶ふべからず、ついに捨てゝ行く命を一日片時なりとも佛法の爲めに捨てらんは永劫の樂因なるべし、後のこと明日の活計を思うて棄つべき世を捨てず行ずべき道を行ぜずして、徒らに日夜を過すは口惜きことなり、唯思ひきりて明日の活計なくば飢へ死にもせよ寒ごへ死にもせよ、今日一日道を聞て佛意に

ませんか。

抑も、我等が生涯を通じての最大目的は何んであるかといふに、道を知り、道を守り、道を行なひ、道を盡すの外は無い。人間の命は道あるが爲めに貴とく、人間の身は道を守るが爲めに靈長なのである。道とは何ぞや、卽ち天地萬物の原理と其の妙用である。其の原理とは何ぞやといふに、一言にして申せば、生々化育の大道、法性無漏の妙德である。道德的にいはゞ、梵網經に所謂『佛性常住の孝順心慈悲心』である。言ひ換れば、本宗所傳の十六條の佛戒の原則是れなりである。されば、日月の天に輝き雨露の地を濕ほす、火の熱する風の動く、花の紅なる柳の綠なる。何れか道にあらざる。之を人事の上に現はせば、忠となり孝となり、恭儉となり博愛となり、奉公となり報恩となる。境に依り緣に隨つて千差萬別なりと雖も、其の歸する所は佛性常住の孝順心慈悲心の德相である。政治の目的は此の道を天下に布かんが爲めである。敎育の目的は此の道を知らしめ守らしめんが爲めである。小學の題辭に、朱子が『元亨利貞は天道の常なり、仁義禮智は人性の綱なり』と云うてあるが、元亨利貞は天の道で、仁義禮智は人の道である。天の道を體して人の道を明らかにし、人の道を現はして天の道を顯はす、此の二の者は畢竟じて相離れぬ我等御互は此の道に依て此の世に生れ、此の道に依て生存して居る。故に道を守るは人間必然の本務であります。若し道を守ること無く、却て道を破り道を傷つくるが如きことあらば、人間として生存するの必要が無いのみならず、寧ろ、早く死んだ方が御互の爲めになる位のものです。して見れば人間は敢て必ずし

に非ず、今日の姿は昨日の姿と同じからず、刻々に易り時々に移る。こは決して人間ばかりではなく、天地間に所有森羅萬象は、一として無常ならざるはないのです。而して我等の身命はどうかと云ふに、草の葉の露よりも脆く、今日にして明日を待たず、朝にして夕を保すること能はず。人間一代の命は僅かに出入の一息に繋れり、一息斷截すれば忽ち未來の人と爲る。兼好法師が『飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事去り樂しびかなしび行かひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬすみかは人あらたまりぬ』と歎きしは、悲觀でもなんでも無い、實に人生の一大事實であります。歌に『あだし野の露はちりても又ぞおくきえてあひみぬ人ぞわりなき』とか、『朝貌をあだなるものと思ひしに花よりさきに落る白露』などとあるも亦全く世の中の眞相であります。故に『何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる』で、如何に善巧なる方便があらうとも、一旦過ぎ去つた月日を復び取返すことはならぬ。小野小町が『花の色はうつりにけりな徒らに我が身よにふるながめせしまに』と歎きしも、古今共に免れ難き浮世の有樣であります。斯る世に住む我等なれば、『徒らに百歳生けらんは恨むべき月日なり悲むべき形骸なり』で、人生の歸趣をも知らず、人道の何物たるをも心得ず、夢の如くに生れ夢の如くに死したらんには、縱ひ百歳の壽命を保つことを得るとも何の所詮も無い。唯だ空しく惡業を重ね罪過を餘計に積むだけである。それでは我等を照し護りたまふ日月の光りも、却て三界六道の苦しみを招がしむる緣となり、萬物の靈長と稱せらるゝ貴とき形骸も、却つて未來永劫の悲みを惹き起すべき源となるではあり

三十一、諸佛行持（修證義第三十節）

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し。何れの善巧方便ありてか、過ぎにし一日を復び還し得たる。徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり。設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其の中一日を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり。此の一日の身命は貴ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり。此の行持あらん身心、自からも愛すべし自からも敬ふべし。我等が行持に依りて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり。然あれば則ち一日の行持、是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。

此の一節は、前節に於きまして報恩謝徳の正道は吾人日々の行持に在るぞと御示し下されてある、その日々の行持を全うする心得に就ての御親訓で、殊に大切なる御文章であります。初に『光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し』とありて、世間無常の有様を示されてあるが、苟も眞實心を以て道に志さん者は、先づ以て無常觀を忘れてはなりませぬ。光陰の迅かなることは矢を射るよりも疾く、人生五十年といふも夢の間に過ぎ去つてしまふ。古歌にも『鏡には知らぬ翁の影見えて本の姿は何地往きけん』とある通り、我等の身體も月日の移り變ると與に、轉變遷流して暫くも留まることは無い。去年の身は今年の身

〇諸佛の妙道は、曠劫に精勤して行じ難きを能く行じ、非忍而忍なり、豈に小德小智、輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲し、徒らに勤苦に勞せん。（達磨大師）

〇業を勵みて家內睦しければ、德を得て磐城の如し。（楠公家訓）

〇勤むれば則ち匱しからず。（左傳）

〇營々として一生忙裏に過ぎ、屋上に靑天あるを知らず。（載復古）

〇務と疲の均衡を保ちて、而して日々多少の進境を見るは、實行の上乘なり。（ケロッグ）

〇いつまでもあけぬくれぬと營まん身は限りあり事は盡きせず。（明惠上人）

〇ひとすぢに心かけずばさゝがにのくものいがき（いがきは網）もかゝらざらまし。（行誡上人）

〇生き死の川に世を經て渡し守わたしはてずば棹もおさめじ。（契冲阿闍梨）

〇神代より世々に傳へし御鏡をくもらぬまゝにみがく嬉しさ。（古歌）

〇朝ねせば何につけても得はなし病もおこり用もかゝせば。（道歌）

つて來るのであります。曹洞宗義の眼目たる本證妙修の大功德も、盡く此の中に存するのであります。故に我等御互は、益々佛祖の御恩の最も深きことに感激して、寢るにも起きるにも南無釋迦牟尼佛の大慈大悲名號を念じ奉りて、以て報恩の行持を全うせらるゝ樣致されたいものであります。

參考

○菩薩は諸佛の實法を知らんが爲めに精進す。平等の法を知らんが爲めに精進す。乃至、一切の佛法を知りて廣く衆生の爲めに分別せんが爲めに精進す。（華嚴經）

○菩薩は衆生を修めて懈ることなく、勇猛の勢力能く制伏するものなく、能く一切の智門を滿足す（同經）

○汝等比丘、若し勤めて精進せば、則ち事として難きことなし。是故に汝等比丘當に勤て精進すべし。譬へば少水も常に流るゝときは則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心、數々懈り廢せば、譬へば、火を鑽るに未だ熱からずして息めば、火を得んと欲するも火を得べきこと難きが如し。（遺教經）

○今日我等が正法を見聞する類となる、祖恩必ず報謝すべし、其の報謝は餘外の法は中る可からず、身命も不足なるべし。（承陽大師）

○この生命は前來の行持の餘慶なり、行持の大恩なり、いそぎて、報謝すべし。（同）

遂げられたであらうと思ひます。又、二祖禪師は、始終、御開山の御傍に侍し奉られて、前後二十年の間御病氣の爲め御開山の御顏を見ざりしこと少かに十日であつたとある。御開山の跡を襲で、永平寺に住持したまふこと十五年、其の間、御開山の御尊像を方丈に安置し奉りて、朝夕御給仕したまふこと御在世の時に變ること無く、御退隱の後も、御開山堂の傍に今の孤雲閣を構へて之に住し、常に侍者の位地に立て御供養あらせられたのであります。實に稀世の行持ではありませんか。佛祖の掟を守りて母親に對する恩愛を顧みられなんだが如きは、全く本分の行持を以て報謝の正道となされたのであります。其の時の二祖禪師の御胸中は何んなでありましたらう。身を截らるゝよりも辛い思ひを爲して其の道を守られたのである。だが孝心の無い者などが、むやみに二祖禪師の眞似を致さうものなら、それこそ飛んでも無い間違になります。要するに、道を守ること堅く、道を行なふこと正しき者に非ればこの行持を全うすることは困難である。

困難とは申しながらも、決して不可能の事ではない。唯だ至心に、御恩の廣大なることを知りて、寢ても寤ても之を忘れず、日常一切の行持を以て報恩謝德の爲めに回向せんと願ふのである。卽ち一念懺悔の當體に身口意三業の罪障を淨め、進んで佛祖正傳の大戒を相續し奉る時は、直ちに平常心是れ道といふ境界に達することが出來る。さすれば、朝から晩までの起居振舞は、盡く御戒法の德相と爲り、道の作用とも爲り、而してそれがそつくり御恩報謝の正道にして、衆生利益の大願大行も皆な此の行持の上に具は

らに醉生夢死の間に彷徨うたりして居るのは、花を見ながら花の風趣を味ふことの出來ぬ癡漢よりも淺ましいではありませんか。

昔、我國曹洞宗の二祖、孤雲懷奘禪師と申し上げ奉る方は、御開山承陽大師よりは御年が二つも上であらせられたが、御開山に對し、又、其の母親に對して、御孝心の深きことは古今に類少なき御方でありました。御年十八の時、比叡山に上りて出家得度あそばされ深く顯密の學に通じたまひしが、母上が或時の敎訓に『汝をして出家せしめたるは、世に時めく譽れを得よとにはあらず、唯だ非人の相を守り雲水の身に甘んじ、佛樣や祖師方の行履に倣ひ、綿密に道を行なはしめんが爲めなるぞ』と仰せられければ、一層此の御語に勵まされ、それより諸方を遍參して、遂に御開山の門下に投ぜられました。御開山が宇治の興聖寺に在せし頃、他出に關する掟を『一月兩度一出三日』と定められた。即ち一月に二度の他出を限りとし一度の他出三日を越えずといふ制限である。其の折に二祖樣の母君が御大病になられたれば、一度は母親の許に至りて末後の安心を授けられ、且つ親しく御看病あそばされたが、彌々御危篤といふ時に至り、他出の掟を破る時は母子共に罪を佛祖に得んとて、遂に母親の許に至りたまはず、大衆に向つて『慈母の人情に隨ひ古佛の垂範に背かん不孝の過何ぞ免がれんや』と仰せられたとあります。古今無比の御孝心にてありながら、特に母親の最後に趣きたまはざりしは、恩愛の爲めに佛法の掟を破りたまはざる絶代の御行持です。不孝に似たる大孝とは此等の事であらう。斯る御方を子に持ちし母親は、定めし成佛得脱の素懷を

能く道を守り、徳を養なひなば、それが直に永久不滅の珍寶功德である。それがやがて四恩を報じ三寶を供養するの上乘なるものであります。故に華手經には『若し華香衣食湯藥等を以て諸佛を供養せば名けて眞の供養と爲さず、如來道場に坐して得る所の微妙の法、隨つて能く修學する者、是れを眞の供養と名く』とありて、徒らに種々の供物を佛前に捧ぐるのみが供養ではない。佛の御敎を守りて身口意三業を淨らかにするが眞實の御供養である。又、十住毘婆娑論に、佛は阿難尊者に告げて『天香華を雨らすも如來を供養恭敬すと名けず、若し比丘比丘尼優婆塞優婆夷、一心に放逸ならずして聖法に親近し修集する、是を眞に佛を供養すと名く』とも仰せられて、能く一心を治め諸の善法を行ふのが本當の御供養であります。

或る歌人が、一人の僕を連れて吉野山に上り、滿開の櫻花を愛觀して、終日興を盡しました。歸るに及んで僕に向ひ『今日は嘸かし汝も樂しかりしならん』と言ひけるに、僕は妙な顏をして『旦那は何が面白いのやら一日樂しさうにして居られたが、私の目には何處もかも花ばつかりで、外に何にも面白しと思ふたものはありませぬ』と答へたさうです。無風流の彼には花より團子、團子より酒を以て樂しみと思うたであらう。天眞爛漫たる櫻花を眺めながら、更に其の趣味を解すること能はず、風流の中に在りて風流を知らないのである。我等お互が、受け難き人間の身を受け、殊に遇ひ難き佛法に遇ひ奉り、此の三業六根を擧げて佛祖の行持を營なむことの出來るといふは、實に此の上も無い妙趣味、限り無き好風流ではありませんか。行持の功德を解せざる者は、此の妙趣味も好風流も一向に心得ず、徒らに人生を悲觀したり、徒

を營まん者は、先づ以て、日々の生命を等閑にせずというて、平生の此の身を徒にしてはならぬ。又、私に費さずというて、自分勝手に使うてもならぬ。如何ほど身體を遊ばさずに、働き通しに働いても、自分勝手の事にのみ働いた分では、働いただけの効能が現はれませぬ。事に依ると、働いた爲めに却て罪を累ぬることもあるものです。さすれば、此の等閑にすることゝ私に費やすことゝが、我等の行持を妨ぐる二大惡魔です。然るに、我等の平生はどうでありませう、果して日々の生命を等閑にせぬであらうか、果して日々の身體を自分勝手の方にのみ使はぬであらうか。人生五十年、其の間、道を行ふの年月はどれほどあるであらう。一晝夜二十四時間、其の間、道を守るの時間はどれほどあるであらう。多くは名利の巷に迷ひ妄念の淵に沈み、夢の如くに月日を送り幻の如くに時間を經過してをりはすまいか。『いつしかに今年も暮れぬ今年はと思ひし事もいたづらにして』とは、我等が齊しく漏すべき述懷ではあるまいか。金錢の爲めに働き衣食の爲めに勞するも強ち之を不可とは言はぬ。されど、金錢以外に寶あることを忘れてはならぬ。衣食以外に眞生命の資糧あることを心得ねばならぬ。無常の嵐忽ちに吹き來る時は、妻子珍寶たすくる無し、唯獨り黄泉に赴くといふが、古今東西に通じて免るべからざる人生の一大事實である。金錢も、衣食も、觀來れば短かき浮世の寶たるに過ぎぬ。我等の大安心は永久の寶を得るに在る。生々世々の大功德を成就するに在るのです。永久の寶、生々世々の功德というても別には無い。所謂日々の行持是れなりである。『假の世を假の世ぢやとてあだにすな假の世ばかり己が世なれば』で、假の浮世に在りながら

煩惱のことです。此の三毒煩惱の爲めに、道の中に在りながら道に背き、佛法の中に在りながら佛法に遠ざかる樣なことゝもなる。趙州和尚は南泉禪師の一語を以て學佛道の基礎と爲し、遂に古今獨歩の大善知識となられたです。然らばどうすれば、平常心が即道と爲るかといふに、唯だ我等の身口意三業が釋尊御相傳の御戒法に隨順し奉るの外は無い。御戒法は大道の妙徳妙用であるから、御戒法に隨順する時は身口意の三業がそつくり大道の姿と爲る。三業が道と爲る時は萬事萬行も道ならざるは無く、若し三業が道に背けば萬事萬行も皆な妄想顚倒と爲る。佛法の大目的といふも、畢竟、平常心是れ道なることを、徹底自得せしむるの外には無い。罪惡の衆生の爲めには山川草木も我身を苦しましむる種ならざるは無く、善根の衆生の爲めには天地國土も我身を樂しましむる器ならざるは無い。一休和尚の所謂『地獄遠きにあらず極樂眼前なり』であります。よく〳〵是の理を明らめて、三毒妄念の塵を拂ひ平常心是道に至る時は、商人が商業を營なむのも、農民が農作を勤むるのも、茶を喫むのも御飯を喫るのも、立つも坐るも、皆盡く佛法の行持と爲り、一擧手一投足の上にも、自利々他の功徳が任運に莊嚴せられます。斯くてこそ佛の御本意にも適ひ佛法の目的をも達せられて、佛樣が御辛勞遊ばされた甲斐もあるといふものです。故に此の日々の行持こそ、眞實、報恩謝徳の正しき道であるぞと御指南下されたのであります。

次の御文には日々の行持の致方を御示し下されて『謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、私に費さゞらんと行持するなり』と仰せられたは、涙の出る樣な有り難き御敎化ではありませんか。眞實の行持

ぬ。父母の御恩とても、唯日々に三牲の養を爲すのみで、滿足とは申されませぬ。況んや佛の御恩を酬ひ奉つるには、唯香を燒き花を捧げ、佛を念じ經を讀み、禮拜を行ひ堂塔を莊嚴することのみを言ふのではない。此等も御恩報謝の一分には相違ないが、形式的の供養は、動もすれば供養の精神を失ふことがある。諸佛廣大の悲願は、娑婆に往來したまふこと幾千返、骨を碎き血を流して我等衆生を濟度したまひしこと幾度なるやを知らず。其の御蔭に依りて、迷妄なる我等凡夫も、易々と盡未來際の大安心を決定し得ることが出來るのであるとすれば、普通一般の方法を以てしては、御恩の萬分一だも報じ奉ることは難かしい。故に『其の報謝は餘外の法は中るべからず』と仰せられたのである。

然らば如何にせば、眞實、恩に報い奉ることが出來るやといふに、次の御文には『唯當に日日の行持その報謝の正道なるべし』といふ有り難き御指南がある。日日の行持といふは、毎日々々朝より夕に至るまで一寸の光陰をも虛しくせず、眞實の道を守り持ちて三業の上に行なひもてゆくことであります。眞實の道を持ち行なふというても、强ち世間に遠ざかり人事を離るゝことではありませぬ。昔、支那禪門の俊傑と稱へられたる趙州和尚が、其の師南泉禪師に向て『如何なるか是れ道』と問はれた時、禪師は『平常心是れ道』と答へられた。卽ち佛道というても決して心の外に別にあるではない。我等の平常の心がソックリ道の姿である。心が心の通りに働きさへすれば、其處に佛の大道はあります。悲しいかな、我等凡夫は兎角に妄想顚倒の念に礙へられて、本心を本心の通りに働かすことが少ない。妄想顚倒とは貪瞋癡三毒の

夫と爲り妻と爲り、兄弟と爲り親類と爲りて、種々樣々の深き關係を有して居る。故に現在の此の世に於て、聊かでも眼に觸れ耳に觸るゝほどのものは、何時の世にか結び置たる因緣の結果が現はれて來たのである。行基菩薩が『ほろ〳〵と啼く山鳥の聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ』と詠れたも、山鳥の啼く聲の圖らず我耳に觸れるといふも、何等かの因緣があるからである。今こそ山鳥の身と爲りをるも、過去の世には、或は我等の親兄弟であつたかも知れず、或は夫婦、朋友であつたかも知れぬといふ意味を詠まれたのである。是の如き觀念に住すれば、一切衆生は皆我が恩人なりと心得て、眞實に報恩の行を營むべきである。普通の道德上に於ても、恩、禽獸に及ぶなどというて、禽獸蟲魚にまでも博愛の德を及ぼすべき敎はあれど、報恩といふ意味から出たのではない。然るに佛敎に於ては、最も大なる慈悲がやがて最も廣き意味の報恩行であるから、昆蟲と雖も、之を輕んぜず之を侮らず、益々之を憐れみ之を重んずべき道理の根據がある。斯くなければ所謂汎神的宗教の趣味は現はれませぬ。此の邊はよく〳〵味うて見て貰ひたいです。第四は佛法僧三寶の御恩である。是は云ふまでも無く宗敎上の報恩に屬し、佛弟子たる我等に取ては最も大切なる御恩德であります。修證義にては、殊に佛祖の御恩を報ずべきことを御敎へ下されてあるが、この中には自から他の三種の恩をも含んでをるものと心得て、回向の文にもある通り、四恩總て報じ三有普く資くるの心懸が無ければなりませぬ。併し報恩と申しても、徒らに物質的に重きを置けよといふのでない。天皇陛下の御恩に酬ゆるというても、唯租稅を納めたり法律を守つたりするばかりではいか

三十、報謝正道（修證義第二十九節）

其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日日の行持その報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さゞらんと行持するなり。

前節に於ては、報恩謝德の至要なることを示されて、古今の因緣を見るに、畜類と雖も猶ほ恩を知り恩を報ずることがまゝ有るではないか、況てや、萬物の靈長たる人間の身を受け、殊に佛祖正傳の大法に逢ひ奉つりて、佛の御弟子と爲りし者が、御恩を忘るゝ樣なことがあつては、畜生にも劣りて淺ましき極みなるぞと御誡め下され、此の一節の御文に於ては、然らば、如何にせば眞實の御恩報謝が出來るであらうかといふ、報謝の正道を御示し下されたので、最も大切なる御敎訓であります。

前にも述べた通り、我等御互が大恩を被むりて居る恩處を、大別すれば四通りある。即ち第一には御國の御恩、二には父母の御恩、此の中には先祖の御恩も含まれてある。三には衆生の恩、此の中には兄弟、夫婦、朋友等相互の恩も、先輩先進の人々の御恩も、社會同胞の御恩も皆籠つて居る。三世因果の道理より推す時は一切の衆生は皆我が恩人である。唯だ生物ばかりではない、日月山川、水土雨露も亦た我が恩處である。我等御互が、幾度か生じ幾度か死する間に於て、或は親と爲り子と爲り、君と爲り臣と爲り、

○母親の寐冷きづかふ夜寒かな。（紅葉）

○つけたのは人の智恵とし猿廻し。（東起）

○若し恩を知らざれば畜類より、愚かなるべし。（同）
○祖師傳法の深恩慇懃に報謝すべし。（同）
○父の恩は山よりも高く、母の恩は海よりも深し。（日本俚諺）
○恩を享けて報いざるもの禽獸に近し。（古聖）
○父の恩は水も溺らすこと能はず、火も燒くこと能はず。（露國俚諺）
○噫々我が子よ、汝若し父母の恩を感ぜずんば、汝の親友と爲るものなかるべし。何んとなれば、父母の恩に感ぜざる人には、親切を盡すとも無益なるを知ればなり。（ソクラテース）
○立ちならぶかひこそなけれ櫻花松の千年の色はならはで。（本誓）
○火の中をわけても法を聞くべきにあめ風雪はもののかづかは。（古歌）
○面影を千代につたへて父母のありしをしへを思ひはなつな。（慈雲尊者）
○とく法に心のはなはひらけどもそのみとなれる人はまれなり。（無難禪師）
○ありがたやいまながらへて世の中にまたもみのりを聞ぞうれしき。（田川とく子）
○やみ〳〵と斃れてやまじ敷島の大和おのこのつとめつくさで。（廣瀬中佐）
○折りとらば手ぶさに穢る立てながらみよのほとけにはなたてまつる。（僧正遍照）
○夢さめて後のそへちと思ふなよ夜宵からまもる母の手枕（古人）

佛祖廣大の御恩力であります。

故に我等は束の間も之を忘るゝこと無く、寢ても寤ても、三身具足の名號、三寶一如の稱題たる南無釋迦牟尼佛の御名を唱念し奉り、供養恭敬尊重讚歎し奉りて、御恩報謝の行持に精進するこそ、最も至要の佛事であります。

參考

○多聞なりといへども、もし修行せざれば不聞に等し、人の食を說くも終に飽く能はざるが如し。（首楞嚴經）

○善根とは、いはゆる善く順ひて法を聽くなり。（大集經）

○恩を知るものは、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。恩を報ずる者も、亦當に一切衆生を敎へて、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし。（大方便佛報恩經）

○正法に逢て身命を捨てざる我等を慚愧せん、愧づ可くば則ち此の道理を愧づべし。（承陽大師）

○祖師の大恩を報謝せんことは、則ち一日の行持なり。自己の身命を顧みること勿れ、禽獸よりも愚かなる恩愛惜んで捨てざること勿れ。（同人）

られたので、其の國は能く治まりて、萬民齊しく太平を樂んだと申すことである。釋尊は此の因緣を御說きあそばされて、其の時の長者は卽ち今の我身である。國王は今の彌勒、龜は今の阿難、狐は今の舍利弗、蛇は今の目連、惡人は今の提婆達多であると仰せられました。此の因緣の如きは實に趣味深い御敎訓であります。

人間は智慧が勝れて居る代りに、之を妄用し濫用するときは、畜生にも劣つた邪見邪業を働くに立至ります。怨に酬ゆるに恩を以てするは是れ上人、恩に酬ゆるに恩を以てするは是れ中人、恩に酬ゆるに怨を以てするは極惡の凡夫、三惡道の衆生であります。我身を愼しみ守りて、中等以上の人と爲り、益々大慈大悲の心を勵まして、怨に酬ゆるに恩を以てするの人となりたいものであります。我能く人を思へば人も亦た能く我を思ふ。因果の道理歷然として私は無い。古歌に『吾を思ふ人を思はぬ報にや我が思ふ人の吾を思はぬ』とあるが、實に面白き歌ではありませんか。增一阿含經には、孝行の功德は一生補處の大菩薩と同一であると說かれてある。正法念經には、四恩に報ずる人は無量の福を得、現在には人の爲めに讚歎せられ、未來には能く菩提を得ると示されてあります。殊に佛法の御恩德は、獨り現當二世の大利益を被むるのみならず、此の御敎に從ひ奉れば、卽座に懺悔の慈門に入りて業障の穢れを除き、佛の御戒法を相續して現身に菩提を成就して、平常心是れ道となりぬれば、朝な夕なの立居振舞が盡く孝順心慈悲心の妙用と爲り、盡く四恩報謝の行持となり、此の世からなる無上佛果の妙樂を得るといふは、皆是れ

喜び、此の御恩は生々世々忘却致すまじとて、涙を流して感謝したです。間も無く、船は或る土地に着しましたから、龜や蛇や狐に別れを告げ、彼の人間だけを伴うて、假りに宿所を定め、將來の方針などを考へて居りました。處が、彼の救はれた狐が、或日、百斤の金を持ち來りて長者に捧げ『是は昔の人の土中に埋め置きしものにして、今は世人に何等の關係も無き金なれば、安心して御用ひを願ひたし』と申した。長者は其の志を憐れみ、然らば之を貧民に施さんとて受取りしに、彼の同道せし人間が慾心を生じて、其の一半を分ちくれよと請求したのです。長者は餘りの事に呆れたれども、さあらぬ體にて、こは多くの人に施す所存なればとて、十斤だけを彼に與へました。彼は是を不足なりとし、果は長者を怨み、土地の官府に訴へて、彼の長者は塚を暴いて金を盜みしと申立てた。それが爲めに、長者は遂に牢獄に繫がれた。處が、或夜、曾て救ひし蛇が藥を口に啣んで來り、『此の度の御災難は御氣の毒の至りなれど、畜類の悲しさ救ひ奉らんやうも無し、唯だ私は此の國王の太子の足を嚙みて傷をつけやうと思ひます。如何なる名醫も其の傷の痛みを止めることは出來ぬ。其の時、貴君が此の藥を差上げなば痛立ろに去るべし。さすれば其の功に依て牢屋の苦しみを免かれたまふべし』というて、其の藥を呈しました。長者は不思議に思ひ居りしに、果して太子は蛇に嚙まれたまひしとて、城中、上を下への騷ぎ、長者は之を聞て、扨はと思ひ、彼の藥を呈したるに太子の痛忽ちに止り、傷さへ殘りなく癒えければ、改めて御呼出になり、仔細の事情を聞きたまひ、深く長者の慈悲を感じ、彼の惡人を憎み、之を追放し、長者をば國の宰相に取立

無學者でも惡人でも、平等に其の恩惠に浴するのであります。日々戴く御米一粒でも、七十二功豈に等閑ならんやというて、七十二度の手數が懸つて居るさうです。それをば、東西未辨の小兒までが、何の造作も無く、三度々々之を食して生命を維持して居るではありませんか。報本反始というて、其の本に報い其の始めに反れば、一粒の米も、一回の汽車も、實に有り難きことゝ思うて、感謝の誠を捧げねばなりませぬ。佛祖の御恩も亦た是の如く、釋尊が娑婆往來八千返、幾許の難行苦行を御積みあそばされたか知れぬ。又、此の佛法を今日迄に傳へられたる祖師方の御辛勞は如何計りでありませう。よく〳〵之を思惟せば、一句の御教、一法の御諭でも、深く其の御恩の廣大なるを感謝し、少しでも等閑の心を持ては相濟まぬことであります。

六度集經の中には面白き因縁が說てある。昔、慈悲深く信心篤き一人の大長者がありました。或時、巷間で一疋の龜を見て大に憐れみの心を起し、多分の金を出して之を買取り、水中に放ちました。其の後、大洪水の爲めに家を流され產を失なひ、命から〴〵、船に乘り流れ行きしに、彼龜が現はれて船を護つてくれました。暫くすると、一疋の蛇が流れて來ましたから、長者は救ひ上げて船に載せたが、又もや一疋の狐が漂ひ來りしゆゑ、それをも救うて船に乘せました。最後に一箇の人間が流れて來ましたから、之を救はんとせしに、龜は之を止めて、兎角、人間には僞多し、他日恩を怨で返すこともやあらんとて、救ふことに反對したです。情深い長者は何條之を見棄つべき、遂に其の人間を助けました。其の人は大に

尚ほ恩を報ず、人類爭でか恩を知らざらん』と結ばれて、雀や龜の如き畜生ですら、是の如く御恩を報謝する例もあるに、萬物の靈長たる人間が御恩を忘れては相成らぬぞとの御誡めであります。心地觀經には『知恩報恩是れ聖道』とありて、御恩の深大なる所以を知りて、能く之を報謝するのが大聖人の道である。御開山大師は『世人のなさけある金銀珍玩の蒙惠尚ほ報謝す、好語好聲のよしみ、心あるは皆報謝のなさけを勵む、如來無上の正法を見聞する大恩、たれの人面か忘るゝ時あらん、是を忘れざらん一生の珍寶なり』とも仰せられ、聊かの金子を惠まるゝさへ其の恩に酬ゆるの志がなければならぬはずのものです。況てや、無量劫來の罪障を消滅して今生後世の功德を成就し、此の身此の儘、佛果菩提に證入するといふ甚深微妙の法門を開示したまひたる大恩は、生を易へ身を易へても報謝し奉らんことを誓はねばなりせぬ。

之を今日の交通機關、其の他、文明の利器に例へても能く解ることです。交通の上では、陸に汽車、電車、人力車あり、海に汽船あり、通信の上では、新聞あり、電信あり、電話あり、郵便あり、智を磨くには學校あり、病を癒すには病院あり、文明國の有り難さは、坐ながらにして全世界の所有機關を應用することが出來ます。併し、其の本はと尋ぬれば、鐵道を敷き汽車を通ずるにも、其の勞力と金力とは並一通りではない。洞門一つでも幾千萬の金を費やし幾百萬の人を役し、若干の死人や怪我人を出かして居るか知れぬほどの困難を歷て居る。出來上つて見れば、非常なる便利を一般の人に與へて、老人でも子供でも

に自在に之を運用するが故に、藏というたのであります。故に、正法眼藏とは佛祖正傳の佛法のことです。我等は何の幸ぞ、座ながら此の正傳の佛法を見もし聞きもして、飽まで之を信じ奉り、飽まで之を行なひ奉ることを得らるゝといふは、御開山が『この生命は前來の行持の餘慶なり行持の大恩なり』と仰せられた通り、正しく佛祖廣大の慈恩に依るのであります。

次の御文に『病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり』とあるは、前の廿三節の『窮龜を見病雀を見し時彼が報謝を求めず唯利行に催さるゝなり』といふ處に於て委く御話しを致して置いた通り、古昔、支那の楊寶といふ者が、華陰山に於て病に苦しめる雀を救ひしに、其の病雀が童子の姿で楊寶の枕邊に現はれ、四箇の白き玉の環を呈して、貴君の子孫は此の玉の潔白なるが如くにして、且の貴君の子孫が出世して三府というて宰相の位に昇らるゝこと此の環の數の如くならんと申したが、其の豫言に違はずして、楊寶の子孫は四代續いて三公の位に登つたといふことです。是れ卽ち病雀の御恩に報いたる因緣である。又、晉の敬康が、餘不亭といふ處で、圖らず人に捕へられて困窮して居る大龜を助け、後に其の土地の領主と爲つた時、餘不亭侯の印といふ役印を鑄らせた處、其の印の鈕と爲るべき龜の首が、左へ傾いて居るから、數回鑄直させたが、どうしても首が正眞に出來ぬ。而して、それが龜を助けた時の姿に寸分違はぬ處より、是れ必ず彼の龜が我を守護する徵證ならんとて、首の曲つた儘用ゐたとある。是れ卽ち窮龜が恩に報いた因緣であります。故に後の御文に『畜類

那の六祖大師は、黄梅山に上りて、八ケ月の間、晝夜米を搗きつゝ工夫を凝らしたまひ、雲巖禪師は四十年間脇を席に着けたまはず、百丈大智禪師は、五百人の善知識となりても、猶ほ大衆と與に洒掃に從事し『一日作さゞれば一日食はず』といへる敎へを垂れさせられ、趙州禪師は、六十一歲にして初めて行脚の途に上りたまひ、難行苦行二十年、說法化導四十餘年とある。過去の諸佛や三國の祖師は、皆な是の如く大法を求め佛道を究められたが、其の御目的は唯だ一切の衆生を濟度し盡さんとの大慈悲心に在るのである。若し此等の佛祖在まさゞりせば、爭でか眞實の佛法が今日まで流傳すべきや。故に次の御文に『佛祖若し單傳せずば如何にしてか今日に至らん』と仰せられたのであります。

斯る大恩ありと知りなば『一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況んや正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや』で、僅かに一句を授かり一法を傳へられただけでも、猶ほ且つ其の御恩を忘れずして之を報謝するこそ眞の人の道である。況てや、正法眼藏無上大法の大恩というて、此上も無き貴とい大法を相續したまへる大恩をば、どうして報謝し奉らずに居られませうぞ。正法眼藏とは、正法は正しき御法で、卽ち佛法のことです。眼は眼目で悟の換名です。眼を以て明らかに萬物を見るが如く、正法の上に開きたる智慧の眼は、能く生死の根源、天地の本體、人々本具の佛性でも徹底見拔くほどの妙用あるが故に、眼というたのである。又、藏は寶藏で、德の換名です。藏には諸の寶を收め、時に從つて之を運び出すが如く、正法の上に具はる道德の藏には、諸の善根功德の寶を收めて、自利利他の上

とぞといふに『佛祖面々の行持より來れる慈恩なり』で、古の佛樣や祖師方が身を捨て命を棄てゝ、此の大法を修行し證得し、面受し面禀せられたる行持の賜であることは申すまでも無い。釋尊因地の御修行は何んなであつたらう。達磨大師や御開山の御艱難は何んなであつたらう。御開山大師が坐禪といへる題にて詠ぜられた御歌に『いたゞきに鵲の巣やすくふらん眉にかゝれる蜘蛛の絲』とあります。是は正しく釋尊因地の御修行を讀みこみなされたのであります。釋尊が因地に於て山中に坐禪觀法せられた砌、鵲といふ鳥が御頭の上に巣を作つたことがある。釋尊が定を出でゝ之を知りたまひしが、今此處に於て身體を動かす時は、あはれや鵲の巣は必ず破れるに相違ない、如何にも不便至極の事なりとて、其の儘再び定に入りたまうて、遂に鵲の雛が產るゝまで出定せられなんだとある。又、下の句は、釋尊が六年苦行の折、眉毛の處に蜘蛛が絲を張て巣うたことがある。さゝがにとは蜘蛛のことです。釋尊は是をも厭はせられず、却て一層御憐れみあそばされたとある。又、達磨大師は佛祖嫡傳の禪風を弘通せんが爲めに、百歲以上の御老軀を提げ、航海三周を經て支那に來られ、錫を嵩山の少林寺に駐め面壁九年の行持を遊ばされた。御開山大師は、大小顯密の經論に精通せられたるにも拘はらず、御年二十四の時、遠く宋土に渡り、諸方を遍參して、遂に天童如淨禪師の輪下に投ぜられ、前後三年の御辨道、從晝至夜脇席に着けず、暫時も御眠り無く御參究なされたとある。其の他、西天の初祖迦葉尊者は、十二頭陀といへる難行を修せられ、釋尊が半座を分ちたまふほどの聖域に上らせられても、猶ほ難行を休みたまはなんだ。支

二十九、見佛聞法（修證義第二十八節）

今の見佛聞法は佛祖面面の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば如何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり、畜類尙ほ恩を報ず、人類爭か恩を知らざらん。

此の一節の御文は前節の御垂訓に引續いて、我等御互が、今日幸にして見佛聞法の勝縁を結ぶことを得たるは、皆是れ佛祖廣大の慈恩に依るものであるからして、縱ひ身命を抛捨するとも誓つて此の大恩を報謝し奉つらねばならぬぞといふことを御示し下されたのであります。故に最初の御文に『今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり』と仰せられたのである。見佛聞法とは、我等が親しく佛を拜み奉つり、又、佛の御法を聞き奉つることであります。前節に於て委く申し述べた通り、若し我等が不幸にして佛法弘通の世に生れざりせば、縱ひ此の身を捨てゝ法を求めんと欲するとも、猶ほ一句一偈をだも聞き奉つることは出來ませぬ。然るに、斯く易々と佛の御前に禮拜して、座ながら佛の正法を聞き奉ることを得るといふは、實に是れ生死の中の善生、最勝の生と申すべきである。而して、是れは誰の御蔭に依るこ

〇六つの道いく世もしらずめぐり來て今此の法に逢ふぞうれしき。（よみ人しれず）

〇あしゝとてそしりやはすな恩を得ておのが身をおく國のおきてを。（最明寺）

〇身を捨てし雪の深山の雪よりもふかきは法のみとりなるらん。（行誠上人）

あまねからざる故なり。すでに寶をむさぼるとき、女人の寶にてあれば、得べからずとおもはず。法を求めんとする時は、この志にはすぐるべし。(同)

○四河海に入つて亦た本名無く、四姓出家して同じく釋氏と稱す。(同)

○ほとけを供養したてまつらんとするに、その身まづしと云ふことなかれ、そのいへまづしといふことなかれ、みづから身をうりて、諸佛を供養したてまつるは大師釋尊の正法なり。(承陽大師)

○賢を求むるに德を以てし、聖を致すに道を以てす。(三略)

○惟り仁者は能く人を好みて、能く人を惡くます。(孔子)

○無禮は傲慢の極度にして、人間を輕蔑するより起るものなり。(チメルマン)

○崇敬の心と慈悲の心との二が、年を積み時を累ねて其の大をなすにあらずんば、大人とは云ふべからず。(テニソン)

○法の爲め身をば薪になしてこそきえても消えぬ烟なりけり。(行誠上人)

○けふひける駒ののりこそかしこけれ佛の道に逢坂の關。(古人)

○佛にも變らぬ姿得るの身はあやしかりける契ならずや。(同)

○法の爲め國のためにはをしからず遠き島邊によし朽るとも。(東紫師)

○消えやすき我身にかへて尋ねみん妙なる法の道しばの露。(大僧正乘雅)

ねばなりませぬ。我本師釋迦牟尼如來は、此の娑婆世界に來りたまふこと八千返、我等衆生を濟度せんが爲めに、艱難をも艱難としたまはず、辛苦をも辛苦と思召さず、我等を導くに受戒入位の法門を以てしたまふ。其の深大なる御恩徳に比ぶれば、須彌も高しといふべからず、滄海も深しと稱すべからず、故に、佛祖の正法を信受奉行する我等は、一層厚く釋迦牟尼如來の恩徳を感謝し奉るこそ、信念相續行持精進の大事であらうと思ひます。

參考

○一切の凡夫は衣食臥具に着し、身の爲にして心樂む。菩薩は若し衣を須ふる時は、身の爲めにせずして但法の爲にす。（涅槃經）

○菩薩この深般若波羅蜜を受持し、乃至憶念するとき、未だ佛前に劫數の記を受けずといへども、この菩薩は、自ら近く菩提の記を受くること、久しからざるを知る。（大品般若經）

○たゞ般若を尊重するがゆゑに、日々に百千兩の金を食せしむべし。天食をおくりて供養すべし（承陽大師）

○むかし野干を師として禮拜問法する天帝釋あり、大菩薩の稱つたはれり。依業の尊卑によらず。（同）

○無上菩提のため、何ぞ得法のうやまふべきを敬はざらん、これ法を重んずる志淺く、法を求むる志

三衣一鉢の外一物の寒さを凌ぐべき無し。偶ま萬子といふ人を訪うて木炭を無心せんとて『寒ければ山より下を飛ぶ鴈に物打荷ふ人ぞ戀しき』といふ歌を讀みしに、萬子は直に『寒ければ山より下を飛ぶ鴈に物打荷ふ人をこそやれ』と答へて、木炭を贈つてくれました。『山より下を飛ぶ鴈に物打荷ふ人』とは山の字と厂の字と、人の字の兩肩に點を打つた火の字とから成る『炭』の字を讀み出したのです。斯くて、秋の坊は明る年の正月四日といふに死んだ。其の日、恰も友人の李東が尋ね來りて、平生の如くに面白く談笑してありしが、不圖思ひ出したやうに、李東に向つて、私は新らしき暦を作つたに依て聞てくれたまへとて『正月四日よろず此世を去るによし』といふ句を讀むや否や、其の儘目を閉ぢて奄然として死んで了うた。流石の李東も大に驚き、一は無常變遷の速かなるを感じ、一は秋の坊の生死岸頭に大自在を得たるを歎じて『稲つむと見せて失けり秋の坊』といふ一句を詠じて、遺骸に手向たといふ話があります。眞に能く風流を樂しむ人は決して物質的の束縛を被らぬ。眞に能く歌道に志す者は、浮世の塵を離れて天眞の妙樂を得るものである。

況てや、難値難遇の佛法に逢ひ奉りて生々世々の好因縁を結ぶといふ、最も尊とき身の上となりし御互は、寝ても寤ても自らの果報を歡喜し踊躍して、益々身口意の三業を淨めて懺悔の功徳を圓成し、佛法僧の三寶に歸依し奉りて佛戒相續の因縁を保任し、衆生利益の誓願は境に觸れ物に接し、彌々堅固と爲り、四恩報謝の行持は時に隨ひ機に應じて益々精進し、一刻も早く修證一如の彼岸に到達せんことを願は

和らぐことを要とす。和らぎて後は禮を以て其の節を正しくすべし、是れ人を歸服せしむるの道なり』と言はれければ、休翁大に感じ、是より和歌を學びて、後には名高き歌人となりました。休翁、或時、古今集の序を讀みしに、紀の貫之が文屋康秀の讀みたる歌を評して『ことば巧にてその樣身にそはず、いはゞ商人のよききぬきたらんが如し』とあるを見て、深くも之を感じ、それより節儉を施して絹の類は一切身につけず、家族一同と共に木綿のみを用ひ、孫子にまでも此の掟を守らしめければ、家業は長へに繁昌致したといふことです。眞理は遂に一つである。歌道を論じたる文章の一節も、其の理を究めて正當に應用する時は、修身齊家の大本と爲るのでございます。啻に修身齊家の大本と爲るのみならず、是に依て金剛不壞の大安心を決定するの因緣を成ずることもある。

加州金澤の俳人秋の坊は、夙に風流の聞えありて頗る脫俗の生涯を送つた人である。湖南を過ぎて芭蕉翁を幻住庵に訪はれけるに、翁は盡く喜ばれて、むさくるしき小庵なれど心置なく逗留あれよとて『我宿は蚊の少なきを馳走かな』の一句を詠ぜられた。秋の坊も亦た翁の志を感謝して暫く玆に止まり、一簞の食を分ち一瓢の飲を共にし、山雲海月の樂は自から其の中に在つたであらう。辭し去るに及んで、翁は山の麓まで送られ、彌々袂を分つに臨み、翁は送別として『やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲』の一句を贐とせられた。翁といひ、秋の坊といひ、唯だ天眞の風流を樂んで、毫も形骸の爲めに累はされぬ趣があり〳〵と見える。秋の坊の故郷に返りし頃は、降雪繽紛として朔風膚を劈くの光景でありしが、

には貪着せぬが宜い。然るに、世の中には肝心なる佛法の本意は、そつち除にして、徒らに役にも立たぬ佛法中の塵や芥のみを覺えたり、姿の色香のみを追ひ廻る者が多いものである。實に情け無いことではありませぬか、誰やらの書いたものゝ中に、法を聞く者の耳に三通の種類を掲げてあつた。第一は籠耳で、是は右の耳から入つて直ぐ左の耳に拔けて少しも心に留らぬ者のこと、第二は笊耳で、是は味噌漉笊の樣に正味の處は皆下に漏れて滓ばかり殘る人のこと、第三に巾着耳で、是は正味の御寶を內に收めて外へ漏れぬ樣に口をしめて置く人のことである。籠耳と笊耳は甚だ感心せぬ。どうか御互は巾着耳を以て法を聞かねばならぬ。其の志専らにして法を求むること切なる時は、老子に所謂『善人は不善人の師、不善人は善人の師』で、善人に接すれば自ら其の善を學び、惡人に接すれば自ら其の惡を誡め、見るものも聞くものも、盡く教訓と爲り警誡と爲りて、益々己れが智德を進むるものである。

昔、泉州の堺に休翁といふ人がありました。茶禮等に精しく、且つ慈悲心ありて、召使ひなどをいたわること兄弟骨肉の如くなりしかば、仕ふる者も親の如く敬ひました。かういう有樣であつたから、家庭は極めて圓滿で家運も益々繁昌したです。或時、京都に上りて某の大納言に見えける時、大に敷島の道を勸められ、『人として文雅の心懸なく、歌よむことさへ知らねば、聲なき鳥を、麗はしく蒔繪したる籠に飼ひたると同じく、殊に豪商の主たる者は、文雅風流のたしなみなくんば、日々の事業偏執に傾き易く、更に和ぐといふことを缺くべし。抑も身を修め家を齊ふるは聖人の敎へたまふ所なり、此の敎へを守らんには

故に、日々三時というて、朝も日中も晩も之を禮拜し恭敬して、聊かでも患惱というて、厭うたり嫌うたり、退屈したりするやうなことがあつてはならぬ。般若は梵語、此に智慧と譯してある。即ち佛樣のお悟りのことである。大小顯密一切の藏經は盡く佛樣の御悟りの說明に過ぎぬ。佛教を尊とぶのは佛の御悟りが尊といからである。其の尊とい御悟りを聞き奉るには、虛禮や虛飾は要らぬ。形式や體裁は第二第三である。唯々佛の御本懷をとつくりと呑こむことが大切である。古の佛菩薩は、或は野干より法を聞き、或は鬼神より法を聞き、或は非人より法を聞き、或は眷族より法を聞きたまひしも、法を重んずること切なるが故に、之を說く人の何者なるかは殆んど忘れたるが如くであらせられた。佛法を求むるに熱心なる人、眞理を尋ねるに忠實なる人は是非かうなくてはならぬ。尤も、これは聞く方の人の心得を示されたものである。若し說く方から申せば、苟も佛法を說かんと欲せば、必ずや相當の品格と態度とを具へ、眞に法を重んずる者は自己をも重んずべきは當然のことである。此の邊は能所共に注意し用心して、佛法の影法師ばかりを穿鑿せず、直下に修證の大本領を捉へる樣にして貰ひたい。

高祖大師の御偈に『飲水の鵞は能く淳味を取る、採花の蜂は餘香を損ぜず』といふ句があるが、是れ譬喩です。鵞鳥といふ鳥は如何なる濁水の中にも浮び、其の中で能く、淳味というて、滋養となるべき好き味のみを取て、芥や塵は飲まぬ。又、蜜蜂が花より蜜を採るにも、決して花の色香を損ぜぬ。佛法を求むる者もかうでありたいものである。言語や形に取付ずして、唯だ佛法の正味を領解し、毫も表面の事柄

ならぬ。釋尊が極樂往生を御勸め下されたのは、別に深き御教訓の存することで、決して自分一己の安心快樂を御勸めあそばされたのではない。一部一卷の御經文を拜讀するにも、よく〳〵佛の御思召を酌み分ける力が無いと、飛だ量見違ひに陷いることがあるものです。

次に『見ずや、佛の言く、無上菩提を演說する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、(乃至)但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れ』といふは、佛の正法に値ひ奉りし因緣を喜び願ふ人々は、其の正法を見聞するにも重々の心得あることを、佛語を引て懇篤に御示し下されたのであります。無上菩提とは此の上も無き佛の道といふことである。幸に無上の佛道を演說する人に遇ふことを得たならは、心を空虛にし念想を靜めて、單刀直入に佛の御本懷を聽取りて、佛法の眞實義を信受する樣に致さねばならぬ。其の演說する人の種姓というて、氏や素姓が如何であらうと、そんなことを觀て貪着する樣では役に立たぬ。又、容顏とて、顏色や容貌が醜くからうが美しからうが、それにも關係うてはならぬ。又、其の人に非理い事があつたにもせよ、其の平素の行が宜しからぬにもせよ、其等の事を嫌ふにも及ばず、考へ糺す要も無い。そんな表面の事柄が目に付て邪魔になる樣では、迚も眞實の發心は得られませぬ。其の人の如何を論ぜず、只だ其の法の眞實を喜ぶが宜い。縱や惡魔であらうと非人であらうと、貧者であらうと小兒であらうと、其の說く所の佛法が眞正であつたならば、至心に其の法を尊とび重んじて、之を敬ふやうにせねばならぬ。唯般若を尊重するが

徳を信ずる人は果して幾許でありませうぞ。見物心で御寺詣りをしたり、病氣平癒ぐらゐの目的で百度參をしたり、淺草の花屋敷を見た次でに觀音堂に立寄るとか、豆撒を見る爲めに成田不動堂の境內に入つたとか云ふ様な連中は、隨分澤山あるであらうが、佛祖正傳の大戒を相續して、身口意三業の罪垢を淨め、生々世々を期して大菩提心を發すといふ様な方は、曉天の星よりも稀れではあるまいかと思はれる。佛法の中に居りながら佛法の味を知らず、佛の御傍に住みながら佛の光明を感ぜぬ人の多いのが今の世の有様であります。

して見れば『正法に逢ふ今日の我等を願ふべし』で、我等こそは實に喜びても猶ほ餘りある身の上ではありませんか。故に此の『願ふべし』と仰せられた御語は深く味うて見ねばならぬ。我等は既に即身成佛の大因緣を結んだ身である。衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入るで、最早三世諸佛の御仲間入の濟んだ身である。此の上に徒らに心外に法を尋ね、別に佛國土を求むるには及ばぬ。何處〳〵までも今日の如き結構なる果報を願うて、生々世々、娑婆世界を離れずして大菩提の行願を圓成することこそ、本望中の本望ではありませんか。後嵯峨天皇は一天萬乘の君主で在しながらも『なか〳〵に人より物を思ふかな世を思ふ身の心づくしは』と御詠じあそばされてある。御身が貴とければ御誓願も亦た一層廣大である。十方三世の諸佛諸菩薩は、御一人として斯る大誓願を發したまはぬは無い。自分一人だけ極樂に往生して七珍萬寶の臺に上り、百味の飲食に飽き不老不死の樂しみを受けやうなどゝは、餘りに得手勝手な考と言はねば

り、兄弟となり朋友となり、又、同く帝國の臣民と生れ、同く至公至仁なる君主を戴き奉り、同く同胞兄弟と稱せらるゝが如きは、決して一世や二世の因縁ではない。過去の過去際より深き關係が相續して玆に至つたものと心得ねばならぬ。一河の流を掬み一樹の陰に宿るさへ常々ならぬ因縁ぞと思へば、つゆ聊かも疎略には致されぬものである。況てや幾千萬里の山河を隔て、三千年の歲月を歷たる大聖釋迦牟尼如來の御法をば、面り見もし聞もして、是に依て無始刧來の迷の夢を覺醒し、是に依て未來永刧の大安心を決定するといふは、並大抵の因縁ではない。故に、贊題の御文の初めに『靜に憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲め抛捨せんことを願ふとも値ふべからず』と仰せられたのです。

雪山童子は山中の鬼神より、僅かに『諸行は無常なり、是れ生滅の法なり』と云へる二句の偈文を聞きて喜びに堪えず、更に次の二句なる『生滅々々し已つて、寂滅を樂と爲す』と云へる文を聞かんが爲めに、身を鬼の口に投ぜんとせられたとは、涅槃經に說きたまひし因縁がある。又、常啼菩薩は身命を賭して般若を東方に求めたまひしとは、大般若經の說である。又、支那禪門の二祖慧可大師は、魏の嵩山に上りて達磨大師に參じたまひし時、大師一言の御說法を聽聞せんが爲めに、左の臂を斬つて大師の面前に捧げ、其の志を示したまうたと云ふではありませんか。若し佛の正法が此世に傳はらざりせば、斯く身を棄て命ちを捨てゝ之を求めんと欲するも、猶ほ遇ふことの叶はぬものである。縱ひ我が國の如く佛法流通して居らうとも、因縁の薄き者は滅多に聞き奉ることは出來ぬ。我が七千萬の同胞中に於て、眞に能く佛法の功

二十八、尊重般若（修證義第二十七節）

靜に憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべからず。正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし。見ずや、佛の言はく、無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して、更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。

前節に於ては、三世の諸佛は、此の娑婆世界に生れて人間の身を受けたまひし時に、眞正の御發心をなされた、我等も幸に此の人間の果報を受け、殊に釋迦牟尼如來の御法に遭ひ奉りしは、またと得難き發心得道の好機會なるぞ、との御敎訓であります。此の一節にては、取分け佛法に逢ひ奉りし因緣の等閑ならぬことを御示し下されたのである。

凡そ世の中の事は、何事にも皆夫々の因緣のあるもので、諺にも『つまづく石も緣のはし』又、『袖すり合ふも他生の緣』などと申すが、途中で袖と袖との觸れ合ふも、目と目とで見合ふのも、盡く幾分かの因緣が存して居るに違ひない。風の吹くのも雨の降るのも、花の開くのも葉の落つるのも、決して偶然とは言はれぬ。必ずや相當の因緣に依らざるは無い。人事の上から云うても同樣で、親子となり夫婦とな

○我滅後に於て、當さに波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇ひ、貧人の寶を得るが如し。(同經)

○この心(菩提心)を起すより後、さらにそこばくの諸佛にあひたてまつりて供養したてまつるに、見佛聞法し、更らに菩提心をおこす、雪上加霜なり。(承陽大師)

○佛法に値ひ奉ること無量劫にも難し、人身を得ること難し、設ひ人身を受くると雖も、三洲の人身は好し、其の中に南洲の人身は勝れたり、見佛聞法出家得道するゆゑなり。(承陽大師)

○進めよ、進め、汝の遭遇せる困難は汝が進むに隨て自ら解散せん。進め、然らば、一條の光明は益々燦然として、汝の行路を照すべし。(佛國天文學大家アラゴー)

○極樂をねがふおもひのけぶりこそむかひの雲とやがてなるらめ。(源信)

○うれしくも人と生れて御佛のさとりの道もこれよりぞ入る。(行誡上人)

の菩提心を發せらるゝやう致したいものであります。業障の雲深しと雖も至心懺悔の風は之を拂うて痕跡を遺さず、大覺の海廣しと雖も正傳大戒の船は我を載せて邊際を究む。菩提の行願は無邊の利益を一切の衆生に頒ち、佛法の行持は最勝の報謝を四種の大恩に盡し、治生產業も妙修の功德を現はし、造次顚沛も本證の光りを放つことゝ相成りまする。斯の如き境界を成ずるのも、盡く是れ釋迦牟尼如來大慈大悲の御賜であれば、取分け其の廣大の御恩に感泣し、行住坐臥の間にも御恩報謝の行持を勵み、以て佛弟子たるの本分を全うして貰ひたいのであります。

參考

○諸佛の一切の功德は皆初發調伏心中（こゝろをおさむるはじめ）にあり。ゆゑに菩薩は、世間に遇ひ難く、佛もまた値ひ難し。たとへば、牛なければ、すなはち醍醐なきがごとし。もし菩薩發心なければ、すなはち佛種なし、發心を難しと爲す。發心難きがゆゑに、佛もまた得がたし。たとへば海寶に無價のもの少く、餘寶甚だ多きが如し。（華手經）

○善法を修習し、諸の實相を證し、深く禪定に入て、十方の佛を見奉る。（法華經）

○大悲世尊、所說の利益は、皆已に究竟す。（中略）又善く導くもの人を善道に導くが如し。之を聞て行かざるは導くものゝ過にあらず。（佛遺敎經）

ら我慢して居るのである。故に人間と畜生との區別は、堪忍の有る無しに依て分ると申しても宜しいのである。

釋尊の如きは、悉多太子といふ貴い御身でありながら、四門御遊觀の折、老・病・死の三苦を實驗せられ、それが近き因緣と爲つて、檀特山の雲に分け入りて修行の功を累ねたまひ、菩提樹の下に明星を一見して、遂に智德無限の光明を發揮あそばされた。是れぞ、人生苦難の狀態に促がされて堪忍の德を現はされたのであります。御開山承陽大師は、八歲の御時に母公の喪に御逢ひなされ、枕邊に立ち上る香の煙を見そなはして無常の理を觀じ、それが動機と爲つて、比叡の山風に御衣の露を拂ひ、遂に見性成佛の大聖と爲られました。是れ亦た堪忍力の最も大なるものであります。人間の如來は人間に同じて居らるゝ如く、我等も釋尊も決して別種ではない。太祖國師も『たゞ諸人の精進と不精進とによりて諸佛頭出頭沒せるのみなり』と仰せられた通り、唯だ志の深い淺い勉強の强い弱いに依りて、佛ともなり凡夫ともなる。御開山も我等も根本に於て大差は無い。唯だ信念の厚い薄い堪忍力の有る無しに依りて、悟ともなり迷ともなるのでございます。

今我等は、宿善の助くるに依りて、既に受け難き萬物の靈長たる人間の身を受け、既に遇ひ難き萬國の極宗たる佛法に遇ひ奉つれり。何の幸か之れに過ぎん、何の喜びか之れに加へん。此の幸多くして喜こぶべき身心を徒らにせず、順緣に接する時も、逆境に觸るゝ時も、毫末の油斷なく、急ぎて淸淨

の力を有して居る。又、堪忍を離れては、一日でも人間として存在することが出來ぬから、娑婆と名けたのである。天には不測の風雲あり、地には不慮の災害あり、季候には寒熱あり、日月に明暗あり、人に善惡あり、花に開落あり、若し之を忍ぶの力なかりせば、暫時も人間の役目は務まらぬ。克己復禮の敎、修身齊家の道、都て堪忍の德に依らぬは無い。釋尊一代の聖敎も、堪忍の力でなければ活動せぬ。故に悲華經には『何んが娑婆と名くるや、此の諸の衆生、三毒及び諸の煩惱を忍受し、能く此の惡を忍ぶが故に忍土と名く』とあります。我等は先天的に、堪忍といふ大荷物を擔いで生れて來たのである。あゝ堪忍なる哉、堪忍なる哉、我等は堪忍の國土に生れて堪忍の務を負ふ者ぞ、と平生覺悟して居さへすれば、人間一代の行程、其の道萬差なりと雖も、驚くことも怨むことも無いはずです。娑婆とは實に能く名付けたではありませんか。法華經には『忍辱の衣』というて、堪忍を着物に喩へてあります。人間は、如何なる美人でも、裸體では見られたものではない。如何ほど熱い時でも着物なしには居られませぬ。其の代り如何なる醜婦でも、キチンと着物を被て禮を行ふ時は、必ず相當の品格が備はるものです。さすれば着物といふものは我身を飾る第一の要具である。堪忍の無い人は、萬事に就て成功の出來ぬのみならず、一切の惡德は、多く堪忍の無きより發生して、到らずといふこと無し。故に、寒暑と晝夜の別なく着物を着くるが如く、寢ても寤ても堪忍の衣を離してはならぬ。畜生などは此の堪忍といふ德を持たぬ。犬や猫が、人前で遠慮する樣なこともあれど、あれは堪忍より出づるに非ずして、恐怖より生ずるのである。恐ろしいか

常なる困難を嘗めて居るか、又は他人の艱苦を自己の事の如くに感ずるかして、よく〳〵世の中の事情にも通じ、其の心の中には、忍ばんと欲するも忍ぶ能はざるものあるを認むることが出來る。言ひ換れば、盡く悲愍の涙を持て居らぬは無い。古の忠臣孝子、仁人義士、貞女烈婦も皆此の涙の結晶つた人々というても宜いであらうと考へる。諺にいふ『可愛い子には旅させろ』で、此の世の苦痛困難が、却て菩提心を發するの機會を與へてくれるのである。『今是の如くの因縁あり』で、我々御互は、幸にして人間の身を受くることを得て、最も菩提心を發するに適當なる因縁を有して居るとすれば、御互の身の上ほど幸福なる果報は無いではありませぬか。

次の御文には『願生此娑婆國土し來れり』とありて、我等は全く宿世に於て植ゑ置きし善因縁の力に因りて、此の娑婆世界に生れて來たのである。人間の此の身こそ、正しく過去幾億萬劫より願ひに願つた果報を受けたのである。加之『見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや』で、親しく釋迦牟尼佛の御法に逢ひ奉りて大戒相續の御弟子と爲り、恰も、面り釋迦牟尼佛を見奉るも同然の身の上でありますから、深く自ら此の身の果報を喜んで、深く自ら此の生の幸福なるを悦び、自ら其の身を尊び其の果報を重んじて、苟めにも此の光榮ある生涯をむざ〳〵と過ごす樣なことを致してはならぬ。サア此處に氣が付きさへすれば、一寸の光陰をも等閑にせず、急ぎて眞の行持を勵み、以て人生最高の大目的を全うせねばなりませぬ。娑婆といふは梵語で忍土と譯してある。忍土とは堪忍の國土といふことです。人間は自然的に堪忍

ある。山の半腹の四方に在るのが四天王天、海を隔てゝ東西南北に洲がある。即ち東弗婆提洲、西瞿陀尼洲、北拘盧洲と、それから南閻浮洲である。其の南閻浮洲が本文の南閻浮です。閻浮は勝金と譯して樹の名であると申すことです。此の南閻浮洲、即ち我等の生れた世界は、苦みもあり樂みもあり、文明國もあり野蠻國もあり、長壽の人あり短命の者あり、貧富貴賤、千態萬狀であるから、一面から見れば優勝劣敗の舞臺であつて、弱肉强食とも謂ひつべき淺ましき狀態である。薄福少德の人からは隨分厭ふべく悲むべき點も少くは無い。縱や福德圓滿と羨まれる人にもせよ、却り來つて世間を觀すれば、猶ほ夢中の事の如しで、假の浮世の果敢なき夢路、『盥より盥にうつる五十年』一旦無常の風吹き來りぬれば四大分散して跡を留めず、故に釋尊は『世は皆無常なり遇ふ者は必ず離るゝことあり』と仰せられた。古人も『草のうへにをかぬばかりぞ露の身に風まつほどの假りのやどりは』と詠じてある。是れ古今東西に通じての人世の有樣であります。だが其の苦み多く憂ひ多き浮世の仇波が天然自然の大敎訓と爲りて、我を勵まし、我を警しめ、我を敎へ、我を導きて、我等の爲めには、知識を磨き道德を進め、世を助け人を救ふの大行願を發すべき好因緣を與へてくれるのであります。兎角、人間は、順境に在る時は、眞實の志も壯烈なる勇氣も起り難いものであるが、一旦逆境に立つとか、若くは悲慘なる事柄に接する時、忽然として大菩提心を生ずることがある。餘りに樂過ぎる人には寧ろ道念が薄く、浮世の荒波に觸れた人に却て美しき人情がある樣に思はるゝ。其の證據には、圓滿なる敎育家慈善家ともいはるゝ樣な人は、大概自身は非

前の章には發願利生というて、一切衆生を利益し濟度せんとの大誓願を發し、其の誓願を無間斷に相續して衆生利益の行を營めよ、是れが眞の佛行ぞと御示し下されてあるが、今の行持といふもやはり利生の行を離れたものではありませぬ。佛樣の御心は大慈大悲の外には無いのであるから、佛の御心を以て我が心と爲し、其の御心のまゝに身口意三業を働かせるのが、眞の菩提心、眞の菩薩行である。治生産業といふも、忠孝仁義といふも、戒法相續の上から望むれば皆盡く菩提心、菩薩行の光明片々です。佛の御身より光明を放たれたといふは、一切衆生を利益したまふ御慈悲の作用のこと、又、佛樣が御說法の時、此の大地が六種に震動したといふは、感化の力の廣大なることを稱したのであります。我等とても、眞實、發願利生、行持報恩の身となりますれば、佛樣と同じ樣に光明を放ち、大地を動かすことも出來るのであります。是の如き廣大なる功德を有する菩提心を發すには、三界二十五有といふ無數の世界の中に於て、我等人間が最も適當なる位地に立ち、最も便宜多き身の上と爲つて居る。我等人間に非ざれば容易に此の菩提心を發すべき機會に遇ふことはならぬ。故に三世十方の諸佛諸菩薩は、多くは此の人間の身を受けさせたまひし時に、菩提心を御發しあそばされてをる。そこを『此の發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり』と仰せられたのであります。

南閻浮といふは我等の住んで居る、今日でいふ地球のことです。御經文を見ると、此の世界の中央に須彌山といふ山がある。此の山が世界の中心になつて居る。山の頂上が忉利天、その上にも無數の天界が

は父たり子は子たり、主は主たり僕は僕たり、山は高く、海は深く、柳は綠、花は紅、法、法位に住して各々其の本能を發揮し、各々其の本德を顯はし、各々其の本來の大目的を達する處に、宇宙絶對の妙理、天地最高の大道が現成し、佛性常住の孝順心慈悲心が歴々然として大光明を輝かし來るものであります。

我等御互は、動ともすると遠方に道を求めたがつてならぬ。南泉禪師は『平常心是道』と言はれてある。平常心とは、眼に色を見て青黄赤白を識別し、耳に聲を聞て絲竹管絃を了辨し、上に向ては其の敬ふべきを知り、下に臨んでは其の憐れむべきを知る。茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫する處に、大道は殘る處なく活動して居る。親に對して孝を盡す時は、此の孝心が取りも直さず佛の御心である。君に對して忠を表はす時は、此の忠心がソツクリ其の儘佛の御心である。佛の御心をして佛の御心たらしめざるものは、貪瞋痴三毒といへる煩惱の塵垢が邪魔をするからである。『唯だ憎愛なければ洞然として明白なり』で、三毒煩惱の塵を拂ひ、我慢我執の角を捩とりさへすれば、我等の平常心は圓滿なる大道の姿、佛法の形相であります。此の平常心が是れ道となつた時眞箇の行持が現はれる。眞箇の行持の現はれた時眞實の御恩報謝が出來るのでございます。古人も『君に事ふるの要道は、身を修め德を立つるに始まり君の爲めに功を成すに終る』と申されて、己れの身を修め己れの德を立てゝ、美しき人格を作り麗はしき品性を養うた時が、御恩報謝の正門の開けて來た時なのである。是を行持報恩と名けたのであります。

け、何に依て未來永劫の大安心を成就することが出來るのであらう。皆な是れ父母の御恩、御國の御恩、社會の御恩、佛の御恩に依るのでございます。佛教では常に之を四恩と申します。實に此の身は御恩の結晶體で此の一生は御恩の賜であります。我等は斯かる大恩に依て生成活動して居る。若し此の御恩が無かつたならば、此の身も無く、此の一生も無く、此の衣食住處も無く、此の安心解脱も快樂も無いのです。故に我等は、天然自然の務めとして此の御恩を報謝し奉らねばならぬ。此の御恩を報謝するのが、やがて此の身をして完全ならしめ、此の一生をして價値あらしむるのであります。智度論には『恩を知るは大悲の根本、善業を開くの初門にして、人に愛敬せられ名譽遠く聞え、死して生天を得終に佛道を成ず、恩を知らざる者は畜生よりも甚だし』と御誡め下されてある。古語にも『恩あるに遇へば必ず報ず、故に臣となりては必ず忠、子となりては必ず孝』というてある。實に報恩は萬德萬善の總府です。然らば、其の御恩を報ずるには何うすれば宜いかといふに、唯々日々の行持を盡すのが眞に是れ報恩の正道です。行持とはオコナヒタモツと訓ずる。オコナヒとは身口意の上に正しき働きを起すこと、タモツとは、己れの本分を持ち、己れの志を持ち、己れの道德を持つなどと申する時の持つの意味で、言ひ換ふれば、道を持ち守りて失なはぬことです。道を守りて之を身口意業の上に大作用を起す、是れ卽ち眞の行持である。道を持ちて之を行ふというても、決して人世を飛び離れた氣高い御話しではない。男子は男子たるの道を持つて之を行ひ、女子は女子たるの道を持つて之を行ひ、君は君たるの道を行ひ、臣は臣たるの道を行ひ、父

二十七、願生娑婆（修證義第二十六節）

此の發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。

此の御文は修證義の四大原則の第四、行持報恩の章の最初の一節であります。毎度御話しに及ぶ通り、我宗安心の要機は、佛の大戒を相傳して佛の御弟子と爲り、佛祖の慧命を相續して此の身此の儘佛境界に安住するに在るのでございます。法には生死の隔て無く、道には古今の別はありませぬ。縦や此の身は因緣業果の姿とは申しながら、宇宙の間に孕まれて眞如實相の法門中に活動して居る御互でありますれば、徹底、生死即ち涅槃と心得て大信心を發し、佛性常住の孝順心慈悲心の光明たる御戒法を以て、我身とも我心とも爲し得る境界と爲りますれば、所謂平常心是道で、尋常の作業爲業の其の儘が、人生の歸趣を盡し佛陀の本誓を全うすることゝなるのでございます。人生の歸趣とか佛陀の本誓とか申せば、大變むつかしい様であるが、つまる所は報恩の二字に止るであらうと思ひます。報恩とは御恩を報謝し奉ることです。

我等御互の身は、抑も何に依て生れ何に依て生長し、何に依て衣食住處を得、何に依て人生の快樂を受

○泰山は土壤を讓らず、故に能く其の大を爲し、河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を就す、王者は衆庶を卻けず、故に能く其の德を明にす。（李斯）

○君子は道を謀て食を謀らず、…………君子は道を憂へて貧しきことを憂へず。（孔子）

○各自の天性に適したる最高等の職業に從ひ、死期に臨みて毫も遺憾なかるべきの生活を爲せ。（シドニースミス）

○常に義務の爲めに快樂を犧牲に供する人は卓絶に達するを得。（ラヴエーター）

○人の爲めに圖るは尊きことなり、再び助くる能はざる如き人を助けよ。（エーマソン）

○なか／＼に人より物をおもふかな世をおもふ身の心づくしは。（後嵯峨帝）

○かぎりなき三世のほとけのこゝろにてあくまで花を手むけつるかな。（兼好法師）

○何事も みな お 惠みと歡びてひとつに照せ光明の德。（古歌）

○撫子や照るも曇るも花のため。（希因）

○みのるほど頭のさがる稻穗かな。（失名）

今我等幸に斯かる微妙の法門に歸依し奉り、懺悔受戒の光明に攝取せられ、此の身を捨てず此の世を離れずして、大菩提心を發得し、自から一切衆生を利益することの出來るといふのは、實に難値難遇の因縁ではありませぬか。故に此の好因緣を喜び樂しんで、寢ても寤ても釋迦牟尼佛の恩德を思惟し觀察して、心を勵まし誠を傾けて其の御戒法を信念受持し奉らねばなりませぬ。

參考

○如來もと菩薩の行を修する時、一發心も一切衆生を利益せんが爲ならざるなかりき。衆生界は無邊際にして、その中の衆生もまた無邊なれば、如來の一々發心の功德もまた無邊際なり。（大寶積經）

○菩薩は一切の相を離れて菩提心を發すべし。色に住して心を生ずべからず、聲、香、味、觸に住して心を生ずべからず、無所住の心を生ずべし、もし心住するあらば、すなはち非住と爲す。（金剛般若經）

○每に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん。（法華經）

○大凡菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心を起さしめ、佛道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむなり、いたづらに世間の欲樂をあたふるを利益衆生とするにはあらず。（承陽大師）

○發心とは、はじめて自未得度先度佗の心をおこすなり、初發菩提心といふ。（同）

永く教育の恩惠に俗するに至る。我等御互は斯の如き功徳を禮拜恭敬せねばなりませぬ。

初學訓には『凡そ人と生れて、君の爲め親の爲め助けにもならず、又、世間の用をも爲さずして、天地の道に少しの補もなく、人を憐む徳もなく、又、人を救ふの功もなくして、徒らに天地の物を損ひ費すは、禽獸草木の民用を助くるにも如かずと古人は云へり』と示してある。君の爲め、親の爲め、國家の爲め、衆生の爲めにと盡す眞實心が、常住不斷に存在すれば、觸處々々に増長發達して、任運に自覺々他覺行圓滿の聖域に進むものであります。古人が『餘あるを待ちて人を救はば必ず人を救ふの日なし』といふてある通り、菩提心を等閑にして、形式的の慈善のみを志したならば、遂に其の志を達するの機會は無いです。況や、我が宗に於て教ふる所の菩提心は、佛より得るにも非ず、師に就て求むるにも非ず、人の爲めにするにも非ず、時世の必要に促がさるゝにも非ず、卽ち佛祖正傳の御戒法を相傳し奉る刹那に於て、自然に發得する本具佛性の孝順心慈悲心、是を菩提心と名くるのである。此の心是れ佛、此の心是れ法、三寶一體の妙功徳は、此の一心の中に圓滿具足して無盡藏の作用を起すのである。佛の御心といふは大慈大悲の心である。神の御心といふは天地の道のまゝになられた心である。我慢邪慢の念を去り貪欲瞋恚の妄を離るゝ時、自から神の御心に感應し佛の御心に道交するのです。『曇りなき三世の佛の影々も心の水にすまぬ日ぞなき』是に至つて我と佛との間微塵ばかりの隔ても無い、是れぞ修證一如の妙境界といふのであります。

りて、悪人變じて善人と爲り魔王變じて菩薩と爲り、一切の衆生も自から其の化益を被むるの功德を實現したものであります。

明治の初年、まだ文明の敎育機關が備はらざりし頃、山口縣周防國熊毛郡室積村に於て、小學校を新築せんとて、村內重立ちの人々が相集まり種々評議を凝したるも、大金を要することとて却々一決するに至らず、深更に至るまで空しく相談に時を移し、何れ明日再び相談せんとて、其の儘解散になりました。此の相談會を催せし家の下婢にふぢ女と稱する女ありしが、側らにて相談の模樣を聞き、深く大に感じまして、吾身は貧賤に生れて敎育を受くること能はず、無知無學、殆ど人に生れた甲斐も無い程である。之に就ても世に兒童の敎育程緊要なるものは無い。然るに、今日の御相談が未だ御決定にならぬといふは、畢竟多くの金錢を要するが爲めなるべし。あゝ賤しき吾が身と申しながら、せめては一絲半錢なりとも御寄附を致し、新築費の一分を補なひたしと思ひ、其の翌朝に至り、自分が親より賜はりしとて常々秘藏せりし銀の簪を取出して、村役人の許に持ち行き、己れの志を述べて、何卒御經費の中に御加へを被むりたしと願ひ入れければ、村內の人々は深く其の志に感じ、一同が非常なる憤發心を起し、皆なふぢ女の行に倣ひ、吾も〳〵と特別に寄附する者が出來、忽ちの間に一の小學校を新築するに至りましたさうです。何んと菩提心の功德は廣大なる勢力を有するものではありませぬか。身分輕き一下婢たりと雖ども、其の菩提心にして眞實なる時は、堂々たる一村內、無數の子弟や父兄までも、其の化益を被りて、

ちハラ〳〵と涙を流し、殆んど堪えられぬほどの悲しみに沈まれました。賊どもは顔見合せて打笑ひ、『さて〳〵汝は出家にも似合しからぬ者かな、聊かの財物を惜みて、それを取られるのが夫程までに悲しいのか』と申しますれば、上人は靜かに口を開き、『予は本より雲水の身なれば、金銀財寶一として惜しと思ふ物は無し。唯だ御身等がそのやうな惡業を働かれなば、未來の果報は果して如何にやあらん、一時の欲情に引かれて萬劫の苦患を招くこと、返す〳〵も口惜きことにあらずや。佛の御目より見そなはせば、一切の衆生は皆な佛の御子ならざるは無し。左すれば、吾も御身も同胞兄弟なるぞかし、決して他事とは思はれず、さても〳〵御氣の毒のこと哉』とて、又さめ〴〵と御泣きなされました。此の有様に彼の盜賊共は、恰かも電氣でも打たれたかの如く、何んとなく有り難き觀念を起し、忽ちに菩提心の微光が兆したものと見え、始めの勢は何處へやら、一物をも取らずに其の儘すご〳〵と逃げ去りました。其の翌日、上人の菴に來り出家を願ふ者が三人ほどあつた。上人が其の人々を御覽なされしに、是れぞ昨日上人を脅かせし三人の盜賊どもにて、彼等は大地に手をついて悔悟の涙を流し、『昨日圖らずも上人の御敎訓を被むり愚かなる我身ながらも御慈悲の御語がしみ〴〵と骨髓に徹し。坐ろに從前の罪過を悔い、玆に御弟子を願出づることとなりました、阿鼻地獄より外には行き處も無き罪業深重の我等なれど、願くは大慈大悲の眸を垂れ濟度攝受あらせ給へ』と哀願したです。上人大に之を喜び給ひ、直に其の願を許され、永く御傍に於て佛道修行せしめられたといふ因緣があります。此の因緣の如きは、正しく空也上人の大菩提心に依

體、神佛の御心と一致する。即ち無漏無爲の功德でありますから、一切諸の功德の中で最も尊とく最も勝れたるものである。此處を、賛題の下の御文で『濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし』とあるのであります。

世の中で何にが一番美しいかといふに、慈悲平等の心ほど美しいものは無い。世の中で何にが一番有り難いかといふに、濟度攝受の心ほど有り難いものは有りませぬ。故に我等御互は、急ぎて慈悲平等の心を發し、濟度攝受の誓を立てゝ、冥々の間に一切衆生を利益するの大功德を成就するを第一の樂しみとし、自分の大菩提心を禮拜し、自身で自身の大慈悲心を恭敬する樣にせねばならぬ。斯くしてこそ眞の獨立も出來るのであります。然るに我等御互は、兎角、大菩提心の功德の廣大なることを知らずして、布施をするにも、直ぐ施す物品の分量や施さるゝ者の頭數の多少にのみ目を付けて、其の功德の大小を論評する風があるから、動もすると形式一片に落入り、又は表面的にのみ流れて、達磨大師の所謂『人天の小果有漏の因』となつてしまふ。眞實菩提心慈悲心を發する時は、其の心の其の儘が冥々の間に一切衆生を利益し、天地萬物にまでも大感化を與へて居ることを信ずる人でなければ、本當に菩提心の趣味を知ることは難しいのです。

昔、空也上人が或る山中を通行せられし時、思ひも寄らず三人の盜賊が現はれて上人を取り圍みつゝ、金も出せ衣服も脫けよと逼りました。其の時上人は、つくぐ\と盜賊の語を聞き、又、其の姿を見て、忽

濟度とは、三界六道の荒海に沈んで居る苦難の衆生を濟ひ出して、佛果菩提の彼岸に渡すこと、攝受とはヲサメウケルと訓じまして、所謂平等大悲の念に住し、有りと所有一切の衆生をば、寸毫の分け隔て無く悉くヲサメ盡くして、本誓願の中に受けこむことである。故に濟度攝受といふは自未得度先度他なる大菩提心の異名です。此の菩提心が發りますれば、自分の身も心も全然御慈悲の結晶體となりますから、此の眼も此の耳も、此の手も此の足も、悉く菩提心を運轉活用する機關となります。此の大菩提心大慈悲心は天地と其の德を同うし、萬物と其の體を同うして居るに依て、一度此の心が現成すれば、未だ一人にも接せざる以前に、其の德は既に天地に充滿し、未だ一指をも動ぜざる以前に、一切衆生は自から其の敎化の大功德を被むるのであります。例せば、眞實國家を愛し、社會の公益に志ざす者の如きは、縱ひ其の身は陋しき巷の間に住み、其の業は數ならぬ些細の事を爲さうとも、其の一擧一動、一進一退は、やがて盡く國家の爲めとなり社會公益の一分子と爲るものであります。是れ卽ち精神感應の力です。一反半反の田地を耕す農夫でも、一紙半錢の商業を營む小商人でも、心に二つは無い。無形の精神の勢力は實に廣大なるもので、社會の安寧も、國家の富强も、畢竟其の勢力の致す所です。此の勢力が神佛にも通じ、天地をも貫く故に、靈驗利益も自から現はれて來るのである。古語にも『一華開けば天下皆な春なり、一たび發心すれば法界盡く道なり』とありまして、僅かに一片の花でも、能く天下の春を代表することが出來る。一念の大慈悲心は普く天地法界の衆生に利益を與ふるの功德がある。此の功德こそ天地の德と一

佛法を以て世渡りの家業としたり、菩提の行願を以て名を釣り利を占むるの資料とする樣な不心得者のことです。此等は名前だけが佛法でも其の實は極惡凡夫の心行と同じこと、名義だけは菩提心でも其の實は株屋連が株騷ぎをするのと變りは無いです。故に佛法も世法も、淨土も惡道も、御互の心たつた一つ、一念の轉處に依て十界三千の相交々生じて來る。古歌に『花となり針ともなれる花いばらその心根に二つやはある』とあるが如く、三界六道の相は全く自己一心の所變である。

然らば、此の一心の本體は何んな物でござりませうか、元來姿も無く形も無く、大きくもなく小さくもなく、生れもせず死にもせず、悟りもせず迷ひもせぬ、平等圓融能く十方法界に充滿し、而して、能く天地萬象を造り能く山河大地を現じ、無邊際に圓通し無間斷に活動して居る、此の一心の本體を徹見するのが禪家の本領である。だが此の事は一朝一夕の談でないから、別に御話しすることゝ致さう。兎に角、我等の一心の本體は佛と同體、菩薩と同性、天地萬物と同一源であると心得るが宜い。既に佛菩薩と同體同性なるが故に、自から廣大にして邊際なき大慈悲心の德を有して居る。此の大慈悲心の德が三毒五欲の妄念に覆はれて、徒らに空中に幻翳を生じ、鬼なき里に鬼を作り、我と我手で四苦八苦の巷に彷徨ふて居つたのが我等凡夫の狀態であります。故に一旦飜然として、煩惱の雲霧を拂ひし時は、忽然として大慈悲の妙德が現成し、自から菩提心の光りが全身に充ち滿ちます。是を濟度攝受の本誓願とも申すのであります。

陀如來特得の發心修行があり、釋尊には釋尊獨得の發心修行がある。獨り佛菩薩のみならず、古今の聖人賢人とても、志を立られし、原因や實踐の方法は、各々其の趣を異にして居る。我等御互とてもやはり同様で、學問の力に依りて發心するもあり、信仰の力に依りて志を立つるもあり、逆境に處せし爲めに菩薩行を起すもあり、苦難の衆生を觀ぜし縁に依りて慈善事業を勵むもあり、十人十色種々様々です。されど其の歸する所は、唯々衆生利益といふ大菩提心の行と願との力を離れたものはない。釋尊の五百大願、彌陀如來の四十八願、觀音、普賢等の十大願も、つまり一菩提心の上に現はれた姿であります。佛菩薩と申しても、我等人間と駈け離れた御境界ではない、我等人間が正當なる順理的最大目的、言ひ換れば圓滿なる理想の實現したのが、即ち佛菩薩である。佛菩薩たらんことを以て目的とせざる者は、決して人の人たる道を完ふすることは出來ぬ。佛菩薩たらんことを目的とする者は、必然此の菩提心を發さねばならぬ。菩提心の完全に發達して、最高最勝の域に到つた御方が、眞の佛菩薩であります。六祖大師が『佛を見んことを求めんと欲せば、但だ衆生を識れ。唯だ衆生の佛に迷ふが爲めなり、是れ佛の衆生を迷はすに非ず、自性若し悟れば衆生是れ佛、自性若し迷へば佛是れ衆生』と說き、『眞如自性是れ見佛、邪見三毒是れ魔王、邪迷の時は魔、舍に在り、正見の時は佛、堂に在り』と示されしは、實に千古の格言であらうと思ふ。此處の道理をばよく〳〵心を靜め念を凝して思惟觀察するが肝要です。之を率爾にして、ウツカリと油斷する時は、佛法中に在りながら三惡道の種蒔ばかりする様になります。率爾にするとは、

二十六、攝受功德（修證義第二十五節）

大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし。

此の御文は、修證義第四章發願利生の結文の一節であります。一應此の御文を拜讀しますれば、前の數節に於て示された通り、菩提心の行願は最も尊とき菩薩行であるに依てよく〳〵其の道理を心得て、常々大悲大慈の念に住し、其の行願より現はるゝ衆生利益の功德を喜び敬へよとの御示しでありますから、別段に講演をするまでも無く、よく其の意味が解つて居ります。併し、仔細に此の御文の深意を研究して見る時は、此の短かき一節の中に、自から格外向上の法門が開き盡されてある。此の御文の深意を十分に咀嚼て自分の物とせねば、前數節に御示し下されたる菩提心の行願も、滿足に實現することが出來難いのであります。

先づ初めに『大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ』とあるは、前數節の御文を結んで、修行の着實なるべきことを示されたのである。三世の諸佛十方の菩薩は、最初發心の動機及び修行の方法に於ては、皆な夫々の因緣があつて、本より一樣ではない。彌陀如來には彌

ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては、患難に行ふ。（中庸）

○海は水を辭せず、故に能く其の大なることを成す。山は土を辭せず、故に能く其の高きことを成す。明主は人を厭はず、故に能く其の衆を成す。（管子）

○此の世界に於ては互に相助くること必要なり。（ラ、フヲンテース）

○吾人は奴隷も亦同胞なることを忘るべからず。（ケート）

○世の中はみな佛なりおしなべていづれのものとわくぞはかなき、（花山院御製）

○冬深きねやのふすまをかさねても思ふはしづか夜寒なりけり。（明治天皇御製）

○高きやにのぼりて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけり。（仁德天皇御製）

○生れては死ぬるものぞと心得て慈悲と情で人を助けよ。（詠人知らず）

○凍るなよはのなき母にたむけ水。（千代女）

○櫻さくひとへに彌陀のひがん哉。（支考）

○出る日と同じ年なり福壽草。（鬼州）

參考

〇菩薩、家にありては、衆生と共に家の性空を知り、その逼迫を免かれんことを願ふべし。父母に孝養しては、衆生と共に善く佛に事へて、一切を護養せんことを願ふべし。妻子集會しては、衆生と共に怨親平等にして、永く貪著を離れんことを願ふべし。乃至、もし、厄難にありては、衆生と共に隨意自在にして、所行礙りなからんを願ふべし。（八十華嚴經）

〇菩薩は唯大悲を以て、方便して卽ち諸の世間に入り、未悟を開發し、乃至、種々の形相を示現し、逆順の境界、其れと同化して成佛せしむ。（圓覺經）

〇同事は薩埵の行願なり。たゞまさに、やわらかなる容顏をもて一切にむかふべし。（承陽大師）

〇彼の琴詩酒は、人をともとし、天をともとし、神をともとす。人は琴詩酒をともとす。（琴詩酒の人天神をともとするは同である）琴詩酒は琴詩酒をともとし、人は人をともとし、天は天をともとし、神は神をともとすることはりあり。（之れ自ら壞せざるの道理を述べたもの）これ同事の習學なり。（同）

〇人界に同ずるをもて、しりぬ同餘界なるべし。同事を知るとき自他一如なり。（同）

〇君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はず、富貴に素して富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行

私も眠ることが出來ぬ。若し母親が御喜びなされば私は其の喜びを喜びとし、母親が御樂みなされば私は其の樂みを樂みとするまでゞ、別にどうのかうのと心を費して孝行したことはありませぬ』と申したさうである。此の御話は扶桑孝子傳に出て居ります。甚介が別に分別思慮を用ひずして、母の喜びを喜び、母の樂みを樂むのは、所謂天眞の慈悲心、佛性の孝順心が現はれたので、其の兄に向ては兄を安んじ、親に向つては親を安んじ、八方に對して少しの圭角の無き行こそ、菩薩同事の功德を成就したものといふべきである。彼の曾子が『孝子の老を養ふや其の心を樂ましめて其の志に違はず』といはれたは、最も至要なる敎であるが、甚介が一點の至誠は、知らず〱『帝の則』に合うて居るのであります。

今日の人は兎角に、同事行といふことを、社會的事業とか慈善的事業とかいふ上にのみ用ひて、日用の間に之を應用するの心懸が不足な樣に思はれます。自分一己の上にも常に柔和の德を養なひ、親子、兄弟、夫婦の間にも、常に不違の德を現はしなば、朝から晩までの爲る事作す事に、盡く同事般若の功德を成就することが出來ます。殊更我等御互は、釋尊の御弟子として懺悔受戒の勝因緣に預かり、發願行持の妙修行を勵み、常に南無釋迦牟尼佛を稱念し奉りて、感應道交の大果報を得べき身の上であつたならば、自にも違はず他にも違はず、上下貴賤を推なべて、相倶に衆生利益の行願を營むこと、何よりの幸福と申すべきであります。

の時でも母親の箸を取らぬ中は食べぬ。母親の食べ終るのを見てから、欣然として始めて箸を下す。又、母親が寢に就かんとする時は、自ら褥を展べ、冬は温かくし、夏は涼しくして、母親を寢ねしめ、其の熟睡したのを見ぬ中は寢たことがない。母親は御茶が大好であつた。そこで甚介は、毎朝早く起き茶を烹、席を布きて母の起るのを待つといふがきまりであつたさうです。室内は總て藁席を布きしが、母親の坐すべき所だけは藺席を布いて居つた。市にでも往た時は必ず魚や菓子を調へて、之を母親に進めるのを何よりの樂しみとして居たと申すことです。母親は八十歳になりし時も六十歳位の顏容をして居つた。人が『貴女は何故につや〳〵して御達者なるや』と尋ぬれば、『甚介が能く孝行をしてくれて、一度でも妾に心配をさせたことが無い、御大名の母でも妾の樂しみには及ぶまじ、是れ妾のつや〳〵しくして達者なる所以です』と答へたさうであります。一人の兄があつたが其の兄は懶者で、自分の田地が充分に實らずして甚介の田の肥たるを羨み、地所の取換を申込んだ。甚介は快く承知しましたが、翌年の秋になると取換へた甚介の田は盡く能く實り、兄の方は矢張り大の不出來であつた。時々兄が年貢を納め兼ねて困つて居ると、何時でも自分で立替て、少しでも厭な顏をしたことがない。承應年間、領主は其の孝悌を聞し召して厚く之を賞し、且つ田地を賜うて租税を免ぜられたことがある。其の時、諸役人が甚介に向つて『汝は何の道を學んで斯く麗しき行を得たるや』と問ひしに、甚介の答へに『私は孝悌などといふ道は一向に心得ませぬ、唯母親が快く食物を召上らねば私も食べる氣にならず、母親が快く眠らぬ中は

は、御身分にも拘はりて、餘りに輕々しき事かと存じます』と申された。其の時、大婆殿は襟を正し形を改めて、暫く正信公の顏を見詰めて居られたが、良あつて語を發し『近頃、世の人の風聞する所に依れば、御身は兎角に驕り昂る傾きがあると申すことである。妾は御身に限りて其の様なことはあるまじと信じて居つたが、今の一言にて、人々の傳ふることの僞ならざるを知りしこそ遺憾なれ、御身の昔は彌八郎と稱して、身分輕き者なりしことはよも忘れは致されまじ、妾は御身の知る如く、三州にて賤しき者なりしが、德川公の御恩に依りて思ひ懸なき榮譽を擔ふことを得たり、昔は五六人の客に對してすら、酒饌を振舞ふこと容易ならざりしを、今は斯く數多の人を集めて饗應するも自由なる身となりしは、全く君恩の致す所と思うて、常に其の大恩に感泣して居る。若し聊かにても驕る心などを持ちなば天罰忽ち身に迫り、行末何を以て君恩に報ふることを得んや、故に賤しき昔を忘れざる爲め、又、二ツには君恩の大なることを忘れざる爲め、自ら料理を調へて、我が君の恩惠を賤しき者共に頒ち施こさんと存ずるのである。御身は今日の富貴に慣れて、既に彌八郎と呼びし時の事を忘れられしと見ゆ、其の様な心得にては天下の政務に預かること實に心許なし』といはれました。幕府の大老を以て稱せられし正信公も、流石に一言の答ふべきなく、赤面して愧ぢ去りしといふ御話しがあります。此の大婆殿の如きは、正しく貴きに居て賤きを忘れず、上に在りて下を憐れみたまふ、同事行一分の光明を放たれたものであります。

又、昔、備中國淺口郡柴木村に甚介と申す農夫がありました。母親に事へて無類の孝行を盡し、御飯

菩薩の三十三身、地藏大士の四十八身、釋迦牟尼世尊の千百億化身は、同事圓滿の妙德であるが、我等が目上の人をば敬ひ、目下の者をば憐れみ、年寄に向つたならば年寄の心に適ふやうに扱ひ、子供に對したならば子供の氣に合ふやうに世話をする。是れが卽ち分身同事の行といふものである。陸宣公が『寧ろ人の我に負くとも、我は人に負くこと勿し』といひ、續讀書錄に『其の心を大にして物を容れ、其の心を虛しくして善を受け、其の心を平にして事を論じ、其の心を潛めて理を觀、其の心を定めて變に應ずべし』とあるが如きは、實に修養上の好敎訓であります。箇樣に和光同塵の德を具ふる時は、孟子の所謂『至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり』で、天下の人は自然と其の德に服し其の誠に感じ、怨も變じて味方と爲り惡魔も變じて親友となるものです。是を『水聚りて海と爲る』とも『他をして自に同ぜしむ』とも申すのであります。

德川二代將軍秀忠公の乳母は參河の人にて、忠實に將軍を御育申し上げし爲め、將軍は眞の母の如くに大切にせられ、時の人も亦た大婆殿と稱して大に敬ひました。此の大婆殿に一ツの道樂があつた。それは毎月一返、必ず大盤切に御飯を堆く盛り上げ、相應なる煮込を調へ、それから六尺仲間などといふ賤しい者共を幾十人となく臺所に召び集め、自ら襷懸になつて給仕をして振舞ふことを、此の上も無い樂しみとして居られました。或時、此の催しのありける所へ、時の宰相本多正信公が入り來り、此の有樣を見て大に驚き『御附の女中も數多きことなれば、誰へなり命ぜられて然るべし。自ら給仕までせらるゝと

ば、人亦た我を見ること其の己れの如くなるべし。自分と他人との間自から感應道交して、自他一如となるものであります。故に、或時は自分の慈悲心を運らして他人の身を濟ふこともあり、或時は他人の身を導いて自分の慈悲心に攝することもあり、同事の妙行は自分と他人との隔てを離れ、或は自を度するの法を以て他を度し、或は他を度するの德を以て自を度し、其の時々に隨つて自他平等に利益す。其の功德は廣大にして、古今に亘り十方に通じ、窮まること無く盡くること無し。是を『自他は時に隨うて無窮なり』というたのであります。猶ほ此の意を一層適切に示さんとて、下の御文には『海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり』と仰せられたのである。例せば、大海の德は百川の水を容れて餘さず、一滴たりとも決して之を辭せぬ。夫故、百川の水は交々大海に聚り注ぎ、爲めに海水は千古萬古長へに滿ちて、毫も減ずることは無い。海の水を容るゝは自をして他に同せしむるので、大河の水も細溪川の水も、清水も濁水も、擇り嫌ひはせぬ。同事の業も亦た是の如く、怨讐にも、親しき人にも、目上にも、目下にも、公平無私に調和するの德が無ければならぬ。

世には八方美人といふことを申すが、菩薩の行願を修めて衆生を利益せんには、一面に於て八方美人的の大度量と大融和が無ければならぬ。古人も『忍び能はざる所を忍び、容れ能はざる所を容る、唯識量人に過ぐる者之を能す』といひ、基督は『汝の敵人を愛せよ』というてをります。況や、諸佛菩薩の慈悲方便に至りては、三界を以て敎化の領土と爲し、一切衆生を以て所化の子弟とみそなはしたまふ。觀音

ず、甘い物の好な人が鹹い物の好な人に和して逆はずといふやうにすれば、一ッ釜の御飯、一ッ鍋の御汁でも、異性殊癖の人を平等に滿足せしむることが出來る。教育家は教育家だけの智力と技能とを具へながら、生徒に授業する時は生徒に相應したことを教へる、是れ卽ち自にも不違なり他にも不違なりである。又、母親は母親だけの經驗と品位とを有しながら、子供を育てる時は子供に適當した教へ方をする、是れ卽ち自にも不違なり他にも不違なりである。故に次の御文には『譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し』とありまして、譬へて見れば、釋尊は人間世界を濟度したまはんが爲めに、人間世界に御出現あそばされたのであるから、天よりも下らず、地よりも出でず、我等と同じやうに人間に生れたまひ、食して以て飢を凌ぎ、飲みて以て渴を癒し、はへば立て立てば歩めの親心に養なはれて、御生長あらせられた。其の御姿も御生活も畢竟人間式で、人間と同じやうにして人間に交はり、而して能く人間を濟度せられたのである。此の釋尊の御生涯こそ、同事行に於ける最勝第一の御手本であります。

其の同事行の功德はどうかといふに、『佗をして自に同ぜしめて後に、自をして他に同ぜしむる道理あるべし』で、此方から大慈大悲の心を運んで、世に逆らはず人に背かずして同事方便を垂るゝ時は、他の人々も自から此方の德に化し、此方の慈愛に感じ、知らず〳〵佛法中の人となるものです。是れ卽ち他をして自に同ぜしむるの功德である。又、他の人々が此方の德に化して同ずる時は、此方の大慈悲心は益々擴張して任運に他に同じ、四方八面に大利益を現はすことゝなる。我れ人を見ること己れの如くなれ

は、皆な此の御仲間です。自他は元來平等にして不二であります。こゝを『自にも不違なり、他にも不違なり』と仰せられたのである。併し、此の同事の德を全うするには、第一に自分の境界が、八風吹けども動ぜざる泰山の如く、確乎した大安心を具へ、火に入ても燒けず水に入ても溺れざる底の氣節と信念とを有して、而して、人に向つては、海の如き寬大なる度量を以て柔和善順の德を守り、時世と根機とに順應して、善功方便の用を起すやうでなければならぬ。これは餘程修養と經驗とを積まねば、却々出來難いのである。

人に逆はぬといふ者でも『浮草や今日はむかふの岸に咲く』といふやうに無節操、無氣力では、てうど藝者や娼妓の御機嫌取りに類する者となる。此等は一見人に逆はぬやうで、道德上却て甚しき逆らひ方をしてをるのである。又、自身の一分だけは頗る堅固に構へこんでをる人でも、人が右といへば左、是といへば非といふやうに、己れの我見のみを主張して、少しも世と相容れぬ者もある。此等は自分だけは立派に獨立して道を守るやうなれども、所謂世に在て益なき者であるから、やはり自己本然の德に背くことゝなるのである。此の程合の能く調うたのが所謂中和の德といふので、甚だむつかしいです。此の不違同事の行は一家の上にも非常に必要です。僅か三人か五人の家内でも、十人十色の俗諺に背かず、餅好もあれば酒好もあり、鹹いものを好む人もあれば甘い物を好む人もある。此の人々が銘々勝手に我見を募らせたならば、三度の食事も別々に調へなければ滿足は出來ぬ。それが、餅好の人が酒好の人に順うて逆は

二十五、同事行（修證義第二十四節）

同事といふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり、譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し。他をして自に同ぜしめて後に、自をして他に同ぜしむる道理あるべし、自他は時に隨ふて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。

此の賛題は修證義第二十四節の御文で、佛弟子たる者の必ず當に行ふべき四枚の般若の中の、第四同事行の御垂示であります。同事とは事を同うすといふことであるから、世の中に逆はず、世の中に背かず、能く世の中に順應して行くことです。故に『同事といふは不違なり』と定義を示されたのである。不違とはタガハズ、ソムカズといふことです。所謂天下の樂みを以て樂みとし、天下の喜びを以て喜びとし、一身の私を貪ぼること無く、一個の我見を募ること無く、其の時に隨ひ、其の機に應じて、濟度利益の行を爲すことであります。萬法歸一の理というて、總ての事柄は終に一理に歸するものであるから、他に對して逆はぬほどの人は自身に對しても逆はぬ。人を大切にするほどの者は自分の身をも大切にする。人に親切なる者は必ず自分にも親切です。世の中には、自分で自分の良心に逆らひ、自分で自分の身體を苦しめる者が澤山ある。惡人や邪見人は申すまでもなく、苟も我見のみを主張せんとする者

○人は仁慈を行はんが爲に此の世に生る。（沙翁）

○見られんが爲めに與ふる人は、暗黒中には何人をも救はず。（英國俚諺）

○なか〳〵に人より物を思ふかな世をおもふ身の心づくしは。（後嵯峨天皇）

○法の爲め國の爲めとて身の限りつくして果てん倒れふすまで。（介石上人）

○すまし井の水に我が身は沈むともにごしはせじなよろづ國人。（孝明天皇）

○鈴鹿川八十瀬の浪の立ちゐにも我が身の爲めの世をば祈らじ。（崇光天皇）

○よしやよし世を去るとても我心御國の爲めになほつくさばや。（國月信濃）

○踏まれても根づよくしのべ福壽草やがて花さく春を待ちつゝ。（道歌）

○氣に入らぬ風もあらうに柳かな。（失名）

○白魚や水にきれいな埃もあり。（失名）

參考

○菩薩は大施主となりて、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることなく、果報を望まず、名譽を求めず、勝處に生ぜんことを求めず、利養を求めず、但一切衆生を救護はんことを欲し、衆生を攝取し饒益せんことを欲し、諸佛の本行を學ばんと欲し、諸佛の本行を受持たんと欲し、諸佛の本行を顯現さんと欲し、一切をして苦を離れ樂を得せしめんと欲す。(華嚴經)

○千言を誦すとも行せずんば何の益あらむ、一たび聞て勤修して益を得るに如かず。(法句經)

○利行のいたれるには、草木風水の非情なるにも、利行の心およぶなり。(藏海和尚)

○君子は人の美を成して、人の惡を成さず、小人は之れに反す。(孔子)

○人君なるものは、心を正うして以て朝廷を正うし、朝廷を正しうして百官を正うし、百官を正うして萬民を正うし、萬民を正うして四方を正うす。四方正しければ遠近正に一ならざるなし。而して邪氣其の間に奸するなし。(董子)

○志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし。身を殺して以て仁を成す。(孔子)

○人の爲に圖るは尊きこと也、再び助くる能はざる人を助けよ。(エマーソン)

して藏きたいです。大學の三綱領に『大學の道は明德を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り』とある。此の一段の聖訓は實に萬古の模範である。明德を明らかにすといふは己れを利益するの標準、民を新たにすといふは他を利するの方針、至善に止まるといふは自他法界平等利益の土臺であります。人々本具の德を明らかにするのが眞の利己である。若も德を昧まし世を害する時は、己れを利益するに非ずして却て己れを傷くるのである。明德さへ明らかになれば其の本心の光りは四方に輝き溺りて、他を利せんと欲せずとも自然に他を利することゝなる。恰も雲を出づる明月の、無心にして普く萬物を照すやうなものである。『里わかずながむる人の袖ごとに影も惜まぬ山の端の月』此の月の如き身となりてこそ自利々他圓滿の域に達することが出來る。此の時をこそ、眞正なる菩提心の活現とも、佛戒受持の光明とも申すのであります。

我等幸に洞上の宗風に遇ひ奉り、懺悔の慈門に投じて三業を淨め、無始已來の罪障を拂ひ、殊に佛祖正傳の大戒を相續して、此の身此の儘、三世諸佛の御仲間入が出來るといふは、何等の好因緣であらう。此の因緣を喜び樂しんで天地公平の德を養なひ、佛性常住の孝順心慈悲心を運用して無邊無際の大信心を起し、我見我慢を打離れ、急ぎに急ぎて利生の大願を發し、佛弟子たるの天職を盡して其の行願を盡未來際に相續せねばなりませぬ。此の境界に達したならば、寢ても寤ても佛陀の恩德を拜し、佛陀の智慧恩德を敬禮し奉り、以て其の恩德に報答し、利益の大行を成就するが肝要であります。

忠孝の道を圓かにすることが出來るのである。唯だ聖人は其の懐を空洞にすといふ如く、己れの邪まなる念、虚僞の情を離れ、天地公平の徳に合すれば利他の徳自から現はれ、自を利すると同時に他を利し、他を利すると同時に自を利して、自他法界平等利益である。是を『利行は一法なり、普く自他を利するなり』と仰せられたのであります。

凡そ天地の間に有りと有らゆる物を觀ずるに、利己といふ上からいへば、一法として利己的ならぬは無い。利己といふは、自己の存在を保護し自己の功徳を莊嚴するのである。飢ては食を求め渇しては水を求む、暑には扇を使ひ寒には衣を重ね、皆な是れ利己の姿であります。然れども、此の利己がやがて利他の徳を産み出す母親たることを忘れてはならぬ。又、利他といふ上からいへば、一法として利他ならぬものはない。親を慕ひ妻を愛し、子を慈み友を求むる、皆な是れ利他の姿である。然れども、此の利他がやがて利己の徳の發現する原動力たることを忘れてはならぬ。唯だ虚僞の念、迷妄の情ある時は、利他を全うすることが出來ぬのみか、やがて利己をも得られぬことになる。是ぞ徳を養ふ者の暫時も忘れてはならぬ肝要の法門である。ところが、世の中で謂ふ所の利己は、始より自分と他人との隔てを付けて、他人を棄てゝ顧みず、只だ己れのみを利益することのやうである。箇様な利己主義であつたならば、正しく天地生々の徳に背いた惡魔の境界であるに依て、利己を求めながら却て自己の存在を危くするものである。世の學者智者たる方々は、深く此の意を領解して、言を愼み行を守りて、世を誤まり人を毒せぬやうに

各益するは萬物固有の德である。此の德の人類間に現はれたのが利益の行であります。次の御文に『愚人謂はくは利佗を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普ねく自佗を利するなり』とあるは、取分け有り難き御示しであります。愚かなる者は、動もすれば、利己と利佗とを全然別物の如くに思ひ、他人を利益することをのみ先としたならば、自分の利益は全然省かれて、終には己れの身の立ち行かぬやうなことに陷るであらうというて、利他を輕んじて利己を重んじ、利他を後にして自利を先にする者が世の中に澤山ある。是は大なる量見違ひで、全く菩提心の上に現はれたる利他の眞意義を心得ぬ爲めに、箇樣な淺はかな考を持つのであります。故に『爾にはあらざるなり』で、眞理は決して其の樣なものではないぞよとの御誡めです。何故かと云へば『利行は一法なり』で、眞の利益行は、自分と佗人との隔てを立てゝ、而して後に行ふといふものではなく、佛性常住の孝順心慈悲心が、自己の身心全體に現はるゝのであるから、自他の境界を超絕して、盡法界盡虚空を普く利益することとなるのであります。例せば、御國の爲め社會の爲めにならうといふ目的で、學問したり勉强したりする時、其の學問勉强が、やがて己れを利益し己れを莊嚴することに爲る。是は利他の精神が即自利となるのである。又、實地に學問し至誠に勉强する者は、獨手に御國の寶とも爲り社會の光明とも爲る。是は利己の功德が即利佗となるのである。親に對して眞の孝行を致し、君に對して眞の忠義を盡さんと欲すれば、自から臣子の本分を全うすることが出來、臣子たるの天職をだに怠らざれば、自から君や親に對する

あります。然るに近頃は、堂々たる學者の中に進化的利己説などと稱する學説を主張して『社會の原始的本能は、唯だ一の利己であつて、利他といふは後天的のものである。言ひ換れば、本然の性は己れを利するに在りて、他を利するといふは人爲の法である』などと論ずる方がある。單に學説として之を見れば、本より主張する者の自由であらうが、宗教上、若くは道徳上より觀る時は、是の如きの主張は全く世道人心を害毒する惡魔の邪説といはねばならぬ。

宇宙の根源は絶對平等にして、元來、利己だの利他だのと稱すべき差別はない。然れども、平等海中に於て、差別の波瀾が活動する上は、自己もあり佗己もあり、人もあり佛もあり、山は高く水は深く、柳は綠、花は紅で、千態萬狀です。自己は自己の本位を守り、佗己は佗己の本分に住し、山は山、水は水、柳は柳、花は花、各〻己れを保ち己れを利するは自然の當相であるけれども、其の根源實體は一如にして二致なきが故に、差別の其の儘が平等の本性を現はしてをるに依りて、自己と佗己との間、人と佛との間、山と水との間、柳と花との間、相和し相調うて宇宙を莊嚴し、未だ曾て隔つることが無いからして、自己は佗己を利し、佗己は自己を益し、山は水を生じ、水は山を支へてをる。是れ即ち利他の徳相である。法なくんば止なん、一法僅かに生ずれば利他の徳相自から現はる。經には是を佛性常住の孝順心慈悲心と仰せられてある。上は日月の大なるより、下は一塵一芥の小なるものに至るまで、一として孤立してをる物は無い。既に孤立してをる物が無いとすれば、必ずや他の利益を享けてをる。甲乙互に利し丙丁

が、九歲の折、華陰山と申す處に於て、一羽の雀が鴟梟に搏たれて、樹の下に倒れ、蟻の爲めに苦しめられてをるのを見て、幼心にも愍然の思ひを爲し、其の雀を抱いて歸り、百日餘りも籠に入れて之を養ひ、傷の癒るを待ちて放ち遣りしに、其の夜、黄色の衣裳を着たる童子が楊寶の枕邊に來り『私は此の程中、長々の間、一方ならぬ御介抱を戴いた雀であります。貴君の再生の大恩を報謝するに由なきも、聊か御禮の印までに差上げます』とて、四箇の白き玉の環を楊寶に渡し、『貴君の御子孫が三公の位に昇らること、此の環の數の如くなるべし』というて立ち去りました。不思議の事と思ひ居りしに、其の豫言虚しからず、楊寶の子の楊震、楊震の子の楊秉、楊秉の子の楊賜、楊賜の子の楊彪と、都合四代とも三公の位に昇り、美名を天下に輝かしたといふことです。此の二の因緣に依て、よく〱御心得を願ひたいのは、孔愉が窮龜を救ひ、楊寶が病雀を助けたる時の如き、本より相手が龜や雀であるから、後日に至り彼より幾許の報謝を受け樣などとは、夢にも思ふはずがない。『唯單へに利行に催さるゝなり』で、嗚呼可愛相なものだ、氣の毒なことだ、どうぞ彼が命を助けて遣りたいといふ、一片利行の心に催ふされて、覺へず知らず、金を投じ、若くは食を與へたので、所謂天眞自然の慈悲心の現はれたのであります。此の慈悲の心、同情の念は、本具佛性の妙德にして、取も直さず天地の御心です。此の天地の御心には、名譽を貪ぼる考も無ければ、利慾を充たさんとするの邪念も無く、實に人間名利の外に超然たる大菩提心の姿です。古人が『悟り得て心の暗のはれぬれば慈悲も情けも有明の月』と詠ぜしも、全く大菩提心の形容で

をして益々不利益を招がしむることゝもなるものです。斯る場合には、斷然、布施を謝絶する方が却て利益することになる。愛語も、同事も、やはり同樣で、苦言を呈したり交際を謝絶する方が、却て利益となる場合が澤山あるであらうと思ふ。是を順逆の妙用とも善巧方便ともいふ者である。

次の御文に『窮龜を見病雀を見しとき彼が報謝を求めず、唯單へに利行に催さるゝなり』とあるは、事例を擧げて最高の利益行を御示し下されたのである。窮龜の因縁は、晉書の中に出て居り、近くは蒙求などにも載せてある。晉の世に孔愉字は敬康といふ至つて慈善心の深い人がありました。或日、餘不亭と申す處に於て、大きな龜を縛り附け、それを擔いで行く者を見て、如何にするぞと尋ねしに、之を殺して食料に用ゆるとのことであつた。孔愉は天性の慈善心に促がされて、傍觀して去るに忍びず、彼者に談判の上、若干の金を出して之を買取り、其のまゝ水中に放ちて助け遣りしに、龜は如何にも喜しさうな素振をして、四度までも左の方へ首を枉げて孔愉を見廻りつゝ水中に沈んだ。幾年をか經たる後、孔愉は出世して餘不亭の知事と爲りし時、金を以て龜の鈕を附けし役印を鑄さした處、其の鈕の龜の首が左へ曲つて出來た。依つて之を鑄直すこと四度に及んだが、どうしても首が眞直に出來ぬ。そこで端なくも、數年前に龜を救ひて水中に放ちし時、四度までも振回つて此方を見た時の樣子に似て居ることを思ひ出し、是れ正しく其の龜が助命の恩を報ぜんが爲め我身を護りくれるに相違あるまじとて、遂に首の曲つたなりの印形を用ゐたといふことであります。又、病雀の因縁は、續齊諧記に出て居ります。支那の楊寶といふ人

れより出生し來るものである。然るに利行の利の字は、全く其の意を異にし、轉迷開悟、離苦得樂の功德を指していうたものであります。

佛敎の目的は何處に在るかといへば、申すまでもなく、無始劫來の迷執を轉じて、智德圓滿の證悟を開くといふの外はない。三界生死の苦惱は固より迷執の招ぐ所、涅槃常住の快樂は證悟に依らざれば獲ること難し、故に一度佛の御位を相續して菩提心を發得したる上は、已れを忘れ私を離れて、常に衆生に施こすに利益の行を以てし、衆生をして得樂の境に達し、開悟の地に到らしむるを以て天職とするの覺悟こそ、一大事因緣であります。更に一步を進めて見る時は、苟も佗をして歡喜せしめ安心せしむるは、盡く是れ一種の大利益なるが故に、佛菩薩や、明君賢者にも、利行を施こし奉ることが出來る。或は三業を淨らかにして佛菩薩を供養し奉り、或は誠を盡して明君賢者に奉公し奉り、或は心を傾けて父母師友に報答し奉るが如きも、皆な利行般若の大光明であります。其處を御文の始めに於て『利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり』と仰せられたのである。貴賤の衆生とは、上は神明佛佗、國王大臣、父母師友より、下は妻子從僕、貧人弱者、及び禽獸蟲魚の末に至るまで、所有衆生を總稱したる御辭である。善巧とは善良なる方法といふほどの意味である。廻らすとは順逆縱橫に其の方法を運ぶことである。布施も、愛語も、同事も、皆な利行の目的を達すべき善良なる方法である。酒癖の惡き者が酒を求むる時の如き、放蕩者が金錢を乞ふ時の如き、妄りに之に布施する時は、それが爲めに、彼

二十四、利益行（修證義第二十三節）

利行といふは、貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり。窮龜を見病雀を見しとき彼が報謝を求めず、唯單へに利行に催さるゝなり。愚人謂はくは利他を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり。利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。

此の讃題の御文は、布施・愛語・利行・同事の四攝法、即ち四枚の般若の中の、利行の徳を御示し下されたる一節であります。利行とは、一切衆生に眞正の利益を與ふる行といふのであるから、四枚の般若の中でも、殊に根本目的となるべき、肝要なる大菩提の行願であります。何故かと申せば、布施を行ふも、愛語を守るも、同事の行を全うするも、畢竟は一切衆生に對して圓滿なる利益を施し、衆生をして最勝安樂の境界に到達せしめんが爲めであるからであります。だが、利といふ文字を誤解せぬやうに注意して貰はねばならぬ。彼の孟子が梁の惠王に對へて『王、何ぞ必ずしも利を曰ん、亦た仁義ある而已』といはれた利の字とは雲泥の差がある。孟子の所謂利は利己主義などと稱する利であるから、朱子も『利心は物我の相形に生ず、人欲の私なり』と解釋してある。苟も義を後にし利を先にして、天理に循がはずして利を貪ぼる時は、自から菩提の行願に背き利佗の精神に悖りて、八萬の煩惱、無量の罪業、皆な是

○善に遷れば其の徳日に新に、非を遂ぐれば則ち其の悪彌積む。（陸贄）

○公誠己を盡す、之を義と謂ふ。（祝枝山）

○ふたつなき花の心の開けては墨繪の梅のいつもかうばし。（古人）

○夢破る心の月もひかりそふくもの林のあかつきのかね。（烏丸光廣）

○もの云へば唇寒し秋の風。（芭蕉）

○しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。（承陽大師）

○愛語をこのむよりは、やうやく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろしられずみえざる愛語も現前するなり。現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし。世世生生にも不退轉ならん。（同）

○或人、中江藤樹に問うて曰く『拙者心中にさのみ怒氣無けれども、自分の弟妹共が少しでも惡きことをすれば言荒に叱りつくる癖あり、如何にすべきや』と問ふ。藤樹答へて曰く『是體認の疎なる故なり、怒が心中に伏藏されてあればこそ、和順の良心亡び、覺えず言荒になるなれば、其の伏藏の曲者を退治するが必要なり』。

○言の洩れ易きは禍を召くの媒なり、事愼まざるは敗を取るの道なり。（臣軌）

○甜言は蜜の如く、惡語は刀の如し。人は多言なるを以て善となさず、犬は善く吠ゆるを以て良と爲さず、刀瘡は好くなり易く、惡語は消し難し。人を利するの言は緜絮よりも暖かに、人を傷ふの語は荊棘よりも利し、一言半句重きこと千金に値ひし、一語人を傷る痛きこと刀の割くが如し。口は是れ人を傷るの斧、言は是れ舌を割くの刀、口を閉ぢて深く舌を藏せば身を安んずる處々牢し。（離騷經）

○自ら愛して而して人を愛せざるものは、未だ自ら愛せざる者なり。（言志耋錄）

○心を推して而して物を濟ふ。（仁明天皇）

○一寸の赤心唯國に報ず。（陸放翁）

の戒を護持する者は、君臣の名分分明にして而も臣庶をも侮らぬぢや。小心翼々として一日より一日を愼む、男女、位 定て而も婦女子を侮らず閨門の間も常に禮節あるぢや。父子兄弟位 定 て而も子弟を侮らぬ家門常に修る。王者が群臣を侮らぬによつて能者が事に當て自ら能を隱さぬ、直臣が諫言を盡してかくさぬ、庶民を侮らぬに由て億兆の推戴することと日月の如しぢや。男子が婦女子を侮らぬに由て賢女貞婦が德を輔け道を守る、父兄が子弟を侮らぬに由て孝子順孫が家風を墜さぬ、一日より一日を愼む中に此の樂事あつて盡ることなきぢや』と、實に愛語の德を言ひ盡して居るではありませぬか。要を取て言へば、佛祖正傳の十六條の御戒法が、口業の上に其の德を現じたのが愛語であります。此の愛語の德が身口意の三業にしみわたる時、發願利生の德を全うし行持報恩の功を收むることが出來る。故に、苟くも懺悔受戒の身となりて、本證妙修の境界に至りたる我等御互は、寢ても寤ても愛語の大行を修め、釋迦牟尼佛の恩德を戴き奉りつゝ、大行の根底を定むるの覺悟が肝要であります。

參　考

○口を護つて惡言を出すこと勿るべし。(遺教經)
○惡罵の毒を歡喜し忍受して甘露を飲むが如くすること能はざるものは、入道智慧の人と名けず。(同)

りました。或時、主人の用務にて從者を召し連れて、さる所へ赴く途中、町家の二階に齒磨を使ひ居たる者が、表の方に唾を吐きしに、圖らずも、平澤の着物に當りて、盡く禮服を汚した。從者は大に怒り罵りたれど、平澤は顏色だに變らずして、靜に之を制し、暫し店先を貸したまはれとて其の家に入り、挾箱の中より着替を出して服を更ため、詫入る人々に向ひて、『人誰か過なからん、只だ此の後を注意せられよ』と言ひ聞かせ、從者が『何故此の儘に御赦しなされしや』との尋ねに答へて『我が常に心得とする所の耐忍は、此の時にこそ必要なり。今日は大切なる主命を帶ぶる身なり、斯かる細事の爲めに時を費すべからず』と申されたさうである。又、夏の日、私用ありて供を連れて外出しけるに、町の者が撒きける溝水が平澤の袴の裾を汚しました。供人また大に怒りけるを推し止め『吾れ今日は私用にて外出せるなり、苟も士たる者は君命の外、私の爲めに人を罵詈すべからず。只耐忍せよ、耐忍だに有らば天下に恥辱のことあるまじ』と申したといふ話が雲萍雜誌に出て居ります。何と有難い話ではありませぬか。

愛語の德は沈香よりも妙なる香氣を放ち、甘露よりも勝れたる味を具へて居るものである。釋尊、四十九年三百餘會の御說法は、盡く愛語行の活動であります。一千七百則の公案といふも、一として愛語ならざるは無い。夫故、承陽大師は學道用心集に於て『忠臣一言を獻ずれば數廻天の力あり、佛祖一語を施せば回心せざるの人なし』と仰せられて、忠臣の一言は能く國家萬世の治基を樹て、佛祖の一語は能く永劫不滅の德本を定めまする。慈雲尊者の十善法語の中、不惡口戒の卷にかういふ語がある。『能く此

は毒舌を弄し、己れを欺き人を欺くことあらば、譬へば室内に悪臭を放つが如く、又は清水に毒薬を滴らすが如く、少なる一言一句が、往々にして平和の社會を紊亂し、天下の人心を動揺するに至るものです。『物いへば唇寒し秋の風』我等は常に深く其の口を愼しみ、益々愛語行を修めねばなりませぬ。

昔、備前の國主池田輝政公の家臣に、伊木清兵衛といふ忠義の士があつた。此の清兵衛、重き病に罹り危篤に逼りける時、傍の人に向つて『我は此の世に於て何等の望だも無れど、只願くは今一度君公に見ゆることを得たし』と切に申しければ、公は之を聞て、特々其の病牀に臨まれ『汝の願ふ所は何事に依らず採用すべければ、心置なく申し述よ』と仰せられしに、清兵衛は坐ろに感涙に咽びつゝ、重き頭を擧げ兩手を合せ『小臣が一族の事などは、君必ず御心な勞したまひそ、唯だ小臣に一の願あり、君は聰明に在せども常に磊落の御氣質ありて、動もすれば事を等閑にし給ふの風あり、且つ客士を好みたまふの餘り、身分に拘はらず濫りに任庸せらるゝの傾あり、是れ小臣の深く憂ふる所なり。夫れ大事は小事より起る、是を以て明君は些細の事たりとも輕んじ給ふこと無し、而して、人を庸ふるには必ず其の器を擇び、至誠を以て之を待つべし、是れ聖賢の志なり、君冀くは之を察せよ』と申し上げました。公は深く其の忠言を喜び、涙を流して實行を誓はれ、それよりは一層國政に注意せられたれば、永く國家安全の基を樹てられたとある。忠臣の語は全く敬愛の衷情より出づるを以て、一言能く萬世の福祉を成した。

また、徳川幕府の頃、何れの藩士なりしや其の名さへ傳はらされども、姓を平澤といへる武士があ

語を聞く時は、誰しも喜びの色が面に現はれ、心の中には言ふに言はれぬ樂しみを感ずるものである。又、面の前でなくとも、裏面に於て我に對して愛語せしことを聞く時は、其の至誠に感ずることが一層深いものであるから、肝にも魂にも銘ずるほどにて、其の慈愛と親切とは永久に忘れぬものであります。故に賛題の終りに於て『愛語能く廻天の力あることを學すべきなり』と仰せられたのであります。

　廻天とは天をも動かすといふほどの意味です。唐の太宗が洛陽宮の修覆を企てられた時、國財は非常に疲弊し、人民亦た大に困難であつた。そこで張玄索が面を冒して御諫言に及び、遂に中止せらるゝこととなつた。其の時、魏徵が張玄索の忠勇を讃歎して『張公の事を論ずる、廻天の力ありと謂つべし、仁人の言其の利溥し』といふたことが書言故事に出て居ります。天子の綸言は天の命令の如くである。それを變更したは、正しく天を廻らすの力と謂ふべきである。愛語の德も亦た是の如く、敵をも變じて味方となし、禍亂をも變じて平和と爲し、人を動かし天を動かすの力あることを知らねばならぬ。譬へば、如何に廣き室内でも、一片の沈香を焚けば、滿室盡く其の香氣に薫ぜらるゝが如く、又、萬斛の水の中に一滴の甘露を灑げば、其の水の全體が盡く藥となるやうなものである。慈愛の言語は慈愛の念より發し、慈愛の念は慈愛の振舞を起すものであるから、眞に能く愛語を爲すの人は、其の人の身口意三業を擧げて、皆慈愛の泉と爲るものです。故に、愛語の人に於ける、恰も沈香の如く、甘露の如く、自づから社會を感化し、自づから人間の道を莊嚴するものであります。之に反して、若し愛語の德に背きて、或は妄言を吐き、或

ある。一衆生たりとも、我が目に留つたならば、第一に慈愛の心を發すこと、慈念に富みし母親が赤子を見るが如くにして、それから、其の衆生に對して言語を發すれば、盡く愛語の徳を生じて其の言ふこと語ることが、自然と、柔和しき語、親切なる語、他をして滿足せしめ安心せしめ、眞正の幸福あらしむる語となるものであります。次の御文には愛語の趣を宣べて『徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし』とある。徳の有る人に對したならば、中心より其の徳を讃めて、彼をして增々其の徳を增進せしめ、他の人人をして彌々其の徳を倣はしむるやうにするが宜い。又、徳の無き者に對したならば、眞心を以て彼を憐み、而して、彼をして、自然に道に進み徳を養なはしむるやうにするが宜い。兎角に、凡夫は我儘我見が強いに依て、動もすると、徳ある人に對しては妄りに之を妬み、徳なき者に向ては妄りに之を誹り、遂には根本的に愛語の徳を滅却したがつてならぬ。吾能く人に親しむ時は、人亦た吾に親しむは自然の道理であるに依て、苟くも愛語の徳を以て人に接する時は『怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり』で、今までの怨敵も自づから我に降伏して、昨日の讐も今日は味方となる。君子とあるは大方の君子などといふ意味の詞で、廣く世の人々を指したのである。愛語の徳は、獨り自分と人との間を平和ならしむるのみならず、人と人との間をも和睦せしむるに至るものです。愛語は實に平和の根本と申すべきである。次の御文には、其の譯柄を委しく説明して、『面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず』と示されてある。徳孤ならず必ず隣ありで、面たり愛

あつて、無形の思想を自由に寫し出すことが出來る。是れほど調法のものは無いです。だが、餘り調法過るので、動もすれば、是を妄用し害用するの恐れがある。故に古人は『口は是れ禍の門、舌は是れ禍の根』だの、『智る者は言はず言ふ者は知らず』だの、『多門の室は風を生じ多口の人は禍を生ず』だのというて誡めてある。佛敎の十善戒法には、言語を誡めて妄語と惡口と綺語と兩舌との四通りを制してある。妄語とは虛妄を言うて人を欺くこと、惡口とは人を惡樣にいふこと、綺語とは語を飾りて人の心を迷はすこと、兩舌とは二枚舌を使うて人を不和ならしむることであります。我が曹洞宗相傳の御戒法の十重禁戒には、第四の不妄語戒と、第六の不說過戒と、第七の不自讃毀佗戒と、第十の不謗三寶戒との四箇條が、主として言語を制せられたものである。卽ち虛妄を言ふこと、人を惡く言ふこと、自慢すること、正道に反いた語を發することの四箇條であります。併し、斯樣な言語上の罪は何に依て生ずるかといふに、畢竟、孝順心と慈悲心との二つが缺けて居る爲めである。換言すれば、上を敬ふの心と下を憐れむの心とが無いからして、妄語をもつき、惡口をも列べ、自慢もいたし、邪見の舌をも弄するのであります。若し、上を敬ひ下を憐れむの心深かりせば、決して其の樣な言語を發せられるものではない。利生發願の心さへ堅固なれば、獨手に言語上の罪を解脫することが出來るものである。その利生發願の上から發する言語が、今の愛語であります。故に、本文には愛語の定義を示して『愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり』と仰せられて

二十三、愛語行（修證義第二十二節）

愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、德あるは讃むべし、德なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

此の一節は、前節に四枚の般若と仰せられた、即ち四攝法の中の第二愛語行の御親訓であります。愛語の愛は、慈愛、親愛、敬愛などと熟字する愛の字です。語は言語で、吾人の口業を代表した詞でありま す。故に、平生の口業、即ち凡ての言葉使ひに於て、常に柔和しき語、親切なる語、他をして滿足せしめ安心せしめ、眞正の幸福あらしむる語を使ふのが愛語であります。抑も、人と禽獸と相異なる所以は色々有らうなれども、此の言語の作用を有すると否とも亦た重なるものの一に相違ない。言語は人の思想を直接に且つ明白に表示する唯一の機關である。此の言語あるが爲めに、知識も開け、道德も行はれ、社會の交通融和も出來る。畜生には是れが無い。猿猴等の如き比較的高等なる動物には、多少言語らしいものがあるさうぢやが、それは音調の變化といふもので、言語とは申されぬ。幸にして人間には言語の作用が

○あさがほに釣瓶とられてもらひ水。（千代）

○蚊一つだに施しかぬる我身かな。（古人）

無ければなり。極貧の人一食を得たる後、食器を洗ひ、その滌汁を施すも福を得ん。縱令麪塵を以て蟻に施すも亦無量の福を得ん。天下の極貧と雖も誰か塵許りの麪なきものあらんや。極貧の人衣服なしと雖も眞の赤露のものはあらじ、苟にも衣あらば一線を拔きて人の疵を繫ぎて施を作せ。善男子、天下の人貧窮なりと雖も其の身なきものはあらじ。若し施す物なき時は、他人の施を作すを見ば、身を以て往いて之を資助せよ。若し夫れ施すに意なくんば、國主と雖も必ず施す能はざらん。（優婆塞戒經）

○世人多く、善事を作す時は人に知られんと思ひ、惡事を作す時は人に知られじと思ふに依て、此の心冥衆の心に合はざるに依て、所作の善事には感應なく、密に爲す所の惡事には罰あるなり。是に仍て、還て自ら謂く、善事には驗しなし、佛法の利益すくなしと思へるなり。是れ即ち邪見なり最も改むべし。人も知らざる時に密に善事をなし、惡事を錯りて後には、發露して過を悔ふ、かくの如くすれば便ち密々にする處の善事には感應あり、露るる惡事は懺悔せられて罪を滅ずる故に、自然に現益あり、當果も亦知るべし。（承陽大師）

○ももとせも猶あきたらず行末を思ふこゝろぞものわらひなる。（江村專齋）

○おごりなきこゝろを代々の寶にてつきせぬ家の守りとも見よ。（慈雲尊者）

○慈悲の目に惡くしと思ふ人はなしとがある身こそなほあはれなれ。（眞阿上人）

○我子なら供にはつれじ夜の雪。（松雨の妻）

參考

○諸々の智者は三不堅を以て、三堅に貿易ふ。一には不堅の財を以て堅財に貿易へ、二には不堅の身を以て堅身に貿易へ、三には不堅の命を以て堅命に貿易ふ。（本事經）

○種を福田に種ゆるは、尼倶類樹の一核を種ゑて、無限の子を收むるがごとく、一を施して萬倍を得。（罪福報應經）

○世に愚なる人多し。慳み守りて施さず、萬億の金を積みて是我所有なりと稱せり。斯くして命終らんとする時に臨み、眼に惡鬼を見、刀風その體を解きて出入の息絶ゆ。貪りの輕重に隨つて苦辛を受け、罪を受くるの處に至りて自ら悔ゆ。悔ゆと雖も何ぞ及ばんや。（菩薩處胎經）

○菩薩は大施主となりて、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることなく、果報を望まず、名譽を求めず、勝處に生ぜんことを求めず、利養を求めず、但一切衆生を救護はんことを欲し、衆生を攝取して饒益せんことを欲し、諸佛の本行を顯現さんと欲し、一切をして苦を離れ、樂を得せしめんと欲す。（華嚴經）

○財無き人の自ら財無しと說くものは、實にあらず。何となれば。人として一水一草も有せずと云ふもの

北條時氏公の妻にて時頼公の母たる松下の禪尼は、一日、時頼公を招かれける時、自ら破れし障子の切張をして居られました。兄義景が之を見て「何ぞ僕を呼で爲さしめざる、又、切張などをせずに新たに張替へたまうて然るべし」と申されけるに、尼公は、「僕ありとも予より上手とも覺えず、又、新たにするには猶ほ早し、凡そ物は少く破れたる時に補はゞ勞少うして事調ふものぞかし」と答へられたといふ話は、有名なる美談であるが、是れ正しく施すに儉約の道を以てせられたのである。眞實の敎は能く一切の福を生じ、眞實の福は能く最勝の德を養ふ。故に、法施と財施とは、唯だ其の相を異にするのみで、歸する所は倶に無畏の果を成じて、大安心大安樂を得せしむるものです。

有福の君子は、宜しく正しき方法に於て、敎育なり、慈善なり、工業なりに力を盡すべきである。それがやがて精神的文明を增進する資糧となります。又、有智の君子は、宜しく誠實に世を導びき人に敎へて倦むべからずである。それがやがて國家を莊嚴し民力を强大ならしむる基礎となります。況や、懺悔受戒の身と爲りて洞上無二の法義に預かる方々は、誠を盡し心を傾けて、緣に觸れ物に應じて財法二施の妙行を實踐し、南無釋迦牟尼佛の名號を唱念し奉る中にも、慈悲愛念の妙德を發揮せらるゝが、佛子第一の妙修行でございます。

君の爲め國の爲め、親の爲め祖先の爲め、社會の爲め衆生の爲めと思へば、その營業の其の儘が、直接間接に公利公益となつて、立派に布施の德を成することゝなります。檀度とは、菩薩六度の行の第一たる檀波羅密のことです。檀は梵語で、委くは檀那といひ、此に布施と飜譯する。度はワタスと訓じ、梵語の所謂波羅密で、此の岸より彼岸に渡るといふ比喩的文字である。卽ち迷の此の岸を離れ、生死の大海を度りて悟の彼岸に達すること。凡夫の此岸を出でて業障の波濤を踰え、聖賢の彼岸に到ることであります。

昔、釋尊が御弟子の阿難尊者を率へて、婆羅門城に托鉢を行ぜられた時、婆羅門僧侶の策略で、一粒米を供養する者も無かつた。時に、町端に居りし一老婆が、釋尊の空鉢にして歸りたまふを見て、臭潘淀とて米の淘汁の澱んだやうな物を至心に供養し奉りしに、釋尊は其の眞心を嘉せられ『汝は今後十五劫の間三惡道に墮せず、後に辟支佛と成るべし』との御記莂を授けたまうたことが大論に出て居ります。又、阿育王經には、阿育王が末後に臨み菴摩羅といふ果物の半分だけありしを、鷄寺と申す御寺に施されし時、同寺の大衆は深く王の淨信心を喜び、其の果物を粉にして數百人の僧侶に頒つたといふ因緣が說てあります。承陽大師は典座教訓に此の因緣を示されて『漿水の一鉢も也た十號に供じて自から老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果も也た一寺に捨して能く育王最後の大善根を萠す、記莂を授かり大果を感ず、佛の緣と雖も多虛は少實に如かず』と仰せられてあります。是れぞ所謂『長者の萬燈、貧女の一燈』の理で、其の信念と誓願とに依て、少分の布施も廣大の善根功德を獲得するのであります。

賜であります。故に、若し淨らかなる心、限りなき心を以て布施を行ふ時は、錢一文、草一本も自から現當二世の大善根となり、經文の一句一偈、教訓の片言隻語も亦た自から今生後世の大功德となる。此處を『然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す』と仰せられたのである。菩薩心の大願大行より出たる布施であるならば、法施でも、財施でも、盡く未來永劫の安心安樂を得せしむる手段であるに依て、法施の中にも自から財に關する福分を與へ、財施の中にも自から安心解脱の因緣の增進するに依て、次の御文には『法も財なるべし財も法なるべし』と仰せられたのであります。而して、此の布施行は實に天地の盛德であるから『唯だ彼が報謝を貪らず自らが力を頒つなり』で、施を致したからとて、決して、彼が報謝というて、他の返禮や恩報じをあてにせず、唯々自分の力を頒ちて人に施す樣にするが、眞正の布施行である。

凡そ施には三種の等級がある。施し已て悔ゆと申して、施してから後に、損でもしたやうに思うて殘念がるが如きは、最劣等の施である。次に相當の報酬を見込で施すのは中等、無所得というて何等の報酬をも求めず、布施行其の物を喜び樂しむが如きは最も優勝の施で、所謂佛陀大悲の妙用であります。斯る妙用が身心に充ち滿つる時は『舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生產業固より布施に非ざること無し』で、舟なき處に舟を置て諸人に便利を與へ、橋なき處に橋を渡して通行人を益するのも皆な廣大なる施である。加之、治生產業、卽ち生計上の業務を執りて、百姓をしたり商法をしたりしながらも、

くにすなほな語使ひをすること、四に身施、身で手傳ひをすること、五に心施、心で他の善を贊成すること、六に牀座施、人に敷物を敷かせること、七に房舍施、人に坐敷をあてがふこと、是等は財物を損ぜずして大なる布施の福を獲るぞと仰せられてあります。抑も布施の行は、之を大別して二施、又は三施としてある。二施とは財施と法施との二つ、これに無畏施を加へて三施となる。財とは身を資け命を養ふ所の物で、所謂物質的の布施である。衣食住は勿論、水一杯お茶一服も皆な財の施である。法とは心を養ひ智情意の三を保護し發達せしむるもので、所謂無形の布施である。小兒を育てるにも、乳房を含ませ衣服を着せるの類は財の施で、言語を覺えさせたり行儀作法を敎へたりするの類は法の施である。佛在世に須達長者が、黄金を布て祇園精舍を建立せしが如きは財施で、釋尊が四十九年の間に三百餘會の御敎化の如きは、法施の絶大なるものである。無畏施とは、無畏は畏るゝこと無しといふのであるから、分り易く申せば、安心といふほどのことになる。故に、無畏施とは安心を施し安樂を施すことである。財施も、法施も、其の目的は、人をして安心せしめ安樂ならしむるが爲めであるから、無畏施なるものは、つまり布施行の目的というても宜い。贊題の御文には財と法との二つを擧げて、無畏施を略してあるのは、財法二施の中に自から無畏施は含まれて居るからであります。

菩薩六度の大行も布施を以て首と爲す。佛樣の御仕事も唯だ是れ圓滿なる布施を行じたまふに外ならぬ。草木鳥獸も布施の力に依らざれば發育生長することは出來ぬ。我等の身體も精神も皆な是れ布施の

神に存する慈愛の念であるから、之を消極的に解釋すれば『貪らざるなり』で、慳貪ならざるが布施の土臺であります。慈愛なき者は他人を顧みることなし。他人を顧みざるを以て分ち與ふること無し。獨り分ち與へざるのみにあらず、動もすれば、他の財を貪ぼり他の食を貪ぼり、色を貪ぼり名を貪ぼり、遂には惡として爲さゞる無く罪として造らざる無きに至る。『十惡をならべて置てながむれば貪欲殿のせいの高さよ』である。若し此の貪欲を離るれば、本性の慈悲心忽然として現はれ、緣に觸れ境に對して、知らず〳〵布施の妙用を起すに至ります。釋尊も優婆塞戒經に於て『貪ぼること無きの心、之を名けて施と爲す』と御示し下されてある。眞正の布施は斯く精神的でありますから、『我物に非れども、布施を障へざる道理あり』で、我物とては更に無しといふ樣な人でも、布施行に障りはない。釋尊は、若し貧窮の人ありて布施すべき物なき時は、他人の布施を行ふを見て深く隨喜（ともに喜ぶ）の心を生ぜよ、隨喜の功德は布施と同一であるぞよとまで仰せられてある。唯だ布施を行ふには、『其の物の輕きを嫌はず、其の功の實なるべきなり』で、品物の輕重には拘はらぬが、其の功果が眞實でなければならぬ。

法苑珠林には、施すべからざる物に五通りありとて、爲めにならぬ財と酒及び毒藥と殺生の道具と、人を傷める器械と人の心を迷はす音樂女色とを擧てある。此等は其の結果に於て功の無いばかりか、却て害があるからであります。又、雜寶藏經には七通りの施を說てある。一に眼施、人に對するにやさしい目付をすること、二に和顏悅色施、人と交はるに機嫌の好い顏付をすること、三に名言辭施、人と口をき

功德を有するから、實智といふたものです。世智にはそれがない。有ても一部分の作用にして全分の功德は具はらぬ。學問があつても、辯才があつても、學問辯才其の物が直に斷惑證理、平等利益の德を現はすことは出來ぬ。下手にすると、學問辯才が却て一段の罪惡を作ることゝもなる。然らば、佛樣の御悟とは何んなものかといふに、宇宙の眞理、天地の妙德を實現したことに名けたものである。宇宙の眞理、天地の妙德とは何んなものかといふに、孝順心慈悲心の外にはない。此の孝順心慈悲心が、物に應じて動き境に觸れて發するのが利生の行願である。布施・愛語・利行・同事といふ四通りの妙行は、此の行願の實現したる相であるから、是を四枚の般若と仰せられたものであります。薩埵とは菩薩のことで、委しは菩提薩埵、是を覺有情と飜譯する。有情とは衆生の別譯です。此の覺有情といふに、覺を開いた衆生といふ意味と、一切の衆生を覺らしむるといふ意味とがある。併し、一口に云へば、衆生濟度を以て絕對の任務とする佛弟子をば、菩薩とも薩埵ともいふたものです。此の四通りの妙行を修する人が眞の活菩薩であります。此の四通りこそ活菩薩の行力と願力とである。

此の一節は其の四通りの中の第一の布施行であります。布施はシキ、ホドコスと訓じて、大慈悲心を以て、普く法と財とを一切衆生に布き施すことである。布き施すといふは、己れの親切を平等に他に頒ち與ふることである。目下の者に物を授くることのみではなく、目上の人を供養するのも施である。『己れの欲せざる所は人に施すこと勿れ』とは、上下一般に通じた敎訓である。然るに、其の布施の根源は己れの精

二十二、布　施　行（修證義第二十一節）

衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり。其の布施といふは貪らざるなり、我物に非れども布施を障へざる道理あり、其の物の輕きを嫌はず其の功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず自らが力を頒つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生產業固より布施に非ざること無し。

是より下の四節は、菩薩の四攝法と申して四通りの妙行がある。それを順次に御示し下されたので、即ち利生の發願を實行すべき標準で、最も大切なる御敎である。夫故、賛題の初に『衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり』とある。四枚は四箇といふこと、般若とは梵語で、此には智慧と飜譯してある。智慧には二通りある。一には世智とて普通人間の知識のこと、二には實智とて佛の智慧のこと、即ち是れを般若といふのです。佛の智慧には、煩惱の根本を斷じ、生死の束縛を解脫し、未來際を盡し十方界に通じて、一切衆生を平等に利益するの大

○もし一刹那、この菩提心をおこすより、萬法みな增上緣となる。(同)
○他をめぐみ我をわすれてものごとに慈悲ある人を仁と知るべし。(烏丸光廣)
○へつらはずおごることなくあらそはずよくをはなれて義理をあんぜよ。(同)
○君をあほぎ臣をおもひてかりそめも高きいやしき禮義みだすな。(同)
○何ごともそのしな〴〵を知る人にひろくたづねて他をなそしりそ。(同)
○心いと直かるべしといのりつゝあしきをすてゝ善にともなへ。(同)

參考

○菩薩は常に清淨にして方便を以て衆生を利す。實に諸欲の垢なきも染を行ずる行ひを示現し、涅槃の池の中に浴しつゝ方便して諸有を現ず。これを諸菩薩は二邊に住せず、身口意常に第一義寂靜に住すれども、衆生を利益せんが爲めに方便して世間に同ずと名く。蜂の華の林に入るに專ら一華を採らざるが如く、菩薩は方便して一切の諸の境界を行ずるなり。(大薩遮尼乾子經)

○智者(佛)は、深く一切衆生の生死苦惱の大海に沈沒するを見て、救濟はんと欲するが爲の故に悲を生ず。又、衆生邪路に迷ふも、示導するものあることなきを見る、是故に悲を生ず。(優婆塞戒經)

○おほよそ菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、佛道にせましと、ひまなく三業にいとなむなり。いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず。(承陽大師)

○あきらかにしるべし、佛祖の學道、かならず菩提心を發悟するをさきとせりといふこと、これすなはち佛祖の常法なり。(同)

○もはら自未得度先度他の行願を退轉せざるべし。自未得度先度他の行願にそむかんがごときは、これ魔說としるべし、外道としるべし、惡友說としるべし、さらにしたふことなかれ。(同)

水尾天皇が親く此等の御物を御覽ぜられて、御返却の際、此の箱を下賜せられたものなさうであります。此の事は、外崎覺氏が官命を帯びて山陵取調の際、實見せられたものとて、同氏の講演中に委く話された事柄です。萬乘の尊きを以て一身を雲水に任せ、一衣一鉢、山を踰え溪を渉り、或は夢を樹間に結び、或は錫を石上に卓し、飄然、淡然として國内を徧參し、怨親平等に發願回向したまひけるは、實に千古未曾有の御行持ではありませんか。是れ皆な道の爲めに御身を忘れ、道の爲めに御心を捧げたまひし、菩提心の妙用であります。

菅原道實公の御語にも『世の人色欲を好める樣に、心のひまなく、道を思ひ修しなば、その天德の己れに入り來ること火のかはけるにつくが如し。色欲は求め得て反て己れをそこなひやぶる、天德は無量劫にも盡きず、妙の妙なるもの也』とある。此の妙の妙なる道を其の身に具へるのが、佛教信者の大目的であります。此の大目的を達するには、先づ以て身口意の三業を清淨にして所謂滅罪懺悔の法を修し、佛祖の大戒を相續して本具の戒光を發揮し、以て本證を身心に圓成せねばならぬ。本證一度現ずれば妙修自から具はり、獨手に利生報恩の行願を全うしまする。是れ皆な大聖釋尊の慈光に依るものなれば、至心に其の恩德を感謝し、速に發願回向の素懷を成就せられたいものであります。

且つ潜に楠公父子等の忠死を惜ませられ、一層浮世を憑みなく思召し、遂に丹波の國の山奥に常勝寺といふ寺を建立してお自ら開基と御成りなされ、後、勿體なくも、草鞋を穿ち脚袢を着け、一蓑一笠、自ら鐵鉢を捧げ、一個雲水の御身となりて、普く全國中を行脚あらせられました。殊に、身は北朝の天子であらせられしにも拘はらず、高野の山を御立出の後、直に吉野へ上り後村上天皇を御訪ねあそばされ、荒涼たる新戰場をみそなはし『南朝と稱し北朝と呼び、敵といひ味方といふも、思へば一場の夢なりけり、觀じ來れば親疎の隔あるべからず。唯惜むらくは此の間に立て各〻忠義の爲めに戰死したる者共哉』とて、倶に御落淚あそばされ、殊に楠公の籠城したりし金剛山の下を御通過の折などは、一層感慨に禁へさせざるが如く、幾度となく御淚を拭ひたまひしといふことであります。天皇の御出家、御行脚は、正しく戰死者の菩提を弔ひ、兼ねては御身を以て佛の道に盡したまふ御心に出でたるものと思はれます。天皇の山陵は常勝寺の奥に在りて、其處には椿と樫と椎の三本が植ゑられて、土が少く高くなつてあるの外に、何にも無いと申すことです。少し離れて陽雲菴といふがあり、只今は陽雲殿と稱して、此の中には天皇と夢窓國師の木像が安置してあるさうです。又、御記念物としては、その寺に、麻だか絹だか分らぬ樣な紺色の御衣の、襟の邊がズタ〳〵に切れて居るのがある。これは始終御召になつて、幾回か風雨にたゝかれたものであらう。又、天皇が草鞋の紐通しに御用ゐあそばされた古い竹の箆が一本と、黄金の四十三體佛と、宗十郎頭巾のやうな御帽と、楊枝入と、箸一對だけがあつて、立派な箱入になつて居るさうである。それは後

昔、良秀といふ畫師は、其の近處に出火があつて、自分の住宅が類燒せし時、家財を取出す考もなく、獨り其の傍に立てニコ〳〵して、さも面白さうに家の燒けるのを見て居つた。人々が此漢氣でも違ひはせぬかと思ひ『御身は何故に見物などをして居るぞ』と尋ねしに、良秀は人々に向ひ『予は久く不動尊を畫き居るも、まだ火焰を寫すこと眞に逼らず、然るに、今は圖らずも火事の御陰で、漸く火焰を描くの術を明らめました』と答へて喜んだといふ話がある。是れ火事を以て繪畫に回向したものである。人間たる價値は此の回向心の如何に依て定まる。古の聖賢は道の爲めに學び道の爲めに經營し、道の爲めに身を忘れ己れを忘れ、即ち萬行を以て道に回向せられたのです。其の道といふも、畢竟は天地の心を以て心とし、天地の德を以て德とし、依て以て一切の衆生を救濟し利益することとなのであります。故に、三世の諸佛十方の菩薩が、無量劫來の艱難苦勞も、但だ此の回向の行持に外ならぬ。此處を『或は無量劫行ひて衆生を先に度して、自らは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり』と仰せられたのであります。但しといふは、唯だ〳〵そればかりといふ語である。

北朝の天子たる光嚴天皇は、足利尊氏等に擁せられて、是非なく皇位に即かせられたまひたる御方であらせらるゝが、曾て夢窓國師を師として佛教の蘊奧に參徹せられ、もと伏見の光嚴寺に在せし緣に依り、紀念の御命名として光嚴天皇と御稱したまはれたと申すことである。當時、武家の權威壓制殆んど其の極に達し、天皇は空しく虛位を御占めあそばされしに過ぎず、天皇は常に國家の狀態を御歎きあそばされ、

露』暫時も差措かず、急ぎに急ぎて利生發願の身とならねばなりませぬ。利生發願の身というても別では無い。『設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尚ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり』で、自分の身口意三業の上に働き出す總ての利益幸福をば、自分一人の爲めにせず、盡く一切衆生の成佛得道に回向することである。回向とは、此方の事を回して彼方の方へ向けるといふ意味です。之を俗諦門の上に就いて申せば、忠孝は人倫の大本である。故に、忠孝を勵まんと欲する者ならば、百姓は百姓の事を爲ながら、商人は商人の業を執りながら、君の爲め、親の爲め、國の爲め、先祖の爲めといふ觀念を離れてはならぬ。此の觀念さへ堅固なれば、日々の業務も自から忠となり孝となる。教育家も政治家も皆な同一で、我が作業一切を回らして、大君に酬ひ奉り、彼の父母に向け奉るのである。眞箇の忠臣ならば、死するも生きるも、進むも退くも、自から忠義の道に違背せぬ。楠公父子の身を棄てゝ公に奉ずる、藤房卿の世を逃れて菩提を弔ふ、其の趣にこそ異なりはあれ、忠節の點に至つては變りは無いやうなものです。故に、菩提心の回向というても、自分の仕事を放擲せよといふのではない、男子は男子の本分を盡し、女子は女子の本分を果し、主人は主人らしく、奉公人は奉公人らしく、各々其の本來の職分を守りながら、大菩提心の大勢力に依て、盡く一切の衆生を利益し、三界の萬靈にも酬ゆることゝなるのである。無量壽經に往生淨土の三心とて、至誠心と深心と回向發願心とを說いてあるが、此の中の回向發願心は正しく此の菩提心の回向に當るのである。

併し、心の奥底に金剛不動の菩提心がありさへすれば、決して憂ふるには及ばぬ。悲しむべき縁に遇ふ時は、淨信心を起して益々懺悔滅罪の功德を成じ、喜ぶべき境に觸れては、報恩の志を振つて愈々受戒入位の境界を樂しみ、善につけ、惡きにつけ、行持を勵まし誓願を進むるやうになるものであるし、また是非共さうならねばならぬ譯のものであります。優婆塞戒經に『一切の惡友諸々の煩惱業は卽ち是れ菩薩道莊嚴の伴なり。何を以ての故に、一切凡夫は智慧正念の心あること無し、故に煩惱を以て怨敵と爲す。菩薩は正念具足す、故に煩惱を以て道の伴と爲す。惡友及び業も亦復是の如し』とありまして、正念具足の人には、惡友も惡業も、皆な我を勵まし我を誡しめ、我をして油斷せしめず。我をして憤發せしむる便りとなる。是れ皆な菩提心の功德妙用であります。

夫故、次の御文には『然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし』と仰せられて、縱や、今日迄ば徒らに五欲六塵の奴隷となり、虛名を貪ぼり虛利を愛し、本具の佛性をも明らめず、永久の安心をも決定せず、唯うか〱と日月を送過し去りし身なりとも、幸にして此の命未だ盡きず、此の身猶ほ存して居るではないか。此の手の利く中に掌を三寶に合せ、此の足の在る中に歩を佛道に進め、此の息の通う間に急ぎて眞實清淨の菩提心を起し、衆生利益の大誓願を立つるが宜い。『いつまでか明けぬ暮れぬと營まん身は限りあり事はつきせじ』夢幻の如き浮世に貪着して何にかせん。露電の如き名利を追廻て何にかせん。『消え易き我身にかへて尋ねみんたへなる法の道しばの

六趣とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道のことで、所謂凡夫の世界です。此の六道は皆現世の業因縁に依て趣くべき世界であるから、六趣と稱したのである。此の中、天上界、人間界、修羅界は果報勝れて居るから三善道と稱し、餘の三世界は果報が劣等であるから三悪道と名くる。三善道の中でも、修羅道は我慢鬪爭の世界であるから、是を三悪道仲間に攝して四悪趣とも稱してある。四生とは胎生・卵生・濕生・化生の四つで、衆生の生るゝ相に依て分類したものです。人間の如く母の胎内より生るゝが胎生、鳥の如く卵より生るゝは卵生、蛞蝓などの様に濕氣のある處を緣として生るゝは濕生、蠶が蝶に變ずるが如き、俗に云ふ山の芋が鰻に化するが如き類は化生である。輪轉は比喩で、車の輪の回轉るが如く始終其の間をくる〳〵轉ることである。諸法本より定れる相なく、一念の動作に依て、佛ともなり鬼ともなり、人間ともなり畜生ともなる。昨日の悪人も今日の善人なるあり、今日柔和の人も明日は如何なる恐ろしい者となるやを期し難い。實に變り易きは人心である。故に我等お互は、無始劫來、幾度か生じ幾度か死し、幾度か善人となり幾度か悪人となり、時々に變化し刻々と移動し、彼處に生れ此處に死し、此處に生れ彼處に死し、車輪の如くクル〳〵と回り轉つて停止する所なきを、六趣四生の輪轉と言うたものです。だが是を遠方のことゝのみ思うてはならぬ。一日の中、一時の間でも、様々に心が變り様々に業を起し、泣たり笑つたり、悲んだり喜んだりして居るのは、取も直さず此の身ながら六趣四生の往來ではありませぬか。

二十一、發願回向（修證義第二十節）

若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も、其の輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尚ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して、自らは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。

邪人正を說けば正も亦た邪、正人邪を說けば邪も亦た正といふ古語がありまして、心得の惡い人の言ふ事は、道理ある事も却て無理となり、量見の正しい人の語は、つまらぬ事も大なる教訓となり、淺はかな事までが、自然に甚深の意味を含んで居るものです。故に人は其の志、卽ち誓願が一番大切で、これが萬行の基礎であります。前節の御文の如く、眞實、菩提心を發して常に大慈大悲の念に住し、身自ら一切衆生の導師を以て任ずるほどの大誓願を有する時は、縱ひ其の身が或る因緣に依て、六趣四生に輪轉すというて、凡夫の間に交はり迷の世界に生死往來して居りませうとも、其の生死往來が却て菩提心の行と願とを莊嚴する資となりまする。其處を『若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も、其の輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり』と仰せられたのであります。

みて行の正しからんことを希ふべし。(文皇后)

○女の心がけは、常に敬の心を持て、夫の猛く彊き心に從ひ順ふやうにすべし。敬といふは、常にまことの心を持て時の間も怠る心なきことなり。順といふは、物やはらかなる心を持て夫に謙り隨ふことなり。この二つの道は、女の大いなる禮儀なれば、此の德そなはりたる人は、夫婦の仲自ら和ぎかなひて行末久しく末とげ侍るべし。(女誡)

○あやにしきとりかさねても思ふかな寒さおほはん袖もなき身を。(昭憲皇太后)

○つゆふかきあさぢが原に迷ふ身のいとゞ暗路に入るぞかなしき。(袈裟女)

○奢りぬる人の榮華はあだ花の早くも散りて實はなりもせず。

○すなほなる竹の操をわするゝなうきふししげき世を渡るとも。

○おのが身に火事がいくならかんにんのやねからけせよむねのほのほを。

○うきことになれて雪間の嫁菜かな。

せり。時に分儒達といふものあり、波羅門に告げて曰く、汝の女をして國中の人に見せしめて、若し女を呵する人あらば我に五百金を與へよ、若し一人の呵するものなかりせば、我は汝に五百金を與へんと。九十日の間、國中を巡くりしと雖も、一人として女を醜と云ふもの無し。時に、佛、祇園精舎にて法を説きたまふと聞き佛の處に至りて云はく、佛は諸國を遊びたまふ中に、此の女の如き端正しき女を見たまひしやと。佛直ちに呵して曰く、此の女は一も好き處なし。婆羅門曰く、國中に一人も此の女を醜と云ふものなし、何故に今醜と云ひたまふや。佛答へたまはく、世間の人は五根及五境の美を翫じて好とす、我は身に細滑を貪らず、口に惡を説かず、意に惡を思はざるを好とす。(七女經)

○惡人は男子も惡人なるあり、善人は女人も善人なるあり、聞法をねがひ出離をもとむること、かならず男子女人によらず。もし未斷惑のときは、男子女人おなじく未斷惑なり、斷惑證理のときは、男子女人簡別さらにあらず。(承陽大師)

○女の身は、一行失すれば百行成ることなしというて、一の濫りがましきことあれば、萬の行儀作法いみじく勝れたりとも、終に其の身を滅すの基なるべければ、深く懼れ謹しむべきことなり。(曹大家)

○女の行ひの惡しきに三あり。一には我が身を自慢して我が爲す事を悉く是と思ふもの、二には人を蔑に自ら矜る心あるもの、三には自ら心の中に其の惡しきを知るも、我れと我が心を欺き、善きことを爲すやうにもてなすものなり。此の三つの心ばせ一つもあらん人は、女の德行の缺けたる人なれば、朝夕謹み

はず、拔苦與樂の誓願を忘れずして、一擧一動、自から自未得度先度他の功德と爲つて現はるゝのが、佛陀の大光明である。

然るに、今の世の中は、此の菩提心といふものに重きを置かず、何事にも外形を飾るのが主となつて居るやうに思はれる。勿論、外形とても輕んずべきものではないが、精神の据り處が惡いと、僞善詐行というて、虛僞の善根、譎詐の行爲と爲る。如何ほど國家が物質的に文明の度が進んで來ても、肝心な精神が僞物では、恰も錦に泥を包んだやうなもので、甚だ心細い譯ではないか。夫故に、我等お互は、先づ第一に自分の心を美しく磨き上げて、慈悲仁愛を以て心と爲すといふことに修養を積まねばなりませぬ。經にも『心淨ければ國土淨し』とありまして、心さへ菩提の道に契ひなば、身體も行爲も自から淨らかに爲り自から美しく成るものです。其の修養の第一義は懺悔受戒の身と爲りて諸佛同證の位に上り、利生報恩の行持を行取して、生々世々の大導師たる釋迦牟尼如來を唱念し奉るが最勝の妙訣であります。

參考

○拘留國に一人の婆羅門あり、摩訶密と云ふ。彼は豪富にして珍らしき寶甚だ多く、智慧秀で國の師となれり。然れども、慳貪にして佛法を信ぜず。彼に七女あり、端正にして比無く、金銀の瓔珞を以て莊嚴

て、大解脱の妙味を背むることは出來まいと思ふのであります。

彼の有名なる舍利と稱する比丘尼は、肥後の國八代の人で、天平勝寶三年に生れ、七歳の時に法華經や華嚴經を誦んだといふほど聰明の質でありました。或時、奈良大安寺の戒明といふ和尚の、華嚴經を講じて居る席に列つて傍聽せしに、戒明は之を見て大に叱り『汝は穢れたる女人の身を以て此の淸淨なる道場に入り、尊とき法筵を汚すこと此上なき不埒の業なり』と申されけるに、舍利尼は泰然として更に驚かず『佛の慈悲は平等にして普く群生を濟度したまふとこそ承はる、況てや法界は一相にて本來罣礙なし、何ぞ男と女とを別つべきや』と答へ、華嚴甚深の敎理を演說しければ、流石の戒明も遂に答辯に窮して、舍利尼の說に服されたと申すことであります。

此等の因緣に依て見るも、佛敎は決して、男女の相を以て成佛不成佛を論ずるものでないことが解るであらうと思ふ、成佛と不成佛とは菩提心の發ると發らぬとに依て分れるのである。菩提心というたからとて佛敎の專有物ではない。即ち佛性常住の孝順心慈悲心で、所謂天地自然の妙德であります。支那の子貢が其の師の孔子に向つて『一言にして以て身を終るまで之を行ふべき者ありや』と問うた時、孔子は『其れ恕乎、己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ』と答へられたとある。『よろづ我がものと心にあぢはひて鹽梅よくば人にふるまへ』で、自分の氣に入らぬ事は人にもさせず、自分の心に適うた事は人にも與へ、衆と與に喜び、衆と與に樂しみ、如何なる境に對しても、如何なる場合に臨んでも、慈悲仁愛の心を失な

を『此れ佛道極妙の法則なり』と御示し下されたのであります。

或時に、虚無僧と塗師職人と出家さんとの三人が集つて、四方八面の話しの次、何んと歌でも讀んで遊ばうぢやないかといふ動議が出た。すると、彼の虚無僧は取敢へず『尺八の竹に異りは無けれども一つは穴のくり方による』と遣て除けた。塗師職人も負けぬ氣になり『輪島なる漆に異り無けれども一つは質のくり方による』と詠んだ。出家は扨々面白き人達ぢや、然らば拙衲も御仲間入を致さうとて『極樂の道にかはりは無けれども一つは珠數のくり方による』といふ歌を詠んだといふことであるが、實にや善きも惡きも、くり方一つ、佛も凡夫も心の持方次第である。男子にして女人なるあり、女人にして男子なるあり、貴とくして賤しきあり、賤しくして貴ときあり、智愚賢不肖の別といふも、菩提心の發るか發らぬかに依て分るゝのである。

近代の高僧原坦山和尚は、體格魁偉、眼光人を射て、而も白髯の生えた豪傑風の人であつた。或時、寫眞屋へ行かれた處、寫眞屋の主人がいふに、『貴僧の御容貌は勅任官というても耻かしからぬ、お立派な御風彩です』と申しますと、和尚は最と磊落な口調で、『拙僧は三界の大導師であるのに、そんな馬鹿者に見えるかな』とて大笑せられたといふ話がある。我等お互もかういう大丈夫の志氣が有りたいものである。さればとて、高慢らしい量見を起してはならぬ。姿や形にのみ貪着せず、名譽や利益にのみ拘泥せず、超然として眞箇の菩提心を發して、三世の諸佛と手を執り膝を交るの樂しみを得る樣にせねば、決し

人を輕蔑したのでもなく侮辱したのでもない。人間界の秩序として、一面には必ず是の如き道理が存するのである。

況てや、釋尊が場合に依り極端に女人を惡く仰しやつてあるが如きは、一は佛法を修行する男子の爲めに、之を說いて女色の害毒を防禦せしめ、一は女人其の物の爲めに、故に弱點缺點を擧げて、彼をして己れの弱點缺點を自覺し、飜然大丈夫の志を起し、其の本性の美德を發揮せしめられたので、何れも皆な大慈大悲の御化導であります。故に涅槃經には『女人と說くと雖も丈夫の性ある者は我れ是を男子と說く、若し丈夫の性なくんば說いて男子と言ふと雖も我れ是を女人と說く』とある。殊に我が高祖承陽大師は正法眼藏禮拜得髓の卷に於て、最も嚴重に、男女の相に依て佛法に障壁を築くの邪見なることを御誡め下されて『正法眼藏を傳持せらん比丘尼は、四果支佛および三賢十聖も、來りて禮拜問法せんに、比丘尼この禮拜を受くべし、云々』又『女人なにのとがかある、男子なにの德かある、惡人は男子も惡人なるあり、善人は女人も善人なるあり、聞法をねがひ出離をもとむることかならず、男子女人によらず、云々』とも仰せられてあります。此等の事は折を見て委しく御話しに及ばうが、兎に角、男といひ女といふは因緣生の假の相で、本來具有の菩提心の上には微塵ばかりも男女の隔てはない。釋尊一期四十九年、八萬四千の法門を開示せられたのも、只だ此の菩提心を發さしめんが爲めに外ならぬ。然れば、佛法の至極微妙の法則の上には、男女の區別を論ずべからざるものであるといふことを、よく〳〵御合點下さるゝが宜い。此處

ては無い。全體、人類のある所、必ず男女がある。古說に依れば、男は陽にして天に配し、女は陰にして地に配す。天地相調うて萬物自から生ずる。男女ありて而して後夫婦の道顯はれ、夫婦和合して子孫玆に繁殖する。葛城慈雲尊者も『此の男子有て天の德を全す、此の女子有て地の德を全す、陰陽此に配して萬物生ず、剛柔此に配して萬物を育す、閨門の內は人知らぬ處なれども、男女の道正しければ天地の氣候も自ら正しく、男女の道亂るれば天地の氣候も自ら亂る』と示されてある。天地の上に貴とい賤しいといふ區別の立てられぬと同じく、男女の上にも尊い卑いといふ定つた相のあるものではない。男女は車の兩輪の如く夫婦は鳥の兩翼の如し。男に八兩の重量があれば、女にも半斤の目方が無ければならぬ。故に、人類世界を組立る上からいへば、男女は實に同權にして、其の德は遂に一に歸するのが自然の大法である。唯だ女人は、其の生理的機能の上に於て、又は習慣の上に於て、敎育の上に於て、若くは宿世の因緣力等に因りて、智慧を磨き道德を顯はすこと、言を換へて申せば、成佛得脫することに於て弱點が多い。形儀容貌を飾るとか、細かい事に執心するとか、愛を貪ぼるとか、胸が狹いとか、嫉妬が深いとかいふのが、その重なるものであらう。だが其の弱點が却て女人の長所であつて、能く之を精錬し修養し善用する時は、天晴なる婦德を成就するものである。兎に角、宗敎、又は智識等の上から眺むれば、男子よりも女子の方に缺點が澤山あることは事實である。又、男と女とを並ぶれば、男は能く愛する方で女は愛せらるゝ方である。從て男は司令者で女は服從者である。古來、東洋の聖賢が五障三從等の敎を設けられたも、決して女

の高尙にして且つ神聖なる慈悲仁愛の心を發しますれば『設ひ七歲の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり』で、縱や七歲や八歲の女人兒童であらうとも、其の心は旣に一切衆生の大導師、大善知識といふことが出來る。四衆とは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四通の御弟子であります。比丘は梵語、此には乞士と譯してある。乞士とは、上は佛に向つて精神上の食物たる法を乞ひ、下は衆生に向つて肉體上の食物を乞ふといふ意味で、つまり三界に家なく身邊に財なく、世間一切の煩勞束縛を離れ、乞食を以て生命を繫ぐといふ、出家に名けたる稱呼である。尼は女のことであるから、比丘尼とは女の出家のことである。優婆塞も梵語、此には信男と譯して、佛法を信仰する在家の男子のこと、優婆夷は信女と譯して佛法に歸依したる在家の女子のことです。釋尊御說法の時は、此の四通の御弟子が席に列なつたものです。今の御文に四衆とあるのは、佛法に因緣ある者を指したので、單に衆生とあるは、佛緣の有る者も無い者も、ひつくるめて、廣く生きとし生ける者を指したのであります。眞實、菩提心を發して慈悲仁愛の念に住する時は、縱や其の身は渺たる滄海の一粟とも謂つべき、數にも足らぬ者であらうと、其の心に至つては寢ても寤ても、何卒して一切の衆生を導きたいもの、救ひたいものといふ廣大なる誓願を運らすが故に、取りも直さず一切衆生の導師であり、又、慈悲深き父親のやうなものであるぞといふ所から、導師なり慈父なりと仰せられたのであります。

玆に至つては、本より『男女を論ずること勿かれ』で、男子とか女人とかいふ物質に屬する身分上の隔

二十、佛法極則（修證義第十九節）

其の形陋しといふとも此の心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり。

『世を治め民をたすくる心こそやがて御法のまことなりけれ』とは中務卿の歌であるが、實にや御法のまことなるものは、唯だ己れを忘れて世を救ひ、己れを棄てゝ人を扶けんとの大慈悲に外ならぬのでございます。假令、匹夫匹婦の賤しき身なりとも、斯る高尚優美なる精神を現はし、此の精神が身口意三業の上に活動する時は、其の心は自から佛心に合ひ、其の行は自から佛行に一致して、心も身もそつくり菩提心の姿となり、其の功徳の力は甚だ廣大無邊にして、人間天上は言ふまでもなく、禽獸草木にも及ぼすのである。其處を『其の形陋しといふとも此の心を發せば已に一切衆生の導師なり』と仰せられたのであります。『姿こそ深山そだちの木なれども心は花になさばなりなん』とは西行法師の歌です。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に處すと雖も、菩提心の大功徳は、無限の時間を通じて盡未來際を期し、無限の空間に遍うして一切の衆生を網羅せざるはない。五種遺規の中にも『世間第一の善事は難を救ひ貧きを憐むに若くは無し』とありて、慈悲仁愛の行ほど高尚なものはなく、慈悲仁愛の心ほど神聖なものはありませぬ。一度此

○菩提心を發すと云ふは、乃ち衆生を度するの心なり。（承陽大師）

○功德海中には一滴もまた讓ること勿れ、善根山上には一塵もまた積べし。（同）

○おほよそ學佛祖道は、一法一儀を參學するより、すなはち爲他の志氣を衝天せしむなり。（同）

○一たび食する每に稼穡の艱難を念ひ、一たび衣る每に紡績の辛苦を思ふ。（貞觀政要）

○仁は人を愛するより大なるは莫く、智は賢を知るより大なるは莫し。（家語）

○嘉肴有りと雖も食せざれば其の旨きを知らず、至道有りと雖も學ばざれば其の善を知らず。（禮記）

○學の道はかたしとも、悟の門はたかしとも、四弘誓願を杖として、毘盧舍那城にのぼらなむ。（行誡上人）

○ならはじな澤邊の蟹の橫にのみ行けばゆかるゝ道はありとも。（同）

○世治まり民やすかれといのるこそわか身につきぬ思ひなりけり。（後醍醐天皇）

○慈悲の目に惡くしと思ふ人はなしとがある身こそなほあはれなれ。（眞阿上人）

に我等お互は、直ちに信念を發得し急ぎて懺悔受戒の身の上と爲り、從晝至夜に南無釋迦牟尼佛を唱念し奉り、進で利生報恩の素懷を達するのが、本宗信者の一大事であらうと思ひます。

參考

○仁を履み、慈を行ひ、博く愛して衆を濟はゞ、十一の譽れありて、福常に身に隨ひ、臥して安く、覺めて安し。（法句經）

○他人を護る爲めに自身を護らざるは最上にして、他人を護り且つ自身を護るは第二なり。自身を護りて他人を護る能はざるは第三にして、自身及び他人を護らざるは最下なり。（寶積經）

○たとへば、船師の常に大船を以て、河流中に於て、この岸に依らず、彼の岸に依らず、中流に任せずして、衆生を渡して休息あるなきが如し。菩薩摩訶薩もまたかくの如し。波羅蜜の船を以て、生死の流の中に於て、生死を厭はず、涅槃を取らず、中流に任せずして、衆生を度して、彼岸に達せしめて休息あることなし。（華嚴經）

○諸の衆生の爲に、利益なきものを除くを大慈と名け、衆生に無量の利樂を與ふるを大悲と名け、諸の衆生に於て心に歡喜を生ずるを大喜と名け、偏りて擁護する所なきを大捨と名く。（涅槃經）

る。三千大千世界は皆な我が教化すべき領分であるぞ、其の中に有りと有らゆる一切の衆生は皆な我が子にてあるぞといふ、釋尊の大慈悲大誓願より溢れ出でたる尊とき御言である。四郎は之を聞くや否や、悄然として憐れを催ふし、豁然として感悟する所あり、嗚呼有り難き佛の御慈悲なる哉、佛の御眼よりみそなはせば、一切の衆生は悉く佛の御子であつて、敵も無ければ味方も無い、敵と呼ばれ味方と呼ぶも、一時業感の致す所、迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、然るを我等凡夫の淺ましさ、徒らに修羅の巷に踏み迷ひ、海内平和の今日に至るも、尙ほ自ら恨を抱き讎を結び、未來永劫逃れ難き怨憎會苦を招がんと欲することの耻かしさよと、飜然悔悟して、翌朝は早速賴朝公に謁し、己れが軍功に代へて新吾の命乞を爲したき旨を願はれた。新吾は思ひ懸けなく危き命を助けられ、遂に出家して、永く眞田與市の菩提を弔うたと申すことであります。

諸君は此の一段の因緣を深く味うて見らるゝが宜い。岡崎四郎の心を飜へしたるは、決して彼れに勇氣が挫けた譯ではない。佛陀廣大の慈悲を感得し、端なくも本來具有の孝順心慈悲心が現はれたのであります。昨日の怨敵も今日の同胞と變じ、過去の惡魔も現在の親友と爲る。是れ皆な菩提心の發展です、此の菩提心は、世の中の一部の者の所謂無我愛といふやうな、漠然たるものではない。菩提心の上には偉大なる勇氣と崇高なる智慧とが伴うて居る。佛陀の三德、菩薩の六度も盡く此の中に含蓄されて居るのである。而して、此の心は全く佛戒の妙用でありますから、是を發すの土臺は正しく信仰の一念であります。故

ち畢竟じて衆生を濟度し等く佛果菩提を成就せしめんとの御誓ひであります。此の四通りの大願といふも唯だ一つの菩提心の相であります。我等お互も、釋尊の御教に歸依し奉る以上は、急ぎて菩提心を發し、此の四通りの大誓願を成就するの心懸が無ければなりません。

古へ平家の侍大將長尾新吾といふは、源氏方にて名も高き眞田與市を討取つた者であります。平家の一門運盡きて西海の泡と消え失せし時、圖らずも新吾は源氏方の手に生捕られ、鎌倉表へ護送せられました。賴朝公は新吾を見て、彼は與市の讐にして容易ならざる囚人なりとて、與市の伯父なる岡崎四郎と申す者に引渡し『汝は存分の成敗を加へて、與市の爲めに恨を晴せよ』と命ぜられた。四郎は一方ならず打喜び、其の夜は新吾を邸内の牢獄に投じ、自身は終宵寐もやらず、夜が明なば直ちに新吾の命を絶たん、去るにても如何なる手段を用ゆべきか、打首にやせん、逆磔にやせん、なぶり殺しにやせんなどと、頻りに思案を廻らす眞夜中頃、遙かに御經を誦む聲が聞える。合點ゆかずと怪みつゝ、聲する方へ尋ね行きしに、正しく牢屋の中なる新吾が最後の看經の聲であつた。四郎は一種異樣なる感に打たれ、聞くともなく耳を傾けしに、新吾はそれとも氣が付かず、明日に逼れる露の命、思へば人間一期の浮沈盛衰は實に盧生邯鄲の夢なりけり、今に至りて何をか悲み何をか恨みん、賴むべきは諸佛の誓願、願ふべきは釋尊の御教と觀念して、聲も微かに法華經の中なる『今ま此の三界は皆な是れ我が有なり、其の中の衆生は皆な是れ吾が子なり』といへる二句の偈文を、繰回し〳〵誦んで居りました。此の偈文こそ釋尊の御本領であ

行上に、自から求濟化度の事業を營むものである。是れ即ち我等が本來に具有せる孝順心慈悲心の妙德妙用であるに依て、此の妙德妙用には、在家だの出家だの、男だの女だのといふ區別はない。天上にもあれ人間にもあれ、或は苦みの中に住する貧乏人や最劣等の勞働者でも、又は樂みの中に在る貴顯豪族でも、皆な平等に此の菩提心を發し得られます。人間界に於ける位地や境遇にこそ種々の別もあれど、孝順心慈悲心の上には寸毫も變りのないはずである。例へば軍人の階級には、元帥大將より下士卒に至るまで數十等の階級はあるなれども、盡忠報國の精神には階級はない。渺たる一兵卒たりと雖も、奉公の志深く忠勇の節堅ければ、其の精神氣慨は元帥大將と同等同權である。獨り軍人ばかりでない、山家の賤の女も、犬打つ童も、其の大和魂に至つては、隨分、元帥にも大將にも劣らぬ者が幾許もある樣なものである。夫故我等お互は、自分の位地や體質に貪着せず、苦み多き者、悲み深き者などは一層心を勵まして、自未得度先度他と申して、利己的根性を離れて、一切衆生を救濟し化度せんとの菩提心、即ち佛心を發す樣に致さねばなりませぬ。

昔、釋迦牟尼如來は御出家あそばされし折、四通りの大誓願を御立てなされたことが悲華經に出て居ります。其の第一は衆生の困厄を濟はんとの大願、即ち衆生の肉體に於ける苦みを濟ふの御誓ひ、第二には衆生の惑障を除かんとの大願、即ち衆生の精神上の苦みを濟はん御誓ひ、第三には衆生の邪見を斷ぜんとの大願、即ち衆生をして正しき知識を得せしめんとの御誓ひ、第四には衆生の苦輪を度せんとの大願、即

の名利なるものは決して絶對の目的ではない。決して最終の目的ではない。絶對の目的、最終の目的は名利以外になければならぬ。忠義を盡せば芳名を百世に揚ることが出來る、孝行を勵まねば譽を後代に遺すことが出來ぬ、故に忠義を盡し孝行を勵むといふ様な心得では、若し功名を揚げ譽を遺すことの出來ぬ場合は、自然と忠孝を怠る様になるの恐れがある。それでは、道徳も善行も、或る一種の目的の爲めに盡すので、道徳善行そのものを以て自己の本分と爲すのではないといふことになる。果して然らば、全く基礎の無い根底の無い道徳善行と申さねばならぬ。

元來、道徳といひ善行といふは、畢竟宇宙の大道の發現であります。唯だ一の大道が、境に對し緣に應じて作用を現はし、忠孝とか慈善とかいふ姿を示すのであつて、其の作用は後天的のものとするも、其の本體は先天的です。天地萬象といふも、つまり其の大道の作用たるに過ぎぬ。梵網經には、佛性常住の孝順心慈悲心と仰せられてあつて、天地も萬象も、ソツクリ孝順心慈悲心の姿であります。此の大道たる孝順心慈悲心に爲り切つたのが、眞正の菩提心、即ち佛心である。而して、眞正の菩提心を發するには、先づ第一に利己的根性を離るゝのが最も肝要であります。こゝを贊題の初に於て『菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり』と仰せられたのであります。

我等凡夫の最も卑しき最も汚らはしき利己的根性を離れさへすれば、別段に心を勞せずとも、自然に、己れ未だ度らずとも一切の衆生を救濟し化度せんとの大願心が發り、從て、其の願力に乘じて、平生の言

妙修が現はれます。妙修といふは修行のことです。修行と申しても、單に坐禪をしたり念佛を唱へたりすることのみではなく、本來の佛德、本來の證悟が手足の上にも作用を起し、起居振舞の上にも活動を現はすことをいふのである。されば、此の修行も畢竟天眞の妙用であつて、卽ち證の上の姿であるから、妙修と名けたものです。其の妙修の有様を、此處では發菩提心と仰せられたのであります。

菩提は梵語、卽ち天竺の語で、此には、道と飜譯してある。道といふ語は何にでも通ずる。親には親の道があり、子には子の道があり、男には男の道、女には女の道、皆夫々に定まつた道がある。然るに、今は佛の道を指したのであるから、意義の混雜せぬ様に、特と原語のまゝ菩提というたのであります。故に菩提心とは、佛の道の通りになつた心、言ひ換れば、佛心といふことです。我等凡夫の心は、どんなであらうぞといふに、大抵自己本位で、自分量見から出て居る。御開山は之を貪名愛利の妄念というて御呵りなされてある。名譽を望むに非ざれば利益を求める、賞められんが爲めに働き、樂をせんが爲めに働く、縱や惡事惡行に遠かり忠孝仁義の德に進むほどの者にもせよ、其の心の奧底を穿鑿して見たならば、やはり貪名愛利の妄念といふやうな汚れた分子が潛んで居るに相違ない。尤も、名を求め利を欲するは人間自然の情であつて、人間は此の情あるが爲めに活動して居るというても宜いぐらゐのものである。けれども、單に是れのみを以て萬事萬行の基礎とするのは、餘りに淺はかなことではありませんか。名譽といひ利益といふは善行に伴ふ自然の結果である。此の結果を豫想して目的を立つるは、頗る必要には相違ないが、此

十九、發菩提心（修證義第十八節）

菩提心を發すといふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

此の一節は、修證義第四章、發願利生の大段中の最初の御文であります。毎度申す通り、我が曹洞宗の安心起行は、懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩の四大原則に歸するのであります。其の中、懺悔滅罪、受戒入位の二箇條は、無始劫來の罪障を懺悔して、佛性常住の戒德を現はすのであるから、之を本證と稱して、本宗の安心は是に盡きて居ります。衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、本來佛性の光明が御戒法と爲つて現はれた時、始めて、此の御戒法は畢竟吾人が天眞に有する所の諦悟の道である、といふことが解つて來る。『雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月』で、今までは煩惱業障の雲に蔽はれて、自ら三界六道苦難の衆生なりと思ひ居りしも、戒法を相續したる曉に、我等は本來の佛にてありし、我等の心も身も本來の證の姿にてありしといふことに氣が付き、豁然として大安心を決定することが出來るのであるから、之を本證と名けたのであります。扨て此の本證を得ますれば、自然の妙用として

○廣大の文字は萬象にあまりてなほゆたかなり、轉大法輪また一塵にをさまれり。(同)

○佛道をならふといふは自己をならふなり、自己をならふといふは自己をわするゝなり、自己をわするゝといふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝといふは自己の身心、および佗己の身心をして脱落せしむるなり。(同)

○釋尊の佛法沙界に充ち滿ちて到らざる所なし、參到せんに何ぞ到らざらん。此人身容易く受る所に非ず、昔の善根力に依て受け來る所なり。若し一度此處に到らば悉く解脱せん。(圓明國師)

○一花開處新二諸象一。萬里春風直下知。出レ門莫レ逐尋レ春客。擬レ前退步幾迷レ岐。(承陽大師)

○溪聲便是廣長舌。山色豈非二清淨身一。夜來八萬四千偈。佗日如何擧二似人一。(蘇東坡)

○峯の色溪のひゞきもみながらにわが釋迦牟尼の聲と姿と。(承陽大師)

○いつもたゞわが古鄕の花なれば色もかわらず過し春かな。(同)

○いつしかと心のかすみきえはてゝ見むと思へばみよしのの山。(行誠上人)

○心よりほかに入るべき山もなししらぬ所をかくれがにして。(無難禪師)

報を喜びて、至心に南無釋迦牟尼佛を稱念し奉り、二六時中間斷なく、利生報恩の妙修行を現はさんことを、第一の心得と致さねばなりませぬ。

參考

○菩薩は衆生を饒益するが故に法を説くこと淨し、法を説くこと淨きが故に智慧淨し、智慧淨きが故に其心淨し、其心淨きが故に一切の功德淨し、一切の功德淨きが故に住める土も又淨きなり。されば、淨土を得んと欲せば當に其心を淨くすべし、其心淨きに隨て則ち佛土も亦淨し。(維摩經)

○我淨ければ施度も亦淨し、施度淨きが故に願も亦淨し、願淨きが故に菩提も亦淨し、菩提淨きが故に一切の法も亦淨きなり。(大集經)

○一切の衆生は定めて當に大信心を得べし。是の故に說て、一切衆生に悉く佛性ありと言へるなり。(涅槃經)

○心性の淨きこと水中の月の如し。(寶積經)

○知るべし、一切諸法悉皆解脱なり。諸法の空なるにあらず、諸法の諸法ならざるにあらず、悉皆解脱なる諸法なり。(承陽大師)

敎の所謂忍辱行を成就したもので、千歳の下、人をして敬慕措く能はざらしむるではありませんか。
彼の有名なる西行法師は、御存知の通り、身を雲水に委ねて諸國を遍歴し、誦經念佛の暇には歌を詠み文を綴り、浮世の波風に遠かりて自然の光景を樂しんで居られた方であります。其の頃、高雄に文覺上人といふ荒法師がありました。袈裟御前の首を斬り、翻然悔悟、直ちに佛門に投じ、紀州那智の大瀧に三七日の荒行を致したといふほどの豪傑です。常に西行のことを罵り『彼が如き似非風流のゴロツキ道心は大嫌ぢや、若し我が門に入り來らば彼の頭を碎いて遣らん』と申して居つた。或日、法華會を高雄に行ひました時、思ひも寄らず、西行が參詣し、夕刻に至り一夜の宿を請はれた。そこで文覺の弟子たちは大心配、サア大變なことぢや、如何なる珍事があるやも知れずとて、ブル〳〵して居りました處、案に相違して、文覺は西行をば親か兄かと思はるゝばかりに尊び敬はれました。西行出立の後、弟子が其の譯を尋ねますると、文覺は太息をつき『どうして彼の法師は我を打ちこそすれ、我に打たるゝ者に非ず、其の勇氣滿身に溢れて寸分の隙だも無し』と言はれました。これは淨き信仰と正しき道德とが、西行法師をして絕大の勇氣と無限の威力とを發現せしめたのであります。故に、眞實、御戒法の德を具ふる人ならば、一切の惡魔は追はずして自ら退き、一切の功德は招かずして自ら聚まり、天地法界、盡く佛の淨土と爲り、草木牆壁も齊しく佛の光明を輝かし、知らず〳〵無漏最勝の大功德を成就することが出來ます。
夫故、我等お互は常に淨らかなる信仰力を養ひ、懺悔の當體に身口意三業を淨め、相共に佛戒相續の果

は何に依て起るかといふに、唯だ一つの淨らかなる信仰心より生ずるのであります。心の底に少しでも嘘や僞があつては淨き信仰とは申されぬ。聊でも恩を忘れ情を知らぬ樣な者には淨き信仰は起りませぬ。嘘も無く僞も無く、而して能く恩に感じ情を存するほどの人ならば、人の勸めを待たずして、自づと佛法僧の三寶に歸依し奉り、御戒法相續の大事を爲し遂げるものです。斯くありてこそ、始て絶大の勇氣も現はれ、眞實の忍耐勉强も出來るものであります。

西暦紀元前四百六十九年、希臘のアッチカ州アロペース村に生れし、泰西哲學者の泰斗ソクラテースは、若年の頃兵士と爲り、後に公會議員等の職に任じ、晩年には專ら敎育に從事せられたが、寛仁大度の賢君子でありました。妻のザンチツプは、之に反して無類のネジケ者で、嫉妬が深く、我見が强く、おまけに大の疳癪持であつた。或時、氏は友人と共に室内に話をして居りしに、何にが面白く無いやら、ブツ〳〵云ひ出したから、氏は靜かに友人を誘うて表へ出掛けました。すると、妻はそれが亦た非常に癪に障つたと見え、二階に上り、樓上より氏の頭の上に水を打懸たので、友人は氣の毒がりて氏を慰めますと、氏は平氣な者で、『ナアに雷の後には雨が附きものです』と申して、顏の色さへ變らなんだと云ふことです。其の後、或人が『先生は何故に彼の樣な妻を娶りたまひしや』と問ひけるに、『馬術に長ぜんと欲する者は必ず悍馬を選んで乘ります、私の目的は談話と講演に在り、斯る妻を娶りて堪忍が出來れば天下の事は凡て與し易し、是れ私が修養の好師表であります』と答へたさうです。實にソクラテースの洋々なる雅量は、佛

間には和合と爲り、兄弟の間には友情と爲り、一切衆生に向ては慈悲博愛と爲て現はれる。それが、取り
も直さず眞實の菩提心の發現でありますから、結文に於て『是れ發菩提心なり』と御示し下されたのでご
さいます。

雜譬喩經の中に斯ういふ話しがある。昔、或處に極仲の宜い夫婦がありました。或時、夫が其の妻に臺所の葡萄酒を執り來れと命じた。妻は直ちに酒瓮の蓋を取り、圖らずも自分の影の酒水に映りしを見て、其の影なることを知らず、大に怒て、此處に一人の女を藏し置けりとて、大聲揚げて夫を罵りました。夫は驚いて瓮の中を窺きし處、亦も己れの影法師を望み、ヤア、汝こそは此處に斯樣な男を匿い置くにあらずやとて、騷ぎ出して、大變なことが始つた。そこで隣に一人の尼僧が居て、夫婦喧嘩を取り鎭めやうとして、瓮の中を窺き、扨々何處の尼か知らんが、ビックリした顏をして此の中に居るわいとて、驚て逃てしまつた。其の時一人の智者が彼等の愚痴を不便と思うて、大石を持て其の瓮を打毀し『夫婦の者よ必ず争ふこと勿れ、瓮の中は此の通り男も女も居りはせぬ、居ると思ひしは御身達の迷なるぞ』と云うて、懇ろに諭したので、始て自分等の影法師なることを悟つたといふことであります。實にや、源の實朝が『神といひ佛といふも世の中の人の心の外のものかは』と詠んだ通り、天地法界は盡く自心現の法であつて、淨土の樂みも、地獄の苦みも、畢竟、一念の影法師です。故に、一度御戒法を相續し奉りて、孝順心慈悲心といふ本來の性德が露れさへすれば、十方の國土は皆な御戒法の姿の佛樣の御光りであります。而して、此の孝順心慈悲心

佛の聲と姿と』とありますが、實にや安心成佛の眼より眺むれば『此の時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其の起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯す』で、十方世界の所有土地も草も木も、屏牆も壁土も、瓦や礫ろまでもソックリ佛樣の心を具へて、佛樣の仕事を爲て居るのです。其の世界の中より起す所の風だの水だの日だの月だのが、互に扶けたり扶けられたり、持つ持たれつして、諸共に利益に預つて居るではありませんか。桶に湛ふる水も、何時の間にやら我等が體內の水分と變じ、畑に生ちし菜や大根も、知らぬ中に我等の血肉と化する。能々觀察し來れば、天地は同根、萬物は一體である。是れが、甚深微妙不可思議なる天然自性の佛樣の御化導、御利益に、冥資と云うて、我れ知らず資けられて居るのであります。サア諸君は此の意が御合點になりましたか。之を合點して、佛樣の通りの德が顯はれたのを、親き悟と申すのである。

親き悟とある、此の親きといふ詞が殊に有り難いです。悟るものと悟られるものと二つあつてはならぬ。我も人も、天地も法界も、唯だ一枚の悟に成り切つたのが親き悟です。言ひ換れば此の身も此の心もソックリ御戒法の儘に爲つたのが親き悟であります。さすれば、此のお悟は宇宙の眞理、天地の大法の現はれた姿であつて、元より人間の力で爲したのでもなく、作つたのでもない。所謂法性自然の功德であるから、『是を無爲の功德とす是を無作の功德とす』と仰せられたのです。而して此の無爲無作の大功德は、どういふ風に現はれるかと申すに、君に對うては忠義と爲て現はれ、親に對うては孝行と爲て現はれ、夫婦の

とは形相や作用の色々に異なつて居ることで、知覺とは心といふほどの意味です。諸の佛樣方は、或は攝取不捨の誓願を御立てなされ、或は大悲代受苦の御約束をあそばされ、或は西方に淨土を構へ、或は東方に身を現すといふ樣に、夫々方面を異にして佛法を住持して居られませうとも、畢竟、此の御戒法の中に住持したまふので、異なる方面の其の儘が平等一味の佛心であるから、方面の外に別に佛の心といふものがあるのではない。併し、此の御戒法は宇宙の眞理、天地の大法であるとすれば、單に佛樣のみの御德ではございませぬ。一切衆生は盡く此の御戒法の中に孕まれて、朝から晩まで御戒法を使用して居るのであります。夫故、次の御文には『群生の長へに此の中に使用する各各の知覺に方面露はれず』と仰せられたのである。

群生とは、天地の間に有りと有らゆる一切の衆生を云うたのです。その一切衆生は、無始劫來より盡未來際まで、長へに此の御戒法の中に在りて、自由自在に之を使用て居る。數も限りもなき衆生の各々が、皆な平等に佛の御心を具へて微塵ばかりも差別はない。各々の知覺の其の儘が平等一如の御戒法の姿であるから、差別の方面の露はれやうはない。然るを、我だの人だのというて、實際、差別して居るもの丶如く思ふから、それが爲めに煩惱や執着が湧出して、繩に縛られるのである。此處を金剛經には『是法は平等にして高下あること無し』と示されてある。吾が我がの執着を離れて見らる丶が宜い。一切の衆生は本來の佛樣で、草木國土も悉皆成佛である。承陽大師の御歌に『峯の色溪の響もみな丶がらわが釋迦牟尼

十八、無爲功德（修證義第十七節）

諸佛の常に此の中に住持たる各各の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此の中に使用する、各各の知覺に方面露はれず、此の時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其の起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす是を無作の功德とす是れ發菩提心なり。

此の一節は御戒法の妙德作用を御示し下されたのであります。今まで繰返して申した通り、佛祖正傳の御戒法は所謂宇宙の眞理、天地の大法でありますから、決して釋迦牟尼如來が故らに御製になつた人爲の法ではありませぬ。御戒法を受け奉りさへすれば、直さま佛樣の御仲間入が出來るといふは、御戒法を受けたる者は、其の身も、其の心も、自から宇宙の眞理、天地の大法に契うて、手の舞ひ足の踏む所が、知らず〳〵佛性常住の孝順心慈悲心の現はれとなるからであります。三世諸佛の八相成道も衆生濟度も、つまり此の御戒法の德の作用に過ぎぬ。故に『諸佛の常に此の中に住持たる各各の方面に知覺を遺さず』と仰せられたのである。

住持はトヾメ、タモツで、佛の道を世に住めて、それを持つて、自在に運用せらるゝことです。方面

○道近しと雖も行かざれば至らず、事少なしと雖も成さゞれば成らず。（荀卿）

○愼みは朝夕馴るゝ言の葉の假初ごとの上にこそあれ。

○有りと云ふ人に地獄はなかりけり無しと思へる人にこそあれ。

○佛はと問へば答ふる麻三斤なにかほとけの名にもれぬべき。（無難禪師）

○佛はと問へばまよはぬ人ぞなきおのがこゝろと知る人もがな。（同）

○宜しく大勇猛を發して、諸佛の淨戒に於て護持せんこそ、明珠の如くなるべし。過去の諸菩薩も已に是の中に於て學しき、未來の者も當に學すべし、現在の者も今學す。此れは是れ佛の行處にして聖主の稱歎する所なり。（同）

○我が思ふことも言ふことも、あしきことあるべき故に、まづ佛道に合ふや否やとかへりみ、自他の爲に益ありやいなやと能々思ひかへりみて後に、善なるべくんば行ひもし言ひもすべきなり。行者若しかくのごとく心を守らば一期佛意に背かざるべし。（承陽大師）

○衆生從本以來佛性を具ふと雖ども日に用て知らず。釋迦老師成道の端的、活眼を開て之を觀れば則ち草木國土悉皆成佛なり。六祖曰く、悟れば則ち衆生是れ佛、迷へば則ち佛是れ衆生と。生佛元隔なし、迷ふが故に衆生となり、悟るが故に佛となる。衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別ならん。（圓明國師）

○昔生未レ了今須レ了。此生度ニ取果生身一。古佛未レ悟同ニ今者一。悟了今人卽古人。（龍牙禪師）

○師に逢て學ばざれば去りて後に悔ゆ。賢に逢て交らざれば別れて後に悔ゆ。親に事へて孝せざれば喪ふて後に悔ゆ。主に事へて忠せざれば退いて後に悔ゆ。義を見て爲ざれば過ぎて後に悔ゆ。危きを見て遠らざれば陷りて後に悔ゆ。財を得て仁ならざれば失うて後に悔ゆ。因果を信ぜざれば報いて後に悔ゆ。菩提を信ぜざれば死して後に悔ゆ。（雲居禪師）

そばされてあります。往くも還るも煩惱執着の跡はない、去れども道は我等の脚下に在りて忘れんと欲しても忘るべからざるものである。手を擧ぐれば孝順と爲り、足を移せば慈悲と爲り、寢ても起ても轉んでも、道ならざるはなく德ならざるはない。これぞ眞の活佛教の活神通といふものであります。

然るに、我等の今日はどうでありませう。事に依ると反對に、手を擧れば煩惱と爲り、足を移せば惡業と爲る樣になりたがつてならぬ。夫故、一時も早く此の御戒法を受け奉りて、即證佛位の勝果を成じ、利生報恩の妙行を現はして、身口意三業の上に釋迦牟尼佛の名號を憶念し稱名し奉行せらるゝ樣、一心不亂に信力を增進せられたいものであります。

參　考

○大衆心に諦に信ぜよ。汝は是れ當成の佛、我は是れ已成の佛、常に是の如きの信を作せば戒品已に具足す。(梵網經)

○明人忍慧強くして、能く是の如き戒法を持せば、未だ佛道を成ぜざる間に、五種の利を安獲すべし。一には十方の佛憫念して常に守護したまふ、二には命終の時正見にして心歡喜あり、三には生々の處、諸の菩薩の友と爲る、四には功德聚あつて戒品悉く成就す、五には今後世に性戒福慧滿つ。(同)

人である。三歳の時父を喪なひ、長ずるに及んで孝行の心深く、家貧しきを以て薪を拾うて母を養はれました。教育を受けらるゝことなどは元より出來なんだのである。或日、市場に於て薪を賣て居られし時或人の金剛經を讀むのを聞かれた、宿因の致す所か、眞に有り難く感ぜられて、耳を傾け心を澄して聞て居られたが、段々と讀み去て『應無所住而生其心』と云ふ御文の處に至り、深くも深く感動せられ、大に發明する所があらせられた。一心と云ふものは大したものである。應無所住而生其心といふは訓讀すれば『應に住する所なくして而も其の心を生ずべし』とある。住とは私情私見を以て物事に執着することです。故に一切の私量見、我儘根性、卽ち煩惱妄想の執着を離れて、本心の儘の作用を起せば、凡て爲す事作す事がソツクリ佛樣の御心なり行なりであるといふ意味の御文であります。

サアこゝが肝心要目の聞き處で、御戒法の根本はこゝにあるのでございます。懺悔は何の爲めに致す。信心は何れより生ずる。私量見、我儘根性を離るれば自から懺悔の實が現はれる。本心の作用が起れば正しき信仰は立ろに生ずるものです。其の本心の作用は何んな風に生ずるかといふに、之を具體的に說明すれば、諸の惡を離れ衆の善を行ひ、一切の衆生を利益するといふに歸する。智・仁・勇の三德も、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜も、皆な之より生じて來る。此の妙用が他の生命に向へば不殺生と爲り、他の財物に對すれば不偸盜と爲るといふ樣な鹽梅に、任運騰々、心の欲する所に從つて矩を踰えさる境界と爲ります。こゝを御開山は『水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道は忘れざりけり』と御詠じあ

を救ひ、又は船筏の如く能く生死の大海を踰ゆ、又は明らかなる燈光の如く能く無明長夜の暗を照す、又は瓔珞の如く能く佛の法身を莊嚴すなどと御示し下されてある。此等の經說を見ても、御戒法は我等の一大事因緣であると云ふことが解るではありませんか。

昔、繼體天皇の十六年に、朝鮮より司馬達等と稱する佛教信者が來朝して、大和の國に草菴を構へ、頻りに佛像を禮拜して居つた。是れが佛教の我國に入りし始めである。其の女が、敏達天皇の十三年に、高麗國の惠便と云ふ僧に就て出家し、法名を善信と申した。是れが尼僧の始めであります。用明天皇の二年に此の善信尼が蘇我馬子に向つて『夫れ出家たる者は戒法を以て本と爲す、願くは百濟に赴いて戒法を學ばん』と云うて、海外留學を願うた。馬子は其の志に感じて之を許し、相當の保護を加へて、留學の目的を達せしめた。是れぞ我國に於ける戒法學の始めであります。是を以て見ても、我國は最も戒法有緣の地であらうと思ひます。併し、其の時の戒法は、元より我宗相傳の御戒法ではなく、所謂難行能行の法です。我宗相傳の御戒法は、前々にも委しく申した通り、眞實に懺悔の念を生じ、眞實の信仰心を發しますれば、其の一念の下に於て立派に御戒法を相續することが出來て、其の時より卽座に三世諸佛の御仲間入りである。華嚴經の偈に『戒は是れ無上菩提の本、應當に具足して淨戒を持つべし』とあるは、正しく此の意を示されたるものであります。

達磨大師より六代の祖師、曹溪慧能禪師と申す御方は、支那の南海の新州と云ふ片田舍に生立なされた

くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なり』と梵網戒經の偈文を御引證あそばされたのであります。これが受戒入位と云ふ標目の出處でございます。

全體、佛樣の御身體は何んで出來たかと申すに、畢竟、此の御戒法の結晶です。諸の惡を離れ、衆の善を行ひ、一切衆生を利益するのが佛樣の大精神である。古歌に『曇りなき心の月を先きだてゝ此の世の闇を照してぞ行く』とあるは、惡を離れ善を行ひ、身も心も清淨にして、一點の曇りなき姿を詠じたものです。又『あはれみを物に施す心より外に佛の姿やはある』とあるは、正しく衆生利益の大慈悲心です。斯る境界になりさへすれば、此の身此の儘が萬德圓滿の佛樣である。涅槃經には『佛性を見、大涅槃を證せんと欲せば、必ず須らく深心に淨戒を修持すべし、若し淨戒を毀れば是れ魔の眷屬にして我が弟子に非ず』と仰せられ、佛の弟子に爲れると爲れぬとは、御戒法を持つか持たぬかにある。大品經には『我れ若し戒を持せずんば當に三惡道の中に墮して尙ほ人身を得ざるべし、況や能く衆生を成就して佛國土を淨め一切種智を具せんや』と仰せられて、眞の人間と爲り眞の佛果を成ずることは此の御戒法の外にはありませぬ。夫故御經の中には、樣々の譬喩を設けて御戒法の功德を示されてある。佛の境界は甚だ遠い。唯だ戒法のみありて能く至ることを得ると云ふので、脚に譬へてある。又、戒法は一切の善根功德を持つこと大地の萬物を載するが如くであると云ふので、大地に喩へてある。尙ほ戒法は時雨の如く能く佛果菩提の苗を長じ、又は良き醫士の如く能く煩惱惡業の病を療治す、又は甘露の如く能く知識道德に乏しき飢渴の衆

を讃歎した詞で、金剛は帝釋天の持てござる寶の名で、其の性質が極めて堅牢にして、決して壞れることも壞されることもない物であるから、不壞と申したのです。佛果圓滿の境界も亦た是の如く、三界生死の苦を出で煩惱惡業の垢を離れ、如何なる天魔外道たりとも、少しも犯し奉ることの出來ぬ御身であるに依て、金剛不壞の佛果と稱するのである。過去・現在・未來の三世に、數限りもない恒沙の佛樣が在すとも、其のお證りあそばされた道と云ふものはたつた一つである。之を此の上も無き正しき道と云うたのです。同修同證の佛樣の上に、優劣あるが如く思ふは凡夫我執の妄見である。其の道の現はれたのが金剛不壞の佛の御果報である。我等お互が至誠眞實の心を以て、一度此の御戒法を相續し奉りますれば、其の信念の力と戒體具足の功德力とに依て、此の身此の儘が、三世諸佛の證りたまひし無上の正道たる、金剛不壞の佛境界を成就することが出來るのでございます。

故に次の御文には『誰れの智人か欣求せざらん』と仰せられた。智人と云ふは、唯だ學問や知識のある人のみを申すのではない。如何ほど政治、法律、文藝、技術に長じた人であらうとも若し人生の目的をも知らず、因果の道理をも辨へざる者は、佛敎の上より見れば齊しく是れ愚癡迷蒙の凡夫である。一心に道を求め道を愛する人を眞の智者と稱するのである。苟も道を求め道を愛する智者ならば、誰れか此の御戒法を欣ひ求めずには居られやうぞ、との仰せであります。此の事は御開山御一分の說ではなく、釋尊金口の直說でありますから、其の次の御文には『世尊明らかに一切衆生の爲めに示しまします。衆生佛戒を受

十七、現身證果（修證義第十六節）

受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰れの智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の爲めに示しまします、衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なりと。

前節に於きましては、御戒法の意義やら、其の持ち方やらを一通り演べましたが、此の一節こそは、正しく本宗安心の極致を御示し下されたのであるから、佛戒相續の最大目的は、此の處に於て十分に領解せねばならね。至心懺悔の曉に佛法僧の三寶に歸依し奉り、玉よりも美しき信念の中に、三聚淨戒、十重禁戒と云ふ、最も尊とき佛祖嫡傳の御戒法を受け奉りし我等お互は、畢竟如何なる果報を獲らるゝのであらう。勿論、眞正の佛教信者は、敢て有所得の心を以て佛法を信ずるのではないが、原因結果の約束として戒法相續の身に具はるべき妙果はどんなものでありませう。そこを此の一節の初めに明らかに御示しなされて『受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり』と仰せられたのであります。阿耨多羅三藐三菩提とは梵語で、飜譯すれば無上正等正徧知と云ふことになる。之を解り易く申せば、此の上も無き正しき悟りの道と云ふことであります。金剛不壞とは佛果菩提のこと

○恐るべし慾のほのほはげしくて我身も家も人もやくなり。

○守れよや人は誠の一枚のきしやうが家を富すなりけり。

○足ることをしりからげして身をかろく欲の薄すきに福と壽はあり。」

○若し我れを殺さんと欲する者あらば我喜ばず、我喜ばざるが如く他も亦是の如くならん。如何ぞ彼を殺さん。是の覺を作し已りて不殺生戒を受け、殺生を樂まざれ。（五苦章句經）

○諸有の善根は慈を根本と爲す。（涅槃經）

○慈心は卽ち是れ一切安樂の因緣なり。（優婆塞戒經）

○慈悲を離れて善法を得ることなし。（同）

○佛、玉耶女に告げたまはく。玉耶女よ、女人の法は端正に依りて憍慢を生ずることなかれ。形貌の端正は眞の端正にあらず、唯心端正なれば人皆愛し敬ふ、是れ實の端正なり。

○佗人の非に手かくべからず。にくむこゝろにて、ひとの非をみるべからず。（承陽大師）

○ほとけも非を制することあれども、にくめとにはあらず。（同）

○人の德を取て失を取ることなかれ。君子は德を取て失を取らずと云ふは此の心なり。（同）

○我も亦をしとこそ思へをしと思ふいのちはおなじ命ならずや。（行誡上人）

○まねくとも尾花がそばは心せよあらぬ荒野にみちやまよはむ。（同）

○天が下みなわがものとなれるにも猶ものたらぬ心地こそすれ。（同）

○いが栗のとげ〳〵しさのみの末や落ていかなる火に燒るらむ。（同）

○はらくろき人の心やぬばたまの闇路をたどるたねとなりけむ。（同）

る。徳孤ならず必ず隣りありで、近村の者までが其の徳に感化せられ、親孝行に依て御上より御褒美を戴いた者が三十餘人もありました。領主は甚だ其の徳を嘉みし、賞典として田地一町餘を與へ、且つ年貢を免ぜられ、正助の死んだ時、特に同人と其の兩親の石碑を建てゝ遣はされました爲め、國中の人々競うて其の墓場に參詣し、神か佛の如くに尊敬したと云ふ御話があります。

　此の正助などは、玲瓏玉の如き一片正直の心が、自から光りを八方に放ち、一擧一動が忠と爲り孝と爲り、恭儉と爲り博愛と爲り、冥々の間に、天地の加護、神佛の冥助を得たものであります。御戒法も亦た是の如く、清く麗はしき三寶歸依の信念を發すれば、十方恒沙の諸佛諸菩薩の御加護を被むり、感應道交の力は『いづくにもあり明の月はさやけきにいとゞ朝日の光りそふらん』で、勸めずして善に趣り、警めずして惡に遠ざかり、十二時中、手の舞ひ足の踏む所、任運に三聚淨戒、十重禁戒の功德莊嚴を現はすことゝなる。眞箇の大安心、佛法の大利益は、茲に到て始て圓成したのでございます。故に我等は、益々滅罪懺悔の誠を捧げ、受戒入位の勝緣を喜こび、朝々夜々に南無釋迦牟尼佛を唱念して其の大恩を報い奉り速に發願利生、行持報恩の妙修を現成せしむることが肝要であります。

参　考

れも御慈悲の御詞、之を背き奉に忍びぬとて、片足に下駄、片足に草履で行つたことがある。其の心根の美しきことは實に花にも勝つて居るではありませんか。妹が村内に嫁して居つたが、老親は妹娘の顔を見るのを喜こぶ處から、毎日背に負つては妹の家へ連れて行く。或日、例の通り父親を負つて行き、何となく憂顔をして居るから妹が怪で尋ると、正助は太息をつき『父上の御體が此の頃はめつきり輕うなられた、是れ全く老衰の爲めならんと思へば實に悲うて堪らぬ』と答へた。村内の惡者共が、正助だとてチツとは慾張根性も有るだらうと云ふので、三貫文の金を通り端に棄てゝ置き、近處の木陰に藏れて見て居た。果して正助は其處へ來懸り、お錢を見るや否や、驚て其の傍に坐りこんでしまうた。惡者は知らぬ顔して『御前は何をして居るか』と尋ねしに『若しか金が無くなつてはと思ひ、落主の來るのを待て居ります』と答へたさうである。又、國主の御通りの時は、毎度路傍に坐つて『あゝ我等の爲めに斯くまでも御骨折下さることの有り難さよ』と云うては、嬉し涙に暮れて居りました。平生牛を使うて、毎朝牛に向て『今日は是々の仕事をして下されよ』と頼み、晩方休む時は『扨々今日は御苦勞でありました』と云うていたわり、牛を引て家に歸る時は、必ず自分で鞍を擔うて牛の勞を扶けました。其の德の致す所か、何な荒牛でも、正助が使へば直ぐ柔順くなつたとある。是れ正しく德禽獸を化したのであらうと思ふ。享保十七年、國中の田地が盡く蝗害を受けたが、正助の田地だけは不思議にも其の禍に罹らなんだ。然るに、正助は、收穫した籾を殘らず村內の人に配分して、自分は草の根や木の皮を喰うて飢を凌いだと申すことであ

行、一切の働が、皆な信仰の上の作用となる。所謂信仰的生活と爲るのである。承陽大師が『法我を轉ず』と仰せられたと同一で、己を忘れ私を離れて、唯々法に打任せたことである。我が心は我が心に非ずして唯だ法なり、我が身は我が身に非ずして唯だ法なり、此の時始めて、眞實、他力の功德が現はれる。夫故他力の成功は、取りも直さず自力の圓滿であります。苟も佛の御弟子と爲て成佛を期する程の者が、此の天地自然の法則たる御戒法に對して、疑を抱く樣なことではならぬ。此の御戒法を受け奉りて、平生底、分に應じて之を保ち之を護ることを、第一の樂、第一の喜と致す樣でなければならぬ。殊に御戒法なるものは、決して泰山を挾んで北海を踰ゆるの類ではない。つまり十二時中に於て必ず行はれ得べきこと、行はざるべからざること、行へば行ふほど卽座に幸福と安寧と快樂とを得らるべきことなのであります。

昔、筑前の國宗像郡武丸村の百姓に正助と云ふ者があつた。別段教育ある人ではないが、天性正直にして忠孝の志厚く、且つ深く佛教を信仰して、菩提寺よりの返りには、佛樣に背を向けては濟まぬと云うて、曲り角までは必ず後向になつて歩いたと云ふ程でありました。處が此の正直なる一念の信仰は、彼をして心の欲する所自から御戒法に隨順する、最と有り難き行を現はすに至りました。其の一つ二つを擧ぐれば、或晩、圃に赴く時、誤て父親の杖を踏みしとて聲を放て大に哭たことがある。何故かと尋ねしに『此の杖は年老いたまひし父親の手足も同然です、之を踏みしは父親を踏みしも同然です』と申したさうです。又、或日、赤間の驛に行く時、父親は下駄を穿けよと勸め、母親は草履を穿けよと勸められた。何

途轍も無い誤つた考を起し、動もすると、成佛を以て朝飯前の仕事の様に思ふ輩があつてならぬ。易行と申したのは、人情に基き根機に嵌まる様に御設け下された廣大の慈門を指したのであるから、如何なる人にでも、確信さへあれば必ず出來るのである。金力も入らず、命を棄るにも及ばず、家業を休むにも及ばず、平生の儘で實行し得られるから易行と稱したのである。それを唯だ、食ひたい儘に食ひ、寢たい儘に寢て、戒法も入らぬ善行も入らぬ、戒法を持つたり善行を勵んだりして佛道に入らんとする者は雜行である雜修であるなどと言ひ散らすは、何たる誤解でありませう。こんな誤解が佛法であるならば、佛法なるものは人間の活動を妨げ精進力を挫き、却て怠慢奴の仲間に墮落せしむるやうな結果を招くことゝもなるのです。

抑も、我等が信仰の一念は、直ちに三祇劫を超ゆる程の力あるものである。信仰力が全身に充ち滿つる時は、寢るも起るも信仰力の範圍を出でぬ様になります。此の時こそは、我身のみかは、世界全體がソツクリ自己の信仰界中に攝せらるゝものです。例せば忠臣義士が、眞實、國家に奉公するの一心に爲り切る時は、百姓するのも、商業するのも、軍隊に投ずるも、軍隊を出づるも、皆な奉公三昧となる。何の爲めに身を養ふのであらう。何の爲めに金を溜めるのであらう。何の爲めに子弟を教育するのであらう。皆な御國の爲め我が大君の爲めと云ふに、歸するのである。若し、一點でも私量見が交れば、早や雜行雜修で、純粋の御奉公とは云はれぬ。信仰の力も亦た是の如くで、信仰を以を心を固め身を固めた時は、一切の

よ、三には男女の禮を守り夫婦の操を正うせよ、四には身口意共に正直なれ、五には身體と精神との健康を圖れ、六には慈愛ある言葉を發せよ、七には謙遜の徳を守りて益々道を修めよ、八には常に布施を行なへ、九には萬事に堪忍せよ、十には三寶を尊信して常に恭敬せよ、これが善を勸める方の御戒めです。次に利物門に就て申せば、一には他の生命を救へ、二には他の財物を保護せよ、三には男女風俗の改善を圖れ、四には正しき教を人に施せ、五には他の健康を保護せよ、六には他の非行を憐れみ善事を隨喜せよ、七には他を尊敬して滿足せしめよ、八には他に安心と幸福とを與へよ、九には柔和の手段を以て他を導け、十には佛教の眞理を護持し擴張せよ、これが衆生を濟度する方の心得です。初と中とは自分の行持に係る、即ち自行門で、消極的に戒法を守るのです。後の方は他を利する上の行持にして、所謂利他門であるから、積極的に戒法を守るのであります。

全體、戒法などと申しますると、大層やかましい檢束でも施すかの如くに思ふ人もあれど、それは飛んだ間違です。畢竟、戒法なるものは佛樣の强て作られたものではなく、即ち天地自然の法則である。天地自然の法則を標本的に分拆せられたのが佛の御戒法です。如何ほど難かしいにもせよ、天地自然の法則を忘れて如何なりませう。日々三度の食事や夏冬の着物、扨は家屋の建築、何れも難しからぬものはない。併し、むづかしいからと申して、食はずに居られませうか、着ずに居られませうか、野原に棲んで居られませうか、一體、佛教に、易行道と云ふ法門がある處から、易行と云ふ詞を凡夫の怠慢根性に當て嵌めて、

大師の一心戒文と云ふもありまして、一戒毎に重々無盡の意味があつて、此の御戒法中に無量の妙理、無邊の深義、一切の經律論、一切の功德行が悉く備つて居る。これぞ所謂禪戒の特色であつて、宇宙の大眞理、天地の大法則も此の外にはないのである。此の事は追て委しく御話しに及ぶ積りであります。要するに、十重禁戒は三聚淨戒の大精神の妙用で、而して、三聚淨戒は我等が本來具有する佛性の上に存する孝順心慈悲心の現はれたのである。其の孝順心慈悲心は、歸依三寶の信念に依り發得することの出來るものであるから、十重禁戒は三聚淨戒に依て生じ、三聚淨戒は三歸戒に依て生じ、三歸戒は清淨純潔なる信仰の一念より出づるものである。故に、我等は此の十六條戒を以て善惡の標準、道德の御手本として、生々世々を誓て信受奉行することが何より大切であります。

三聚淨戒は前にも演べし如く、止惡と作善と利物との三大門です。止惡門とは凡ての惡を止むること、作善門とは衆の善を勸むること、利物門とは衆生を利益することであります。十重禁戒の一々を三聚淨戒に割當れば下の如くになります。先づ止惡門の方から申せば斯うである。一には生物の命を殺さゞれ、二には他の財物を盜まざれ、三には不義の婬行を爲さゞれ、四には虛妄を言はざれ、五には酒の爲めに自他の身心を傷けざれ、六には他の過失を說かざれ、七には己れを貢り他を侮どらされ、八には慳貪ならされ九には瞋恚憎嫉の念を起さゞれ、十には三寶に無禮を加へざれ、これが惡を止むる方の戒です。

次に作善門に就て申せば、一には常に博愛の念に住せよ、二には義を守り足ることを知りて分に安んぜ

第九の不瞋恚戒は、總ての事に辛抱して妄りに腹を立つなよとの御戒めです。堪忍は無事長久の基、人間たる者は風雨寒暑をも忍び、所有欲望をも忍び、艱難をも忍び、逆境にも堪える力がありてこそ、始て一切の目的を達することが出來るものです。堪忍する力がなければ、何時も外界の爲めに瞞ぜられて、自ら苦を招き罪を造るものである。寛仁大度の雅量さへあれば、短氣も起さず腹も立たず、春風の如き溫乎たる德を具へ、佛菩薩の樣な麗しき心に住することが出來る。世の中は苦しきもの、凡ての事は思ひの儘にならぬものと覺悟すれば、どんな事でも堪忍せらるゝものであります。

第十の不謗三寶戒と云ふは、佛法僧の三寶に歸依し奉りし上は、如何なる事があらうとも、三寶を謗つたり、若くは不敬の振舞に涉る樣なことを爲てはならぬぞよとの御誡めです。信心の相續と云ふことは却却難しいもので、一旦三寶に歸依しても、何時の間にか信心がおろそかになつて、佛樣の敎を疑うたり佛樣の功德を輕んじたり、又は佛樣の敎に背きて邪見の心を起し、佛敎信者にあるまじき振舞を爲す者もあるのである。故に、我等は常に三寶歸依の念を相續して、苟にも佛樣の御心に反くが如き行のない樣に深く愼しまねばならぬ。宗派の異同に依りて妄りに愛憎の念を起し、同一佛敎中に在りながら互に俗情を以て惡口を言ふが如きも、三寶誹謗の罪は免れぬ。又た佛敎の體面を汚し佛敎の信用を害するの類も非常な大罪であります。

是にて一通り、十重禁戒の大意を演了りましたが、此の御戒法には、承陽大師直授の戒文もあり、達磨

のです。聊でも自慢顔をすると、最早臈が見えすく様で、其の人の價値は却て低下なるものである。溫良恭謙讓は孔子の美德である。常に人を輕んぜぬと云ふが釋尊の行持である。此の謙德ありてこそ、智慧も德行も益々進步することが出來る。生々世々を盡して、諸の惡を斷じ衆の善を勸め、一切衆生を濟度せんとの大願心を發すべき我等佛敎信者が、些々たる位地や、財產や、學識や、技藝に誇りて、己れを高ぶり人を侮る樣なことは、決して出來ぬはずであります。

第八の不慳法財戒は、法と財との二つを力に應じて他に施し、決して貪り慳む心を起すなよとの御戒めです。法とは佛法のみには限らず、凡て心を善道に導き、智識を啓き、德性を養なふ、人の人たる行動より、轉迷開悟の聖域に赴かしむべき法則のことである。財とは金錢ばかりでなく、飮食でも、衣服でも、住居でも、品物でも、凡て人の生活や事業を資くべき物を云うたのです。親が子を養なふにも、行儀を敎へ、言語を敎へ、必要なる心得を敎ゆるが如きは法の施しで、着物を與へ、食物を與へ、筆紙等を與へ、小使錢を與ふる等は、皆な財の施しである。親は子に施し子は親に施し、夫は妻に惠み妻は夫に事ふる、其の他、普通の交際上に於ける、挨拶一ツ、お茶一服、皆な是れ布施の相ならぬはない。施す者は益々福を生じ、慳む者は却て德を失ふ。社會の組織は布施の力に依て成立て居る樣なものです。六度四攝法も皆な布施を以て根本とする。故に、我等は、常に博愛慈善の心を以て應分の布施を爲さんことを心懸け、苟にも物を慳み貪欲を增長してはなりませぬ。

第五の不酤酒戒は酒を酤るなよとの御戒めだが、其の要旨は、酒の爲めに、自分は申すに及ばず、他人をして身を害し心を狂はしむる樣なことを爲るなよとの御戒法です。酒は起罪の因緣なりとありまして、酒と云ふものは、身體を害し精神を亂し、諸の罪を作るの媒介と爲るもので、涅槃經には『酒は不善諸惡の根本なり、若し能く是を除斷せば則ち衆の罪を遠ざく』とあり、長阿含經には六種の過失を擧げ、善惡所起經には三十六の過失を示されてあるが、實に、酒の爲めに、財を失なひ、病を起し、爭を生じ、名譽を損じ、時間を費やし、知識を昧ますことは夥いです。世の中には、花に耽り、鳥に溺れ、芝居、相撲、又は碁、將棊などに無我夢中になる者もある。是も亦た一種の酒である。故に、我等は、常に正しき觀念に住して、苟にも身體を害し、精神を昏まし、品行を亂すやうな惡魔に近かぬのが、此の御戒法の持ち方であります。

第六の不說過戒は人の惡口を言ふなよとの御戒めです。人誰か過ちなからん。過を知りなば親切に諭すこそ慈悲の業である。然るに面白さうに喋々と饒舌り散らして、更に他の迷惑を顧みぬと云ふが如きは、實に淺ましき心根と申さねばならぬ。況てや、嫉み妬み恨み等の心を以てするは、徒らに己れの品性を傷け罪惡を招くことゝなる。故に我等は常に愛語を守りて、決して惡口罵詈に渉らぬ樣にせねばなりませぬ。

第七の不自讚毀他戒と云ふは、高慢を戒められたので、自分の事を讚めんが爲めに他人を毀るを自讚毀他と云ひます。どんな學者でも、才子でも、高位高官の人でも自ら謙遜してこそ奥床しい美德が顯るゝも

にして其の志を毀り其の道を誤るのも、多くは之より起る。或は一家の和合を破り、或は不孝不忠に陷り、或は財産を失なひ、或は家名を傷くるも、大概は之より生ずる。故に我等は常に此の御戒法を守りて男女の禮を愼しみ夫婦の和合を守り、誓て不義婬行を致さず、更に進んでは、社會の風紀を改善することに志したならば、獨り己れの德行を全うするのみにあらず、自から陰陽の道に契ひ、天地の妙德を一身に具ふることが出來まする。

第四は不妄語戒である。此の御戒法は虚妄を語ふなよとの御戒めです。妄語の害は第一に自分の良心を欺き、次には他人を欺て迷惑をかける。諺にも『正直の頭に神宿る』とあるが如く、神佛は天地の道を以て其の身と爲し給ふ。天地の道は正直である。春來れば百花玉を綴り秋來れば千山錦を織る、雨降れば地濕ひ風吹けば樹動く、實に是れ正直の姿ではありませんか。然るに、人間は動もすれば語と心とが裏腹で心にもない虚僞を言うて、己れを欺き人を欺く、之れが爲めに神佛にも遠かり天地の道にも背き、一切の惡業罪障は皆な之より生じて來る。『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』此の至誠こそ一切善行の母です、梵網經には身心の妄語と云うて、口ばかりでなく、心の中に、一點でも人を欺さうと云ふ了見が起れば、早や妄語の罪を構成する。又、貧乏人が金持の風を爲たり、無學な者が學者ぶつたり働かずして働ぶり勤めずして勤め振る等は、身體の妄語です。故に、我等は常に正直の德を修め、身口意三業の上に於て、聊かも妄語のない様にせねばなりませぬ。

物を貪り盗むべきものではない。我等は分を守り足ることを知りて、聊かなりとも廉直ならざる行を爲さず、更に進んで他の財物を保護し、常に己れの身を削つてゞも、他をして損害を受けしめたり不自由せしめたり致さぬ樣に、親切と慈愛とを以て、他を誘導化益するのが此の御戒法の持ち方であります。

第三に不邪婬戒と云ふは、道に反いた婬事を爲すなよとの御戒めであります。夫婦の道は人倫の大本である。閨門の禮修らざれば其の災子孫に及ぶ、愼むべきは男女の間柄です。抑も、天覆ひ、地載せ、山秀で海湛え、火は高く騰り水の卑く流るゝ、皆な是れ陰陽の大經です。人間には、此の天地陰陽の氣を稟けて男女の別がある。天には天の道あり地には地の道あるが如く、男には男の守るべき天則あり、女には女の守るべき大法がある。而して始めて夫婦和合し、男女各々其の德を全うすることが出來る。若し男女の道が崩れ夫婦の和合が破るゝ樣なことがあれば、ちやうど天地がひつくりかへり、山と海とが其の位地を亂した樣なもので、それこそ大變です。男が女を愛し女が男を慕ふは陰陽自然の理であるが、若し愛するに道を以てせず慕ふにも法を以てせざれば、大亂は必ず之より起つて來る。昔しから女に對しては操と云ふことを敎へてあるが、男を責むることは寛大に過ぎて居る。尤も我が國なぞは血統相續を重んずる處より本妻に子の無い場合には、公然妾を蓄ふることを許したのだが、是は止むを得ざる場合に行はるべき權道である。それを好い事にして、多くの子を持ちながらも、恬然、妾を蓄へ、專ら情欲を恣にすると云ふ樣な有樣になつた。是が風紀頽廢の基を開いたのであります。世間の實例を見るも、青年の男女が、中途

業家が無遮會を行うたりするのは、正しく此の不殺生戒に起因したる善行であらうと思ひます。凡て大乘戒には、開遮持犯と申して、特別に聽す場合と遮る場合とがある。此の邊を能々心得ねば、御戒法を自在に運用することが出來ませぬ。前の三聚淨戒に當て嵌めますれば、物の命を殺さぬが攝律儀戒、物の命を保護して參るが攝善法戒、猶進んでは、己れの命を捨ても物の生命を救助するのが攝衆生戒である。一の御戒法は必ず止惡と作善と化物との三條件が備つて居ります。後の九ケ條も之に準じて知るが宜しい。

第二の不偸盜戒は他人の物を盜むなとの御戒めです。金錢や衣服や家屋等は申すに及ばず、紙一枚、絲一筋たりとも盜んではならぬ。啻に壁を穿ち牆を踰えて盜むばかりがヌスミではない。凡て取るべからざる物を取り、與へられざる物を濫用するは皆な此の戒法の罪人です。役人が賄賂を取つたり、商人が暴利を貪つたり、日傭取がナマケて賃銀だけの働きをせなんだり、約束より疎末な品物を賣付たりするのは、盡く恐るべき三惡道の罪因である。途中で拾うた物を胡魔化したり、親子夫婦の間でも、妄りに承諾の無い物を使うたりするのも、やはり免るべからざる罪過である。此の御戒法は三業清淨戒であるから、縱ひ手出をして盜まんでも、意の中に盜みたいと思へば、早や破戒の罪を犯すことになる。直接に盜むも間接に盜むもつまり同罪です。今の世の中を見渡せば、滔々たる天下、此の戒法の罪人だらけの樣に思はれる。なんと情けなきことではありませんか。凡そ我等衆生は、皆な前世からの因緣に依て、夫々定まつた果報がある。親子兄弟の中でも一樣には行かぬ。然れば、自分が如何に不自由なればとて、妄りに他の財

ろと鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』と詠ぜられたのも、正しく此の消息を示されたのであります。斯く觀念して見れば、耳に觸るゝ小鳥の聲、眼に遮ぎる昆虫の影も、決して他人ではない。無關係の物ではない。佛樣が『一切の衆生は皆な是れ吾子なり』と仰せられしも、法爾法然の眞理より割り出した御詞です。さすれば、小鳥一羽昆虫一疋に對しても、自然に無殘なる取扱は出來ぬ譯ではありませんか。罪の輕重を論ずれば、人間を殺すは上品の罪、牛馬等を殺すは中品、魚や蟲などを殺すは下品、又上品の中でも、恩人を殺すは其の罪最も重く、普通の人を害するは其の次で、惡人を殺すは又其の次と云ふ樣に重々無盡の等差がある。殺生する者の意思の方から申せば、殺した後も更に悔悟の心なきは極重の罪、悔悟懺謝するは中品、殺さんとして未だ遂げざるに意を飜へすは下品と云ふやうに種々の區別も付く。併し、我が宗所傳の戒法は、佛性の孝順心慈悲心より顯現する自然の德相であるから、必ずしも形式的に輕重の別は論ぜぬ。要するに、平等に衆生の生命を保護し救濟せんとするの菩提心を失却すれば、最早一分の罪根を崩すものと心得て、深くも深く愼しまねばならぬ。尤も征露の戰爭の如く、國家が正義の爲め平和の爲めに戰を開く場合は、諺に所謂『小の蟲を殺して大の蟲を助ける』のであるから、其の罪は僅少にして其の功は莫大である。一面より見れば、寧ろ大なる慈悲行功德行であります。又、商賣の爲め產業の爲めに止むなく動物の生命を殺すが如きは、固より極端に否認は致しませぬ。併し、斯かる場合にも一層の慈悲心を發揮して、殺しながらも之を愍むの心情を失うてはならぬ。養蠶家が蟲供養を行うたり、漁

第一の御戒法は不殺生戒です。是は生物を殺すなよとの御戒めであります。衆生の最も恐るゝものは死ぬことである。衆生の最も大切にするものは命である。生命は實に寶の中の寶です。其の寶の中の寶を奪うて生命を害すると云ふは、無慈悲の中の無慈悲、惡の中の大惡と言はねばならぬ。前の三聚淨戒の處で御承知なされたであらうが、諸の惡を離れ衆の善を勤め、大慈悲心を發して一切の衆生を利益すと云ふが戒法の根本精神で、是れぞ佛の御心菩薩の誓願であつて見れば、一切衆生に對しては、最先に其の生命を保護し救濟することを努め、苟にも命を害する樣なことを爲さぬと云ふが自然の道理であります。鳥獸に至るまで命を惜むの情に變りはない。故に梵網經には『一切有命の者故らに殺すことを得ざれ』とありて此の不殺生の德が昆虫にまで及ぶ樣にせねばならぬ。況てや三世因果の法則に照して見れば、諸法は元より無我にして定法はない。一切衆生は其の業力に依て種々の果報を現はすので、人間はいつまでも人間にあらず、畜生もいつまでも畜生なるにあらず、生々世々の間に於て、或は人間と生れ、或は畜生と生れ、又は地獄、餓鬼等の苦果をも感ずるのである。然れば今日目の前に生存する鳥や獸も、或は過去に於て、親子兄弟、夫婦朋友の關係があつたかも知れぬ。此處を梵網經には『一切の男子は是れ我が父なり、一切の女人は是れ我が母なり、我れ生々に之に從ひ生を受けずといふことなし、故に六道の衆生は皆な是れ我が父母なり、然るを殺し食するは卽ち我が父母を殺し亦た我が故の身を殺すなり』とも仰せられたのである。承陽高祖が『六の道遠近迷ふともがらは我が父ぞかし我が母ぞかし』と詠ぜられ、行基菩薩が『ほろほ

處から、十重と云ふ名前が出たのであります。然るに我が曹洞宗の相傳では、別に輕い戒法と云ふものを說かず、單に十重禁戒のみを傳ふるのであるから、重の字は必ずしも輕の字に對する詞とは見ないで、極極大切なる重要なる御禁戒と云ふ程の意味に心得た方が、寧ろ穩當であらうと思ひます。然らば、我が宗の戒法は不備であるのかと申すに、決して左樣ではない。此の十箇條の中に大小輕重一切の戒法を網羅し盡くして、罄きずと云ふことはない。四十八輕戒は申すに及ばず、三千の威儀八萬の細行も悉く此の中に含蓄されて居る。實を言へば、獨り戒法のみならず、經律論三藏の大精神、六度萬行の大功德も、ソックリ此の十箇條の中に籠つて居るのであります。故に修證義の次の御文には、戒法を受け奉る時は、三世の諸佛の證りたまへる阿耨多羅三藐三菩提、金剛不壞の佛果を成就するぞと仰せられてある。

本師釋尊は、涅槃經に於て『戒は是れ一切善法の梯磴なり、亦是れ一切善法の根本なり。地の悉く是れ一切樹木の所生の本なるが如し』と御示し下され、遺敎經には『若し人能く淨戒を持てば卽ち善法なり。若し淨戒なければ諸善功德皆な生ずることを得ず、此の故に當に知るべし、戒は第一安穩功德の所住處たることを』と御說き下されてあります。して見れば、苟も佛の御敎を信ずる方々は夢の間にも此の御戒法を忘れてはならぬ。就中、十重禁戒は諸佛の法身光明とも謂つべきものであるから、一戒毎に委しく御話して是非共信受奉行して貰はねばなりませぬが、隨分席數を要することであるから何れ追てのことゝ致し、只今はほんの大綱だけを演べて置からうと思ふ。

十六、十重禁戒（修證義第十五節の後段）

次には應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偸盜戒、第三不邪婬戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讃毀佗戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり。

今席に於ては十重禁戒の事を御話致さうと思ふ。十重禁戒とは讀んで字の如く、十箇條の重き禁戒であります。是れは前段の處で申し述べました通り、御戒法の根本は、誓て惡しき事を爲るなよ、誓て善き事を勤めよ、誓て一切の衆生を利益せよ、と云ふ三聚の淨戒の外にはない。其の根本戒法が萬づの物柄事柄に對して、實地に其の妙用を現はすのが、此の十重禁戒であります。然れば三聚淨戒は網の大綱の如く、十重禁戒は網の目の如きものである。又、三聚淨戒は機の經絲の如く、十重禁戒は機の緯絲の如きもので、互に本末體用の關係を有して、暫時も離るべからざるものであります。言ひ換へれば、三聚淨戒は戒法の精神で十重禁戒は其の相形であります。尤も十重禁戒と云ふ名義は、十箇條の重き禁戒と申す詞であるから、他に罪の輕い禁戒があつて、それに對して名けたものです。卽ち大乘戒の根本經典と爲つて居る梵網戒經には、十重禁戒四十八輕戒と云うて、重い禁戒が十箇條、輕い戒法を四十八箇條御定め下されてある

きらしむ。戒は甘露の門たり、衆聖の遊ぶ所なり。(同)

○戒は法城の塹たり、能く煩惱の賊を遮ぎる。戒は勇猛の將たり、魔軍の衆を摧伏す。戒は如意珠たり、能く商人に寶を與ふ。戒は妙樓觀たり、諸の三昧に遊戲す。持戒を平地と爲し、禪定を屋宅と爲して、能く智慧の光を生じ、次第に明照を得、定慧の力莊嚴して、萬行具足することを爲し、乃至佛道を成すことも、悉く猶ほ戒を本と爲す。(同)

○戒は是れ正順解脫の本なり。(遺敎經)

○此の戒に依り因れば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得。(同)

○若し人、能く淨戒を持てば、是れ則ち能く善法有り、若し淨戒無ければ、諸善の功德皆生ずることを得ず。(同)

○戒法の因緣あるときは、禁戒を破して地獄におちたりといへども、つひに得道の因緣なり。(承陽大師)

○曇りなき心の月を先きたてゝ此の世の闇を照らしてぞ行く。(伊達政宗)

○人問はゞ鬼は居ぬともいふべきにこころの問はゞ何に答へん。(矢部駿河守)

參　考

○戒は清凉の池の如く、能く諸の善華を生じ、また猛熾なる火の如く、能く諸の惡草を燒く。（大薩遮尼乾子經）

○諸の衆生及び草木の一切生長するは、咸く地に依るが如く、世及び出世の諸の善根は、皆最勝尸羅(戒)の地に依る。無戒にして善道に生ぜんと欲し求むるは、鳥の翼無くして空を飛ばんと欲するがごとく、人の足なくして遊行せんと欲するがごとく、また海を渡るに船筏無きがごとし。（華嚴經）

○若し、淨戒を持たんと欲せば、應に犛牛の一毛を護らんが爲めの故に、死守して命を惜まざるがごとくすべし。(同)

○戒は大明燈の如し、良く長夜の闇を消す。戒は眞寶鏡の如し、法を照して盡く遺すこと無し。戒は摩尼珠の如し、物を雨らして貧窮を濟ふ。世を離れて速に成佛すること、唯此の法を最と爲す。（梵網經菩薩戒序）

○戒は妙法の藏たり、亦た出世の財たり。戒は大なる舟船たり、能く生死の海を渡す。戒は清凉の池たり、諸の熱惱を澡浴す。戒は無畏の術たり、邪毒の害を消伏す。戒は究竟の伴たり、能く險惡の道を過

に、彼の二人に向て其の仔細を尋ねられしに、二人は、大に驚きたる様子なりしが、やがて語を揃へて申すやうは『私共は兩人して欄檻に倚りつゝ熱心に佛法の御話をして居りましたが、後には退屈せしまゝ、其の御話は御休にして、つひ〳〵浮世話に移りました。思ふに、佛法の御話をせし折には身心清淨なるを以て、諸天善神が私共を御加護あらせられしかども、浮世の談に移りし爲め、善神忽ち其處を去り、打て代つて、惡鬼羅刹が便を得たものと相見えます。扨も〳〵恐ろしきものかな』と、震へ上つて答へたので、禪師は感慨斜めならず、それより後は、苟にも無益の御話などをせられしことなく、身を終るまで佛法一三昧になつて道を行なはれたと申すことであります。『さま〴〵に人の心は白糸のそまりやすかる者にこそあれ』、暫くも油斷の出來ないのが我等お互の精神です。

世が文明に進み、人の學問に長ずるだけ夫れだけ、止惡・作善・利物の三根本戒を宣傳して、之れが擴張普及を圖らざれば、所謂智益々明らかにして行益々昧く、辯論益々巧にして實際益々拙なりと云ふやうな、反對の結果を生ずるの憂がある。否、滔々たる天下皆な此の患に罹らざるは無しといふ有様ではありませんか。故に、我等お互は佛心菩薩行の根本たる此の三聚淨戒を受持し奉りて、惡を惡くみ善を好み、慈悲仁愛を旨とすることを忘れてはなりませぬ。而して、之を實行するの基礎は一大信念の力に在るのであるから、常に佛法僧の三寶に歸依し奉りて、受戒入位の身と爲り、隙なく南無釋迦牟尼佛の法號を唱念して、御恩報謝の行持を營むことが最も肝要であります。

で、善事を行うたる因に依て福德自在の果報を受けます。三には無病は信心より來るで、宗教を信ずる人は心が健全であるから無病息災の身を獲る。四には愛敬は忍辱より來るで、堪忍ある者は人に敬まはれ人に可愛がらるゝやうになる。五には智慧は精進より來るで、勉强する者は必ず智慧者と爲る。六には高位は禮拜より來るで、禮拜は他を敬ふ所の相であるから、自から他より敬まはるゝ高位の人となるのです。七には短命は殺生より來るので、物の命を取る者は必ず短命に生るゝは自業自得の理です。八には病身は不淨より來るで、身心ともに不潔なれば自から病氣に苦しむ身を受けます。九には貧窮は慳貪より來るで、物慳みをして人に與ふることが嫌ひであれば、却て貧乏の果を受けねばならぬ。十には患盲は破戒より來るで、掟を破り法を昧ませば盲目の身となつて生るゝ。是れが十來と云うて因果の有樣であります。夫故、我等は深くも深く因果の道理を恐れ愼しみて、惡しき事は必ず致すまい、善き事は是非とも勤めやう、一切の衆生は誓て救ひ助けんとの約束を心に結ぶことが肝心であります。

昔し、宋の光孝安禪師が淸泰寺と云ふ御寺に住せられて、或時、坐禪をして御出なされしに、二人の坊さんが佛殿の欄檻に倚て談話をして居るのを見られました。然るに、不思議なる哉、限りも無き諸天善神が其の傍に侍し、耳を傾けて聽聞して居る樣子であつた。扨ても有りがたき事かなと感歎せらるゝ間もあらず、彼の諸天善神の姿は烟の如くに消え失せて、俄かに、恐ろしき惡魔羅刹が二人の坊さんを取り圍んで、或は唾を吐き或は脚を掃ふのを御覽なされた。如何にも不可思議千萬でありましたから、禪師は後

我國の大賢と稱せらるゝ北條泰時公は、栂尾の明惠上人に天下を治むるの法を尋ねられし時、上人は『良醫よく脉を取つて其の病の根源を知り、各々藥を與へ灸を加ふれば病自から癒ゆ、國の亂るゝ源を知りて治め給ふべし、亂世の根源は唯欲を本とす、欲心變じて一切萬般の禍となる』と答へられました。公は更に『我れ常に之を思へども、人を無欲ならしむること甚だ難し、何か良き方法は無きや』と問はれければ、上人は『太守一人、無欲ならんことを思ひ給はゞ、これに耻ぢて萬人自然に欲心うすくなるべし。人の欲心深く訴へ來らば、未だ我欲のすたらぬ故と我をはぢしめ給ふべし。其の身正しければ影亦た曲らざるものと知り給ふべし』と敎訓せられました。此の敎訓は迂遠の樣にも聞えまするが、深く之を味うて見ますれば實に親切なる御諭であります。自ら徹底無欲、即ち無我となりさへすれば、身口意の三業は自から清淨となり、知らず〳〵止惡作善の妙用を現はすものである。斯うなうては天下國家を治むることは不可能です。泰時公は此の敎訓を服膺して、遂に古今の大賢となられたのであります。天下を治むるも、一家を治むるも、其の大本は同一である。凡そ世間出世間に於ける因果の理法は、古今東西に通じて動かすべからざる天則であるから、佛祖聖賢の敎なるものは盡く因果の大法を基礎として、止惡作善の標準を示されたものであります。

大集經には、因果の相を示して十來といふことを說てある。其の十來と云ふは、一には富貴は慈悲より來るで、人を助け人に施こしたる慈悲の因に依て富貴と云ふ果を受けます。二には福德は善根より來る

に是れほど險いことはないです。此の時、白樂天は語を轉じて『如何なるか是れ佛法の大意』佛法には八萬の法藏ありと聞く、之を一口に言へば、其の大意はどうであるかと云ふ問です。禪師は直ちに『諸惡莫作衆善奉行』一切の惡は作すなよ一切の善は行へよ、是れが佛法の大意であるぞと答へられた。白樂天は呵々として大に笑ひ『是の如きことは三歳の童子も猶ほ之を諳んず』と言うた。すると、禪師も亦た大に笑うて『三歳の童子も之を諳んずと雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し』と仰せられた。白樂天は此の一語に感激して、遂に禪師に歸依せられました。實にや、八十になつても實行の出來かねるのが止惡作善の道であります。それも三業清淨と申して、身の行も語の使ひ方も、心持も共に止惡作善でなければならぬ。

御經の中には『五種觀人』とて五通りの人を擧げてある。一には身の行は善であるが口と意との善ならざる者、二には口だけは善なれども身と意との惡なるもの、三に意は至極善なれども身の行と口先が之れに伴なはぬもの、四には身口意の三業とも善からぬもの、五には三業共に善なるものである。此の五通りの中で、一から四までは落第の方で、五番目の三業皆な善でなければ、圓滿なる佛菩薩にはなられぬのである。三業皆な善にならうと云ふには、是非共堅固なる大誓願の力に依らねばなりませぬ。此の大誓願を全うするには、一方に於て無我、即ち我見と云ふ奴を離るゝことが肝要であります。我見と云ふは私意私欲のことです。利己的精神のことです。

の杖つきていよ〳〵たどれ法の大路を』、すぐなる節の杖と云ふは、此の三聚淨戒の外にはないのである。佛法の大路は是れに依て始めて通ずることが出來るのであります。

昔、唐朝に名高い白樂天が道林禪師に參じた因縁は、能く說敎の話の種に上ることであるが、此の禪師は、暇さへあれば、大木の叉の上に登つて坐禪して居る方であつた。恰も鳥が巢を作つたやうにして居るところから、世人は鳥窠禪師と云ふ渾名を付けた。鳥窠とは鳥の巢のことである。日本語で云へば『鳥の巢禪師』といふことになる。初め白樂天の訪うた時も、やはり鳥の窠ごもりをきめ込で居られたと見える。其の樣子が如何にも險呑に思はれたから、白樂天は覺えず『險哉々々』と連呼した。すると、禪師は之に應じて同じ樣に、『險哉々々』と云はれた。白樂天は進みより『私は頭に靑天を戴き脚に大地を履む、何の險きことか之れあらん』と突こんだ。禪師は差置かず『薪火相交はり、識情停まらず、險からさらんを得んや』と答へられた。薪火は薪と火です。山の如き薪も一片の火に接すれば忽ち灰燼となる。今や御身等の境界は、薪と火とが相接近してをるやうなものだ、如何ほど高位高官であらうと學者智者であらうと、一たび無常の火に觸れなば早く既に未來の人ではないか。其の未來とは如何、一息截斷の時節、我れ生を知らず安んぞ死を知らんなどと、すましこむでは居られまい。況てや、識情停まらずで、我等の精神界は煩惱妄念の變化最も甚だしく、一時一刻も安心して居られぬではないか。斯く、命は無常の火に接はりて、將に燃えんとして僅に兎かると云ふ有樣、而して、心は山川の水の如く轉變して少くも停まらぬ。世

遂に世界一の大富豪と云はれるほどになつた。故郷を出る時、三箇條の志、即ち誓願を發したさうです。其の三箇條とは、一に予は實直なるべし、二に予は勉強なるべし、三に予は投機を試みざるべし、此の三通です。正直と勉強と着實、是ぞアスをして大長者たらしめた源泉である。今の三聚淨戒も、正しく誓願の上に成立つべき戒法でありますから、其の誓願の力さへ堅固なれば、設ひ渺たる一凡夫の身なりとも、在々所々に増長して、遂には圓滿なる境界に進むことが出來まする。

元來、菩薩には四弘誓願と云うて四通りの誓願がある。其の第一は衆生無邊誓願度とて、一切衆生は無邊なれども誓て之を濟度せんとの願、第二は煩惱無盡誓願斷とて、煩惱は容易に盡くることなきも誓て之を斷せんとの願、第三は法門無量誓願學とて、佛の法門は無量なれども誓て之を修學せんとの願、第四は佛道無上誓願成とて、佛道は最尊無上なれども誓て之を成就せんとの願であります。此の四通りは、一切の菩薩が盡く發せらるゝ誓願であるから、是を菩薩の通願とも稱するのです。此の中、第一の願は攝衆生戒に當り、第二の願は攝律儀戒、第三の願は攝善法戒、第四の願は三聚淨戒全體に通じての最終の大目的であります。涅槃經等には七佛通誡の偈といふがある。即ち『諸の惡は作すこと莫れ、衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨かにす、是諸佛の教なり』と云ふ御文であります。初の二句に止惡と作善だけを擧げて、自から衆生利益の一條を此の間に籠めたのである。是れぞ佛教の骨髓、道德の大綱であるに依て、我等は此の三聚淨戒を以て、精神の根據地と爲し萬行の基礎とせねばなりませぬ。『呉竹のすぐなる節

徳を増長して法身を荘厳するものである。我等が精神界の光明は、煩悩の暗を離れ、又、一切衆生をして能く煩悩の暗を離れしむるより大なるはない。又、我等の身に取りて一番奇麗なのは、清く美しき行を以て善根を聚むるに越た物はない。古歌に『此の法は受けて持てる玉なれば永き世照す寶なりけり』とあるは此處のことである。

抑も、人間と云ふものは『性相近し習相遠し』というて、生れ落ちた時は、上下貴賤おしなべて、大した變りのないものです。それが成長するに從ひ、教育や習慣等の力にて、君子とも小人とも、佛とも凡夫ともなる。『をみなへしおく白露の色かへて花には黄玉葉には青玉』である。大學者、大賢人とて、最初から獨手になつたのではない。所謂天然の釋迦なく自然の彌勒なしで、幾許の業を積み、多くの功を重ねて後に、大學者とも大賢人ともなられたのです。其の業を積み功を累ぬるの根本は何にかと云ふに、正しく其の人の志一つに在るのである。是を佛法では誓願と申します。釋尊の五百大願、彌陀如來の四十八願、觀音、普賢等の大菩薩の十大願等は、皆な遠大なる志を立られたのである。此の世一代を範圍とするやうな短かい狹い志ではない。空間の上からは十方世界、時間の上からは盡未來際の大望である。楠公の七生報國と云はれしも、やはり誓願の一である。米國に於て古今の大長者と稱せられしアス氏の如きも、二十歳の時、故郷なる獨逸を立出で米國に來たりし頃は、一文無しの素寒貧で、少かに七箇の笛を持ちしのみであつたさうです。其の笛を賣却して毛皮を購うたのが商法の發端で、其の後、段々勉强して、

藏と云ふも、此の三箇條の中に籠つてをる。夫故、聚と云ふ名前も付いたものです。然れども、言ふことは易く行ふことは最も難い、そこで梵網經の古迹記には『諸〻の凡夫即ち一切を能せんとにはあらず、三聚頓に誓うて漸に修滿するが故に』とありて、つまりは我等の大誓願の中に成立つところの戒法です。此の世ばかりではなく、生き易り死に易り未來際を盡して、誓て一切の惡は爲すまじ・一切の善は勤めん、一切の衆生は利益せんとの大誓願を發すのである。此の大誓願の力は非常に廣大なもので、分に應じ時に隨つて、少々づゝなりとも其の目的に近づいて來るものである。此の大誓願力がありさへすれば、萬一、誤て惡を作した場合は、サア大變なことをしたと思うて、直さま心の底から懺悔するやうになる。又、聊かの善を行うたり、人一人を助けたりすることのあつた時は、中心に之を喜ぶやうになるものである。惡を厭ふの心深く、善を欣ふの心厚ければ、知らず〳〵眞正なる道德、眞正なる佛行菩薩行は現はれて、一日一日、一時一時に進歩向上して、終には純善無漏の聖域に登ることが出來るものであります。故に、至誠を傾けて此の戒を受け奉れば、其の時こそは正しく佛菩薩の通りの心になつたのである。佛も菩薩も此の戒を以て根本とせられるから、此の戒をば三根本戒とも稱します。梵網經には、此の戒法の功德を喩へて『戒は明なる日月の如し亦は瓔珞珠の如し、微塵の菩薩衆是に由りて正覺を成ず』とある。日月の光は能く諸〻の闇を照す、此の戒法は能く煩惱惡業の暗を破り、又、一切衆生をして煩惱惡業の暗を破らしむるに依て、明なる日月の如しと云うたのである。又、瓔珞の寶珠の色身を莊嚴するが如く、善根功

第二の攝善法戒は、啻に消極的に惡心惡語惡業を制するのみでなく、更に積極的に、一切の善心善語善業を修せんことを誓ふのである。只だ佛法の上に示す所の四諦十二因緣、三學六度、及び念佛、懺悔、看經、題目等のみではなく、世間の上に敎ゆる所の、忠孝仁義、忍耐恭儉、節操廉恥などと云ふことより、衞生看病、報恩謝德に至るまで所有善法を攝めこんで、總ての善き事は必ず之を行なへと云ふのが攝善法戒で、きつと之を行なひますと心に誓ふのが、此の戒の受け方であります。

第三の攝衆生戒は、一切衆生を攝めこむると云ふ戒法であるから、人間は申すに及ばず、凡そ世の中に生とし生る者は、餘さず漏さず之を救ひ助けよと云ふのが攝衆生戒である。故に此の戒をば、饒益有情戒とも、利益衆生戒とも稱するのである。依て、一切の衆生は分に應じ力に應じて、きつと救ひ資けて利益を與へますと心に誓ふのが、此の戒の受け方であります。

此の三箇條を約めて申せば、止惡と作善と利物との三通りになる。卽ち惡を止め善を作し衆生を利益すと云ふの外はない。第一と第二とは自利行で、重に自分の方に屬したる行、第三は利他行で、全分、他人を利益するの行である。之を修證義の四大原則に當て見れば、懺悔滅罪と受戒入位とが第一の攝律儀戒に當り、行持報恩が第二の攝善法戒に當り、發願利生が第三の攝衆生戒に當る。併し、此の三箇條は鼎の三足の如く、互に相依り相資けて離るべからざる關係を有してをる。徹底、惡を止むれば其れと同時に善法は現るゝものです。善法の現はるゝと同時に衆生利益の德が生じて來るものである。佛敎八萬の法

十五、三聚淨戒（修證義第十五節の前段）

次には應さに三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり。

此の讃題は修證義第十五節の中の前段の御文で、正しく三聚淨戒の戒目を御示し下されたのである。前に申し演べし如く、本宗所傳の戒法は都合十六箇條で、其の初が三歸戒、卽ち佛法僧の三寶に歸依する三箇條の戒法、次の三聚淨戒が三箇條、後の十重禁戒が十箇條であります。其の中、三聚淨戒と云ふは、聚はアツメルと訓で、一切の法律、威儀、誓願、行持、其の他所有功德善根が、盡く此の三箇條の中に聚つて居ると云ふ意味になる、淨は淸淨にして垢れ無きの義で、此の三箇條を受け持つ時は、身口意三業の上に於ける煩惱惡業の垢れを除き、眞實淸淨なることを得るより名けたものであります。

其の第一は攝律儀戒である。攝はオサメルと訓む、律儀は一切の非法非道を禁制する掟のことである。佛法にも世間法にも皆な夫々の法律や掟を定めてあるが、要するに、から云ふ事を爲てはならぬ、これこれの事を爲ればこれ〳〵の罪に行ふぞと云ふ禁戒のことである。故に、一切の律儀を一口に言へば、惡い事を致すなよと云ふことになるのである。其の律儀の一切を攝めて、總ての惡心惡語惡業は微塵ばかりも爲るなよと云ふが攝律儀戒である。苟くも惡心惡語惡業に涉ることは決して致すまいと心に誓ふのが、此の戒の受け方であります。

同じ。譬へば大日輪の光明は山河大地照さざる所なきが如し、賤しき糞土の上も、貴き金玉の中も、替ることなく明かなり。然るに盲人は其の光りの中に在りながら具に知らず、悲むべし。（東嶺禪師）

〇一切衆生に自性あり、此の性もとより不生不滅なり、常住不變なり、故に本有の自性と名く。三世諸佛も一切衆生も此の性を本地法身とす。此の法身の光明、周遍法界に充滿して、一切衆生の愚暗無明を回光返照す。（聖一國師）

〇佛法の大道は一塵のなかに大千の經卷あり、一塵のなかに無量の諸佛ましします、一草一木ともに身心なり、萬法不生なれば一心も不生なり、諸法實相なれば一塵も實相なり、しかあれば一心は諸法なり、諸法は一心なり、全身なり。（承陽大師）

〇宗教心無き天才は、宮殿門外の燈の火の如し、外を照らす事明かなれども、內は暗黑なり。

〇塵々佛を見て佛を誇らず、刹々經を聞て經を離れず。（承陽大師）

〇尋ね入る深山の奥のさとぞもと我すみ馴し都なりける。（同）

〇春風に綻びにけり桃の花枝葉にわたるうたがひもなし。（同）

〇月やわれわれや月やのわかぬまで心もすめる秋の夜の月。（成島柳北）

參考

○大慈大悲を名けて佛性と爲す。（涅槃經）

○慈は卽ち如來、如來は卽ち慈なり。（同）

○佛心とは大慈悲是れなり、無緣の慈を以て諸の衆生を攝す。（觀無量壽經）

○今此の三界は皆是れ我有なり、其の中の衆生は悉く皆吾が子なり。而して今此の處は諸の患難多し、唯我一人能く爲めに救護す。（法華經）

○佛性等しきを以ての故に、衆生を視るに差別あることなし。（涅槃經）

○佛身は法界に充滿し、普く一切衆生の前に現はれ、緣に隨ひ感に趣いて周からざること靡し。而も恒に此の菩提座に處る。（華嚴經）

○一性は一切の性に通じ、一法は徧く一切の法を含む。一月は普く一切の水に現じ、一切の水月は一月に攝む。諸佛の法身は我性に入り、我性は還て如來と合す。（永嘉大師）

○夜々抱レ佛眠。朝々還共起。起坐鎭相隨。語默同起止。（傅大士）

○人人具足する本性と、三世諸佛の本性と、無二なれば功德莊嚴も均し、光明赫奕たり、智慧神通悉く

高祖承陽大師が、寶治三年正月一日に羅漢供養を御修行あそばされた時、木像畫像等の羅漢尊者が光明を放たれたと云ふことや、太祖圓明國師が元亨元年四月十八日の夜、觀音大師の靈夢を感ぜられたと云ふことなどは、之を求めて招いたものでもなく、之を願ふて得たのでもなく、卽ち感應道交難思議の奇瑞であります。今日の人が、動もすれば此等の奇蹟を以て單に怪談俗說とのみ思ふのは、唯だ正法に不思議なきことを知て、不思議界に正法の存することを究めぬからである。さればとて、拙僧は不思議を貴とぶべしと勸むる者ではない。不思議なるものは所謂天祐の發現であつて、其の因て來る所は淸淨皎潔なる信念である。淸く潔よき信念の力は實に偉大なるもので、天地をも動かし鬼神をも泣かしむるほどの勢力のあるものです。若し此の信念を有せずして、單に不思議と云へる影法師のみを目的としたならば、盲人の壁を摸るやうなもので、迷信の溝に陷らなければ、勞して功なきに終るの外はないです。

今や、我等は幸にして、圓滿完全なる佛法僧の三寶と云へる御本尊に對する身の上でありますれば、自ら其の身の勝緣を喜んで、至誠眞實の心を以て之れに歸依し奉り、感應道交の功德を成就して、更に進んで受戒入位の本懷を遂げ、利生報恩の行願を全うし修證一如の大道に達したいものであります。それに付ても、前々に申し演べた通り、僧は法に依て生じ法は佛に依て現はるで、三寶の根本、功德の淵源は、南無釋迦牟尼佛に歸するのでありますから、行住坐臥に拘はらず、一心淸淨にその名號を唱念し奉りて、佛恩報謝の行持を勵まるゝが本宗信者の本分であらうと思ひます。

の功德こそ、實に最も尊とく最も氣高い、甚深不可思議の法門であると云ふことは、釋尊が處々の經文に於て御證明あらせられてあるのだから、此の旨をよく〳〵心得て、深く三寶を信受せよとの御訓誨であります。

昔、村上天皇の時、禁裡に於て五種の法を修せられたことがありました。五種の法とは、東西南北中央に壇を設け、東方には降三世明王を勸請し、西方には大威德明王、中央には大日大聖不動明王と云ふ樣に、五ヶ處に五尊を勸請して法を修するのであります。其の時、中央の壇に上られたのが元三大師慈惠僧正で、東方の壇に上られたのが寬朝僧正、何れも當時拔群の高僧です。天皇が畏くも玉簾の中から御覽あそばすと、不思議なるかな、慈惠僧正の姿が藏れて、嚴然たる不動明王の御姿に成つて居る。然るに寬朝僧正の方は、降三世明王の姿になつたかと思ふと、又、元の自分の姿となつて、時々刻々に變化して見えたと申すことです。そこで天皇は、慈惠僧正の一心不動にして、佛と其の身を感應道交してゐることを感歎あらせられ、之れと同時に、寬朝僧正は修法の中にも妄念の兆ありて、佛になりきることの出來ぬことを不愍に思召されたと云ふ御話しがあります。併し、是れを昔話とのみ思うてはなりませぬ。我等とても、一心清淨にして、眞實の信仰を捧げて佛法僧に歸依し奉る時は、三寶の光明燦然として我心に印し、其の心が、ソツクリ無上正覺の佛ともなり、清淨離塵の法ともなり、和合功德の僧ともなり、凡夫の此の身が一轉して、佛の全身ともなりまする。

云うて益々生長發達し、必ず積功累德と申して、功を積み德を累ね、任運に無上佛果菩提を成就するぞよとの御教訓であります。阿耨多羅三藐三菩提は梵語であります。阿耨多羅は無上と譯して、此の上も無いと云ふ意、三藐三菩提は正徧知と譯して、正しくして邪なること無く、徧ねく行き渉る智慧と云ふ意です。一口に申せば、佛樣の御悟を阿耨多羅三藐三菩提と申したのであります。佛樣の御悟と云うても別では無い、眞正なる善根功德の凝り固つた姿である。其の善根功德は、三寶歸依の信念を以て根本とするのであるから、優婆塞戒經には『是の三歸依は卽ち是れ一切無量の善法、乃至、阿耨多羅三藐三菩提の根本なり』と說てある。維摩經には『一切の不善法を斷じ一切の善法を集むるより如來の身を生ず』とも說かれてあります。世の中には、佛樣になるには世を遁れ身を捨てゝ、枯木の如くにならねばならぬやうに思ふ人もあるさうであるが、決してさうではないです。世を遁れ身を捨つるは一旦の修行で、所謂修養の一方法に過ぎぬ。修養の成熟した上は、世に出で身を現はして、人を救ひ國を利し、所有善根功德を積み累ねて、始めて佛樣になれるのです。夫故、一善を修すれば一善だけの佛、一德を具ふれば一德だけの佛樣になれまする。其の一善一德と云ふも、心の底の底から出るのでなければ眞實の結果を見ることはならぬ。心の底に僞もなく垢も無き眞善眞美の境界に達するには、必ず信仰に依らねばなりませぬ。信仰は實に萬善萬德の母であります。故に、下の御文に『知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと世尊已に證明しまします、衆生當に信受すべし』と仰せられたのであります。卽ち、三寶歸依

す。我等の方に如何ほど感ずる心がありましても、向ふに應ずる用が無ければ、布で作つた太鼓を撃くやうなもので道交は致しませぬ。又、向ふに應ずる力がありましても、此方に感ずる心が無ければ、虚空に物を畫く樣なもので何の功能もございませぬ。我等が信仰の對象たる御本尊樣が御疎末であつたならば、感じたからとて應ずる資格が無いです。又、如何に貴とき御本尊樣でも、信仰が微弱であつたならば、應のみあつて感が無いから、是れも役には立たぬ。雙方が合體した處に於て、始めて眞實の功德利益が成就せられますから『此の歸依佛法僧の功德必ず感應道交する時成就するなり』と仰せられたのであります。之を一家の和合に就て見ても同じことです。親が如何ほど子を愛しても、それを感ぜぬ樣な子であつたならば、決して一家の幸福は得られませぬ。又、妻がどのやうに夫を大切にしても、夫が之に應ずるだけの親切を持たなかつたならば、家庭の平和を相續することが出來ませぬ。若し能く感應道交するならば『設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり』で、天上界、人間界は申すに及ばず、縱や地獄・餓鬼・畜生と云ふ樣な淺ましき惡果報の者でも、眞實、歸依三寶の大功德を成就することを得るのであります。

次の御文には『已に歸依し奉るが如きは生生世世在在處處に增長し必ず積功累德し阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり』とありまして、一度佛法僧の三寶に歸依し奉りて、感應道交の功德が現はれますれば、如何なる世界に生れ如何なる處に在りませうとも、此の功德因緣の盡きると云ふことは無い。增長と

十四、感應道交（修證義第拾四節）

此の歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは生生世世在在處處に増長し、必ず積功累德し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと世尊已に證明しまします、衆生當に信受すべし。

此の一節は感應道交と云ふことを御示し下されたのであります。感は感覺の感で、我等衆生の方に係る。即ち、佛の靈光、佛の御慈悲を、心に深く感ずることです。これは理窟や學問の力では行かぬ。『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ』と云ふ歌の如く、理窟や學問を離れて、唯だ何んとなく心の底に有り難いと感ずるのである。母親が子供を見る時可愛と感ずる、子供が母親を見る時なつかしいと感ずる、此の感ずる意は言にも筆にも露はされるものではない。それから、應はコタヘルと訓じて、佛の方に係る。鐘を打てばゴーンと響く、是れ鐘がコタヘルのである。我等衆生が有り難いと感ずれば、之れと同時に佛の御慈悲が其の妙用を露はすこと、恰も響の聲に應じ、影の形に從ふが如くである。箇樣に、我等の感ずる心と佛の應ずる力との二た道が、交互て一致するを感應道交と云ふのでありま

○梵語に南無、此には翻じて歸と爲す、卽ち是れ歸趣の義なり、或は云く那摩、或は曩謨、皆是れ梵音の訛なり。或は云く、此に救我と云ひ、又、歸命と云ふ。(涅槃經疏)

○或は那謨、或は南摩、此に歸命と翻す。要律儀に恭敬と翻す。善見論には歸命覺と翻す、或は信從と翻す。法華經疏に云く、南無には大に義有り、或は度我と言ふ云々。(釋氏要覽)

○いはゆる歸依とは、歸は歸投なり、依は依伏なり、このゆゑに歸依といふ。歸投の相はたとへば、子の父に歸するがごとし、依伏は、たとへば民の王に依するがごとし、いはゆる救濟の言なり。(承陽大師)

○面かけは千代に傳へて父母のありし敎を思ひ放つな。(慈雲尊者)

○思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道を知るなれ。(伊藤仁齋)

○惡しとも善しともいかにいひ果てむ折々かわる人の心を。(弘法大師)

○みなをのみきくの下露いつのまに深きさとりの淵となるらん。(行誡上人)

○谷川の流れにかけし丸木ばし世を渡る身は足もとを見よ。

○油斷こそ大敵なりと心得て堅固にまもれ己が心を。

を達するのみならず、佛果菩提の莊嚴之れに越したることはないのである。

參考

○菩薩に十種の大悲ありて常に衆生を觀ず。卽ち衆生の歸依する所なきを觀察して大悲を起し、衆生の邪なる道に隨逐するを觀察して大悲を起し、衆生の貧しくして善根なきを觀察して大悲を起し、長く生死に睡るを觀察して大悲を起し、衆生の欲に縛らるゝを觀察して大悲を起し、衆生の長病あるを觀察して大悲を起し、衆生の善法を欲するなきを觀察して大悲を起し、衆生の諸佛の法を失ふを觀察して大悲を起す。(華嚴經)

○十種の法を具足するときは、眞に如來を供養すとなす。一には法を以て供養し、二には諸行を以て供養し、三には平等に一切の衆生を利益し、四には慈悲心を以て隨順ひ、五には如來の力を以て一切に隨順ひ、六には一切の善法を勤め修めて捨てず、七には一切の菩薩の事業を捨てず、八には說の如く行ひ、行ひの如く說き、九には長時に修めて心に疲厭はず、十には常に大菩提心を捨てず、若し此の十法を具足せば、如來を供養することを得。(同)

○南無とは此れ諸佛世尊の名號の音聲。(悲華經)

るから、親を敬まはぬやうな者は、とても國家に對し社會に對するの道德を實踐し得らるゝ氣づかひはない。三寶は實に我等の父母も同然である。我等は三寶の恩德に依て安心決定の門を開くのである　然るに若し、三寶を歸依するの信念が無かつたならば、どうして三聚淨戒、十重禁戒の戒德を得ることが出來ませうぞ。

昔、道紀法師は、名高い善知識で、世の人々に重んぜられた方でありましたが、至つて孝心が深くあられた。其の母親が老衰の後、餘所に行くとか、又は庭內などを運動してみたいと云ふやうな時には、必ず自身で母親を背に負つて、半日でも一日でも、母親が機嫌好く遊ぶのを此の上なき樂しみとして居られた相です。弟子だちは氣の毒に思ひ『貴師が自ら母親を脊に負ひなさるは勿體ない』と云うて、之れに代らうとすると、法師は『吾母なり君の母に非ず、其の形骸の累は卽ち吾事なり』と云はれた。卽ち私の母なれば私が孝行を盡すは當然である。どんな骨の折れることをしても孝養を勵むは私の務めでありますと云うて、生涯、人手にかけず、親孝行をせられたと申すことであります。

我等御互も亦た是の如く、今生後世の大智慧大道德を惠みたまうて、受戒入位の大安心を御與へ下さる所の法身の親は、卽ち佛法僧の三寶でありますから、常に三寶を頭に戴いて暫時も其の恩德を忘れず、寢ても寤ても至心に歸依し奉り、寢ても寤ても三寶一體の洪名たる南無釋迦牟尼佛を唱念し奉り、急いで佛の御戒法を相續して受戒入位の素懷を遂げ、發願利生、行持報恩の妙修を圓成せば、獨り人生の目的

ある。又、佛樣は何の爲めに法を説かれたかと云ふに、我等には煩惱惡業と云ふ恐ろしき病があり、其の病の爲めに鬼なき世界に鬼を作り、自由の境界を特々不自由に陥れる、其の病を療治するのが佛法の目的であるから、一代五十年の御敎化は皆な良い藥の配劑のやうなものです。夫故に是非とも御歸依を致さねばならぬ。又、僧は佛の御弟子で、佛法を實行する御方であるから、我等の身に取りては、轉迷開悟と云ふ目的に向て進んで參る修行の道中の案内者なり同行者なりで、最も勝れたる御友達であるから歸依するのである。して見れば、佛樣に向うたならば『ア、佛樣は宇宙の眞理をお悟りあそばされて我等を敎化したまひ、我等を救はん爲めに斯くまでも御辛勞下されたのである』と觀念し、法に向うたならば『ア、これぞ、我等の精神を苦しめ德行を傷り、社會を亂し、國家を迷はす樣な難病を療治する結構なる御藥である』と觀念し、僧に向ふたならば『我等が宗敎上の大目的を達する上の善良なる相談相手なり』と觀念して、清く正しき信仰を以て歸依し奉らねばなりませぬ。

　次の御文には『佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其の後諸戒を受るなり、然あれば即ち三歸に依りて得戒あるなり』と仰せられて、三寶に歸依し奉りし人こそ、眞の佛弟子となつたのでありますから、三寶に歸依せぬ者は、到底、他の佛戒を相續するの資格はない。三寶歸依は實に是れ受戒入位の根原であります。てふど人たる者が、眞實、忠孝仁義の道を全うせんには、必ず先づ我を生み我を育てゝくれた兩親を敬ひ尊とばねばならぬやうなものである。孝順は至道の法であ

の一念を出でませぬ。十本の指を一つに合せるのは、取りも直さず、十界一念の觀想を形の上に現はしたのです。又、南無は梵語で、歸命とも歸依とも譯してあります。歸命とは命令に歸するの義です。歸の字はトツグと訓で、女の嫁に行くことを意味してゐます。嫁に行く時は、恰も自分の實家に歸つた心持で、夫の家を眞實の我が家と爲し、舅姑を以て眞實の父母なりとして事ふるからであります。玆でもその如く、何事も向ふの仰せに歸きて、如何なる命令でも少しも違背せざること、てふど軍人が將官の命令に從ふやうな工合に、毫も疑はず躊躇せず、命令次第では、火の中へでも水の中へでも飛込むと云ふほどに歸伏して、三寶を以て眞實の親とも思ひ家とも賴み、幾ど此の全身を擧げて三寶に打ち任せると云ふ意味から歸命と云ふのであります。歸依もやはり同じ意で、依は人扁に衣と云ふ字を書いて、人は如何なる場合にも着物を離さぬ如く、寢ても寤ても三寶の衣に我身を纏うて居ると云ふ意味でありますから、つまり梵語と漢語とを雙べ擧げて、南無歸依と申したものであります。

然らば何故に歸依せねばならぬか、又、歸依する所の大精神は何處に在るかと云ふことを、次の御文には『佛は大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す』と御示し下されたのです。佛樣は三界の大導師で、娑婆往來八千返の難作能作の御艱難をあそばされ、三界生死の根源を究め煩惱生起の原因を明らめたまひ、我等衆生に對して、煩惱の束縛を離れ生死の苦惱を脫し、此の身此の儘、宇宙本來の性德を開發せしむる法門を御授け下されたる大恩教主なるを以て、歸依し奉つるので

仲間を免るゝことは出來ぬ。苟も三寶に歸依し奉る時は、淨信を專らにして微塵ばかりも餘所外に心を散してはなりませぬ。佛の法身は元よりして常住不滅である。法も僧も宇宙の性德、眞理の妙用であつて、決して昔だの今だのと云ふ隔のあらうはずがない。故に『或は如來現在世にもあれ或は如來滅後にもあれ』で、佛樣の御在世も、滅後の今日も、三寶歸依の精神に變りはないです。俗人すら『神を祭ること其の在すが如し』と云うてある。況てや我等は、木像に對はうが畫像に對はうが、木像だの畫像だのと云ふ有相の見があつてはならぬ。正しく現在の釋迦牟尼如來に逢ひ奉りし觀念を以て歸依し奉つらねば、眞實の淨信は起り兼ぬるのである。

次の御文に『合掌し、低頭して口に唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧』とありまして、心に於ては淨信に住し、身相に於ては掌を合せ頭を低げ、口に於ては南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱へ奉り、身と口と意との三業が一體となつて歸依し奉らねばなりませぬ。口で計り三寶の御名を唱へても、心に淨信が無ければ役に立たぬ。心で如何ほど御歸依をしても、身相と口とが之に伴なはねば實地に功德を得ることは出來ぬ。心と口と身との三業が一ツになりきつて歸依し奉る時、始めて三寶の妙功德が我身に具はり、我と三寶とが一體となりまする。掌を合せるのは三寶に對する敬禮の儀式であります。又、之を十界一念の印相とも申してある。十界は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛陀の十種の世界、是れ皆な一心の作用に依て生ずるのであるから、十界は本より自己

十三、歸依精神（修證義第十三節）

其の歸依三寶とは正に淨信を專らにして或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、佛は是れ大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す、佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受るも必ず三歸を受けて其の後諸戒を受るなり、然あれば則ち三歸に依りて得戒あるなり。

前節に於て、佛法僧の三寶に歸依するは衆苦を解脱するの要道なることを演べられ、此の一節には、三寶歸依の大精神を御示し下されたのであります。初に『其の歸依三寶とは正に淨信を專らにして』とありまして、三寶を御本尊として歸依し奉るには、聊かにても穢れた量見があつてはならぬ。淨信と申して、極々淨らかなる信心を起すのが一番肝要である。淨らかなる信心と云ふは、虚僞りや邪見妄想の穢を離れたる心のことです。兎角、我等の心には虚僞が交りたがつて、却々眞實正直の心は起り惡いものである。歌にも『花に染め紅葉に染めてまことなき心の色やあだし世の中』とある通りである。夫故、觀無量壽經には、至誠心・深心・發願心の三心を說てある。其の第一が至誠心、卽ちマコトの心である。又、起信論には、直心・深心・悲心の三心を說てあつて、其の第一がやはり正直の心であります。若も心に淨心が無ければ、縱ひ如何ほど神聖にして且つ完全なる御本尊樣に向ふとも、依然として妄信迷信の

三、植物崇拜。老木大樹を神とするもの。

四、山岳崇拜。富士山や御嶽を神とするもの。

五、天體崇拜。日月星辰を神とするもの。

六、庶物崇拜。岩石刀劍類を神とするもの。

七、生殖器崇拜。男根女根を神として崇拜するもの。」

〇いまわれら宿善のたすくるによりて、如來の遺法にあひたてまつり、晝夜に三寶の寶號をきゝたてまつること、時とともにして不退なり、これすなはち法要なるべし、天魔波旬、なほ三寶に歸依したてまつりて患難をまぬかる、いかにいはんや、餘者の三寶の功德におきて、積功累德せらん、はかりしらざらめや。（同）

〇學、諦理に乖き、自ら妄情に隨つて、內覺に返らず、稱して外道と爲す。（翻譯名義集）

〇外道とは理外に解を生ずるの徒。（義楚六帖）

〇正理に入らざるを外と名け、但、邪因を修するを道と名く。（楞嚴義疏）

〇心外に法を見るを名けて外道と爲す、若し自心を悟れば卽ち是れ涅槃。（楞伽經）

〇邪心、理を見て邪智を發し、正教を禀けず、故に外道と名く。（三藏法數）

〇迷信は正眞の信仰を害するものである。而して世に迷信と云ふべきもの尠からざるも、天理教、金光教、蓮門教等はその重もなるものである。また左の如きものを對象として信仰するものは皆迷信の徒である。

一、動物崇拜。狐、蛇、鼠の類を神とするもの。

二、死者崇拜。祖先若しくは聖賢英雄等に對して追慕の念に出で崇拜するものは、迷信にあらざるも、平井權八・小紫の比翼塚、鼠小僧の墓等に信仰するは迷信である。

参　考

○人若し一心に心を誠にして佛に歸依すれば、彼の人は必ず大なる快樂を得べし。佛の心は晝となく夜となく、衆生を憶へばなり。人若し一心に心を誠にして達磨（法）に歸依すれば、彼の人は大なる快樂を得べし。達磨の力は晝となく夜となく衆生を加持ればなり。人若し一心に心を誠にして僧伽（僧侶）に歸依すれば、彼の人は大なる安穩を得べし。僧伽の威は晝となく夜となく、衆生を保護すればなり。（帝釋所問經）

○菩薩は一切世間の作業を示現し、衆生を敎化して倦まず、其の心樂に隨つて爲めに身を現じ、一切の所行皆染着する無く、或は凡夫を現じ、或は聖人を現じ、或は生死を現じ、或は涅槃を現じて、衆生を度す。（華嚴經）

○正道に住し、占卜を行はず、惡戒を取らず、心見直にして誑無く諂無く、佛法僧に於て決定信を起す。（莊嚴論）

○いまの衆生、いたづらに各々の一佛の名號を稱念せんよりは、すみやかに三歸をうけたてまつるべし、愚闇にして大功德をむなしくすることなかれ。（承陽大師）

大騒をして、江戸中の評判となつた。然るに、妙船は更に之を肯はぬ。『我等凡夫の身が、縱や念佛を唱へしとて、佛が有形的に來迎せらるゝはずはない。思ふに是れは信仰を妨げんとする惡魔の所爲ならん』とて、益々念佛を勵んで居りました。或時、例の如く念佛を始めると、また例の如く光が射した。人々は感歎して居る。妙船は『ソレ又た惡魔が來れり』とて、一生懸命に念佛を唱へた。時に佛壇の上にたゞならぬ響がした。『それッ』と云うて、佛壇の上を探がして見ると、思ひも寄らぬ一疋の古狐が飛出て、何處ともなく逃失せた。それよりは光明の射すことが無かつたと云ふ話があります。『幽靈の正體見たり枯尾花』で、世の中にはこんな事が間々あるものである。

我等が宗教を信ずる上に於ても、先づ以て自己の精神を大丈夫にして、健全なる信仰力を養なはねばなりませぬ。今や、幸に釋尊直授の法門に遇ひ奉り、佛法僧の三寶を御本尊として、其の大利益に預かり、受戒入位の席に列なり、利生報恩の大功德を成就すると云ふは、實に最善最美なる信仰の餘慶でありますれば、寢ても寤ても南無釋迦牟尼佛の御名號を唱念し奉りて、懺悔の功德を積み、受戒入位の本願に本證の妙果を圓成し、甚深なる御恩德に報い奉らんことを期せねばなりませぬ。

と申すのである。世に是れほど神聖にして且善美なる御本尊様は無いです。

此の頃、拙衲の寓居へ、某と云へる老書生風の人が來て面會を求められた。其の人の申すには『私は佛教信者と云ふ方でありますが、年來、神道、耶蘇教をも研究して、眞理の歸する所、三教遂に一致なる事を發見した。そこで、全世界の宗教を統一して、一宗教と爲さんとの志を立てました。先づ其の意見を天下に告白するの必要を感じて、目下、著述中である』とのことであつた。拙衲は珍らしきことゝ思うて、宗教統一に關する講釋を聞て見ると、其の要點は『佛教の法報應三身、我國の三種の神器、耶蘇教の三位一體等は、皆な同一の原理に出たものである』と云ふ意見で、陳列的に手前勝手の理窟を牽强て居つた。そこで、拙衲は『貴下の論ずる所は曾て心學者流などの說きしものと小異にして大同である。それ位の解釋を以て宗教統一などとは思ひも寄らぬ。それよりは先づ佛教中の一分派でも宜いから、其の教理を忠實に研究して見られよ』と云うて、忠告したことがありました。又、近頃は、少しばかり眞理の星光を感得すると、はや佛知見でも開いた樣に思うて、自ら神だとか豫言者だとか云うて居る人々が澤山出來る樣であるが、佛教の見知より見れば、此等も亦た迷信の御仲間で、所謂見惑の一類であります。

昔、今の東京を江戸と稱した頃、妙船と云ふ尼さんがあつて、常に佛壇に向つて念佛を唱へて居つた。ところが、何時の間にやら、念佛を始めると佛壇より一道の光明が射して妙船の頭を照す。家内の者の目にも明らかに見える。一同は大に驚嘆して、是れ正しく佛の御來迎に相違ないと云ふので、近處近邊で

とを與へ、更に神ともなり佛ともなるべき聖域に向つて進歩せしむるに在るのでございます。夫故、今日の宗教は、是非共科學的で、哲學的で、倫理的で、而して國家的で無ければならぬ。更に進んでは、科學も哲學も倫理も及ばざる處に於て、第一義門を打開して、社會の暗黒を根本的に照破し、宇宙の妙德を一身の上に運用せしめねばならぬ。若し然で無ければ、宗教は却て人を愚にし人を卑屈にする樣になります。腐れ水を呑まして病氣の回復を祈るとか、斷食鹽斷等の苦行をして却て身體の健康を害するとか、宗教の爲めに却て風俗を害し、經濟を亂し、精神を苦しめ、平和を傷くるやうなことがあつては相濟まぬことであります。斯る間違つた信仰では『彼は其の歸依に依りて衆苦を解脫すること無し』で、いくら御歸依をしたからとて、少しも衆苦を解脫する因緣にはならぬ。衆苦とは衆多の苦痛と云ふことです。苦痛には心の上の苦もあれば身體の上の苦もある。家庭の上の苦もあれば社會の上の苦もある。苟も道德の大本を養なひ眞理の原則を明らめ、內にしては因果の理法に從がひ、外にしては人生の義務を盡す時は、所有苦痛は自から解脫するものであります。故に『早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脫するのみにあらず、菩提を成就すべし』と仰せ下されたのです。佛法僧の三寶は、前に委しく申し演べた通り、宇宙の原則たる、體・相・用の三大妙德に起因したるものなれば、淸き美はしき信念を發して歸依し奉る時は、其の三大妙德が自から我心に現はれ、我身に行なはれ、我身、我心が、ソツクリ佛とも法とも僧とも爲つて、平等の德を得、淸淨の相を具し、和合の用を現はすので、是を菩提を成就した人

とも云はれぬが、併し、其の靈は決して歸依すべきものではなく、寧ろ之を濟度して遣るべきものである。然るに、杉の木や銀杏などに禮拜して自分の吉凶禍福を指圖して貰はうとしたり、洞穴などに頭を低げて將來の救ひを願うたりするのは、實に迷信の甚しきものと云はねばならぬ。況や、鷄や鳩や鹿や蛇を禮拜したり、甚しきは生殖器を禮拜する者なぞは、全で御話になつたものではない。佛教の祭神にも狐や龍や大蛇などの姿も見えるが、是は別に密意の存することで、決して世の所謂動物崇拜の類ではないのです。此處をよく〳〵心得て貰はぬと、却て佛教の神聖を害するの恐があるのでございます。外道とは『心外に法を求むるを外道と云ふ』とありて、一心の根柢を度外視して、知識道德の本源を打忘れ、學理に外れ常識に悖るやうな淺はかなる信仰を起し、神や佛を以て、賤しむべき自己の欲望を遂ぐるの道具に使ふやうな量見のある者は、皆な外道と云ふのです。佛教の中に在りながらも、やゝもすると此の外道の仲間に入るやうになりたがる者があつて困る。制多は梵語で、可供養處などと譯してある。つまり外道連中の禮拜堂や、迷信の對象たる山神鬼神等のことである。そんなものを禮拜したり信仰したりするは、甚だ悲しむべきことであります。野蠻未開の人類ならばいざ知らず、文明國の人民たる者が、學理にも教理にも當嵌らぬ怪しい物に向つて信仰を捧げるなどと云ふは、馬鹿々々しき限りではありませんか。

凡そ宗教の目的は一には、國民道德の根柢を養うて文明の基礎を鞏固にし、二には教育や法律の手の屆かぬ人類思想界の奧底に向つて、眞善眞美なる靈光を施こし、又た我等の精神に最高の安心と無限の快樂

を聞き奉ることだも出來ないです。況てや之れに歸依し奉りて、親ら三寶の大功德を成就し、宇宙眞理の體相用三德を一身に表現するなぞといふ結構なる果報は、決して得られなんだであらう。敎の多き其の中にて、最尊最貴の佛法に遇ひ奉り、信仰の對象たる御本尊の數も少なからぬのに、最も完全にして且つ合理的なる佛法僧の三寶に歸依し奉ると云ふ我等こそは、實に幸の中でも殊に幸なる善果報と申さねばなりませぬ。然るに世の中には、斯る貴とき御本尊樣のあることをも知らず、自分の心の迷から却て淺ましき邪信妄信に陷ゐる者も少なからぬ樣に見受らるゝは、甚だ遺憾なる次第ではありませんか。夫故、次の御文には『徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ』と御誡め下されたのであります。所逼はセマラルで、他の壓制や强迫を受けることです。卽ち、此の神を信ぜざれば罰が當たるとか、我は嫉妬の神であるから必ず我を信ぜよなどと嚇かされる事を云たのです。迷信連中には、隨分、神樣が祟るとか、神樣が御立腹なされるとか稱して、ワイ〳〵騷ぎ立て、滅茶苦茶に信仰する輩もあります。山神鬼神と云ふは、山や巖や洞穴や、又は樹木などを御神座、又は御神木と稱して祭るの類です。尤も、今日ならば、東宮殿下御手植の松とか、東鄕大將手植の月桂樹とか云ふ樣に、古の神々や聖賢英雄などの關係から、紀念として之れに對し敬意を表するのは、樹木其の物に歸依するのではなく、之れに關係ある偉人の功德を追慕するのであるから毫も差支はない。又た佛敎では依草附木の精靈と云うて、鬼神などが老木や荒草に其の靈を寄するの說もあるから、樹木なども絕對的に靈がない

り、遂に三界六道生死の苦しみをも招くに至りまする。然るに、尊者の御答へは、私は出息入息の上に於て、少しも煩惱妄念の垢なく生死の束縛をも受けませぬ。煩惱なく生死なき、是れ即ち佛なり法なり僧なりで、これぞ眞の活きたる御經文である。出息も妙法なれば入息も經卷である。一日一夜は八萬四千の息の出入があれば、取りも直さず、八萬四千の御經文が現はれてをるのである。私は是の如きの經を讀み通しに讀んで居りますと云ふ御挨拶です。何んと有り難い御話ではありませんか。佛法も此の處まで達して見ねば、眞の大功德も現はれず、又、眞の大安心も得られませぬ。然るに世の中には、斯かる正しき信仰を起すことが出來ずに、何時の間にやら迷信の淵に陷りて、一種の病的宗敎を發生することの少なからぬは、實に歎かしき限りであります。依て此の賛題は、嚴しく病的宗敎の根據地を打破り、衆苦解脫の正門を御開示下されたもので、最も大切なる御文でございます。

凡そ何事にも、夫々因緣由來する所があるものです。人間世界の上で申せば、貴ときもあり賤しきもあり、富めるもあり貧しきもある。是れ皆な因緣因果の理法に支配せられ樣々なる現象を呈するもので、決して偶然に現はれたことではない。今、我等が、受け難き人間の身を受け遇ひ難き佛法に遇ひ、殊に、三種の大功德を具へたる、佛法僧三寶の光明に照さるゝといふ有り難い果報を得たのは、並大抵の因緣ではありませぬ。故に賛題の御文の初めに『若し薄福少德の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり』とありまして、若も宿世の福分が薄く、前生の功德が少なかりしならば、到底、斯る貴とき三寶の御名字

等御互の此の身此の儘がソツクリ佛法僧三寶の姿である。此の妙德の明かに事實となつて世に現はれたのが現前の三寶で、此の妙德を現はすべき標準たる本尊樣が卽ち住持の三寶であります。是に就ての委しい事は、追々申し上ぐる積りであるが、兎に角、佛法僧の三寶に歸依し奉るのは、やがて宇宙眞理の妙用、我等が本來具有する大功德を現はす爲めなのであつて、彼の漠然たる信仰より妄りに神の御前に屈伏したり、己れの私利私慾を滿足せんが爲め佛に媚び諂う樣な連中とは、自から其の選を異にして居るのであります。

釋尊より二十七代の祖師般若多羅尊者と申すは、達磨大師の御師匠樣です。或る時、東印度の國王が尊者を請待して大齋會を設けられた。なにがさて、國王の御施主で滅多に見られぬ大佛事、如何なる大法要が勤まるかと、君臣ともに頸を伸して其の樣子を窺うて居られた。然るに、尊者は鐘も鳴さず經も誦まず、默々として坐禪せられた儘、何時まで過ても御勤の模樣が無い。國王は堪へかねて『尊者は何故に御經を讀誦して御回向せられぬぞ』と御尋ねあそばされた。すると尊者は『貧道、出息衆緣に涉らず、入息蘊界に居せず、常に是の如くの經を轉ずること百千萬億卷』と御答へになりました。貧道とは道德に貧しき者と云ふので、御自分のことを謙遜して言はれた詞です。衆緣は衆々の所緣の境を指したのです。蘊界とは五蘊十八界のことで、卽ち、我身の眼耳鼻舌身意の六根が、色聲香味觸法の六塵に對して、種々の感覺や意識を起すことであります。凡夫は一切萬境に對して、常に貪慾を起し、瞋恚を生じ、愚癡に欲

て、一々詮索して御覽なさい。眼には眼の法があり、耳には耳の法があり、手は手、足は足、各々其の法の妙用を現はして、見んと欲せば見、聞かんと欲せば聞き、執らんと要せば執り、行かんと要せば行き、實に自由自在、妙用不可思議の法ではありませんか。這裡、何處に煩惱妄想などと云ふ惡戯物がありませうぞ。眼の中にありますか耳の中にありますか、手の先でせうか足の底でせうか、『鳴子をば己が羽風に任せつゝこゝろとさわぐ村雀かな』で、本來解脱の法中に在りながら、唯一念分別の羽風の爲めに、我と我手で地獄・餓鬼・畜生の三惡道を作つて居る。『跡もなき雲に爭ふ心こそなか〳〵月の障りなりけれ』、雲に跡なきことを知りなば、ソツクリ其の儘の大經卷であります。次に僧は和合衆と譯し、數多の人が集て同一の心を以て同一の道を行ひ、能く和合するより名けたものです。我等の身體の上で申しても、眼は眼、耳は耳、手は手、足は足と、各々別々の法を守つてをるなれども、つまりは一身の運用で、手は足を扶け眼は耳を助けて、互に犯すことも無く爭ふことも無い。詩經に『天烝民を生ず、物あれば則あり』とあるが如く、天地間の萬物は、皆な夫々の法則があつて、古も今も少しも變りは無いが、其の萬物が互に調和して相反かぬ。天地同根萬物一體で、とゞのつまりは同一の眞理に歸するのである。之を一體三寶の功德と云ふのであります。

然らば佛法僧の三寶と云ふも、全く宇宙の眞理の本體と、實相と、妙用との、三大功德に名けた者であります。而して其の三大功德は外に在るのではなく、つまり我等御互の心の上の妙德である。さすれば我

とも爲りまする。月には自から、玲瓏玉の様な皎潔たる本體と、其の本體より發する光明の相と、一切の暗を破ぶる光の力用との三德が具つてをる。又、鏡には、清淨潔白一塵の垢なき實體と、普く一切の萬象を照映する靈光と、萬象を映すと雖も萬象卽一體にして少も分け隔の無き妙用との三德が備つてをる。此の體・相・用の三大德は終に一體であるから、一體三寶と云うたものです。

之を戒文には『阿耨多羅三藐三菩提是を佛寶と名く、清淨離塵は則ち法寶、和合功德は是れ僧寶』と御示し下されてある。阿耨多羅三藐三菩提とは梵語で、此方の語に譯すれば無上正眞道となる。卽ち、此の上も無い正しき道と云ふことで、正しく宇宙の眞理を指したのである。此の眞理を明らめて眞理と同化せられたのが佛樣です。其の眞理は何處に在るかと云ふに、我等の心の中にチヤンと存在して居る。否な天地法界はソツクリ其の儘眞理ならざるは無い。これぞ正眞の佛陀である。此の佛陀には、法爾として、清淨離塵な、一切の惡業煩惱の塵を離れた解脫自在の妙德がある。是れ卽ち法寶である。我等の本心を束縛する惡魔があると思ふは、畢竟、妄想の所爲である。宇宙の眞理を昧ます煩惱ありと執するは遂に是れ顚倒の見である。一切の世界、一切の色心も、盡く佛陀正覺の姿、眞如實相の現はれであるから、柳は綠、花は紅の其の儘、松は直く、棘は曲れる其の儘が、本來解脫の德相、周徧法界の妙法である。彼の東坡居士が『溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや、夜來八萬四千の偈、他日如何が人に擧似せん』と云うたは、此の法寶を發見した時の感を記したのである。試みに我等の身體の上に就

である。其の佛の御說きあそばされた八萬四千の法門が即ち現前の法寶で、舍利弗、目連等の一千二百五十人の常隨の弟子を始め、八萬の大衆は申すに及ばず、三國の高僧知識方は皆な是れ現前の僧寶であります。

次に住持の三寶と云ふは、住持はトヾメタモッと訓んで、現前三寶の功德を、今日の末世に住めて之を持つと云ふ意味です。佛は既に二千九百年前に涅槃の雲に隱れたまうて、今は其の御姿を拜むことも出來ず、且つ親しく佛の御說法を聞き奉ることも、佛の御弟子に遇ふこともならぬ。そこで、佛の御姿を彫像や畫像に製して之を拜するのが住持の佛寶であります。又、佛の說かせられし法門を經文に錄して之を讀誦し解說するのが現前の法寶で、佛弟子の御姿に法りて髮を剃り法衣を着する僧侶たちが住持の僧寶です。併し、眞の信仰を捧げて至心に歸依する時は、彫像や畫像も眞の佛樣と同一の御利益があり、卷物や折本の經典も佛の御說法と少しも變らぬ功德を現はし、末代の僧侶も亦た應分の結緣を結ぶことが出來ます。

それから、一體三寶とは理體の上に現はるゝ無形の功德を云うたものです。我等の一心上には、自づから佛と法と僧との三寶の功德があるのでございます。悲い哉、一切衆生は自己の迷妄に依て之を知らずに居るです。一度、至心懺悔の一念に無始劫來の罪障を消滅して、身も心も淸淨と爲り、恰も雲を離れし月の如く、曇を去りたる鏡の如くなれば、其の時こそは、此の心がソックリ佛とも爲り、法とも爲り、僧

十二、衆苦解脱（修證義第十二節）

若し薄福少徳の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何に況や歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其の歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず、菩提を成就すべし。

此の一節は迷信を誡めて、眞正なる衆苦解脱の法門を御示し下されたのであります。前節に於て申し演べた通り、佛教八萬の法藏も詮じ來れば、佛法僧の三寶に歸依し奉りて三寶の妙功徳を得るの外は無いです。此の三寶には三種の功徳と申して、現前の三寶と、住持の三寶と、一體の三寶との三通りの功徳があります。之をよく〳〵心得て置かねばならぬ。

先づ現前の三寶と云ふは、世の中に事實として現はれた、卽ち歷史上の三寶です。今を距ること二千九百年の往昔、中天竺迦毘羅維國、淨飯大王の御子悉達太子と御生れなされ、十九歲の御時に世を逃れて檀特山に分け上り、難行苦行十二年の後、御年三十歲の十二月八日の曉、明星出現の時、忽然として無上正覺を成じ、遂に釋迦牟尼佛と御成りあそばされ、それより四十九年の其の間、一切衆生の爲めに正法を開示したまひ、八十歲の二月十五日夜半に於て、滅を拘尸那揭羅に示されたのが、正しく現前の佛様

事の成り易くして心の至り難き、但徒らに人を勞することなく、或は誹謗を生じ、反て罪辜に墮せんことを恐る。是故に知識に預るものは、懇ろに至誠を發し、各什福を招かん。宜く毎日盧舍那佛を三拜し、自ら當さに念に存じ、各盧舍那佛を造るべし。もし人一枝の草、一把の土を持ち、助けて像を造らんと請願する者あらば、恣に之を許せ。國郡等の司、此の事に因りて百姓を侵擾し、强て收斂せしむるなかれ。遐邇に布告して朕が意を知らしめよ。（聖武天皇盧舍那佛建立の詔）

○萬法の中最も尊貴なるものは三寶なり。最上勝のものは三寶なり、天帝も喩ふるにたらず、輪王も比せず。（承陽大師）

○總じて三寶の境界を恭敬供養すれば、罪滅び功德を得、また惡趣の業をも消し、人天の果をも感ずることは寶なり。（同）

○おほよそ佛子行道、かならずまづ十方の三寶を敬禮したてまつり、十方の三寶を勸請したてまつりて、そのみまへに燒香散華して、まさに諸行を修するなり。もし歸依三寶の儀、これすなはち古先の勝躅なり、佛祖の古儀なり、未だかつておこなはざるは、これ外道の法なりとしるべし、または天魔の法ならん。しるべし、佛々祖々の法はかならず、そのはじめに歸依三寶の儀軌あり。（同）

に語るべし、三には身を以て之を敬ふべし、四には當に之を戀慕ふべし、五には當に恭敬ひ承事へて度世の事を問ふべし。（六方禮經）

○自ら佛に歸依し奉る、當に願はくば、衆生とゝもに、大道を諦解して佛種を紹隆し奉らん。
自ら法に歸依し奉る、當に願はくは、衆生とゝもに、深く經藏に入りて智慧海の如くならん。
自ら僧に歸依し奉る、當に願はくば、衆生とゝもに、大衆を統理して一切無礙ならしめん。（華嚴經）

○篤く三寶を敬せよ、三寶は佛法僧なり。即ち四生の終歸、萬化の極宗。何れの世、何れの人か、是の法に嚮はざる。人尤惡鮮し、能く敎ふれば乃ち化す。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直くせん。
（聖德太子）

○我れ昔し人君にありければ、萬姓惡を作すもの我が身に歸す、今佛子となつて以て一身善を修し、善く萬姓を利せん。（寛平法皇）

○朕、薄德を以て恭く大位を承け、志兼濟に存し、勤めて人物を撫す。卒土の濱已に仁恕に霑ふと雖も、而も普天の下未だ法恩に洽からず。誠に三寶の威靈に賴て乾坤相泰く、萬代の福業を修め、動植咸な榮えんと欲す。粤に天平十五年歲次十月十五日を以て菩薩の大願を發し、盧舍那佛金銅像一軀を造り奉り、國銅を盡して象を鎔り、大山を削りて以て堂を構へ、廣く法界に及ぼして朕が知識となし、遂に同く利益を蒙らしめ共に菩提に致らんとす。夫れ天下の富を有つ者は朕なり。此の富勢を以て此の尊像を造る

れば三寶恭敬の外は無いです。今や三寶歸依の身となりし我等こそ、幸の中の幸、樂みの中の樂みでありますから、至心懺悔の一時に於て成佛得脱の門を開き、衆生利益の誓願に報恩謝德の行持を營むに付ても、安心の根本たる戒法を相傳し、戒法の源泉たる正信心を發得し、寢ても寤ても三寶歸依の信念相續を怠らぬやう心懸けられたきものでございます。

參考

○三寶の恩とは、衆生を利樂すること不思議にして休息あることなきを云ふ。諸佛身は眞善無漏にして、無數大劫の間、因を修めて證る所なれば、三有の業果永く盡きて餘すこと無く、功德の寶山巍々として一切有情の知る能はざる所、福德甚深にして大海の如く、智慧無碍にして虚空に等しく、光明遍く十方三世を照して、一切衆生煩惱業障都て覺知せず、苦海に沈淪みて生死窮りなきも、三寶世に出でゝ大船師となりて、能く愛流を截ち、彼岸に超昇らしむ。諸有智者、悉く皆瞻仰ぎ奉る。(心地觀經)

○我れ初め道を成じて、孰れを敬すべく讃すべきかを觀しに、法に過ぎたるは無し。法は能く一切の賢聖を成立す。(般若經)

○沙門道士に事ふるには、當に五事を用ふべし。一には善心を以て之に向ふべし、二には好言を擇びて與

だ』と、毎日の様に、感慨胸に溢れて、獨りクヨ〳〵して居つたさうです。或日、岩崎家の前で、亦もや何時もの様な感慨を起したが、不圖思ひ直して、『併し、岩崎氏が如何ほど大長者たりとも、百年の壽命を保つことは覺つかない。今にも一息々が切た時はどうであらう、此の立派な屋敷も、山の如き財産も、盡く他の有と爲て、自分の身には五厘銅貨一箇も付けることは出來ぬ。して見れば、浮世の財産も、一代の榮華も、全く暫時の夢に過ぎぬ。ア、思へば賴み少ないものではある。今我は忝くも佛の敎を信仰して、朝な夕なに佛の御名を稱へて居るが、此の念佛の功德は盡未來際に通じて、無價の功德である。若し岩崎の御主人が此處へ來て、汝に我が財産を殘らず遣はすから、汝の念佛をソックリ我に與へよと云はれたなら、何んと答へたものであらう。暫時の夢の様な賴み少ない財産と、永久不滅の寶たる念佛との交換が出來るであらうか。凡夫根性から云へば岩崎家の財産が貴とからうが、宗敎的信念の上から見れば念佛に代られぬではあるまいか。ア、そうぢや〳〵、とても〳〵取換ることはならぬ。實に我は岩崎家の財産よりも貴とい念佛の寶を持ちながら、今が今まで不平だら〳〵でをりしことの耻かしさよ』と、始て玆に明らめが付た。それからと云ふものは、分に安んじ位を守り、毎日〳〵喜び樂んで家業を勵まれたと云ふ御話があります。我等お互も亦た、佛の敎に順つて生々世々の大功德を得んと思ひなば、財産よりも名譽よりも貴きものは恭敬佛法僧である。

次の御文には『西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり』とありますれば、佛敎八萬の法門も詮じ來

れに歸依し奉りますれば、三寶加護の功德力に依て、此の世に在りては、心も自から快樂に進み、身も自から安穩を得、家も齊まり國も治まり、人をも救ひ世をも益することが出來る。又、未來に至つては、生々に惡道の苦患を免かれ、常に佛の御傍に親近し奉り、衆生濟度の大願輪に乘じて報恩謝德の行持を全うすることが出來る。箇樣に今生後世を一貫して、不自由も無ければ苦惱も無き、大安心、大自在の境界となりまするこことは、全く佛法僧の功德に依るの外は無いです。故に三つの寶と稱するのであります。かう云ふ有り難き御本尊であるから、此の世一代などと云ふ薄弱なる志でなく、生き易り死に易り、幾百萬劫の後までも、三寶を供養し奉り敬ひ奉らんとの、深き〱信仰を具へねばなりませぬ。夫故、次の御文には『生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべし』と仰せられたのであります。

東京日本橋通一丁目に、砂糖漬物商をして居る田川柳助と申す人があります。世に稀なる佛教信心者です。下谷に漬物製造所があるので、毎日其處へ通うて、怠りなく商業に勉强して居つたが、途中、湯島切通に岩崎彌之助君の別邸があり、日本一の富豪家と稱せらるるだけあつて、其の構の壯大なる御大名屋敷も及ばぬほどである。柳助は其の前を通る度毎に振ひ付くほど羨ましく『ア、人間の幸不幸は斯ばかり違ふものか知らん。』我等は夜の目も眠ずに、齷齪と働いて居るが、何時まで歷ても本の木阿彌だ。岩崎氏の如きは一代にして是の如き大富豪となられた。どうかして、一日なりとも此の樣な身分に成て見たいもの

歸依の土臺であります。至心懺悔の一念に罪障消滅の大利益に預かりし者は、言にも述べ盡されぬほどに佛の御慈悲が身に浸みわたるものです。而して、懺悔の次には必ず恭敬佛法僧の信念を生ずるものである。故に、贊題の初に『次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし』と仰せ下されたのであります。佛法僧は、佛樣と、佛樣の御說きあそばされた法と、其の法を傳へて我等を濟度せらるゝ僧とであります。眞の道は宇宙の間に充ち滿ちてをるけれども、佛樣が此の世に御出現あそばさねば其の道が現はれませぬ。佛樣の御修行は唯だ此の道を御悟りなさるが爲めである。さりながら、一代五十年の御說法が無ければ、佛の御悟を我等に傳へたまふことは出來ぬ。又、御說法ありとも、舍利弗、目連等を始めとして八萬四千の御弟子達や、三國傳法の祖師方が其の御敎を實行したればこそ、今日に至るまで相續して、我々お互が疊の上に坐りながら、三千年前の御敎を易々と戴くことが出來るのであります。故に、佛ありと雖も法なければ道を傳ふること能はず、法ありと雖も僧なければ其の功德を現はすこと能はず、僧は法に依て生れ法は佛に依つて出づ、此の三のものは一を缺いてもならぬ。三寶即一體であつて、これぞ、世間、出世間に於て比ひ無き寶であるから、三寶と云うたのです。金錢と云ふ寶がありさへすれば、見ず知らずの土地に參らうとも少しも不自由は無い。汽車にも乘れるし、宿屋にも泊れるし、多くの人をも手足のやうに使ふことも出來る。冬になつても寒さを免がれ、夏になつても暑さを避け、美酒佳肴も目前に陳なり、綾羅錦繡も其の身を纏ふ、是れ皆な寶の光りです。佛法僧も亦た是の如く、眞實、淸淨の信念を捧げて之

だと思ふ志を立てねばならぬ、緊要の掟であります。我が宗門に於て相傳する所の御戒法は、正しく此の通戒に當るのである。兎角、我等凡夫は、必ず守らねばならぬことが守れんで困る。忠義と云ひ孝行と云ふも、必ず守らねばならぬ道徳の主腦であるが、眞實之を守ると云ふ人は却々少ないです。それと同じことで、今身より佛身に至るまで、是非持たねばならず行なはねばならぬ御戒法なれど、却々それを行ひ持つことは出來ぬから、佛樣に對する誓を堅固にして平生の心懸を確かりせねばならぬのである。さればと云うて、別段、力のいることでもなければ、學問や金錢を要する業でもない。唯だ誓て之を守らうとの誠意がありさへすれば、何んな人にもきつと守られるのです。而して、其の御戒法は總體で十六箇條しか無い。即ち三歸戒と三聚淨戒と十重禁戒とであります。此の事は追々席を重ねて申し上ぐることゝ致します。

先づ初めの三箇條は、三歸戒と申して、佛・法・僧の三寶に歸依せよとの御戒法です。之を飜邪歸正の戒と申します。即ち、今までの邪見の心を飜へして正しき道に歸依すると云ふ意味です。此の賛題では、それを『恭敬佛法僧』と御示し下されてありますが、此の恭敬の二字が最も大切であります。恭敬の二字は、共にツヽシムとも、ウヤマフとも訓じまして、つまり三寶を大切にして、此の外に本尊樣と賴み參らすべきものは無いと徹底思ひ定めて、心の底から敬ひ尊ぶことであります。此の敬ひ尊ぶ心が起らねば、身をも命をも惜まぬと云ふほどの深き信仰は生ぜぬものです。して見れば、恭敬するのは正しく信仰

三世諸佛の御仲間入りがされるのでございます。箇様に佛の御戒法は、我等衆生をして一足飛びに成佛安心を決定せしむる妙法であるから、『衆生佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る』と仰せられたのである。故に、此の御戒法こそ實に成佛の根源、安心の基礎であります。

我が宗門の血脈には『佛戒は宗門の一大事因緣なり』とも御記し下されてあるのでございます。尤も、佛の御戒法には、小乘の戒法もあれば大乘の戒法もあり、永久の掟もあれば一時の禁制もあつて、一様ではない。世の中には、憲法の如き百世の後にも變改することの出來ぬ法典もあれば、また一時限りの規則や、年々に改正する法律があるやうなものである。夫故、御戒法の中には、十重四十八輕戒、二百五十戒、三百五十戒、五百戒と云ふやうな、非常に緻密な掟もあつて、其の箇條を心得るさへ並々の人には難かしい程である。況てや、之を守ることの困難なるは申すまでも無い。淨土眞宗などで『在家止住のやから、一生造惡の輩、いかで戒法を受持し奉ることを得べき。己れの力を以て成佛せんと思はゞ、百年河清を待つと一般である。先づ我が身のあさましく罪の深き其の儘を、佛の御慈悲に御任せまうして、諸々の雜行雜修の心をさしをけよ』と敎ゆるも、之れが爲めであります。併し、御戒法には別戒と通戒との二様あることを知らねばなりませぬ。二百五十戒、五百戒などは皆な別戒と申して、特別に御定めの御戒法で、是れはつまり專門家の守るべき掟であります。通戒は、出家在家、老若男女に通じての御戒法で、苟も佛の敎を信ずるほどの者は必ず守らねばならず、縦や、十分に守れんでも、是非守りたいもの

十一、恭敬三寶（修證義第十一節）

次には深く佛法僧の三寶を敬ひたてまつるべし、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

これからは愈々、修證義の第三章なる、受戒入位の法門の御話になります。受戒入位とは、戒法を受けて佛の位に入ると云ふことで、梵網經の『衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る』との御文に據て名けられたのであります。戒はイマシメと訓み、防非止惡の義と釋してあります。釋尊が我等衆生の爲めに、諸の非を防ぎ諸の惡を止むる所の掟を授けられたのが戒法で、卽ち佛敎の法律である。何事でも法に依らねば其の德の現はれぬものであります。軌道があり機關車があつても、法に依て運轉せざれば一里の道も走ることはならぬ。反物があり糸針があつても、法に依て裁縫せざれば襦袢一枚すら着ることは出來ぬ。どんな愚か者でも、差金と云ふ法に依りますれば、一分一釐も違はぬ樣に測量がされます。電話機と云ふ法に依りますれば、理學の心得の無い者でも、幾百里を隔つた人と自在に話がされます。是の如く法に依る時は愚者も其の功を現はし、法に依らざる時は智者も其の德を失ふものである。成佛得脫の法門も之れと同じ譯柄で、佛の御戒法を受け奉れば、愚夫愚婦と雖も直ちに佛果菩提を成就して、卽座に

○塔をつみ堂を造るも人なげき懺悔にまさる功德やはある。（源實朝）
○なをからぬ心をかくす我かげをいとはで照らす月ぞはづかし。（太田道灌）
○地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩何にならうとまゝな一念。（古人）

○善の泉は心中にあり、汝努めて穿たは、滔々として湧き出でん。(アウレリアス)

○心に物ある時は心せまく體窮屈なり、物なき時は心廣く體ゆたかなり。心に我慢ある時は愛敬を失ふ、我慢なき時は愛敬そなはる。心に欲なき時は義を思ふ、欲ある時は義を思はず。心に飾りある時は僞を思ふ、飾りなき時は僞りなし。心に驕りある時は人をうらむ、驕りなき時は人を敬ふ。心に私ある時は人を疑ふ、わたくし無き時は疑ひ無し。心にあやまりある時は人を恐る、誤り無き時はおそるゝことなし。心に邪見ある時は人をそこなふ、直なる時はそこなはず。心に怒りある時は言葉はげし、怒無き時は言葉やはらかなり。心にむさぼりある時は人に諂ふ、貪り無き時は人に諂はず、心に堪忍なき時は物をそこなふ、堪忍ある時は物とゝのふ。心に愁ひなき時は悔みなし、愁ひある時は悔み多し。心に自慢ある時は人の善を知らず、自慢無き時は人の善を知る。心に迷ひある時は人を咎む、迷ひ無き時は咎むることなし。心賤しき時は願ひ多し、欲あらずんば願ひ無し。心に誠ある時は分に安んず、誠無き時は分に安んぜず。(徳川家宣)

○夫れ人の病は瞞心より大なるは無し。人の浮氣躁念は千狀万態也、狂ふが如く醉ふが如し、病は悉く是れ瞞心の祟りを爲すを知る。是を以て心術の要は瞞を降し、虛を致すより先きなるは無し。(中江藤樹)

○能く學ぶ者は人の非を咎むるに暇あらず、日々に己が非を見ること精くなるものなり。(同)

○念慮一毫差、應酬千里訛、人心宜レ主レ靜、明月不レ沈レ波。(同)

一念に七通りの心得も具はる譯であるから、何とぞ三業を捧げて佛前に懺悔し、本證妙修の功德海に入り、深くも深く佛の恩德を感謝して、急ぎて受戒入位の本懷を遂げ、即心是佛の大功德を圓成せられんことを望みます。

參　考

○若し能く如法に懺悔すれば、あらゆる煩惱悉く皆除くこと、猶ほ劫火の世間を壞りて、須彌並に大海を燒き盡すが如けん。(心地觀經)

○懺悔は能く煩惱の薪を燒き、懺悔は能く天路に往生す、懺悔は能く四禪の樂を得、懺悔は摩尼寶珠を雨らし、懺悔は能く金剛壽を延ばし、懺悔は能く常樂の宮に入り、懺悔は能く三界の獄を出で、懺悔は能く菩提の華を開き、懺悔は佛の大圓鏡を得、懺悔は能く寶所に至る。(同)

○佛に對ひて偕りを作すは、盲人の自ら視えざるを以て、人も己れが惡事を作せるを見ざるべしと思ふに同じ。(涅槃經)

○一切業障の海、皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を念ぜよ。衆罪は霜露の如く、慧日能く消除す。(觀普賢經)

明日は扇子のありたけを賣盡して借金の片を付けるに依て、殘らずの扇子を店先にならべよ』と命じて、寺に戻られ、翌日は早天に、辨當持參で扇子屋に行き『一休早書の扇子今日一日賣渡す者也』と、筆太に書いたる大札を表に貼出し、それから店先に坐り込で、當時町奉行たりし蜷川新左衞門に墨を磨らせて、やたら書に書いた。サア忽ちの間に市內一般の大評判となり、吾も〳〵と買人が寄り集まり、一日の中に數百兩の金が出來た。夕刻に至ると『サアこれで借金の始末が付たらう。婿殿の役目おしまい〳〵』と云うて寺に歸られた。扇子屋は、思ひも寄らぬ禪師の御助で、借金も片付き、おまけに幾分の資本にまでありついたと云ふ御話がある。今でも京都には、其の時の早書の扇子を所持してをる人があると申すことです。百に三本位のやくざ扇子でも、名家の筆が入れば、忽ちに百層倍の價値となつて、首も廻らぬ借金も直さま片付いてしまふ。造惡不善の凡夫でも、法界平等なる六大法身はチヤンと具へてをる。一度佛の光明に接觸して、至心懺悔の筆が入れば、一足飛に三世諸佛の御仲間入り、罪障無量の借金も根本的に銷殞して、滅罪清淨の身と爲ります。

　阿毘達磨や慈悲水懺には懺悔に七通りの心得あることを示してある。一には大慚愧の心を生ずること、二には深く未來の果報を恐るゝこと、三には煩惱と業苦との身を厭ふこと、四には衆生の苦を救はんとの菩提心を發すこと、五には怨親平等の念に住すること、六には佛の御恩報謝を念ずること、七には罪の本性は元と空にして實體なきことを觀ずることであります。併し、『我昔所造』と至心に唱ふる時、其の

『尺八の竹に變りは無けれども一つは穴のくり方による』と云ふ歌を讀んだ。傍に居た塗師職人が之を聞くと、忽ち『輪島なる漆に變り無けれども一つは質のくり方による』とやつた。處が、一人の僧が、扨扨面白きことかな、私も御相手せんとて『極樂の道に變りは無けれども一つは珠數のくり方による』と詠んだと申すことです。我等とてもその通り、佛に成るのも鬼になるのも心の置所一つである。懺悔すれば則ち安樂なり、懺悔せざれば罪益々深し、懺悔の質のくり方と、心の珠數のくり方に、よく〱注意せねばならぬ。千載集にも『朝夕に三世の佛につかふればこゝろを洗ふ山川のみづ』とある通り、佛の御慈悲を念ずる時は、忽ち我心の中に佛の光明が宿る。三世諸佛を禮拜する時は、忽ち我が手本に諸佛の功徳が聚まる。『はかなくぞ三世の佛と思ひける我身一つにありと知らずで』である。

有名なる紫野大德寺の一休禪師と不斷親しく交際せる、京都の御影堂と云へる扇子屋の主人が、或日、悄々として禪師の處に來り、涙を流して『私も俄に御別れ申さねばならぬ事が出來て、御暇乞に參りました』と申ますから『如何なる譯ぞ』と御尋になると『借金の爲め詮方なし』との話ゆゑ、殊に氣の毒に思召し『汝に子供があるはず、何とか働の付くことならん』と仰せられしに『子供はありますが、僅か四歳になる娘一人』とのこと、禪師は『然らば、予は年來知己の間柄ぢやに依て、其の四歳の娘の聟となつて、汝を助けてやらう。明日とも言はず、今晩直さまの婿入ぢや。善は急げ、早く〱』と追立られ、扇子屋は烟に捲れて夢中で歸つた。禪師は其の晩、頰冠の體で御影堂に行き『サア予は此の家の婿ぢや。

作りつゝあるのである。我等は此の様に耻かしき汚はしき身の上であるから、それをば、只今と云ふ只今こそ、一切合切、盡く懺悔し奉りますと云ふ意味であります。

次に『此の如く懺悔すれば必らず佛祖の冥助あるなり』とありまして、心の中に積み重つてをる罪惡を懺悔し盡して、胸中無一物となつてしまへば、自づと無我無念の奇麗な心と爲る。此の時こそ、佛様や祖師方の御慈悲の月影が、冥助と云うて、人知れず冥々の間に、我等の心の水底に輝き渉つて、其の御助を蒙むりまする。それには、我等の三業も亦た、裏表なく淨らかでなければならぬから『心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり』と仰せられたのである。即ち、心念とは眞心を捧げて、己れの罪過の最と深きこと、佛の御慈悲の廣大なることを念ずるのである。身儀とは、身を端うして掌を合せ、懺悔の儀式を正しく守ること、發露白佛とは、口業の上で無始劫來の罪過をば發き露し、少しも包み藏すこと無く、殘らず打まけて佛様に白し上げるのです。かくする時は、大集經にも『百年の垢衣も一日に於て鮮淨ならしむるが如し、是の如く百年千劫中集むる所の諸々の不善業は、佛法の力を以ての故に、善順思惟せば一日一時に於て盡く能く消滅せしむべし』とあるが如く、發露懺悔の功德力を以て、罪過の根本が、銷殞、即ち金の鑠るが如く氷の融るが如く、罪惡の塊などは兎の毛で突たほども無いやうに、綺麗サツパリとなつてしまふのである。

昔、淀川の乘合船で、多くの旅人が徒然の餘り、思ひ〳〵の話をしてをつたが、尺八を持た虚無僧が

て居る。而して、五日目の夜は、懺悔道場に入て戒師の前で懺悔の式を行ひます。般舟讃に『念念稱名常懺悔』と云うて、一心不亂に佛を念じ、口には佛名を唱へ、身には禮拜を行ひ、三業一致して佛を供養する時は、其の行願に依て自ら罪障消滅の功德が得らるゝからである。斯く種々の法則もありまするが、我宗正傳の儀規文には『二儀兩懺ありと雖も先佛の承受したまふ所の懺悔の文あり、罪障悉く消滅す』とありまして、大乘、小乘等夫々の儀式や、事の懺悔、理の懺悔などの區別があらうとも、それこれに拘はらず、唯々三業一體になつて佛祖傳來の懺悔の文を唱へ奉れば、罪障消滅は疑ひ無いぞとの御定めである。其の懺悔の文と云ふのは、三世諸佛御相傳の文と稱して、華厳經の普賢行願品に出て居ります。卽ち、只今賛題に御示し下されてある、我昔所造云云といふ七言四句の偈文であります。

抑も、我等お互が自ら犯せる罪過の中で、記憶してをるものは百千萬分の一だも無いから、とても一々之を白狀して、人間に懺悔することなどは出來やうはずがない。夫故に、此の偈文を唱へて無始劫來の罪障を殘らず懺悔するのである。此の文を和譯しますれば『我が昔し造る所の諸の惡業は、皆な無始の貪瞋癡に由る、身口意に從て生ずる所なり、一切我れ今ま皆な懺悔したてまつる』と讀みます。卽ち、我等が昔から漸々に造りし所の諸の惡しき罪業は、皆な始めも知れぬ過去の過去際より起し來つた、貪（ムサボリ）と瞋（イカリ）と癡と云うて物の道理に迷ふことと、此の三毒煩惱が本となり、之に由て身と口と意との三業に惡作用を起し、種々の罪過を生じたのである。今日とても、やはり三業の上に此の罪過を

十、罪根銷殞（修證義第十節）

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔、此の如く懺悔すれば必らず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

懺悔と申す法門は、眞實、佛法中の人と爲るべき入口であつて、最も大切であるから、古來、種々の行法儀式がございます。懺法と稱する法要も一種の懺悔式で、歎佛會なども、やはり懺悔が付帶してある。又、今より千有餘年以前、淳和天皇の天長七年十二月に、宮中に於て三千佛名會と云ふ法要を行はれた。これは過去の千佛、現在の千佛、未來の千佛、即ち三世の諸佛にて三千の佛がある。其の佛の御名を唱へて、一佛毎に御拜を一拜づゝ致して、一年中の罪過を懺悔し、身口意の三業を淨らかにして新き年を迎ふると云ふ意味なのである。天子樣は特に、百官百僚より庶民子女に至るまで、佛名を唱へて懺悔せよとの勅令を下されたので、幾ど六百年間も、國內一般に佛名會が行はれた。慈鎭和尚が『三世の佛みちびく御名を聲にたてゝ此の一年の罪ぞきえぬる』と詠だのも佛名會の事です。三千佛の御名は諸佛集功德華經に出て居ります。

我宗では授戒會と云ふ七日間の法要があつて、三世諸佛の御名を唱へて御拜をするのが第一の加行と爲

解おろかなりとして佛法を會すべからずとおもふことなかれ、いはんや人みな般若の正種ゆたかなり。(同)

○一誠は以て萬僞を消すべく、一敬は以て千邪に敵するに足る。(曹靖公修)

○山中の賊は討ち易く、心中の賊は討ち難し。(王陽明)

○欲淡ければ心清く、心清ければ理見はる。(薛子)

○凡夫より聖人に至るの眞志實學は、たゞ愼獨の工夫にあり。(熊澤蕃山)

○欲を除くは外物の上にあらず、一念の微の上にあり。(春日潛庵)

○世の中は皆佛なりおしなべていづれのものとわくぞはかなき。(華山院)

○小夜ふけて蓮の浮葉の露の上にたまと見るまでやどる月かげ。(源實朝)

○我が心池水にこそ似たりけれ濁りすむこと定めなくして。(源空上人)

○尋ね入る深山の奥のさとぞもとわが住みなれし都なりけり。(古人)

○我が心心そのまゝいきぼとけ波をはなれて水のあらばや。(古人)

○思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道を知るなれ。(伊藤仁齋)

況てや、佛の御慈悲にすがり御救を戴く身は、幾億萬劫、生死の罪も消え失せて、一足飛に受戒入位の樂土に入るのでありますから、喜の上にも喜んで、至心懺悔し、釋迦牟尼佛の御名號を唱念し奉らねばならぬ。

參考

○佛言はく、我れ世に出現するは、猶ほ大雲の一切を潤すが如く、枯渇の衆生をして、皆苦を離れしめ、安穩の樂を得せしめんが爲めなり。（法華經）

○大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり。（涅槃經）

○人の手なければ寶の山に至ると雖も、終に所得無きが如く、信の手無きものは、三寶に逢ふと雖も所得無し。（心地觀經）

○諸佛の大悟は衆生のために大悟す、衆生の大悟は諸佛の大悟を大悟す。（承陽大師）

○おほよそ諸佛の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあらず。いはんや不信劣智のしることを得んや、たゞ正信の大機のみよくいることをうるなり、不信の人はたとひをしふとも入るべきことかたし。（同）

○人まさに正信修行すれば、利鈍をわかずひとしく得道するなり。わが朝は仁智のくににあらず、人に知

二月頃、元と田所町にて番頭を勤めたりし世話吉藏と云ふ者が、乞食同様な姿をして尋ねて來た。親切なる與兵衛は氣の毒に思ひ、叮嚀に取扱ひ『君は何故斯く零落しや』と尋ねしに、吉藏涙を流し『私は主家を退てから愛宕下邊に道具商を始めたが、不幸にも火難に遇ひ、終には車夫とまで成り下り、加之に惡瘡が發し、たうとう非人の群に入りました。是れ皆自業自得で、誰を恨まんやうもありませぬ』と云うて、さめぐ〳〵と泣いた。與兵衛は色々に慰めて、お金と着物とを與へて返し、其の後も度々物品を惠んださうです。四月の初めに使の者が來て『吉藏、大病危篤に付、是非お目に懸りたい』との賴ゆゑ、直さま見舞に參りて、種々に力を付けて遣りましたれば、吉藏は嬉し涙にくれ、息も絶々なる口を開て『扨て私は、迚も叶はぬ大病なれど、今はの際に、折入て貴方に御詫をせねばなりませぬ。先年、貴下が日本橋に奉公中、金を落して困られたことがあつた。然るに其の金は落したのではなく、實は此の吉藏めが盜んだのであります。貴下が急いでお使に行なされた後に、ふと目に付いた風呂布包、披て見れば大切なるお金です。幸あたりに人も無く、圖らず起つた惡心に取返しの付ぬ罪を作りました。其の罪業の報にて、此の世ですらも是の如し。況てや未來は如何ぞや、思ひ遣るだに身の毛もよだつ、胸三寸の切なさは、此の身ながらの劒の山、何卒不便と思召し、御恕しなされて下され』と泣く〳〵懺悔を致しました。與兵衛は、且つ驚き、且つ感じ、『ようこそ懺悔せられた。今までの罪過は殘らず勘辨して上るから安心するがいゝ』との情けの語に、吉藏は始て喜びの顏色を現はし、ニツコリ笑うて其の儘息を引取りましたと云ふ事です。

なんでも盛られぬ物はない。無始劫來の罪障は泥や芥のやうなものです。之を掃除するのが卽ち懺悔の法門である。又、凡夫の我等は澁柿のやうなもので、我見我慢の澁々した境界は口元へもよせ付られぬが、併し、此の澁の儘、よく〳〵太陽の光を被むり、空氣の惠を受けさへすれば、其の澁がソツクリ甘くなつて老人の口にも小供の口にも適當な、怨親平等、自他圓通の味が現はれます。佛の御慈悲は卽ち太陽の光である。懺悔の法門は空氣の惠です。貪欲・瞋恚・愚痴の三毒も忽ち法身・般若・解脱の三德と變ずるのである。『あしきとて只一筋に捨つるなよ澁柿を見よ甘干となる』、諸君は是非共懺悔の法門に入て早く當來の佛祖とならねばなりませぬ。

東京深川區八名川町に關口與兵衞と云ふ吳服商がある。此の人幼年の頃、日本橋區用所町の某吳服店に奉公して、實直に勤めて居つた。然るに、明治十年、與兵衞が十七歲の時、主人より金三十五圓を預つて餘所にお使に行ました處、不幸にも道に落したものか其の金を失うた。サア大變なことをした、と驚き騷いでも仕方がない。止むを得ず、泣く〳〵八丁堀北島町に居る父親の處に至て相談に及んだ。父も貧しき者なれど、捨置くべきにあらねば、漸のことで十五圓だけを才覺して主人に御詫をした。主人は篤と將來を誡めて、其の過失を恕してくれた。其の時、與兵衞は『ア、私一人の油斷から、父上には借金をさせ御主人には損耗をかけた。誠に濟まぬことを致した。おのれやれ此の後は倍增の勉强を爲さん』と決心して辛抱したので、禍却て福となり。遂に獨立して吳服商を營むやうになつた。然るに、明治二十八年の

最と深き惡業の果を、解脱というて、身を縛れる繩目の解けた如く、籠に鎖されし鳥の圈を脫て空中に舞出しが如く、すつかり一切の束縛を離れて、佛の道を學ぶ上に少も障りの無いやうにして下さる事をお願ひ致します。又『其の功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸せらん。哀みを我れに分布すべし』で、其の大慈大悲の恩德に依て罪障消滅と云ふ大功德を得るの法門は、私一人の爲めではなく、衆生界無邊なるが故に、佛の慈悲光明も亦た無邊であり、『無盡法界に充滿彌綸』とて、限りも無い宇宙間に、所有十方の世界にミチワタリ、天地世界の際までも御照しなさらぬ隈とても無いので、其の廣大なる御哀みの一分、大慈悲光明の一片を、私に御分なされ、御授下さる事を是非々々お願ひ申します。

『佛祖の往昔は我等なり、吾等が當來は佛祖ならん』で、佛樣や祖師方も、まだ發心修行遊ばされぬ往昔は、矢張、我等と同じい凡夫の御身と承はる。されば、如何に罪障深き我等でも、一念懺悔の功德力に依て、當來は疑も無く佛とも祖師とも成ることが出來るであらう。龍牙禪師は『昔生未だ了せずんば今ま須く了ずべし、此の生累生の身を度取せよ、古佛未だ悟らざれば今者に同じ、悟り了れば今人も卽ち古人ならん』と仰せられた、彼の平の清盛の愛を受け、後に至つて佛御前に其の寵を奪はれしと云ふ祇王と申す女ですら『佛も本は凡夫なり、我等も終には佛なり、同じく佛性具せる身の、隔つるのみこそ悲しけれ』と歌うたとある。何んな立派な茶碗でも、泥だらけや芥だらけでは用ゐられぬ。これを奇麗に洗へば、何んな御客の前にも出せます。我等の本性は、七寶燒にも勝つた立派な茶碗のやうなもので、智慧の水、慈悲の湯、

始を盡すことの出來ぬほど三界六道に往來してゐるのである。其の生々世々の間に造つた罪過は、一として我等の記憶に存するものはない。我等は實に自ら犯せる罪過を自ら知らずにをるのである。前生は扨置き、今生の中でも、幼稚の時の事はまるつきり覺えてゐぬ。成人の後とても、大きな事は記憶にも存しやうが、細い事は全然忘れてをるではありませんか。『盗みせず人殺さぬをよきとして身に過なしと言ふぞはかなき』である。されば、よく／＼因果の大法と生死の始終とを覺りて、我身を襲ふ所の一切の苦は、皆な過去の罪障より來ると知り、我心の中に、朝から晩まで動く所のものは、多くは煩惱妄念の惡魔なることを明らめ、『人心鏡に映るものならばさこそ姿の醜くかるらん』とある歌の通りで、思へば思ふほど耻かしくも亦淺ましき身の上ぞと恐れ愼みて、心底から佛の御前に御救を願ふのが佛教に於ける懺悔であります。

故に賛題の御文には懺悔の大旨を御示しあそばされて『願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて、障道の因緣ありとも云々』と仰せられたのである。で、佛の御前に向つて御願申す事柄は斯うである。我身の上は、設や過去に於て、生々世々に造りし惡業が澤山に積み重なりて、其の惡業こそ、佛に變らぬ本心の光を昧まし、天地の公道、成佛の至道を障ゆるの惡因緣と爲たのであるけれども、『佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我れを憐みて業果を解脱せしめ、學道障り無からしめ』て、佛道修行の功德に因つて無上菩提の道を得たまひし、過去現在の諸の佛樣や祖師方は、大慈大悲の眸を垂れさせられ、我等凡夫を憐んで、

九、當來佛祖（修證義第九節）

其の大旨は願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて、障道の因緣ありとも佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我れを憐みて業累を解脫せしめ、學道障り無からしめ、其の功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸せらん、哀みを我れに分布すべし、佛祖の往昔は我等なり、吾等が當來は佛祖ならん。

此の贊題は、懺悔の章の第三段目の御文であつて、懺悔する者の心得方を御示し下されたのであります。懺悔と云ふは、一口に申せば、既往の罪過を悔い改めて深く自ら將來の行爲を警しむることですから自から倫理的、卽ち世間的懺悔と、宗敎的懺悔との二樣があります。彼の玉耶經に『人誰か過なからん、過て能く改むれば善之れより大なるは無し』と云ひ、朱子が『善に遷るは當に風の速なるが如くなるべし、過を改むるは當に雷の猛きが如くなるべし』と云ひし如きは、倫理的懺悔です。佛は『世に二人の勇士がある。第一は曾て罪惡を犯さゞる者、第二は誤て犯すこともあるも能く懺悔して改むる者、これが大丈夫の人である』と仰せられてある、聊でも過があつたならば、深くも慚ぢ愧ぢて、速に之を改むる心があれば、それこそ實に良心の最も健全なる人であつて、道德界の勇士です。

併し、佛敎の上より見ますれば、我等は現在一世のみの身ではなく、前生もあり前々生もありて、其の

○うつし見よむかふ心の水鏡仰ぐも俯すも身よりなす影。（中江藤樹）

○壁に耳石のもの云ふ世の中に人知らじとてあしきことすな。（北條時賴）

○磨き得て國の寶となるものは人の心のたまにぞありける。（月照上人）

○濁り無き心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる。（承陽大師）

○鳥さへもおのがねぐらの木をゑらむ道の正しき人につかへよ。（北條時賴）

○我心鏡にうつるものならばさてこそかげの見にくからめ。（同人）

に念じて波羅蜜を修行す。四には僧能く自利々他を修行すと信じ、常に樂んで諸の菩薩衆に親近して、如實の行を求め學ぶ。（起信論）

○おほよそ信現成のところは、佛祖現成のところなり。（承陽大師）

○佛果位にあらざれば、信現成あらず。（同人）

○佛法に證入すること、かならずしも人天の世智をもて出世の舟航とするにあらず。佛在世にも、てまりによりて四果を證し、袈裟をかけ、大道をあきらめし、ともに愚暗のやから痴狂の畜類なり。たゞし正信のたすくるところ、まとひをはなるゝみちあり。また痴老の比丘默坐せしをみて、設齋の信女さとりをひらきし、これ智によらず、文によらず、ことばをまたず、かたりをまたず、たゞしこれ正信にたすけられたるなり。（承陽大師）

○信は是れ義の本なり、事毎に信あれ。其れ善惡成敗は要する所信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらん。君臣信なくんば萬事悉く敗る。（聖德太子）

○能く生を尊ぶものは、富貴と雖も養ひを以て身を傷らず、貧賤と雖も利を以て形ちを累はさず。（莊子）

○德は才の主、才は德の奴、才有て德無きは家に主無くして、奴の事を用ゐるが如し。（洪自誠）

○敵雖二多勢一不レ可レ驚、依二一善言一爲二味方一。味方雖レ多不レ可レ賴、依二一惡言一爲二怨敵一。刀雖レ利不レ可レ悅、心亂則害二其身一。刀雖レ鈍不レ可レ恨、心正則服二大敵一。（楠木正成）

故に、我等お互は正法聴受の因縁を喜び、誠心を專らにして深くも佛前に懺悔し奉り、餘念を雜へず信心を凝す時は、造悪不善の身ながらも其の儘滅罪淸淨の境界となり、受戒入位の法の園には發願利生の花開き、やがてぞ結ぶ報恩の行持の身をば樂しみて、勇みに勇んで釋迦牟尼如來の御戒法を信受し奉行して、以て名號を唱へ奉り、罔極の大恩を報ゆるの心懸が肝要である。

參考

〇信は道の元なり、功德の母なり。（華嚴經）

〇佛法の大海は、信を以て能入とす。（智度論）

〇佛法の海に入るには、信を以て根本と爲し、生死の河を渡るには戒を以て船筏と爲す。（心地觀經）

〇一切の諸々の佛は信心より起る。（華嚴經）

〇常住の理を信ずるを名けて信心と曰ふ。（楞嚴經）

〇菩提の因は復た無量なりと雖も、若し信心を說けば即ち已に攝め盡す。（涅槃經）

〇信心を說くに四種あり、一には根本を信ず、所謂眞如の法を樂念するなり。二は佛に無量の功德ありと信じ、常に念じて親近し恭敬し、善根を發起して、一切智を願ひ求む。三には法に大利益ありと信じ、常

昔、有名なる兆殿司は、京都東山、東福寺開山聖一國師の弟子である。始め庫下に在りて御飯を炊ぐ役を務めて居つたが、性來畫が好で、御飯を炊ながらも、竈の灰をならしては夢中になつて畫を習ふので、始終御飯を焦つかしてしまふ。國師は之を悲しみ、再三説諭を加へても用ゐませぬから、後には山を追出さんとまで御叱りになつた。兆殿司は恐れ入つて、もう此の後は決して畫は描かぬと云ふ誓を立てゝ、漸く御詫が濟んだのである。然るに、或日の事、亦もや御飯の焦る臭がするから、國師は困つたものだと思ひながら、板戸の隙間から御覽になると、竈より燃上る炎の中に、不動明王の御姿がありありと現はれた。國師は感歎の餘り三拜して方丈に歸られ、其の日は御飯の焦たのを別に御咎はなさらなんだ。其の翌朝も亦た、板戸の隙間より窺て御覽なさると、此の度は竈の前に一疋の大牛が臥して居る。驚てよく／＼見れば、頭は兆殿司にて體は正しく牛に見えた。國師は大に悲しみ、早速、兆殿司を呼で、さて／＼汝は生ながら畜生道に墮ちたりとて、御歎きなされましたが、兆殿司は一向合點ゆかず、段々國師の御話を聞くに及んで『實は私、昨日は竈の前で一心に不動明王を畫いて居りましたし、又、今朝は牛を畫いてをりました。それゆゑ右樣なる事があつたのでござりませう』と答へました。之を聞いた國師は『嗚呼唯心所造とは此の事ぞかし、以後は畫を習ふことを許すが、其の代り佛菩薩の像をのみ描けよ』と嚴重に仰付になつた。それから兆殿司は其の御言を守り、遂に佛畫の泰斗となられたと申すことであります。精神一到、其の力の偉大なることは是の如くである。

じ譯合です。儒書にも『一人慶あれば兆民之に賴る』とか、又『一人元良なれば萬邦以て貞し』などあるは、決して君主の御身の上ばかりの事ではありませぬ。『其の利益普ねく情非情に蒙らしむ』で、其の利益は有情の人間や動物ばかりではなく、非情というて情識を有せぬ草木にまでも、其の潤を蒙らしむるものである。

欽明天皇の時代に、秦の大津父と云ふ人が、或時、山中を通り、二疋の狼が咬合をして居るのを見て、如何にも不便に思ひ、杖を以て引分て遣り、怪我した狼のために血まで拭うて逃しやつたのを、天皇が御聞あそばされ、御感歎の餘り、遂に天下の財政を主どる大藏省の行政を、同人に任せられたといふことが日本紀に出てをります。斯ういふ風に、禽獸にまでも恩を施すほどの人ならば、草にも木にも、火にも水にも、自から情を懸るものである。後三條天皇は至て御仁心深くあらせられたが、御道具から御上り物までも常に勿體なしとて、御扇などは檜の柄の藍紙を以て製せしめられ、御膳は青魚の頭を炙り胡椒を付て御上りあそばされたと申ことである。水戸黄門光圀卿は、一生涯、黄色の絹の夜着蒲團一つだけにて間に合せ、床の上げ下しは皆な自分にてあそばされ、火事羽織は雲齋木綿を以て作られたと云ふことです。備前の池田新太郎光政公は、蚊幗の釣糸に、生涯、自分で造つた觀世撚を用ゐられたとある。此等は眞正の儉約であつて、即ち恩草木に及ぶものと謂ふべきである。此等の因緣を味うて、情非情平等に利益を蒙むる譯を合點下されたいものであります。

數百千年の常夜の暗も、サラリと消え失せて、打て變りし光明は隅の隅まで輝きわたるではありませぬか。至心懺悔の功德力は正しく常闇を照す一大光明である。此の光明に照さるゝ時、始めて無礙の淨信精進を生長せしむるのです。

『無礙の淨信』とは、少しも礙りのない淨らかなる信仰のことである。四苦八苦の世に在りても、五濁惡世の眞只中に住しても、懺悔心より湧出る信仰は少しも世の中の障礙を受けぬ。又、精進の精はクハシと云ふ字で、米を能々搗上げれば青味を帶びる樣になる。さうなれば糟も糠もすつかり取れて極々純粹の物になる。それを精と云ひます。即ち惡心惡業の糠糟の離れた純粹の善心善業です。語を換れば、佛法一三昧になることである。進はスゝムで、一尺より一丈へ、百里より千里と、段々進歩することで、世に所謂勉強のことです。故に、精進といふは、善法に向つて專一に勉強することであります。神聖なる信仰が起りますれば、其の信仰の歸する所に向て專一に勉強するは自然の勢です。勉強するからして、益々信仰が生長し、發達し、且つ鞏固になつて參るので、斯樣に『淨信一現』といふことになり、而して、淨い信仰が一たび現はれますれば『自他同じく轉ぜらるゝなり』で、自身ばかりでなく、他人までも其の潤ひを受けて、迷を轉じて悟を開き、苦を轉じて樂を得るやうになるものです。『德は孤ならず、必ず鄰あり』で、信仰の大功德は決して自分一人だけの寶ではない。知らずしらず他人をも感化するに至り、一軒の家に一人でも眞の信仰者があれば、きつと其の德が家內中に及ものである。之を廣むれば、一國一社會の上も同

事懺の裏には必ず理懺が伴ひ、決して相離るべきものではありませぬ。

それであるから、我が宗門では二儀兩懺などと申す外部の方法には拘泥せず、唯た至誠眞實の心を以て佛の御前に向ひ奉り、我等が過去及び現在の身や心は、煩惱の塵深く業障の曇晴れやらぬ最と耻かしき境界なりと、一心に觀察して佛の御救を願ふのである。そこを『然あれば誠心を專らにして前佛に懺悔すべし』と仰せられたのです。前佛と云ふは、以前に成佛したまひし、過去及び現在の佛方を指した詞であるが、つまりは佛の御前と云ふほどの意味に見られても宜い。斯く、徹頭徹尾、自身の罪深きことを覺り、心の底には常に煩惱の汚のあることを恐ろしく思うたならば、其の慚愧の一念力に依て、自づと心の中の邪見邪欲は影を藏すものであります。それには誠心を專らにせねばならぬ。『祈れども效なきこそ效なれ己が心に誠なければ』、『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』、少しも虛僞のない、底から湧出る眞心でなければならぬ。それも專らにしてゞあるから、聊でも餘所へ氣を散らすやうでは駄目です。佐座に前佛に懺悔すれば、其の功德の力は非常に廣大なものであつて、たつた一念の懺悔でも、煩惱業障の大海に浮沈する我等をば、直さま弘誓の船に拯ひ上げて、清淨潔白、一點の障もない奇麗な者にして下さるのであります。譬てみますれば、我等の境界は、丁度、數百千年の間、太陽の光線に觸れたことの無い眞暗な座敷のやうなものです。黑白も分かぬぬばたまの、常夜の暗は根の國や、底の底まで汚れたる煩惱の塵拂ふに由なきは我等の身の有樣です。斯る淺ましき身ながらも、若し一本の蠟燭なりと點じますれば、

八、無礙淨信（修證義第八節）

然あれば誠心を專らにして前佛に懺悔すべし、恁麼するとき前佛懺悔の功德力我を拯ひて清淨ならしむ、此の功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり、淨信一現するとき自他同じく轉ぜらるゝなり、其の利益普ねく情非情に蒙らしむ。

此の御文は懺悔滅罪の章の第二段目であります。前段にもある通り、懺悔は實に佛祖廣大の慈門である。苟も佛道に入る者は、必ずや此の懺悔と云へる門戸を潜らねばならぬ。而して、懺悔には二儀、兩懺と申すことがあります。即ち、儀式の上に大乘と小乘との別があり、又、南山律に傳ふる所と圓頓大乘戒に於て傳ふる所との差もあり、其の他、種々の變つた儀式がある。懺悔そのものゝ上にも兩様ありまして、第一には事懺というて、罪惡の事相、即ち罪過の事實に就て懺悔するのと、次には理懺というて、罪惡を理體の上から見て、罪過の根本を畢竟じて實體の認むべきものは無く、元來空なるものと觀察するのであります。此の外にも、光明文句には、作法と取相と無生との三通りの懺悔法を示してゐる。併し、此等は外面から一應區別したので、懺悔の大精神から見れば、唯だ過去及び現在の罪障を懺悔して、罪性不可得で、本より罪の本性と認むべき物は無い、畢竟、清淨にして佛と同體であると云ふ根本に立戻るのであるから、

○靜夜の鐘聲を聽ては夢中の夢を喚醒し、澄潭の月影を觀ては身外の身を窺ひ見る。（同）

○微邪は大邪の生ずる所なり。（管仲）

○僅顚二乎外一。邪火妄動。胸中焦熱。煩躁不レ恬。一念自反、水外火降。焦熱倏消。清涼滿レ腔。大本時立。達道博通。大上眞樂。自在二此中一。（中江藤樹）

○湛然虛明一池水。嚴凛寒氣堅氷至。春來風光和煦時。湛然虛明一池水。（同）

○波立たぬ水に氷の結ぼれて釋くればもとの波立たぬ水。（同）

○いさぎよき月にかゝれる叢雲も霽るればもとのいさぎよき月。（同）

○今ぞ知る世々を心に照らしつゝ人を鏡といひしまことを。（了然）

○花さかぬ身をすぼめたる柳かな。（麥林）

○獵人の追ひ出されたる燒野かな。（双飛）

○きのふまでおそろしき野に若菜かな。（失名）

るに依て、深くも我身の罪障を悲しみ、佛の御慈悲を喜びて、唯だ一心に南無釋迦牟尼佛を唱念し奉らんこと、暫くも御忘れの無きやうに致したきものであります。

参考

○人衆の過ちあり、自ら悔いて頓かに其の心を息めずんば、罪來りて身に赴くこと、水の海に歸して漸く深廣と成るが如し。若し人過ありて自ら解りて非を知り、惡を改め善を行はゞ、罪自ら消滅すること、病の汗を得て漸く痊損るが如くならん。(四十二章經)

○一切業障の海は、皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を念ぜよ。衆罪は霜露の如く、慧日能く消除す。(觀普賢經)

○悔は凶より吉に赴くの道なり、強く悔ることは反て先非の病を拔去る根なり。昔ありたる過失の、今は跡方も無くなりて、心氣替りたる事は思ひ出てゝ悔は無し、唯よそ事の如し。思ひ出して首を搔き汗出るは、未だ其の過失の根、伏藏して、又も其の境を現はすが故なり。(中江藤樹)

○智者が最も注意して怠らざる點は、決して同じ過失を再びせさるにあり。(フオツク)

○心體光明なれば暗室の中青天あり、念頭暗昧なれば白日の下厲鬼を生ず。(洪自誠)

放蕩者でありしが、去年の暮、京橋の邊で客待をして居つた時、其の近處の家で說敎が始まつたから、不圖それを聞た處が、佛の御敎の最と有り難く、忽然として已れの非なることを悟り、たつた一座の聞法で、酒も博奕も殘らず御止にして、毎晩のやうに、夫婦して說敎聽聞に出懸け、家に歸れば、互に聞いたお話を語り合うて居るが、其の樂みはなんとも言へぬほどであつて、御蔭で日々の家業も喜びながら勤むることが出來ます』と答へたのである。竹五郎は之を聞て、幾ど感服致し、それに付ても、自分は一朝の怒に年來の恩を忘れしことの恥しさよと、徹底悔悟して、遂に深川の主人に御詫をして歸りました。然るに、主人は、竹五郎が今までと違ひ、全で別人の樣に改まつたのを不思議に思ひ、段々と其の因緣を聞て、始めて佛敎の感化力の偉大なることを悟られまして、それからは主人までが非常な信者となつて、近處の人人に讚られるほど立派な家庭を作つたと云ふことであります。是れ卽ち一人の懺悔の功德力に自他平等の大利益を得たる例證ではありませんか。『照る月を心の水にうつさばややがて此の身の光をぞます』で、懺悔の一心に佛の御慈悲を宿し、本心本性の鏡の光が現るゝのであります。

　ボルテールは『神は悔悟を以て人類の美德となせり』と云うてあるが、佛の心に感應し神の心に道交するは、全く懺悔淸淨の一念に在るのであります。尤も、懺悔の意義は却々甚深から、席を重ねて御話に及びませうが、兎に角、我等は斯る貴とき御敎を戴くのを生々世々の大因緣と心得て、一刻も早く眞正なる懺悔心を起さねばなりませぬ。此の懺悔心こそ受戒入位の堂に上り、利生報恩の行持を顯現すべき入口た

もすつかり消滅して、清淨無垢の身とも爲るぞよとの有り難き御教訓であります。

神秀大師の偈に、『身はこれ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること莫れ』とありまするが、實にや、我等の本心本性は明皎々たる鏡のやうなものです。然るに、生々世世の其の間、煩惱惡業の塵埃は積り〲て鏡の本性を昧まし、道德の輝きも智慧の光も無い眞黑々の凡夫となつたのです。斯る暗黑なる我等の身は、一に煩惱と惡業との致す所と心得て、あゝ惡かりし、迷にけりと深く自ら慚愧して、只管佛の御慈悲にすがり、もう〲此の後は誓て煩惱惡業の垢には染まりませぬと至心に懺悔すれば、雲晴れて月の生ずる如く、波收まりて水の淸らかなるが如く、忽ち佛の御慈悲に救はれて、本性の德自づと現はれ滅罪淸淨の身となるのでございます。『過つては改むるに憚ること勿れ』、顏回は過を貳びせざることを力め、子路は過を聞くを力む。是ぞ佛法信心の土臺、精神修養の根源であります。

まだ近年の御話ですが、東京深川の豪商某の俥車夫に、近藤竹五郎と云ふ者がありました。此の者は非常に短氣な性質で、或時、主人が聊の小言を云うたのに、むかッ腹を立て、プイと飛出して知合なる淺草三筋町の同業者增藏の處を尋ねて、暫く食客の身となつて居つた。增藏は元は却々の道樂者であつたのが、今では夫婦とも見違るほど品行も正しく、朝夕の行爲萬端どことなく溫厚篤實でありますから、『なぜ君は其のやうに立派になつた』と尋ねました處、增藏の申すには『君も知ての通り、今までは手も附られぬ

力があればこそ、人間と生れ佛法にも値ひ奉ることが出來たのであるが、之と同時に、惡業の力もなかなか盛んである爲めに苦の絕間が無いのであります。加之、我等の精神界を顧れば、我癡、我見、我慢、我愛の煩惱は、隙間も無く壘を築きて勢を逞うし、動ともすれば『生れ子が次第〳〵に智慧づきて佛に遠くなるぞ悲しき』と云ふ悲劇を演じてをるではありませんか。斯る淺ましき境界に在る我等をば、如何にしたならば、一足飛に佛の位に進め聖賢の域に導き、此の煩惱惡魔の軍勢を鏖にして善根菩提の淨土を建築すべきやと云ふのが、三世の諸佛、十方の菩薩方の、最も御心配あそばす所なのでございます。獨り佛菩薩ばかりでなく、古今所有聖人賢人の等く苦心せらるゝ所は此處です。中に就て、佛樣や祖師方は我等衆生を憐みたまふの餘り、廣大無邊なる御慈悲の門を十字に開いて、玆に懺悔と云へる貴き御法を御授け下された。是は、我等は申すに及ばず、縱や五逆十惡の輩でも漏さず、餘さず、正しき證を得て佛の道に入らしめんが爲めである。此處を贊題には『佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり』と仰せられたのである。さすれば『人天誰れか入らざらん』で、人間でも天人でも、凡夫でも惡人でも、此の御慈悲の門に入らずには居られますまい。『彼の三時の惡業報』と云へる因果の大法に依りて、宿世、又は今世にて造りし無量無邊の惡業は、きつと我身に報ふべきは當然であるが、若し佛樣の御敎に隨うて一心に懺悔し奉る時は、『重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪淸淨ならしむるなり』で、三惡道に墮すべき程の重き罪過も、轉じて輕く受くる樣になるのみか、更に進んでは、所有罪業

た影法師です。然らば、我等の身の上は、果して如何なる位地に在るかと云ふに、一面から見ますれば、受け難き人間の身を受け、遇ひ難き佛法に値ひ奉れる最勝の善身であるが、他の一面より眺むれば、生れるより死するまで、心にも身にも苦痛の絶間は更に無く、草の葉の露よりも脆き命を持ちながら、四苦八苦の風に襲はれざる日とてはあらじ。不平の上に不平を重ね、希望の上に希望を添へ、暫時も安心を得ることは出來ぬ。花に浮かれ月に嘯くも盧生邯鄲の夢、財を樂しみ色を喜ぶも黄粱一炊の烟に過ぎぬ。思へば、我等ほど果敢なきものはございませぬ。斯く人生を悲觀するは餘りに心の狹いやうであるが、よくよく考へて御覽なさい、苦痛は人生必然の事實です。飢ては食を求め渇しては水を喚び、役々として財を貪り區々として色を漁る、道に進むの時は甚だ少なく、罪を重ぬるの日は甚だ多い。觀來れば、人間一代の事業は、苦と云へる大惡魔に對するの戰爭と云うても宜い。而して最後の一戰には、出入息斷えて、兩眼光を失ひ、身は鳥邊野の煙と化して名を一塊の骨に留む、なんと滑稽ではありませんか。併し、諸君は之れが爲めに力を落してはなりません。人生苦痛の狀態は、決して本來の面目ではない。因緣に依りて現はれたる暫時の影法師に過ませぬ。

然らば、何んな因緣であるかと云ふに、前章で申上た通り、總ての苦は必ず惡業の力に依て生じ、總ての三惡業は必ず煩惱妄惑に依て現はる。卽ち、惑・業・苦の三道は萬古不變の定則であります。苦無くんば止なん、苟も苦ありとすれば、其の苦は煩惱に因て生じたる惡業の致す所です。尤も、我等は宿世の善業

七、廣大慈門（修證義第七節）

佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり、人天誰か入らざらん、彼の三時の惡業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ。又滅罪清淨ならしむるなり。

只今讀上ましたる贊題は、修證義第二章、懺悔滅罪の一段の最初なる、第七節の御文で、これより第十節までは、正しく懺悔の法門を御教下されたのであります。懺悔と申す詞は、梵語では『サンマ』又は『センマ』と云ふを、支那では悔過と譯してある。悔過とは既往の過失を悔い改むると云ふことです。即ち三世因果と云へる明かなる眞理の鏡に照して、我等の身の罪過の最と深きことを自覺し、今日と云ふ今日こそ、心のドン底から、あゝ耻かしき我身なる哉、淺ましき境界なる哉と、自ら深く慚愧の心を生じ、佛に向て御救ひを求め、且つ至心に悔悟の誓を立つると云ふ意義です。即ち、梵語の懺摩の懺と、漢語の悔過の悔とを取合せて、懺悔と稱する熟語を制つたのであります。

前章に於て詳しく御話し申した通り、上は天地の大なるより下は蠢動含靈に至るまで、因果の大法に漏るゝ者は一つも無く、我等お互の生死も、一期五十年の貧富貴賤、盛衰苦樂も、盡く是れ因果の鏡に映つ

○澄みわたる月は我が身を照らせども無明の雲のみせぬなりけり。(千観法師)

○五月闇木の下道はくらきよりくらきに迷ふみちぞくるしき。(尊圓親王)

○よしあしのむくひをしれな世の中のいさみあるにも歎あるにも。(政爲朝臣)

○外からは手もさへられぬ要害を內からやぶる栗のいがかな。

大師）

○邪見は即ち佛敎の正理に相違したる外道の見解なり。而して外道の分類、諸經論一ならず、今左に二三を擧ぐ。

二十種外道

一、小乘外道論師。二、外道方論師。三、風論師。四、圍陀論師。五、伊睒那論師。六、倮形外道論師。七、毗世師論師。八、苦行論師。九、女人眷屬論師。十、行苦行論師。十一、淨眼論師。十二、摩陀羅論師。十三、尼揵子論師。十四、僧佉論師。十五、摩醯首羅論師。十六、無因論師。十七、時論師。十八、服水論師。十九、口力論師。二十、本生安荼論師。（小乘涅槃論）

十六異論

義林章に曰く、外道は九十五種有りと雖も、大意は十六異論に過ぎたるは莫しと、而してその一々は左の如し。

一、因中有果論。二、從緣顯了論。三、去來實有論。四、計我論。五、計常論。六、宿作因論。七、自在等爲作者論。八、害爲正法論。九、有邊無邊論。十、不死矯亂論。十一、無因見論。十二、斷見論十三、空見論。十四、妄計最勝論。十五、妄計淸淨論。十六、妄計吉祥論。

○おそろしき地獄の底の鬼とてもをのがふきだすものと知らずや。（行誡上人）

の人の心懸は別なものです。依て諸君も、何とぞ我身の貴きことを忘れずに、深くも永劫不退の佛緣を喜び、常に釋迦牟尼佛の御法に遭ひ奉りし勝緣を喜んで、正見正業の人たられんことを希望致します。

參考

○百年の垢衣も一日に於て、澣ひて鮮淨ならしむべきが如し。是の如く百千劫の中に集むる所の諸の不善の業、佛法の力を以ての故に、善く順ひて思惟せば、一日一時に於て盡く消滅すべし。(大集經)

○佛法を學ぶ漢は、須らく邪正の兩途、及び外道と佛道との殊りを知るべし。見解若し外道に同じければ終に佛法の益無し。(承陽大師)

○道を學ぶの丈夫は、先づ須らく道に向ふの正と不正とを知るべし。夫れ釋雄調御、菩提樹下に坐し、明星を見ることを得て忽然として現に無上乘の道を悟る。其の悟る所の道は聲聞緣覺等の能く及ぶ所にあらず。(同)

○所謂、道に向ふとは佛道の涯際を了するなり、佛道の樣子を明むるなり、佛道は人々の脚跟下なり。(同)

○夫れ佛法を學習することは、最も得難しと爲す。所以いかんとなれば、縱ひ發心の實有りと雖も、魔に落つることを知らず、病を發することを知らず。道心破敗し、修證退墮せば、眞に憐憫すべきなり。(承陽

を來たしまして、日一日、刻一刻に人智が發達し、人權が擴張せられたは宜いが、それが爲めに、黄金崇拜主義だの法律萬能主義だのと云ふ妙な主義が流行出して、遂には宗教無用論を唱へる者さへ飛出すやうな有樣になつたのです。夫故に、佛教の眼より眺むれば、智識あり才能ある人々の中に、却て邪見の穴に飛込で居る連中が殖えて來て、今以て撲滅せぬやうに思はれ、實に慨はしいことであります。

昔、御開山承陽大師が支那の天童山に在りて御修行の砌、或時、佛殿の邊を御通になつた。頃しも六月の炎天『萬民應に雨を望むべし片景空を燒かんと欲す』と云ふ有樣で、熱きこと言はん方もない。然るに佛殿の前を見られると、背には梓の弓を張り額に四海の波を湛へ、眉毛の白きこと鶴の如くなる一人の老僧が、中庭で頻りに苔を晒して居る。其の樣子は、笠をも被らず、唯だ一本の竹の杖を携へて、ヂリ〳〵燒けるやうな處で、一生懸命に働いてをる。大師がよく御覽になると、大府の用典座と申す六十八歲の老僧である。大師は氣の毒に思召され『何故、下部の者に命ぜられぬぞ』と御尋あそばすと、『他は是れ我に非ず。幸に受け難き人身を受け遇ひ難き佛法に遇ひ奉りし我身なれば、此の息のつゞかん限りは、道を行ひ德を積むは當然である。人にさせては我が修行にはならぬ』と答へた。大師は再び『只今は餘りに暑ければ後になすとも遲かるまじ』と仰せらるゝと、『更に何れの時をか待たん。光陰は矢よりも疾し、身命は山の水よりも無常なり、今日今時を空うせば、後悔臍を嚙むとも及ばず』と挨拶して、故の如く苔を晒してをつたので、大師も非常に感激あそばされたと云ふ有り難き御話があります。因果の道理を明らめし正見

き、又は鍋に入れて煮殺し、竟には骨も殘さず食つてしまふと云ふことぢや。各々は、ゆめ〳〵油斷はしたまふな』と最と懇に說き諭したさうである。ところが、大勢の鰌共は大口開て打笑ひ『馬鹿氣たことを云ひたまふな。我等は、別段、其の人間に對して恩も仇も無いのに、濫に我等を苦しめるやうなことがあつてたまるものか。殊に、我等の祖先や朋輩の中で、惡魔の世界から、我等に便をして救を求めた者もなければ、我等の中で實地に見た者も無いではないか。そんな好い加減な空論は止したまへ』と云うて、たうとう大勢に冷されてしまうた。多數決なれば如何とも致し難く、涙を呑んで默つてをつた中に、ジャブンと云ふ水音がした。彼の一疋の鰌は、『ソレ』と云うて逃げ出したが、大勢の鰌は悠々閑々ときめこんでをつたために、何時の間にやら、其の身は鰌屋の爼の上に曳据られて、憐れ果敢なき身の上となつてしまうたと云ふ寓話があります。

諸君如何でありませう。今の世の中には、隨分と此の大勢の鰌のやうに、悠々閑々ときこめんで御座る方が澤山ありはしますまいか。『深き淵うすき氷の誡を心にかけぬ人ぞ危うし』とは楠正成公の歌です。殊に、我國に於て、古來、多數の人心を支配せし道德的觀念はどうかと云ふに、神樣が覽そなはしてござる、佛樣がながめておいでなさる、天道樣が照してござる、御先祖の神靈に對して濟まぬ、と云ふ樣な極めて單純なる信念が、自然と人心の奧底に浸みこんで、自づと其の獨を愼むやうにもなり、優美なる高尚なる人情をも養うたのです。然るに、維新以後は、西洋の物質的文明を俄に輸入して、諸般の制度に大變革

人でも、斯ういふ御連中が澤山見えるやうです。併し、因果の大法は空理空論を以ては動かされぬ。天地の道理は理窟を以て防ぐわけには行かぬ。縱や、惡い業を造りながら、是は決して惡業でないと思ひ、又、惡業としても、社會の制裁や法律の網の目を漏れさへすれば好い、未來などに惡の報があつてたまるものかなどと、邪まな思惟をしたからとて、天地の道理、因果の大法は、そんな人には貪着せず、ずん〳〵と賞罰を勵行してをるに依て、惡道の果報を免がるゝわけには行かぬぞ、との御教訓であります。されば四十二章經には『人に諸の過あり、而も自ら悔て頓に其の心を息めざれば、罪の來りて身に赴くこと、水の海に歸して漸く深廣となるが如し』とありて、聊の罪過でも、之を消滅せざれば、來世幾許の苦惱を受くるやら知れぬ。此の理を諦に信ずる時は、縱や如何なる辛抱をしてゞも、眞の道を守らずには居られますまい。故に六度集經には『寧ろ道を守りて貧賤にして死することありとも、富貴にして生を貪り求むること勿れ』と御諭し下されてあります。

或處の古池に多くの鰌が住んで居つた。或時、一疋の賢い鰌が、大勢の鰌に諭して申すのには、『扨も我等の身の上ほど危險なる者は無い。終日、泥深き處に此の身を落着けて、柳の蔭、藻屑の下に溫な夢を結んでゐるは至極安心のやうなれども、我等の住居を離れた陸上に、無常の殺鬼とも云ふべき、それは〳〵恐しい人間と稱する惡魔がをる。其の惡魔は、常に我等の身を付け覘うて、聊も油斷があると、忽に引捕へ、惡魔の棲家に連行きて、生ながら無理無體に爼の上に引据ゑ、咽笛に針を穿し、刀を以て五體を曳割

空く冥より冥に入ると云ふは、諺に言ふ『寶の持ち腐れ』ではありませぬか。故に、唯今の讃題には『當に知るべし、今生の我身二つ無し、三つ無し』と御誡になつたのであります。法華經には『唯一乘の法のみ有りて、二も無く亦た三も無し』佛の悟りたまひし御法は、宇宙間に唯一筋のみ有つて、二つも三つも有るわけのものではない、と仰せられてある。我々の身も亦た天地間に唯一つしか無い。何な大福長者でも身の懸替は持たぬ。即ち一乘法です。佛の御法と我等の身とは同體同格で、決して變つたものではない。唯だ變つて居らぬのみか、我等の身こそ却て御法を生み出す所の母である。眞言宗にて『父母所生身、即證大覺位』とあるも、此の理の顯れたことを指した辭です。行誡上人の歌に『夜もすがら唱ふる三世の御佛の御名は昔の我名ならずや』とある通り、佛菩薩の御身と云ふも、我等の此の身の上に開きたる悟の華の御名であります。斯樣に貴とき身を持ちし我等こそ、歡びの上にも喜ばねばならぬ果報ではありませぬか。然るに若し、此の身の貴きことをも打忘れて、徒に邪見といふ邪まな道に迷ひ込で、惡行を働き罪過を作り、虚々惡い業報を感得して、未來永劫、三惡道、四惡趣に仲間入をする樣なことでは、惜みても猶ほ餘りあることではないかとの御警告であります。

邪見と申すは、因果と云へる正しき道理を信ずることが出來ず、佛の御慈悲を有り難く戴くこともならず、因も無い果も無い、神も無い佛も無いなどと、唯だ現在一世のみを見て、肉眼の及ばざる所は、全然之を無いものとして、我見ばかりを張り通す者を邪見の人と云ふのであります。今の世の中には、立派な

六、遠離邪見（修證義第六節）

當に知るべし、今生の我身二つ無し三つ無し、徒らに邪見に墮ちて虚く惡業を感得せん、惜からざらめや、惡を造りながら惡に非ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて、惡の報を感得せざるには非ず。

拙僧が或る地方に參りし時、信徒の人々が聲を揃へて和讃を唱ふるのを聞たことがあります。其の和讃は極簡單だが、何となく有り難く感じました。それは斯ういふ和讃であつた。『歸命頂禮釋迦如來、拜もとすれば雲かゝる、如何なる邪見な雲ぢややら、雲は邪見ぢやなけれども、我身が邪見で拜まれぬ』其の詞句は兎も角も、意味は甚だ面白いです。實にや、我等の胸中に結ぼれる邪見の雲霧こそ、宇宙の眞理をも失ない、神佛の冥鑒をも昧まし、進では人の人たる德を傷ぶり、退ては永劫不退の佛果を得ることが出來ぬのである。『心から流るゝ水をせきとめて己れと淵に身を沈めけり』、決して、向ふに我等を束縛する惡魔があるのでは御座いませぬ。

抑も、我々の身の上は、前々にも御示し下されてある通り、受け難き人身を受け遇ひ難い佛法に遇ひ奉りし、最勝の善身です。斯かる最勝の善身を持ちながら、徒に生老病死の淵瀬に浮沈して、前途茫々

○吾人徳を修むることを思はゞ、日々善を爲さんのみ。一善増す時は一悪損ず、日々に善を爲さば日々に悪退く可し。是れ陽長ずる時は、陰消ずるの理なり、久しくして怠らずんば善人とならざらんや。(中江藤樹)

○小車のめぐりこん世はおのれまたひかれてうしとおもひしるらん。

○六界の歌

菩薩界　三十あまり三つの浦舟なみたちてさす棹いかに隙なかるらむ。

天人界　ひく糸のしばしばかりのゆるびより思ひ揚れる凧のぼりかな。

修羅界　はてもなく思ひあがりし心より阿修羅とまでの名はおひにけむ。

餓鬼界　袖ぬれし水際のなみも音かへてほのほばかりぞもえ渡るなる。

畜生界　父といふ名をだにしらぬ簑虫の身の果いかにならむとすらむ。

人間界　うれしくも人とうまれてみ佛のさとりの道もこれよりぞ入る。

(行誠上人)

の雲霧に蔽はれず、常に佛の光明に沐し奉つるやう御用心下されたきものであります。

參　　考

○十不善の業道を行する因縁の故に、地獄、餓鬼、畜生の三惡道に墮す。十善の業道を行する因縁の故に、則ち天界、及人界に生ず。（彌勒菩薩所問經論）

○しかあればすなはち行者かならず邪見なることなかれ。いかなるか正見、いかなるか邪見と、かたちをつくすまで學習すべし。まづ因果を撥無し、佛法僧を毀謗し、三世および解脱を撥無する、ともにこれ邪見なり。（承陽大師）

○因果の道理は孔子老子等のあきらむるところにあらず、たゞ佛々祖々あきらめつたへましますところなり。澆季の學者薄福にして正師にあはず、正法をきかず、このゆゑに因果をあきらめざるなり。（承陽大師）

○獸を逐ふものは目に太山を見ず、嗜欲外に在るときは則ち明蔽はる。（淮南子）

○善に從ふことは登るが如く、惡に從ふことは崩るゝが如し。（國語）

○道德を棲守するものは一時に寂寞たり、權勢に阿附するものは萬古に凄凉たり。達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ、寧ろ一時の寂寞を受くるも、萬古の凄凉を取ることなかれ。（洪自誠）

には佛を無みし神を無みし、天理を無みし、人道を無みし、どゝのつまりは三惡道に墮ちて、長き時節の其の間、浮む瀨も無い苦しみに至るぞとの、御親切なる御教訓であります。

彼の天正十年三月、甲州の武田勝頼が滅びた時、其の首級を信長公と家康公の實驗に備へた所、短氣の信長、刮と睨めつけ、いきなり起て其の首を足蹴にし、『汝の親の信玄が無道であつたから、汝もこんな死耻を搔いたのだ、ざまを見よ』と云うて罵つた。然るに、家康公は、自ら床几を下りて首級を上座に直し『武田家は、二十四代の間甲州を領したる名家にして、新羅源氏の嫡流である。勝賴殿は年猶若く血氣に逸りし爲め今日の滅亡を招かれたり、返す〴〵も氣の毒である』と挨拶せられた。兩公の心行は實に天地の相違です。然るに、其の歳の中に、信長公は光秀の叛にあうて生害せられ、家康公は甲信二箇國を併有せられた。是等は順現報受です。又、佛在世の時の、蓮華色比丘尼といふは、三生以前は婬女であつて、或時、戯れに佛袈裟を掛けた事があつたさうである。その非梵行の罪で、次の世には惡道に落ちたが、袈裟を身に觸れた因縁で、第三生目には釋尊の御弟子となつて、羅漢果を得られたとある。是等は順次生受と順後次受との二つを兼ねたのです。

して見れば、我等お互の一言一行は、盡く業勢力となつて、何時か一度は其の果報を受くるのであるから、深くも深く未來の業報をば恐れ愼しまねばならぬ。『みな人の本の心は增鏡みがゝばなどが曇りはつべき』、朝夕、懺悔受戒の身を喜こび、利生報恩の業を樂しみ、至心に南無釋迦牟尼佛を念誦し奉りて、邪見

あるが、唯だ其の報の現はるゝ時節に三通の別があるから三時業報と名けたのであります。一に順現報受は、此の世で造つた業が此の世の中に報いて來るのです。これだけは我等が實驗の力でも大概知れます。若い時に働て老後の身代を作るも、青年時代に勤學して壯年に立派な學者になるも、戰場に武功を現はして名譽の位地に進むも、又、惡心を起し惡事を働いて、或は法律の罪人と爲り、或は德義の罪人と爲りて社會より擯斥を受るも、皆な現世の果報であります。次に順次生受、これは實驗の及ばぬ、所謂冥界に於ける因果の狀態です。即ち、此の世で造りし業が、命終の後、未來で果報を受くるのであります。三に順後次受、これは、此の世の業が來世にも現はれず、次の未來、即ち第三生以後に受くるのであります。此の世と未來との樣子を、今年と來年以後とに例へてみれば、米や豆の類は、今年種を下して今年の中に果實を見るから、順現報受です。麥などは、今年下した種が來年になつて漸く實るから、順次生受である。又、栗や柿などは、三年も五年も過てから始めて實を結ぶのであるから、順後次受です。又、顯界の側から見ますれば、一代の中に結果の現はるゝ人と、親の因果が子に報ゆ後の子孫にまで遺傳する事とがある。是れ皆な三時業報の理法であります。なぜに三種の時節が分るゝかと云ふに、其の原因の力に、强いと弱いとの別があるのと、其の原因を增上さすべき外緣、即ち境遇の關係如何とに依るのです。此の道理が解りませぬと、因果の大法を信ずることが出來ぬから、佛祖の道を修行し習ふには、先づ最初に此の三時業の事を效ひ驗らめねばならぬ。さもなくば、多くは因果の理を疑うて邪見の穴に墮ち入るのみならず、遂

と思ふのです。顯界とは我等人間の實驗せらる可き世界、冥界とは實驗の及ばぬ世界、言換れば、一は此世で、他は來世である。尤も、此世と來世とのみ申しては、少しく範圍が狹過ぎる樣にも思ふ。故に、一は我等の善と惡との業が子孫や社會に及ぼす勢力、一は我等の善と惡との業力が我等自分の上に現はるゝ狀態、此の二つと御承知下されても宜い。此の二の區別を心得ぬと、佛樣の御示下された因果の正道理は解りかねるのであらうと思ひます。前の楠公等の御話は、楠公等の業作用が子孫や社會の上に及ぼした勢力の上の事であつて、まだ楠公自身の上の因果の事は盡して無い。尤も、楠公とか我等とか云ふ箇體は無いものだと云ふ方もあらうが、私とても、決して常一主宰の我といふものが有るとは認めませぬ。併し、因緣の作用に依て、楠公とか清盛とか云ふ一の箇體が現はれた以上は、其の箇體が五十年なり七十年なり、一生の壽命を相續して居るやうに、未來に至るも決して斷滅に歸するものではない。若し、無我無常であるから箇體はないと云ふならば、念念刹那の無常なるに依て、楠公と云ふ方も、清盛と云ふ者も、そのまま空です。其の眞空なる平等界中、假りに差別を示し、刹那無常の間に前後相續の影を留めたのが楠公や我等の一生である。其の一生が死と云ふ一段落を付れば、更に復た其の一生に類似した一生が未來に現はれて來ねばならぬはずです。其の現はれて來る有樣を御示下されたのが、只今の贊題なる三時業報の一節であります。

凡そ、善にもせよ惡にもせよ、身口意の上に作業を起しますれば、きつと夫れだけの報のあるは必然で

其の偉勳は赫々として萬世に輝き『嗚呼忠臣楠氏之墓』と、後世幾百億の人をして景仰措く能はざらしむ。故に、公が肉體は中途にして死すと雖も、公の精神は益々其の光を放つて天地と共に盡ぬでは無いか。佐倉宗五郎は、一農夫の身を以て幾萬人の難儀を救はん爲め、三尺高き木の上で、磔の刑に處せられたは頗る非因果のやうであるが、後世、其の義を感じ其の德を貴び、宗吾神社として之を神に祭り、今に至るまで衆人の尊敬する所と爲る。是れ皆な因果の現象である。逆臣平清盛は一代の榮華を極めたが、死際には、火の病の苦しみを受けたばかりか、百代の後、猶ほ億兆の人に罵らるゝが如き、皆な天道の明かなる所以である。箇體としての楠公や清盛は死でしまうても其の善惡業は永く子孫の上に遺傳し、國家の上に留まりて、相續不斷である、と論ずる人がある。實に尤千萬なる說で、それに相違はありませぬが、併し、單に夫れだけで因果の道理を說明し盡したとは云はれぬ。なぜならば、楠公の忠義や清盛の暴逆は、頗る著しい事柄であるに依て、後世に及ぼす感化も廣大であるが、廣い世界の長き歷史の中には、人にも知られず、世にも知られぬ處に、楠公以外の楠公、清盛以外の清盛が澤山あるに相違ない。是等はどうした者でせう。況てや、忠臣孝子の子孫とて必ずしも榮ふるに非ず、亂臣賊子の子孫でも大に繁昌を來す事もあるではありませんか。さすれば、此の因果の關係は非常に複雜で、非常に微妙で、なか〳〵人間普通の常識のみを以て、容易に其の隅々までも見拔くといふことは難かしいのです。

然らば、どう心得れば宜いかと云ふに、私はこれを顯界と冥界とに大別して、諸君に御承知を願ひたい

五、三時業報（修證義第五節）

善惡の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ、佛祖の道を修習するには、其の最初より斯三時の業報の理を效ひ驗らむるなり、爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて長時の苦を受く。

廣い世界に短かい浮世、といふ語があるが、此の短かい浮世の狀態だけを視て、限りも無い世界の出來事に對する因果の關係を論じやうとするは、ちやうど一日の狀態を以て一年間の事を說明せんと欲するが如きもので、到底、滿足なる解釋の出來やうはずはございません。善因善果、惡因惡果は、宇宙の大法ではあるが、單に人間一期五十年の上から眺めますると、往々にして此の大法に反する事實を發見せらるゝであらうと思ふ。卽ち、惡人が却て福を得るとか、善人が却て禍を被るとか、懶惰なる者却て富み、勤勉なる者却て貧しく、仁者の短命、暴人の長壽、逆臣の幸運、義士の災厄といふ樣な類例は、決して少くないのです。是に於てか、『天道抑も是か非か』などと歎息して、疑を因果の正道理に挾む輩も出て來るのでございます。是れ果して如何なる理由でありませうか、これに就て斯樣に論ずる人がある。

楠正成公は千古の大忠臣である。不幸にも、其の志を達するに至らずして、身は湊川の露と消えたが、

きとして佛祖の洪恩を報すべくば、すみやかに諸因果をあきらむべし。（承陽大師）

○善も妄りに來らず、禍も空く發らず。（後漢書）

○善を行ふときは則ち休徵之を報じ、惡を行ふときは則ち咎徵之に隨ふ。（孝經）

○天は聽けども寂にして音無し、蒼々何れの處にか尋ねん、高きにあらず亦た遠きにあらず、都て只人心にあり、人心一念を生ずれば、天地悉く皆知る、善惡若し報いずんば、乾坤必ず私あらん。（邵康節）

○善事は善事を生ず、其の增殖すること實に驚くに堪えたり。善は獨り善ならず、惡も亦た獨り惡ならず。（モスレー）

○富貴は慈悲より來る、福德は善根より來る、無病は信心より來る、愛敬は忍辱より來る、智慧は精進より來る、高位は禮拜より來る、短命は殺生より來る、病身は不淨より來る、貧窮は慳貪より來る、愚盲は破戒より來る。（大集經の取意）

○いぶせさをたれにか問はん蚊遣火もおのがたてたる煙なりけり。（行誡上人）

○おのれこそおのれむせびて山賤がましばいぶせき宵の蚊遣火。（同）

○かれやらぬおのが古根のおひいでゝ今年もさわぐ蘆の亂葉。（同）

○おどしたるむくひにくちるかゝしかな。

○よしあしのうつる心の水鏡よく〳〵みれば我が姿なり。」

尼佛の恩德を喜び戴いて、利生報恩の行持を全うせねばなりませぬ。『しばしこそ人の心に濁るともすまでやむべき法の水かは』、返す〳〵も平生の用心を怠らぬやう致したいものであります。

參考

○善惡の報は影の形に從ふが如し。三世の因果循環して失はず、此の生空しく過ぎなば、後に悔ゆとも及ぶこと無し。（涅槃經）

○前世の因を知らんと欲せば、則ち今世に受くるところのもの是れなり。後世の果を知らんと欲せば、則ち今生に爲すところのもの是れなり。（因果經）

○妖孼にして福を見るは、其の惡未だ熟せざればなり、其の惡熟するに至りて自ら罪虐を受く。貞祥にして禍を見るは、其の善未だ熟せざればなり、其の善熟するに至りて必ず其の福を受く。（法句經）

○佛法參學には第一因果をあきらむるなり。因果を撥無するがごときは、おそらくは名利の邪見をおこして、斷善根とならん。（承陽大師）

○撥無因果すれば、このとがによりて莽々蕩々として禍殃をうくるなり、撥無因果のほかに、餘惡いまだつくらずといふとも、まづこの見毒はなはだしきなり。しかあればすなはち參學のともがら、菩提心をさ

昔、釋尊御在世の時、或る大國を領して居られた和默と申す國王がありましたが、それが大の迷信家であつた。曾て其の母君が大病に罹つた時、或る婆羅門派の教に依て、更に醫藥の手當をせず、殆ど天理教的の御祈禱などばかり致して居つたが、少しも病氣が瘉らぬ。そこで、彼の宗派の者は『是は尋常の病で無いから、之を治すには、百疋の畜生と一人の小兒とを殺して、至心に天の神を祠り母君をして禮拜せしめねばならぬ』と教へた。飽まで邪見の雲に蔽はれて居る和默王は、淺はかにも之を信じて、象だの馬だの牛だの羊などの類を驅り聚めて、今や城の東門より祭場に赴かんとした。釋尊は深くも其の迷妄を愍みたまひ、東門に御立あそばされて、和默王に向はせられ、『王よ、王は善く我が一言を聽け、穀食を得んと欲せば當に耕種を行ふべし、大なる富を得んと欲せば當に布施を行ふべし、長命せんと欲せば當に大慈を行ふべし、智惠を得んと欲せば當に學問を行ふべし』と仰せられ、更に偈を御說になり、『若人壽百歲、勤て天下の神に事へ、象馬をもて祭祀するも、一慈を行ふに如かず』とて、種々御懇切なる御說法があつたので、王は始て夢の覺たる如く、因果の理を明めて正しき信仰を起した、と云ふ御話が法句譬喩經に出ております。

只今でも、和默王の如き迷信を抱て、神佛に對する人が無いとも申されぬ。是等は畢竟、因果の大道理を信ずる眼が無い爲めに、盲動的信仰に陷つたのである。苟も曹洞宗祖の御恩に預かる我等お互は、平生に因果の法則を昧すこと無く、益々身口意の三業を淨らかにし、受戒入位の身を喜び、寢ても寤ても釋迦牟

を得るには、必ず先づ種を下さねばならぬ。其の種は今新に出來たのではなく、卽ち去年の春に下した種から生じた結果なのである。扨て種を下しても、或は田の草を取り、或は害虫を驅除し、或は水を引き、或は肥料を用ひねばならぬ。聊も其の勉强を怠たると、忽ち影響を來たして、思ふ儘に收穫を見ることが出來ぬ。是が因果必然の姿です。此の道理を明らめなば、自然に種を下し、自然に必要なる手當を施すやうになるのである。而して、首尾よく果實を得ますれば、其の果實が亦た來年の種となるです。斯樣に、因が果となり、果が因となり、未來永劫盡くることが無い。我等も亦た是の如く、立派な人間にならうと思はば、夫だけの種を播ねばならぬ。種とは卽ち發心です。立志です。宗敎の上から申せば確固たる信仰です。

一度、信仰の種を下せば、煩惱惡業といふ草も取らねばならぬし、敎育修養と云ふ肥料も入用であるし、外界の惡魔の侵害を防ぐの必要も生ずる。斯くして竟に立派な人間となつたのが結果です。其の結果がまた次の因となつて、益々善根功德を生み出し、漸々に進步向上して、智德圓滿の佛になるのであります。是は善い方の御話だが、惡い方も、矢張、同じ筆法である。草も取らず肥も施さねば、良い種までも腐つて、忽ち荒地と變じ、蛇や蛙の住家と爲ります。身口意の上に於て、一微塵でも作業を起せば、其の狀態に應じて、佛ともなり鬼ともなり、地獄とも極樂ともなる。是れ皆な自然力たる因果の大法則の致す所であります。『民草のおのがかせぎの程々に穗に現れて見ゆる秋の田』、『火の車つくる大工は無けれどもおのが造りて己がのりゆく』、實に因果の道理は歷然として寸分も私は無いのである。

も忘はざるなり』、惡い事を爲た者は其の精神も賤しくなり、其の位置も劣等になり、益々冥きより冥きに入り苦に陷り、終には、三惡道、四惡趣の巷に彷徨ふのである。反之、善い事を爲た者は其の心も貴くなり其の身も優等になり。益々光明の世界に進み、安樂の境界に達し、終には人間・天上の果報をも受け、神佛の位地にも陞るのである。然らば、善と云ひ惡と云ふは、どんなものであるかと云ふに、これには種種の學説があつて、隨分やかましき議論の存する所であるが、細い事は他日に讓りまして、一口に之を申せば、理に隨ふが即ち善で、理に背くが即ち惡である。併し、漠然、唯だ理と云ふても要領を得ぬからして、或は法性とか或は佛性とか申しますれど、早解りに云へば、此の因果の理を確信するが、取も直さず理に隨ふのである。

我等は實に宇宙の一分體で、一個の小天地です。經には『佛性の孝順心慈悲心』とも『一切衆生、皆な如來の智慧德相を具す』ともありて、慈悲も、智慧も、盡く我等の本性に備つて、少しも缺けたる所は無いのである。此の德を現はすのは、現象界の支配者たる因果の理法を信ずるのが捷徑です。能く因果の道理を信じますれば、自然に良心の能力を振ひ起し、自然に最大多數の最大幸福を進增するの妙用を現はすものである。次の文には『若し因果亡じて虛しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず』で、諸佛の世に出でゝ教を施したまふも、祖師の法を傳へて衆生を濟度したまふも、聖賢の道を授くるも、君子の則を垂るゝも、皆な三世因果の大法則があるからである。例へてみれば、百姓が米穀

までも、因果相續して、始も無く終も無い。過去より現在に移り、現在より未來に遷り、現在が過去と爲り、未來が現在と爲り、善因には善果あり、惡因には惡果あり、瓜の種より瓜を生じ、茄子の實より茄子を生じて、毛筋程の間違も無い。之を三世因果、善惡業報と云ふのです。此の因果の原則なるものがあればこそ、人生も、宇宙も、悉く意味あるものとなつて、道德の基礎も、賞罰の理由も、始めて成立のであります。神樣は何故敬まはねばならぬか、佛樣は何故信仰せねばならぬか、我等は何に依て安心立命すべきか、我等は何に依て生死の一大事を明らむべきか、皆な此の因果の大原則を土臺とせねばならぬ。若し因果を信ぜぬ者があつたなら、其の人は、眞實、神を敬まひ佛を信ずることは出來ぬ。從て、善を好み惡を惡むの誠意も無い邪見の人です。夫故、贊題の始に『今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨へざる邪見の黨侶には群すべからず』、斯かる邪見の者に親しみ、自ら邪見の群に入つてはならぬぞよ、との御誡であります。

次の文には『大凡因果の道理歴然として私なし』とありて、我等の身も心も、我等の相手たる社會も天地も、盡く此の因果の法則に支配せられて居る。因果の法則は公平にして普遍なので、因果の鏡は萬象を印して少しも私を容れぬ。天地の大なるより一草一塵の小なるに至るまで、此の鏡に漏るゝ物は無い。物理學の原則たる、物質不滅、勢力恒存の理も、つまり此の因果の法則なるものゝ存在を證明して居るのである。之を道德の上から說き明したのが、次の御文です。即ち『造惡の者は墮ち、修善の者は陞る、毫釐

四、深信因果（修證義第四節）

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり、若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず。

前節には無常の事を御示し下されてあるが、時々刻々、刹那々々に變遷して、暫くも停まらぬ人生ではありますれど、其の無常變遷の上には、必ず、古今に通じ十方に渉りて、動かすべからざる一定の原則がある。卽ち因果であります。因果とは言ふまでも無く原因結果です。玆に一の原因があれば、必ず其の原因に相應したる結果があらはれる。而して、其の原因も亦た、其の前の原因から現はれた結果であります。是の如く原因より結果を生じ、其の結果がまた原因となつて其の次の結果を生じ、因が果となり果が因となり、因々果々窮り盡くるといふことは無い。之を業報とも申すのである。卽ち身口意の上に發動する作業が原因で、其の作業に應ずる結果の現はるゝのが報です。

さて此の因果の理法は、一時の上にも、一念の上にも、一日の上にも、一生の上にも、キチンと現はれて居るので、我等の此の世に生れぬ前から、死しての後までも、又、此の世界の成立ない前から、破壞し後

代、イウドクサス、ヒツパルカス、アルキメデス、其の他才藝ある者、抱負ある者、勤勉なる者、敏捷なるもの、忠者、若しくはメンペス一流の如き、人生を輕視して、高く其の身を置ける者の相踵いで出でたる時代を顧みよ。彼等の一人として土と化し畢らざるものあらんや。而も其の身死し、其の名も亦滅せりとて何ぞ深く悼むに足らん。心を用ふべきは唯一事あるのみ。正義を踏み、誠實を守り、不正不信の徒に對しても、仁愛の情を以て接し、斯くて生涯を送らんこと是れなり。（マアカスアウレリアス）

○懶惰の人は光陰を殺し、黽勉の人は光陰を活す。（コルレッヂ）

○吾は死を恐れず、義務を盡さずして生きることを恐る。（ハオルド）

○萬物盡く變化す、汝も亦絶えざる轉換と、絶えざる破壞との中にあり。（アウレリアス）

○正月梅花落。二月桃花紅。榮枯元有ㇾ數。不㆓必怨㆒東風㆒。（釋英實存）

○うへもなき玉のうてなもおく露のしばしけぬ間の光なるらん。（行誡上人）

○時しあれば松もたきゞとなりぬなり何を常盤のものと定めむ。（同）

○いつのまに昨日はすぎて今日もまた暮れむとすらむ入相の鐘。（同）

參考

○佛、沙門に問ひたまはく、人命幾くの間に在る、對へて曰く、數日の間なり。佛言く、子未だ道を知らず。復た一の沙門に問ひたまはく、人命幾くの間に在る。對へて曰く、飲食の間なり。佛言く、子未だ道を知らず。復た一の沙門に問ひたまはく、人命幾くの間に在る。對へて曰く、呼吸の間なり。佛言く、善哉子、道を知れり。(四十二章經)

○今生の人身は、四大五蘊因緣和合してかりになせり。八苦つねにあり、いはんや刹那刹那に生滅してさらにとゞまらず、いはんや、一彈指のあひだに六十五の刹那生滅すといへども、みづからくらきによりていまだしらざるなり。すべて一日夜があひだに六十四億九千九百八十の刹那ありて、五蘊生滅すといへどもしらざるなり、あはれむべし。(承陽大師)

○山に入り市に交りても遁れ難きは無常の使、關を固め兵を集めても防ぎ難きは生死の敵。(平維盛)

○彼のフヰリスシオン、フエーバス、オリフガニオン等の名を認むべき太古に溯りて考ふるに、凡ての人凡ての業、凡ての國は皆亡びたり。さらば他の時代につきて考へんか、ヘラクリタス、ピサゴラス、ソクラテスの如き大學者の輩出せる時代、多くの英雄多くの勇士の現はれし時代、專制君主の勢を逞うせる時

でありながら、十九歳の二月七日の夜、潜かに城を踰え山に入り、難行苦行したまひし御も、正しく此の無常觀が動機となつたのです。曾て王城の四門に遊覽したまひし時、老人の相、病人の狀、死人の有樣を御覽なされ『世の榮は快樂なりと雖も生老病死あり。此の四種、若し無くんば、我が心如何に樂しからん』と仰せられ、竟に此の無常の苦因を離れ、一切衆生を救はんとの大誓願を起しあそばされたのであります。又、高祖承陽大師は、久我内大臣通親公の御子であらせられながら、御年八歳の時、母公の御薨去に遇はせられ、香の烟の立ち上るかと思ふ間も無く、忽ちに消え失せる有樣を御覽ぜられ、はら〳〵と御淚を流し給ひ、扨ても果敢なき浮世哉、獨り人間の壽命ばかりか、一切諸法の行末も此の香の煙の如く、忽にして生れ忽にして滅し、一として賴むべきものはない。斯る夢幻の世に生れながら、徒らに煩惱妄念の塵に穢れ、永劫にも救ひ難き罪過を作りつゝあるは、凡夫の狀態である。何卒して之を濟度せんとの大菩提心を御起しあそばされたのが、日本曹洞宗の開かるゝ源となつたのです。其の他、所有佛菩薩方も、此の無常觀よりして發心せられぬは無い位である。

故に諸君も亦た、常に世の無常なることを深く觀念せられ、幸にも佛の御法に値ひ奉りて懺悔受戒の身となりしことを自ら喜び、利生報恩の念暫くも怠らず、寐ても寤ても南無釋迦牟尼佛を稱念して、正しき信心を無限に相續せらるゝやう希望致します。

此の業力の様子を譬へて見ますれば、茲に三人の兄弟があつて、父親も母親も同じであるから、其の體格と云ひ、心だてと云ひ、殆ど寸分も違はぬ程である。然るに、稍や生長するに及んで、總領には學問をしこみ、次男をば畫師に、三男をば大工に育てあげたです。三人とも、一人前の立派な者になつたが、體格や心だては、依然として別に替りはせぬ。だが仕事に至ると、總領は立處に文章を綴り、次男は山水人物を描き出し、三男は立派に木を削り家を建てる。而して、弟は兄の眞似が出來ず、兄は弟の眞似が出來ぬ。仕事を休めば、矢張、本の瓜二つではない、瓜を三に割つたやうな兄弟である。學者の手だからとて筋が増たでもなければ、大工の腕だからとて骨が變つたでもないが、學者が筆を取れば文章がすら〳〵と書け、大工が斧を持てば材木が思ふ通りに言ふ事を聞いてくれる。是が即ち業力です。最初、教育の原因が違うて居るに依て、同じ體格と心だてでありながら、三人が三人とも、別々の業作用を起すのである。業力には形がないが緣に觸れて作用を現はすので、同じ世界に生れ同じ時代に育つても、業力次第で、苦むもあり、樂むもあり、貴賤貧富、吉凶禍福が千萬萬狀である。故に、我等が朝な夕なの爲る事作す事は、未來までも何處までも附添て、暫くも離れざる、業と云ふ大勢力を製造するのだと心得て、一擧手一投足の上にも十分の注意を拂はねばならぬ。況てや、今夜をも賴まれぬ無常の命なれば、今日只今を忽にせず、益々善心を磨き善業を勸むるが肝要であります。

昔、大聖釋尊は、中天竺迦毘羅衞國、淨飯大王の太子と御生れあそばされ、何不自由もなき尊貴の御身

でしまうて、靈魂だけは死なぬなどと信ずるは、正しく外道の見であるぞと、佛様や御開山様が御叱りなされてある。心と身とを別々に見て、實際に生死をする物柄があると思ふは皆な凡夫の迷です。大涅槃の上には生死する物柄はない。生れたり死んだりするやうに見えるのは、因縁に依て現はれた假の相である。身と心とは決して二つではない。我と天地とは本より平等にして一如である。こゝが即ち無我の眞理です。

併し、中江兆民居士の言うたやうに、無神無靈魂で何にも無いといふのではない。太祖國師が、後醍醐天皇の勅問第四の御答にも『命終の時、四大離散して一切なしと見るは、外道の空見、因果撥無の見解なり。今生善惡の業因に依て來生の依身を感じ、或は天堂に生れ或は地獄餓鬼畜生に入り、種々の苦を受くること諸經の所説分明なり』と仰せられてあつて、決して因果業報の理を昧ますことは出來ぬ。要するに靈魂が有ると云うて我を執するも、無いと云うて空見に墮するも、兩ながら間違で、之を斷常の二見と云うてあります。『麻糸の長し短しむづかしや有無の二つをいつか離れん』、有無の二見を離れねば正しき知見は開けませぬ。然らば、未來に赴くものは何物ぞと云ふに、所謂業力です。善と惡との業力が未來を作り其の業力が自から果報を受くるので、卽ち自業自得です。此の事は餘程こみいつた道理であるに依て、追々とお話をすることに致しませう。こゝを合點すれば、自づと無我の理に達して、生死の二路に疑の無いやうになります。

觀念して、從前の非なることを悔い改めて、益々善に遷り德に進まねばならぬ。未曾有經には『前心惡を作すは雲の日を覆ふが如し、後心善を起すは炬の暗を消するが如し』とある。されば、惡人をして善人たらしめ、野蠻國をして文明國たらしめ、地獄に墮すべき衆生をして淨土に往生せしむるも、盡く是れ無常の賜であるに依て、我等お互は、朝夕此の無常を利用して、佛菩薩の境界にも達せねばなりませぬ。

四には不動の安心を得るの德があります。常に此の觀念に滿たされて居りさへすれば、事に臨んで驚き恐るゝことが無く、如何なる艱難に運り逢ひ、どのやうな怨敵に出遇ふとも、平生の覺悟が堅固であるから大磐石です。生死到來、斷末魔の際に至らうともピクともせぬ。太田道灌は、或る若武者の戰死を見て、『かゝる時さこそ命の惜からめかねて無き身と思ひ知らずば』と詠じた。かねて無き身と思ひ知らば、死に臨んでも狼狽は無いはずである。

五には無我の眞理を明らめて生死の一大事を決着するの德がある。身も心も刹那〳〵に移り變つて、暫くも停らぬとすれば、どこに我といふやうな物がありませう。『世の中に我が物とては無かりけり身をさへ土に還すべければ』、我が身も終には我が身でない、我が心も亦た終には我が心とは申されぬ。世間では人間が死でしまふと靈魂と稱する物があつて、フラ〳〵と死骸から飛出して、未來に赴くものと信じて居る人が澤山ある。墓場から光る物が出た、そら人魂ぢや、ア、怖いとか、棺の傍でガサ〳〵と音がした、そら幽靈ぢや、ア、恐ろしやなどと云ふ騷ぎは能く聞く話である。併し、よく〳〵考へて御覧なさい、身は死

凡そ、正しき觀念は、盡く發心修行の土臺となり、善根功德の本と爲るものです。此の無常の憑み難く業力の恐るべき事を觀念すれば、それが土臺と爲つて五通りほどの利益を得ます。

第一には時間を重ずる樣になる。高祖大師は『學人は必ず死ぬべきことを思ふべき道理は勿論なり、縱ひ其の事をば思はずとも、暫く先づ光陰を徒らに過さじと思ひて、無用の事をなして徒らに時を過さず、詮ある事をなして時を過すべきなり』と仰せられ、太祖國師は『聖を去ること時遠く道業未だ成ぜず、身命保ち難し何ぞ後日を期せん』と御誡め下されてある。日月は人を待たず露命旦夕をも計り難し。一念茲に思ひ至らば、自から時間を重んじ、獨手に勉强する樣になります。

二には思想が高尙になつて淺はかなる欲情を離れ、『花の色はうつりにけりな徒らに我が身世にふるながめせし間に』爛熳たる紅の花も、夕の嵐に遇へば忽ちに其の香を失ひます。窈窕たる美人も、何時まで其の美しき姿に誇られませうぞ。『色はにほへど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ』と弘法大師が詠ぜられた通り、榮枯盛衰は一瞬の夢の間である。斯く觀じますれば、肉體の奴隷となつて情欲の闇に迷ふことや、一時の榮華を貪ぼりて永劫の苦を招く樣な事が無くなる。況て業力の恐るべきことが解れば、自づと其の獨を愼しみ、萬事萬端誠意を以て行ふやうになります。

三には悔過遷善の德があります。無常轉變の速なること是の如しとせば、昨日の罪人も今日の良民、朝には愚人なりとも夕には智者たることを得られぬはずはない。佛も本は凡夫なり我等も終には佛なりと

云ふ形の無い勢力となつて、どこ〱までも喰付て離れない。我等〱の未來は實に此の業力に導かれて、三悪道にも墮し、人間・天上にも生れ、お淨土にも赴くのである。此の業力は善因善果、悪因悪果といふ因果の大法に依て、其の相を現はし其の力を動かすのであるから、縱ひ佛樣や神樣と雖も、此の定業を免るゝことは出來ないです。それ故、我等〱は平生口で言ふこと、意で思ふこと、身で行ふことを深く自ら用心して所謂『君子は其の見ざる所を戒愼し其の聞かざる所を恐懼す、隱れたるより見はるゝは莫く微なるより顯かなるは莫し、故に君子は其の獨を愼しむ』と中庸に在るが如く、其の獨を愼むが一大事です。皇后陛下の御製に『人しれず思ふ心のよしあしも照しわくらん天地の神』と申す有り難き御歌がありますが、世間の人は知るまいと思うても神佛がちやんと見そなはして御座る。因果の理法が業力の輕重を定めて、淨玻璃の鏡よりも明かである。殊に、我等〱お互の身命の無常なることは、前に述べた通り、一時一刻も油斷がならぬ。命ばかりか、心までが刹那〱に移り變つて、暫も停まることがない。笑ふかと思へば悲しみ、喜ぶかと思へば瞋り出す。一日の中、一時の間、千萬無量に變化する。昨日の身と今日の身とは決して同じではなく、朝の心と夕の心とは全然違うて居る。それが同じ樣に見ゆるは、つまり業力の相續と申すものである。此の意味が解りさへすれば、自から無我の道理にも通達して、眞正なる智慧をも啓き、圓滿なる道德をも具へ、現在は言ふに及ばず、未來永劫佛界に活動し、衆生の爲めに大善知識と爲ることが出來ます。

逢ふと云ふことは殆ど稀れです。『古を思ひ出つゝながむればやがて涙に曇る月かな』深夜、月に對して往事を追懐すれば、何人の胸中にも自ら萬斛の感慨が浮ぶものです。一期の無常忽ちに到る時は、國王の御威勢でも、大臣の權力でも、之を引留むることはならぬ。如何ほど親類や家來眷屬が心配しても、如何ほど妻や子が歎き悲んでも、七珍萬寶、財産の有らん限りを傾けても、死出の旅路に赴く人を助くることは出來ぬ。眞宗の蓮如上人が白骨の御文に『すでに無常の風來りぬれば、双の眼忽ちにとぢ、一つの息ながくたえぬれば、紅顔むなしく變じて桃李の粧を失ひぬる時は、六親眷屬あつまりて歎き悲しめども更にその甲斐あるべからず』とあるも、正しく人生に於て誰しも免るべからざる最終の事實です。この時こそは『唯獨り黄泉に赴くのみなり』です。黄泉とは未來のことである。二世を契りし夫婦も、千代を誓ひし親友も、決して一處には行かれず、たつた獨で、行へも知れぬ三途六道の廣野を指して旅立をせねばならぬ。裸で生れて來たから死ねば本の裸になる。生れた時に盥に入つたから死んだ時も盥に入る。『盥より盥に移る五十年』である。空より出でゝ空に歸る、因縁の力に依て、不生不滅の中に於て、假りに生死の相を現すのである。

だが玆に、たつた一つ未來までも何處までも附添うて離れぬ者がある。此の身すら空に歸るといふに、始終一處になつて離れぬとは、それは果して何物であるぞと云ふに、『己れに隨ひ行くは只是れ善惡業等のみなり』とありて、我等が一生涯の間、身と口と意とに於て造りし、善事と惡事との二つの行爲が、業力と

此の命の無常なることを觀じ、此の身の脆くして憑み無きことを念じて、急ぎて大菩提心を發せしめらるゝのである。是れ、お互が精神を修養ひ信心を開發す上に於て、缺く可らざる觀念でございます。そこで、讃題の御文の初には『無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん』とお示し下されたのである。梵網戒經の序にも『壯なる色の停まらざることは猶ほ奔る馬の如し、人の命の無常なることは山の水よりも過ぎたり、今日は存すと雖ども明んまで亦た保ち難し』とある。如何なる英雄豪傑でも、智者學者でも、到底、敵し難いのは無常の勢力です。人間一期の壽命も僅かに出入の一息に繋がつてをる。露より脆きお互の命、今にも時節到來せば如何なる道の草の邊に落ちてはかなく散り果てゝしまふやら知れぬ。

『身已に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し』衣食財産には本より一定の主は無いが、此の身躰だけは何處へ出しても自分の物に相違ないと思ふやうなものゝ、よく〳〵觀念して見れば、此の身體とても決して私の自由にはならぬ。いつまでも年若で達者で居たいと願うても、光陰は刹那〳〵に此の身を誘ふて、遠慮なく、老・病・死の巷に曳附てをるではありませんか。『紅顏いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし』、十六七の花盛り、玉の顏、雪の肌、それ簪よ、それ白粉よ、と騷ぎ廻るも、思へば邯鄲一睡の夢の間である。『面影の移らで年のつもれかしたとひ命に限りあるとも』などと願うたとて何の役にも立たぬ。腰に梓の弓を張り、額に四海の波を湛へるやうになつては、頭の天邊から足の爪先まで尋ね探したとて、昔の面影は微塵ばかりも殘つては居らぬ。熟〳〵觀ずるに、往事と申して、過ぎ去りし事に再び

じたててをる中に、いつの間にやら、其の坊ちやんに髯が生て、議員選擧の競爭をする樣になる。お孃さん〳〵と可愛がつてをる中に、いつの間にやら、其のお孃さんが子供を懷に抱いて乳房を含ませる樣になる。是れ皆な人生無常の狀態です。であるから、生るのも無常であれば死ぬるのも無常である。財產家の一朝にして破產の不幸を見る、貧乏人の暫時にして富貴の身となる、野蠻の文明に進む、凡夫の佛となる、平和が破れて戰爭と爲る、戰爭が靜まつて平和に復する、盡く無常の姿ならざるは無い。過去數千萬年の歷史も、未來幾億萬載の進化發展も、皆な無常の活動である。して見れば、無常といふことは決して緣起の惡い詞でもなければ、厭世主義より出た詞でもなく、實に宇宙進化の有樣なのであります。

併しながら、一步を退て我等お互の身の上を顧みたならば如何です。煩惱の犬は追へども去らず菩提の鹿は招けども來らず、お互の精神界はどんなでせう。名譽が欲いとか衣食財產が欲いとか云ふ欲念を取除て見たなら、後には何が殘つてをります。偶ま高尙なる理性が現はれ、淸潔なる善心が起るかと思へば忽にして三毒煩惱の雲に蔽はれ、依然として惜い欲い憎い愛いの妄念に彷徨ひ、朝から晩まで同じ樣な事を繰返して、瞬く間に、五十年の一生を夢幻の如くに送り『世の中は貧ぢや有德ぢや苦ぢや樂ぢや何ぢやかんぢやで末は無茶苦茶』たうとう末は無茶苦茶になるです。古人も『朝に道を聞て夕に死すとも可なり』と云うてある。若し、人の人たる道を知らず、生死の大事をも心得ずに、唯だ無茶苦茶になつてしまうては、人生ほど淺はかにして馬鹿〳〵しいものは無いのです。それ故、我が佛敎に於ては、先づ第一に

三、諦觀無常（修證義第三節）

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし、熟觀ずる所に往事の再び逢ふべからざる多し、無常忽ちに到るときは、國王大臣親暱從僕妻子珍寶たすくる無し、唯獨り黄泉に赴くのみなり、己れに隨ひ行くは只是れ善惡業等のみなり。

前節には、受け難き人間の身を受けたるのみならず、遇ひ難き佛法にさへ値ひ奉りし、我等お互の果報をば、自ら重んじ、自ら喜んで、苟にも無常の風の吹に任せて、徒らに生涯を過してはならぬぞよ、と御誡め下され、而して、今の賛題の御文に於て、專ら無常の有樣を御示しなされたのであります。

無常と申す詞はツネナシと訓じて、此の世の中の法は、身も心も、天地も日月も、一つとして常なるものは無く、時々刻々に遷り變りて、暫くも住まらぬことを言うたのであります。花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは、錦を聯ねたやうに麗しき花も、夕の嵐には痕形もなく散り失せ、鏡を磨し如き明なる月も、曉の烟に包まれては其の影すらも見るに由ないのである。それ暖爐、それ火燵、というて騒いでをるかと思ふと、忽ちにして氷水が欲しくなつたり、團扇が使ひたくなつたりする。坊つちやん〳〵とはや

○忘れてはよその木末とおもひにき阿耨菩提はこのみなりしを。（同）

尊、彼遇ふこと能はず、その所以は盲の龜、若し海の東に至るに、浮木は風に隨つて、或は西に、或は南北に、或は四維に繞りて、必ず遇ふことを得べからざるが故なり。佛、阿難に告げて給はく、此の盲龜と浮木は互に往て違ふと雖も、或は復た相得ることあらん。然るに愚痴の凡夫に至りては、五趣に漂流して復た人の身を得んこと、彼の龜よりも難し。此の故に汝等よ、今當に勤めて方便して增上の欲を起し、致を學ぶべし。（雜阿含經）

○仁の鎧、三昧の弓、手に智慧の箭を執り、福業を六衆と爲し、以て波旬の軍を壞る。（增一阿含經）

○二十五有に流轉するの際、最も得難きの事有り、謂く生れて佛法に値ふことなり。既に佛法に遇ふも菩提心を發すこと亦た最も難し。（承陽大師）

○夫れ佛法を學習することは最も得難しと爲す、所以いかんとなれば、縱ひ發心の實有りと雖も、魔に落つることを知らず、病を發することを覺らず、道心破敗し修證退墮せば眞に憐憫すべきなり。近代の學者聰明の魔に嬈されて以て悟道となし、名利の病を發するに値うて以て効驗とす。但一生一身を損壞するのみにあらず、亦た能く多生曠劫の功德菩提を損ず、是れ乃ち學人の最も悲みとすべきなり。（承陽大師）

○道を得れば無窮の樂あり。道を得るは一物を得るにあらず、卽ち元來の心これなり。（春日潛庵）

○うれしくも人とうまれてみ佛のさとりの道もこれよりぞ入る。（行誡上人）

○めしひたる龜も浮木にあふものをいつまで沈む我身なるらむ。（同）

楽がある。第一には天地の間に棲息する者多き中に、萬物の靈長と稱せられ、物の道理を知り得る人間に生れたのが大なる樂である。次には、時に治亂あり世に盛衰あり、然るに、今、太平の御代に生れ、書を讀み道を學ぶ、是れ亦た大なる樂である。次には、今の諸侯方は皆な深宮の中に育てられ、世の艱苦を知らず、徒らに酒色を喜びて、一生を游惰放逸に消費する者が多い。私は幸にして貧賤の家に生れ、人事の辛酸を解し、道を習ひ徳を養ふ、何の樂か之れに如かんや』と申されたさうです。流石は闇齋先生、その一言一句、實に警世の木鐸です。

況や、人間の位置を自覺し、人生の由て來る所の原因を明めたる我等は、一層其身の果報を喜び樂しんで益々其の智徳を增進し、急ぎて受戒入位の身となりて、現世を離れずして佛菩薩の位にも進み、現身を捨てずして利生報恩の大事を圓滿せんことを期するのが、自利利他の功徳を成就するの根本でございます。

參考

○佛、諸の比丘に告げ給はく、大地悉く變じて大海となる。その時、一の盲の龜あり、その壽無量にして百年に一度其の頭を出すとせよ。又その海中に唯一の孔ある浮木ありて海浪に漂流し、風に隨て東し又西すとせよ。今此の盲龜頭を上ぐるの時、此の木の孔に遇ふことを得べきや、否や。阿難、佛に白して言く、世

るに、今、我等は受け難き人間の身を受けたるのみならず、遇ひ難き佛の正法にも値ひ奉ることを得たり生死の中に於て、殊に結構なる生れ方、最も勝れたる生を受けたのである。斯かる善生最勝の身を徒らにして、草の葉の露より脆き命をば、空しく無常の風に散らしてはならぬ。深く自ら、自身の位地の最尊最貴なることを自覺して、人の人たる本分を守り、益々其の美徳を發達して、向上の一路に進まねばなりませぬ。譬ば、玆に一個の貴重なる器物がありとせんに、外面は別段珍らしくもない、世にありふれた品のやうに見えるから、自然、取扱も疎末にして、臺所の隅や戸棚の端に置てあつたのが、一朝、世に得難い寶物だと云ふことが知れゝば、俄に箱を作るやら寶藏に入れるやら、その上、火盗の災難さへ用心して、永く之を子孫にまで傳へんとの考が起るやうなものです。我等の身も亦た、世に有りふれた物として自ら重んずることなき時は、自然と疎略にして、怠慢懈怠、暴食淫酒は言ふに及ばず、危險の場處や不潔な處へも出入して、身を穢し行を亂し、恬として耻づる所なきに至るのです。若し一朝、最勝の身なりと確信すれば、獨り手に自ら愼み自ら護り、智を磨き徳を養ひ、知らず〳〵眞の人間となり、佛菩薩の境涯にも進むことが出來る。こゝを慈雲律師は『人身の貴重なるを知るは入道の捷徑じや』と御示しなされてあるが、實に千古の格言でございます。

　昔、山崎闇齋先生は、敎を受くる者六千人の多きに上つたといふ大儒でありまするが、或時、會津侯が尋ねられて、先生の最も大なる樂は何なるやと問はれました。すると、先生の答に『私には三つの大なる

ありませんか。故に佛様は『人間の身を受くる者は爪の上の土の如く、畜生等に生るゝ者は大地の土より
も多し』と仰せられてあります。

併し、幸に人間の身を受けましても、若し其の天職たる倫常道徳をも守らず、自分の位置如何をも自覺せず、徒らに百歳の日月を送り、空しく死出の旅路に彷徨やうでは、人間に生れた効果は無いのです、我等が天性に有して居る智・情・意の三者を併行發展し、更に現在の狀態に滿足せず、進んで向上の一路を開き、永久不滅の安心を獲得するこそ眞の人間です。教育も宗教も畢竟、此の眞正の人間を造る爲めの機關である。併しながら、向上の一路を開て永久の安心を得ることは、偏へに我佛教の力に依るより外は無いのです。乘雅僧正が『消え易き我身にかへて尋ね見ん妙なる法の道芝の露』と詠じたのも、此の消息を通ぜられたのであります。看板は佛教でも、倫常に悖り德義に背き、天理人道に適はざる者は、所謂妄信迷信の連中で、決して眞の佛教ではない。世の佛教を批議する人は、動もすると、此の妄信連中の取扱てをる僞佛法を眺めて、見當違のことを述べ散らしてをるのです。故に、人間多しと雖も佛法に遇ふ者は甚だ稀であるのみならず、佛法に遇ふ者ありとも眞の正法に遇ふ者は一層稀有と申さねばならぬ。

四十二章經には『天下に五難あり、貧窮にして布施すること難し、豪貴にして道を學ぶこと難し、命を制して死せざること難し、佛經を覩ることを得ること難し、生れて佛世に値ふこと難し』とあり、法華文句には、佛に値ふことゝ、法を説くことゝ、法を聞くことゝ、信受することゝを四難と云うてある。然

十界一念とも言ふのであります。

さすれば、我等人間の位置は何うかと云ふに、十界の中の六番目、六道の中の二番目に位してをりまして、生んでくれたから生れたのではなく、必ず過去世に於て、倫常道德の行、即ち萬物の靈長たる資格を具ふるだけの善業があつて、此の身を受けたのです。其の證據には、孟子も『人皆な人に忍びざるの心あり』と云うた通り、人類には、自然の性質として、良心といふものがある。此の良心なるものが、諸般の行爲に就て、自づから其の善惡美醜を辨別するの能力を有してをる。故に、人間は常に此如の事を爲すばなるまじ、爲ねば濟まぬと思ふ心があり、若し其の事を爲したる時は、自づと滿足と喜悅の情を起し、爲さゞる時は、自づと不安と苦痛とを感ずるではありませんか。孟子の所謂『惻隱の心は仁の端なり、羞恥の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり』とあるが如く、此の四つの心こそ、取も直さず人間の本性たる良心の官能です。動物と人間との異なる所以は、此の良心の有無に依ると云うても差支は無からうと思ひます。此等の詳しい事は追々お話に及びませうが、兎に角、萬物の靈長たる人間の性德は、父母の遺傳とか自然の習慣とか云ふ單純なる說明のみで盡くすことは出來ぬ。して見れば、人間の身を受けるといふことは、なか〳〵容易ならざることであるに依て、賛題の初めに『人身得ること難し』とあるのでございます。況てや、學術上、最近の研究調査に依れば、動物の種類、其の多きこと五十萬種にも上つて居ると云ふことです。而して、人間の數は全世界を通じて、十五億萬前後に過ぎぬでは

とではありませんか。

佛教に於ては、一心十界と申して、我等が一念の作用に依て造り出す所の世界を、十通りに分類してあります。その中でも、地獄界と餓鬼界と畜生界との三世界は、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒妄業に因て感ずる世界であるから、之を三惡道と稱します。次に修羅界と人間界と天上界との三世界は、五戒十善、卽ち倫常道德の善行に因て感ずる世界であるから、之を三善道と云ひます。此の中、修羅界は同じく倫常道德を行ふにしても、ひたすら我慢高慢、競爭嫉妬の念を以て致すのであるから、自然、其の果報も劣等であるに依て、前の三惡道の仲間に加へて四惡趣とも云ひます。以上の三善三惡の六道は、其の苦樂優劣、本より非常な懸隔がありますれど、何れも迷の境界を離るゝことが出來ず、罪障の束縛を受けつゝあるところから、之を六凡と稱して、同じく凡夫の地域內に置くのであります。次は覺悟の境界にて、所謂聲聞界と緣覺界と菩薩界と佛界との四世界です。聲聞と緣覺とは、四諦、十二因緣、卽ち無常・苦・空・無我の理を觀じて、煩惱を解脫し生死の苦を離れた境界である。それより更に一步を進めて、大慈悲心を起し大誓願を發し、衆生濟度の爲めに六度萬行の功を累ぬるのが菩薩で、その菩薩の行願が十二分に成功つて、自覺覺他覺行圓滿といふ域に達せられたのが佛樣です。此の四世界は、何れも煩惱惡業の穢を離れたる聖賢の境界であるから、之を四聖と云ひます。是の如く凡夫と聖賢との差があり、迷と悟との科が分れて居りますが、其の根本はと申せば、皆な我等の一念の作用より生じた者でありますから、之を一心十界とも、

二、最勝善身（修證義第二節）

人身得ること難し佛法値ふこと稀れなり、今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

我等は、宗教を信仰して自己の安心を求むる場合ばかりでなく、我等が當然の任務として、凡ての事業を經營するに當ても、第一に必要なるは、自分の位地と云ふことを自覺するに在るのです。自分の位地が解らんでは、自身の權利も義務も知れやうはずがない。何にも知らず、無我夢中で、唯だ腹が飢くから御飯を食べる、眠いから睡る、人が爲よと云から爲る、と云ふやうな鹽梅で、徒らに見聞の爲めに使役せられ、情慾の爲めに追ひ回されてをつた分では、此の生涯の事業一切を擧げて、無意味の中に葬つてしまふか、但しは、肉體の奴隷と爲つて一生を果たすに過ぎぬのであります。少かに眼を一世に注ぎ、因果の眞理をも信ぜず、生死の大事をも明らめぬ人には、隨分、無理のない處でもあらうが、自分の位地如何をも心得ずに、唯だ生んでくれたから生れて來たのだ、生れて來たから働くのだ、道德も宗教も社會存立上の必要より生じたる方法である、などと公言して憚らぬ人が有ると思へば、餘りに情けなく歎かはしいこ

○五蘊假成レ形。四大今歸レ空。將レ首當ニ白刃一。截斷一陣風。(日野資朝)

○古來一句。無レ生無レ死。萬里雲盡。長江水淸。(源俊基)

○逍ニ遙生死一。四十二年。山河一革。天地洞然。(源具行)

○極樂も地獄も共に有明の月ぞこゝろにかゝる雲なき。(上杉謙信)

○討つ人も討たるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀。(大内義隆)

○衆生の心體、從本已來、不生不滅にして、自性清淨なり。(占察經)

○衆生の心は涅槃なり、本性常に清淨にして異なることなき虛空の如し。(新譯入楞伽經)

○一切諸法の本性清淨なる、これを涅槃といふ。(華嚴經)

○實相は諸法なり、諸法は如是相なり、如是性なり、如是身なり、如是心なり、如是世界なり、如是雲雨なり、如是行住坐臥なり、如是憂喜動靜なり。(承陽大師)

○生死はのぞくべき法ぞと思へるは、佛法をいとふつみとなる。(同)

○生を使得するに、生にとゞめられず、死を使得するに死にさへられず、いたづらに生を愛することなかれ、みだりに死を恐怖することなかれ。(同)

○大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす。(同)

○たゞ本來不變の自性、聖凡なく、迷悟なきことを看得すれば、百千の法門無量の妙義、總に心源にあり
(圓明國師)

○生を必するものは死し、死を必するものは生く、要はたゞ心志の如何にあり。能く此の心を得て守持すること堅ければ、火に入りて燒けず、水に陷りて溺れず、何ぞ生死に關せん。予常に此の理を明かにして三昧に入れり、生を憎み死を厭ふは、未だ武士の心膽にあらず。(上杉謙信)

○業鏡高懸。三十七年。一槌打破。大道坦然。(北條時賴)

に臨んで悲しむは古今の人情、弟子たちは號哭を禁じ得なかつたです。すると、大師は忽ちにして眼を開きたまひ『心、物に依らざる是れ眞の修行なり、生に勞し死に息はゞ悲しみに於て何か有らん』と仰せられ、覺悟の不確なるは愚痴の習情より起るなりとて、『愚痴齋』と名けて、更に七日の間、叮嚀に生死の覺悟、佛法の一大事を御示しになり、八日目に至て、再び端坐して御入滅あそばされました。是の如きは、正しく生死透脱の妙用でありまするが、我等とても、眞實、生死即涅槃の理を明らむる時は、自から此の境界に至れぬことはないです。大石良雄が『あらたのし思ひは晴るゝ身は棄つる心にかゝる浮雲もなし』との辭世を遺したるも、一休禪師が『風は息虛空は心日は眼浦山かけて我身なりけり』と詠ぜられしも、皆な是れ涅槃城裡の遊戲三昧であります。

今、我等は煩惱業苦の中に在りながらも、直に生死の大事を明らむることを得るは、偏へに佛陀の恩德に依るものなれば、朝な夕なに、佛法の目的を誤まらぬやうにして信念を相續し、人生の道中を愉快に滿足に渡りて、一日一時をも徒らにせず、寢ても寤ても、一心に懺悔受戒の勝因緣を喜びて、益々報恩の大義を勵まるゝこそ肝要でございます。

参考

死の其の儘が直に涅槃である。涅槃と云ふは不生不滅の本體の異名であります。さすれば、生死の厭ふべきも無く、此の身此の儘の大涅槃です。斯く明らめが附き安心の決定せし時、始て生死の束縛を脱することが出來る。是れ實に佛教の肝要、萬善の源であるに依て、『唯一大事因縁と窮盡べし』と、御教訓なされたのであります。

之を譬ふるに、生死は開花落葉の如くである。春來れば、百花爛熳、紅霞錦を織り、萬物發生して天地も自から繁華になる。夏も過ぎ秋の季節に入りぬれば、西風天の一角より起り、忽ちにして紅葉地に滿ち乾坤盡く寂寥の觀を呈して來る。一年三百六十五日の間に於て、斯くまでも反對の現象を見るです。是に於てか、花を見て狂せんばかりに樂しみし人も、秋の空に向ては、月に涙を洒ぎ、夕暮の鐘に腸を斷ち、人生の哀れに袂を絞るのです。然れども、天地の上には寸毫も生滅は無い、增減も無い、陽極まれば陰生じ、陰極まれば陽發し、輪環して窮らぬは實に天地の妙用である。此の妙用を明らめなば、春夏秋冬の其の時々に、天道を樂しみ、人事を盡し、水鳥樹林、念佛、念法、念僧の極樂淨土を目の前に實現せしめねばならぬ。生死即涅槃の眞理も、之に依てよく〳〵合點せらるるやうに願ひたいです。

昔、達磨大師十一代の法孫、洞山大師は絕世の大善知識であるが、唐朝懿宗皇帝の咸通十年（我國の清和天皇貞觀十一年）三月一日の早晨、剃髮沐浴して、鐘を鳴し弟子を集め、生死の理を諄々と御示しなされ、そのまゝ六十三歳を一期として、眠るが如くに涅槃に入らせられた。豫て覺悟は致しながらも、事

第二には本體門の方です。所謂宇宙の本體には、生と云ふことも無く死と云ふことも無い。生死と云ふも水の上の波の如く、本體と云へる鏡の面に現はれたる一時の影法師に過ぎぬ。天地も常住にして我等も亦た不滅である。『吉野山おくに心のすみぬれば散る花も無く咲花も無し』、『これぞまこと佛の道に入りしより得ての命はつくるものかは』、我等は元より不生不滅なりと明らめしほど、世に滿足なること愉快なることは無からうと思ふです。さすれば、本體と現象との關係は如何かと云ふに、本體の不生不滅なることは、今日の學理上からも充分證明が出來る。其の不生不滅の本體が、何故に生死の相を現はすぞと云ふに、是れ卽ち本體の妙用、法性自然の作用である。本體は決して空々寂々ではない、死物ではない、神變不可思議の作用を具へて、それが生ともなり死ともなり、千變萬化して自由自在である。悲哉、我等凡夫は、兎角、妄想の爲め、煩惱の爲め、却て生死の束縛を受け、繩なき繩に苦しめられて居るのです。之を明らめさへすれば、生死の當相こそ、無上の快樂、無量の趣味の存在する所である。こゝを承陽大師は『この生死は佛の御命なり、之を厭ひ棄てんとすれば卽ち佛の御命を失なはんとするなり、之に住まりて生死に着すれば是れも佛の御命を失なふなり』と仰せられてあります。

生死は宇宙の活力であるからして、佛や菩薩は此の生死を利用して、娑婆往來八千返の神通もせられたのです。我等も亦た此の生死を應用して自在に大光明を放ち大功德を成ぜねばならぬ。是の如き境界に至りしを生死の中の佛と云ふのである。『入出と人は見れども夜と共に鷲の峰なる月日のどけし』で、生

此の根本目的に就ての御示しである。故に、初めに『生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり』と仰せられたのであります。

然らば、生死の一大事は如何に明らむべきかと云ふに、これには重重無盡の深き意義のあることですが、第二義門に下つて早解りに申せば、二箇の方面から見らるゝが宜い。第一には現象門の方、即ち因緣因果の大法である。經にも『過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ』とあり、限り無き時間の中に於て、或は生れ或は死することは、恰ど昨日が今日と移り、今日が復た明日と變るが如く、又た昨年が今年となり、今年が明年となるが如く、生々世々、更に窮り盡くることは無いです。併し、其の間には自から因果の大法なるものが、過去の過去際より未來の未來際までを一貫して、一事一物でも、偶然にして生じ偶然にして死すると云ふことはない。必ず前の原因に依つて今の果報を受け、必ず今の原因に依つて後の果報が生ずるのであつて、人生の苦樂昇沈は皆な是れ因果の姿である。これでこそ道德の基礎も立ち、賞罰の原理も明らかになるのです。朝に道を聞て夕に死すとも可なり、因果の大法を信じさへすれば、我等の一擧一動も盡く大なる意味があるので、縱や斷末魔の際に於ける思想及び行爲でも、決して空しく消滅するといふことはないです。此の理を深く信じて、常に善因を喜び善業を樂しみ、未來永劫を期して、天地の公道に順ひもて行くは、實に人間としての最高理想の發現と申さねばなりませぬ。

勞し、どの詰は鳥邊野の烟に包まれて、果敢なき人生を一夢の中に葬てしまふのである。此の時に至りなば、血肉相争うてまで蓄へたる幾多の財産、世間より羨まれしほどの麗しき邸宅、二世を契りし妻女、束の間も離れ難かりし愛兒、此等の者にも打別れ、唯獨り冥途黃泉の孤客となりをはらねばならぬ。而して、其の生れ來りし所以をも知らず、死しての後は如何になりゆくやも心得ずして、斯かる暫時の生涯に夢幻の痕を留むるのみとせば、人生ほど無意味のものはありません。

世の學者とか智者とか云はるゝ人々は、自ら安んずること能はざる爲め、此の生死の問題に充分なる解釋を與へんものをと、腦漿のあらん限りを盡して、研究に研究を重ねつゝあるが、其の最後の斷案なる者を見るに、此の人生の始末に困却して、其の本家たる宇宙の中に押込隱居をさせる人もあれば、又は無神無靈魂などと絶叫して、獨り自ら快とする者もある。斯様に力瘤を入れて見ても、矢張、生死岸頭の苦は依然として免かるゝことは出來ぬ。是に於てか、宗教の必要が益々著しくなつて來るのであります。然るに、佛教を信ずる人の中にも、隨分、其の目的を取違へてをる者が少なくないやうに思はるゝです。

抑も、佛教の目的は那邊に在るかと云ふに、解り易く申せば、第一には我等の精神に活氣ある滿足と樂しみとを與へ、第二には人間道德の中心を定めて其の基礎を鞏固にし、第三には生死の問題を解決して未來に對するの安心を決定せしむるが爲めである。中にも第三の目的が一番の根本であつて、眞實、此の安心が決定すれば、第一と第二との目的は自然と達することが出來ます。曩に拜讀したる讃題の御文は、卽ち

修證義說教軌範

一、生死透脱（修證義第一節）

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分あり、唯一大事因緣と究盡すべし。

『心愉快なれば終日歩み、憂悶すれば僅に一里にして倦む』とは西哲の格言であります。實にや、人生最第一の幸福は、精神上の樂しみと滿足とに過ぎたるものは無い。百里の長程を歩み數日の勤勞に服するも、心樂しければ猶ほ其の短きを恐る。之に反して、心に滿足する所なければ、一刻の會話、暫時の勤務さへ、猶ほ其の長きに苦むといふが、人の心の狀態であります。

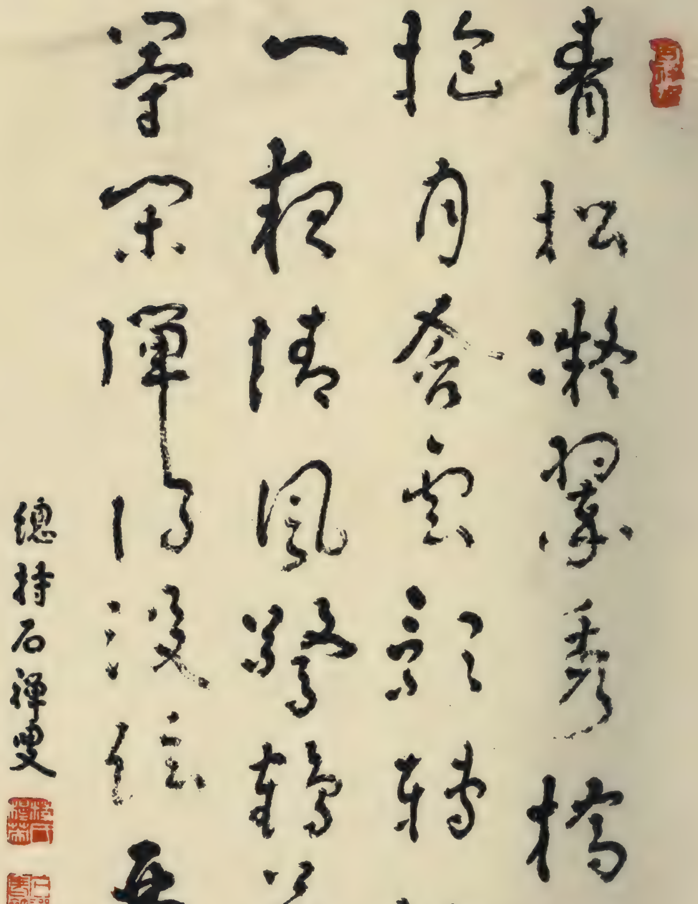
抑も、我等は何の爲めに此の世に生れて來たのであらうか、一息截斷すれば即ち未來に屬するのであるが、其の未來とは如何なるものであらうか。人間僅五十年、電光朝露の身を持ちながらも、海より深き父母の御劬勞に預かり、山より高き國家の大恩を荷ひ、朝に名譽を望み夕に利益を求め、一生役々として身心を

禪學講述篇

第三

禪學講述篇　第三

目次


德持石禪叟

新井石禅全集